第34回

青少年指導者育成セミナー
報告書

RYLA
Rotary Youth Leadership Awards

Seminar

Reach Within to Embrace Humanity

こころの中を見つめよう
博愛を広げるために

2012年3月22日▶25日
神戸YMCA余島野外活動センター

［主催］
国際ロータリー第2680・2670地区
ライラ運営委員会

この桟橋から

小豆島RCの皆さん、いつもありがとうございます

CONTENTS

RYLAセミナー方針・ねらい …… 3
スケジュール …… 3

≫≫≫ 1日目

●開講式

ガバナーあいさつ
国際ロータリー第2680地区ガバナー
久野　薫 …… 4
国際ロータリー第2670地区ガバナー
美馬 精一 …… 6

ごあいさつ
元国際ロータリー理事・パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問　今井 鎮雄 …… 7
国際ロータリー・ライラ委員会委員
海沼 美智子 …… 8

講話「ロータリーがライラに期待するもの」
パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問　深川 純一 …… 9

オリエンテーション …… 15

●オープニングパーティー …… 18

●ロータリアンの夕べ
パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問　深川 純一 …… 19

≫≫≫ 2日目

●講義1
愛媛大学名誉教授・㈱愛媛キャンパス情報サービス社長
野田 松太郎 氏 …… 32

●講義2
人間牧場主・年輪塾々長・夕陽のミュージアム名誉館長
愛媛大学農学部客員教授・法文学部非常勤講師
若松 進一 氏 …… 48

●ロータリアンの夕べ「鈴木正三の思想とロータリー」
国際ロータリー第2680地区パストガバナー・ライラ顧問
安平 和彦 …… 76

≫≫≫ 3日目

●フォーラム「今の社会はこれでいいのか?私達は何をすればいいのか?
またそれをどう考えて行動すればよいか?」
－ 個人として、そしてロータリアンとともに －
フォーラムリーダー 深川 純一
進行 安行 英文 …… 87

バズセッション報告 …… 88

フォーラムディスカッション …… 115

●カウンシルファイヤー 元国際ロータリー理事・パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問 今井 鎮雄 …… 132

≫≫≫ 4日目

●講義3
元国際ロータリー理事・パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問 今井 鎮雄 …… 134

●閉講式
閉講のあいさつ 国際ロータリー第2680地区ガバナーエレクト
石丸 鐵太郎 …… 141

国際ロータリー第2670地区
新世代活動委員会カウンセラー・パストガバナー
今井 正信 …… 142

参加者感想文 …… 143
思い出 …… 170
受講生名簿 …… 172
第34回RYLAセミナー運営委員会 …… 174

RYLAセミナーの方針・ねらい

RYLAセミナーのねらいは、受講者の皆さんに次のような５つの特色をあじわってもらうことにあります。

①高いレベルの講義と討論
②キャビンタイム（親睦の熟成）
③自由と規律
④余島の自然
⑤カウンセラーシステム

自然に囲まれた余島で、講義、キャビンタイム、思索の時間、バズセッション、フォーラムなどを通して、徹底的に学び、語り合い、考えていただきたいと思います。

スケジュール

3月22日［木］						集合 14:00	開講式 オリエンテーション 15:00	オープニングパーティー 18:00	キャビンタイム ロータリアンの夕べ 20:00	
3月23日［金］	朝食 7:30	講義① 野田 松太郎氏 9:30		昼食 11:30		講義② 若松 進一氏 13:00	レクレーション 15:00	夕食 18:00	バズセッション ロータリアンの夕べ 19:00	
3月24日［土］	朝食 7:30	思索の時間 9:00	バズセッション 10:00	昼食 12:00		バズ集約 13:00	フォーラム 14:00	夕食	カウンシルファイヤー 19:00	キャビンタイム
3月25日［日］	朝食 7:30	講義③ 今井 鎮雄氏 9:00	閉講式（11:15～ 学友会案内 記念植樹 記念撮影 昼食							

ガバナーあいさつ

国際ロータリー第2680地区ガバナー
久野　　薫（神戸東RC）

みなさん、こんにちは。ライラにようこそおいでくださいました。先ほどから、この前に座っておりまして、皆さん方のあのピーンと張り詰めた雰囲気が伝わって参りまして、動悸を打ち始めております。上手に話ができるかどうか、ちょっと自信がありませんけれども、開会のご挨拶をさせていただきます。

申し遅れましたが、さきほどご紹介がありました2680地区、これは兵庫県全県一区の国際ロータリーの地区でございます。そこのガバナーを務めております、久野薫と申します。本年度のライラ、四国四県がひとつの地区で2670地区と申しますが、そこの皆さんのお世話で、第34回のライラが開催されるということでございます。

今年度のライラのテーマは「新しい地域社会」ということです。これは、後ほど深川先生にお話していただきますが、非常に難しい問題をはらんでいます。まず、地域社会というのにはテリトリーというものがあります。ところが、現在テリトリーというのはなくなってきています。俳句ではありませんけれども、“秋深し 隣は何をする人ぞ”、隣に住んでいる人が何をしているか、どんな職業の人か、どんな人が住んでいるのかさえ知らない。コミュニティというのはコミュニケーションのできるテリトリーのことです。このコミュニティがなくなってきたという事です。もう1つの問題は、このコミュニティを構成している人間、この人間の質が変わってきました。私、地区大会でも言いましたが、日本人には、世界に誇る日本精神というものがあります。ところが、この日本精神というものが薄れてきました。このような社会の中で、新しい地域社会を考えることは大変難しい事だと思います。この4日間、皆さんにじっくり考えていただきたい。

本日の私のご挨拶といたしましては、若い皆様に以下の言葉を贈り、開会の言葉にかえさせていただきたいと思います。「子曰く、いずくんぞ後世恐るべし。いずくんぞ来者の今にしかざるを知らんや。」「四十五十にして聞こえるなきはこれまた恐るるに足らざるのみ。」という孔子の言葉があります。後世というのは、後の世ということではありません。自分よりも遅れて生まれてくる人、こういう人達と接するときには、畏敬の念を持って接しないといけません。なぜかというと、私よりも遅れて生まれてくる皆さんのような若者が、努力次第では自分よりも優れた人間になるかもわからない。だから若者と接するときには、畏敬の念をもって接しなさいということです。

それから、四十五十にして聞こえるなき、というのは、光陰矢のごとし、少年老いやすく学成り難し、皆さん方は、今学ばなければならない時期にあるということでございます。というわけで、どういうことを学ぶのか？どういうことで努力したらいいのか？ということを、一言だけお話をいたします。

これは勉強するときも、仕事をするときも、遊ぶときも、真剣にやりなさいということです。真面目に真剣に生きてください。それでは、真剣に生きたら何が分かるのか？人生の哲学が分かる。人生哲学というのは何なのか？これは、“人間”という言葉は人の間と書きます。“仁義”という言葉がありますが、仁というのはにんべんに二と書きます。二人です。義は、羊という字を我という字の頭の上に掲げている字であります。つまり、宝物を神様に捧げているという意味を、義という漢字で表している。いずれも言わんとしていることは、私とあなた、私と彼、私と彼女、この二人の間柄の美学を身につけなければならない。そのためには愛が必要である。愛です。愛があって初めて物事は始まる。愛に始まって、それが教養によってさらに高められたところに、情緒の世界がくる。先ほどから言っております日本精神という、日本人が持ち続けて、大切にしてきたもの、失われつつある精神がこれなのです。中途半端にやりますと、5年10年やっていても何の役にも立たない。この4日間、真剣に学んでいただきたい。これだけを切にお願いいたしまして、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

ガバナーあいさつ

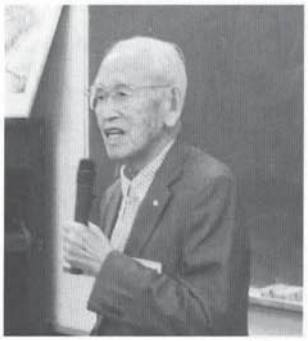
国際ロータリー第2670地区ガバナー
美馬　精一（鴨島RC）

皆さん、こんにちわ。ロータリーでは若い方を対象にしたプロジェクトがたくさんあります。そんな中で、リーダーシップを携えてもらいたい人に集まってもらうのが、このライラでございます。ロータリーの5つの価値観の中で、最後にリーダーシップというのが問われています。それは、ロータリアン自らにそれを携える必要があるということと同時に、若い、未来にかける皆さん方に、リーダーシップを身につけてもらう為にはどうするべきか？ということです。精一杯遊び、精一杯勉強し、学んでいくものだろうと私は思うわけでございます。世の中を見てみますと、あの人がリーダーだったらいいな、と思うような人も、リーダーシップをとっている国も少ないように思いますね。リーダーがいない時こそリーダーシップというものを考える必要があろうかと思います。

今回のライラは、新しい地域社会、コミュニティということについてのセミナーでございます。これをテーマにして、皆さん方に考えていただくということでございます。豊かさというものはどういうものか。私も考えますのに、今までは物の豊かさを追求し、貿易でも、ずいぶんと日本は頑張ってこられた。しかし結果的に、物とかお金を追求して、物質的にリッチになってきたけども、しかしバブルがはじけた後に、何にも残った物がない。今日、やはりメンタル面にリッチなものを追求する必要があるのではないかと思います。貧富の差というものも、アメリカのような先進国にとっても広がっている。中国のような新興国でも、沿岸部と内陸部、あるいは農業と都市では貧富の差が大きい。人間社会というのは、なかなかこの貧富の差というのは解消しにくい。やはりそれは人間のエゴがあるからかもしれません。

このセミナーでは、皆さん方で十分討論し、そして若い人の意見をロータリアンにぶつけて、考えて、そして次のステップに上がってもらいたいと思います。どうぞ皆さん方にとりましてこの４日間が有意義でありますことをご祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

ごあいさつ



国際ロータリー第2680地区パストガバナー
元国際ロータリー理事
今井　鎮雄（神戸西RC）

皆さんこんにちは。私は、このライラの第1回から今まで、休むことなく、多くの青年諸君と一緒に新しい時代を担うということを考えてきました。先ほど、7年前にこのライラを受講した方もおられましたが、自分が一度来たこのライラを自分で大事にして、そしてその中から自分の生き様を見つけている人達を、私達はライラリアンと呼びます。また場合によってはその方にロータリーに加わっていただいて、世界進出した人達と一緒に平和を分かち合いたいとか、あるいはまだ見たことのない世界の友達、そういう人達のために何かしたいと努力をする、そういう心構えをもった人間として育っていくことを期待しているのです。

そして、本当に世界を平和なものにしようとするならば、日本の国の持っている立派な伝統と、色々な考え方とを分かち合うような、お互いの友愛がなくてはならないということであります。毎回、このことのために、ロータリアンもたくさん入ってくると思います。皆さんの後ろで講義だけを聴かせていただく。その中で、私達がロータリーとして何をしなければならないか？　このことを考えるときに今大事なことは、さきほどのガバナーのお話にもございましたように、年取った人も若い人も、お互い同士が協同の社会、共生の社会にならなければいけないということを目的として、私達はしっかりあなた方を受け止めたいし、あなた方もまたしっかり先輩の方々を理解していただきたい。同時に、またその伝統をもって、次の中継ぎとして若い人たちを育てていただきたい。皆さんのために多くのロータリアンが、往復の旅費あるいは食費、講師に対しお金を出して、皆さんに自由に集まっていただきたいとお願いしている理由はそこにあります。

これは決してお遊びではなくて、私の持っている気持ちを皆さん方にお伝えをして、本当に次の世界が豊かになるような努力をしていただきたい。こういうことを私が深く願っていることを覚えていただきたいと思います。

私も考えたら34回目のライラであります。昔は若かったですよ、私も。実は2，3日前に青年諸君100人ほどが集まってくれた会で、私のことを「昔は今井さんの話を聞くのにマイクはいらなかったし、こんな小さな声でささやくように話すのは初めてです。新しい今井さんを発見しました。」と言うんです。年寄りになったということでありますけども、しかしここでは皆さんと仲良しになりたいな、同時に私の持ってる気持ちを伝えたいな、受け取ってもらったらその人達を励ましたいな、こちらも一緒に生きてる間、そして次に、皆さん方が新しい世界を開くことのために、一緒に頑張っていただくことを心からお願いをしたい。そういうことでご挨拶にかえさせていただきます。

ごあいさつ

国際ロータリー・ライラ委員会委員
海沼 美智子（東京恵比寿RC）

今日、東京から参りました。ここ数年、余島のライラには毎年伺わせていただいておりまして、ここのライラというのは日本でも大変独特な、有名なライラでございます。東京ももちろんライラをやっているんですが、まだ8年で、始まったばかりでございます。こちらのライラで諸先輩の方からいろいろお勉強させていただき、また若い皆様から学び、パワーをいただき、そしてこの素晴らしいロケーションの中で癒されて、元気になって東京に毎年戻っているという感じでございます。4日間、皆様とご一緒できるのをとても楽しみにしております。どうぞよろしくお願いいたします。

講話

ロータリーが ライラに期待するもの

国際ロータリー第2680地区パストガバナー・ライラセミナー顧問
深川　純一（伊丹RC）

ただいまご紹介いただきました深川でございます。皆さんようこそいらっしゃいました。今までちょっとかたいお話が続いておりますが、リラックスして気楽に聞き流してください。これからの３泊４日、ゆっくりとライラを楽しんでください。

最近ご存じのように、世界中がいろんな事で動いております。我が国でも先般の東日本大震災、大変な被害が発生しております。実は今から17年前に阪神淡路大震災がありました。このときにも私達はまさに被災者でありまして、大変な目にあったのであります。しかし、この東日本の大震災に比べると、その規模は全く違いますし、今回の大震災、未だに復興どころか復旧もままならない状況であります。淡路大震災の時も、わずか2ヶ月後にこのライラが予定されていた訳ですが、こんな非常時にライラをやるのかと、非常に強い非難の声がありました。事実、その当時、阪神間のロータリークラブとか、ロータリアンの家庭はみんな壊滅的な被害をうけました。クラブの例会場も事務局も、会員の住居も事業所も、全部潰れてしまったのであります。

そこで、この兵庫のロータリー、即ち、2680地区においては、年に1回の楽しみの会であった地区大会も中止いたしましたし、各地のミーティングから新年の行事、全ての行事をとり止めたのであります。しかし、このライラだけは実施したのであります。予定通りに震災後わずか2ヶ月くらいしか経ってなかったのでありますが、実施いたしました。大変な非難を浴びましたけれども、何故実施したのかというと、実はここにおられる今井鎮雄先生をはじめとする私達ライラのスタッフは、こういう非常時だからこそライラを実施すべきだと考えたわけであります。そして若いライラの皆さん達に奮起していただきたい。世のため人のために役に立っていただきたいと願ったわけであります。果たして震災後、ライラの若い皆さん達が、被災者の救済のためにずいぶんと働いていただきました。この震災の時ほど人々の暖かい善意の心というのを感じたことはなかったのであります。

このたびも東北地方を始め東日本は、本当にひどい状況になっておりました。こういうときにこそ、人間の善意というものがいかに大切かということを、皆さん心にとどめていただいて、私達はできる限りその心の救いの手を差し延べたい。また、現実に救済の手を差し延べなければならないのであります。

枕がちょっと長くなってしまいましたが、ライラというのは青少年の指導者の養成セミナーであります。皆さん方、ロータリークラブのこととか、このライラというものが一体どんなものかということを、まだご存じないと思います。パンフレットで具体的に説明はしておりますけども、もうちょっと詳しく話しておきたいと思います。そこでまず、このロータリーのこ

とです。皆さん、おそらくライオンズクラブというのはご存じかと思いますが、ロータリークラブというのはあまり聞いたことない人がおられるかもしれません。ロータリークラブというのは、簡単に言うと社交クラブの一つであります。この世の中は、皆さんご存じのように、自分のことしか考えない人達が大変多い中で、人のためにも何かをしようとする人達が集まったのがロータリーであります。

いま、日本全体でクラブの数は2300ほどあります。会員数は8万8千人ほどであります。世界中ではどれくらいかというと3万4千のロータリークラブがあります。会員数は121万人ほどでありますが、この世界中のロータリークラブは、それぞれ1つ1つのクラブが独立した自治団体なのであります。このような世界中にある3万4千のロータリークラブが連合体をつくりまして、その連合体を国際ロータリー、Rotary International と言っております。この世界中のロータリークラブの連合体である国際ロータリーもまた、各クラブと同じように自治団体であります。自分たちのことは自分たちで責任を持って治めようというのが、自治団体でございます。したがって、国際ロータリーも理事会とか事務局があります。ここにおられる今井鎮雄先生は、その国際ロータリーの元の理事の1人であられます。そこで、この世界中のロータリークラブというものを、50クラブから70クラブくらいでグルーピングいたしまして、それぞれ1つのグループを地区と称しております。そして、1つの地区毎に国際ロータリーの役員として、ガバナーと呼ばれる役職を1人ずつ置いて、クラブ群の連絡調整とか、指導監督に当たらせておるわけであります。先ほどご紹介がありました兵庫は1県1地区で、2680地区といいます。それからこの四国四県で2670地区ということになっております。そして、全世界で530の地区があります。ということは、ガバナーが全世界に530人おるわけであります。ガバナーというのは、任期1年、無給の国際ロータリーの役員でありまして、次年度に就任する人を、ガバナーエレクトと呼んでおります。そしてガバナーの任期1年の役職を終わった人をパストガバナーというわけであります。ロータリーの組織は大体このようなものであります。これは、万人平等の世界でありまして、ガバナーだから偉い、会長さんも偉いとか、役職のない人は偉くないとかいうことはありません。みなさんもガバナーも完全平等・対等の世界がロータリーの世界であり、ライラの世界であります。

ところで、このロータリーというのはどんな活動をしているのかと言いますと、20世紀の初頭は、まことに素朴な、そして奉仕活動のようなことをやっていたのです。例えば、新聞売り子の少年が、新聞が売れなくって冬の朝つっ立ってる。そこを通りかかったシカゴのロータリアンが、「おじさんが良いところに連れてってあげよう」と言って、例会場へ連れて行きます。そして「おい、みんな、この子が困ってるから助けてやれよ」。みんなが「わかった」と言って新聞を買ってやったり、中にはジャンパーを着せてやったりして帰してやる。少年は嬉しそうに、「おじさん達ありがとう」と言って帰って行く。それをロータリーの人達が見て、世のため人のためのことをしたんだなと思って、うなずくわけであります。こういう素朴な奉仕活動をやっていた訳であります。中には苦学生にクラブから奨学金を出したり、身体障害者の養護学校を作ったり、また、その運動を助けたり、また、例えば阪神大震災のような災害が起こると、その救援活動をやっていました。こういう活動をロータリーは社会奉仕と呼んで活動しているわけであります。

やがてこのような困っている人達を助ける所謂弱者救済の社会奉仕活動だけではなくて、

ロータリアンというのは、みんな職業を持っていますから、自分の持っている職業を通じて、世のため人のために何か役に立とうとこういうことを考え出しました。こういうことをロータリーでは職業奉仕と言います。例えば、賄賂をおくってはいけないよ、とか、そういう業界を浄化していくことなどを倫理の提唱と言いますが、そんなこともしていました。だからロータリー運動はある意味では、倫理運動とも言われているのであります。

ただ、倫理運動といってもわかりにくいかもしれませんが、具体的な例を言いますと、例えば街角にゴミが落ちていたとします。ロータリアンとしてはやはり、街を美しくするためにそれを避けてそのまま通るわけにはいかないから、やっぱりゴミは拾います。しかし、そのゴミを拾ったからといって、それはロータリーの本願ではない。ロータリーの本来の目的ではないよと言います。それでは一体、ロータリーの本来の目的は何かといいますと、そもそも、ゴミを捨てない人を育てること。これがロータリーの目的である。ゴミを捨てない人を育てたらゴミがなくなりますから、その根本的なところを目指しているのであります。これがロータリーが倫理運動だと言われている理由なのであります。

このように元来、ロータリークラブというのは、倫理運動だということになりますけれども、現実には、寄付もしていますし、災害の救助もしています。ボランティア活動もしています。とにかく困った人が出てきたら必ずそれを助けようということになりまして、寄付をすることも、まずロータリークラブで世のため人のための奉仕の心を身につければ、自然にその人は寄付もするだろうし、災害の救助もするだろうし、そしてボランティアもするだろう。そういうことをする元になる心をつくっていくべきだと、こういう言い方をしているのであります。だから現実にロータリークラブは大変な寄付もしておりますし、ロータリアン個人も色んな寄付もします。それからボランティア活動もしております。そういう風にご理解を頂きたいと思うのであります。

ところで今、社会奉仕と言いました、それから職業奉仕といいました、それ以外にも、国際的な活動もしております。それから大事なことは、子ども達の心を育てる、青少年の心を育てる青少年奉仕という活動もしております。例えば、高校生達の集いとしてインターアクトクラブというのを作っておりますし、それから18歳から30歳までの青年男女をもって、ローターアクトクラブをつくって、そのクラブの人たちとロータリアンとが、一緒に世のため人のために働いていこうということをしております。実は、このライラも、青少年を育てていくプログラムの1つなのであります。

それから、特殊な国際的な活動として、ロータリー財団というものもあります。これは元来、ロータリーが始まって12年ほど経った1917年のことでありますが、最初にロータリアンの寄付金をもってつくられた財団であります。これは今、世界中で大変大きな仕事をしております。例えば、世界中の若者達の国際感覚を育てようということで、ロータリー財団の奨学生に学資を貢いで育てていくということをしております。それから地震とか災害がおきるとその救済資金を出したり、今一番大きなこととして、全世界からポリオを撲滅する運動をしております。これはロータリー財団とか国際ロータリーがする最も大きな仕事であります。このようにロータリーの活動は非常に広いのであります。

ライラもロータリーが開発したプログラムの1つであります。そこでこのライラというものがどういうものか、英語で言いますと、Rotary Youth Leadership Awardsというのでありますが、日本語では青少年指導者養成計

画と訳されております。青少年のリーダーとしての立場にある人たちを養成していく、そういうプログラムであります。

ライラは、1959年にオーストラリアで始まったのでありますが、その後は鳴かず飛ばずの状態でありました。ところが1974年になって、アメリカのタコマでライラが開催されたことがきっかけになりまして、まさに草原の野火のように、全世界に広まっていったのであります。そして4年後の1978年に、ここにおられる今井鎮雄先生が、独自の発想で計画を立てられまして、このライラが始まったわけであります。したがって、このライラは、オーストラリアとかアメリカで始まった、オリジナルなライラとは、若干、趣を異にしております。オリジナルのライラというのは、18歳から24歳までの青年男女を対象として、青少年のリーダーを育てようというのでありますが、このライラが対象としているのは、20歳以上の青年男女でありまして、上限はありません。第1回、第2回のライラでは、60歳近い方も受講生として参加して勉強しておりました。

我が国の青少年を育てるという計画の実態を考えますと、青少年の指導者として育てるには、18歳から24歳という年齢では低すぎる。一般的に言って、指導者となる青少年の養成、青少年のリーダーを養成するということになりますと、既にボーイスカウトとかYMCAとかがそれぞれ独自にリーダーを養成しております。したがって、ロータリーが、それと同じようなものを企画・立案・実施していくというのは、屋上屋を重ねていくことになりまして、全く意味がありません。そこで、ロータリーが企画立案する以上は、一般のリーダーよりレベルの高いもの、ひと味ちがったものを実施しようということになったのであります。つまり、一般の青少年を指導する者がリーダーですが、その“リーダーのリーダーを育てる”、これが今井先生の構想であります。したがって、オリジナルのライラを日本の実情に合わせまして若干アレンジしたものが、今ここでやっているライラセミナーなのであります。したがって、このライラでは、受講生の皆さんは、一応この青少年活動、YMCAとかボーイスカウト、ガールスカウトで指導者としての技術的なことはもうすでに身につけたものとして、それより更に高い精神的な境地へ導いていこうという、これがねらいなのであります。したがって、非常にハイレベルなものとして計画をされております。

明日から始まりますこのセミナーの講義は、50人、60人の受講生の皆さんのために、はるばる一流の先生を遠くから招いて、講義をしてもらうという意味では大変豪華なプログラムだということができるわけであります。そこでこのハイレベルな講義を消化する能力を考えまして、今申し上げましたように、受講者の年齢を20歳以上としたわけで、これがオリジナルのライラと大きく違うところであります。そして年齢の上限はありません。そこで、1つお断りをしておきたいことがあります。講義というものは、話をする話し手と、聞き手、即ち聴衆との共同作業によって成り立つのであります。したがって講義の最中に部屋の出入りをしますと、講義の雰囲気を乱すことになります。話している講師の先生にも失礼でありますし、また講義をまじめに聴いている人達にも失礼であります。したがって、講義が始まったら部屋の出入りは絶対にやめていただきたいのであります。私たちはお互いに、絶対的信頼の世界に生きているわけでありますから、皆さん方も自分の良心に従って、自らを規律していただきたいと思うのであります。

このライラというのは、皆さん方の自律、自ら規律するということを前提としております。したがって、ここで何をするにも基本的には自由、何をやっても結構なのでありますが、ただ

みんなで何かをしようとするとき、例えば講義が始まる時には、始まる時間までに必ず来てください。時間を守ってください。時間というのは、万人の共有物なのであります。みんなのものなのであります。1人が時間に遅れますと、みんなが迷惑を被ることになります。実はこの時間を守るというのは、昔から日本のロータリーの精神伝統の一つであります。ロータリアンは時間を守ることに非常に厳しい。時間に遅れたりすると、あいつはだめだとして、信用を失ってしまいます。したがって、時間を守る、約束を絶対に守るというのがロータリーの掟でありますので、そのことを心に留めておいていただきたいと思います。

それからこのライラには、いろいろなプログラムがございます。キャビンタイムがあります。それかキャンプファイアーがあります。それからディスカッションがあります。そしてレクリエーションタイムがあります。ここで大事なことは、何故こんなことをするのかということをよく考えて、自分自身を規律していただきたい。皆さん方は青少年のリーダーのリーダーであります。したがって、自らの人格に恥じないように、自分の行動を規律していただきたいと思うのであります。

もう1つお願いがあります。それはこのライラは、4つのグループに分かれて、それぞれのキャビンに入っていきます。その前に、この3泊4日、4ヵ日間は、各班毎に行動をしていただきたいと思います。他の班にたまたま友達がいるからといって、勝手に自分の班から離れないようにしていただきたい。何故そんなこと言うのかというと、世界中のロータリークラブは、各クラブ毎に自治権を持ってそれぞれまとまっている。それと同じ論理で、この班というのはロータリーのクラブみたいなもので、クラブの中で本当に心を開き合って、仲良くなってもらう。それが大事なことでございます。ロータリークラブでは、会員がお互いに顔と顔を合わせて話し合うことを何よりも大切にしております。だからみんな仲が良いのであります。その話し合いの中からいろんな悩みを解決したり、またいろんな原理を開発したり、そして世のため人のために行動する知恵を生みだしていくということになります。それがこのクラブというものの原点なのであります。そこからやがてこのロータリーは世界的な巨大な組織に育っていったのであります。

このようにロータリーは、クラブの中に入って話し合うことを一番大事に考えております。したがって、このライラでも皆さん方がキャビンの中でまとまって話し合うことを大切に考えていただきたいと思っております。これが実はご自分のためでもあり、またキャビンの仲間のためでもあるということを覚えておいていただきたい。そしてお互いに色んな悩みがあったら悩みを話し合う。色んなアイディアが出てきたら、それを話し合う。そしてまた知恵も与え合う。そのようにして楽しく3泊4日を過ごしていただきたいと思います。

そして、そのいろんな話を聞いてくれるのがカウンセラーであります。このライラの顕著な特徴というのは、このカウンセラーシステムをとっているということであります。カウンセラーの方はこの3泊4日、皆さん方と一緒に寝食を共にする皆さん方の話や悩みを聞く相談相手だと思ってください。だからお互いに心をひらいて、話し合っていただきたい。そしてカウンセラーというのは一体どんな人がなってるのかといいますと、ロータリアンとロータリアンの奥様であります。この男女一対で各キャビンに入っていただきます。カウンセラーは、このライラが終わった後も、皆さん方の同窓会その他で面倒をみていただくことになるわけでありまして、仲良くお付き合いをしていただきたいと思います。

実はこのライラ、終わったあとにライラの学友会というのがあります。ライラのOB・OG会です。皆さん方も入っていただいて、知恵の交換をしたり、仲良くお付き合いをしていただきたいと思います。

それからこのライラの特徴の一つに、思索の時間というのがあります。これも他のリーダー養成計画にはないと思うのでありますが、何故こんな思索の時間などをおいているのか。それは、最近の世の中というのは、科学技術が発達いたしまして、物質的には大変豊かになりました。そして便利になりました。しかしそれと同時に効率一辺倒の社会になってしまって結局、今は格差社会になってしまいました。私達は仕事に追われて、自分というものを見失っている、心が貧しくなっている、そこでライラでは、平素はこの3泊4日、キャビンの中で一緒に過ごすわけでありますが、この思索の時間だけは、1時間、皆さん一人ぼっちになって、それぞれどこで一人ぼっちになっても結構です。浜へ出ても良いし、どこでもいいですが、一人ぼっちになってそして自分自身を見つめていただきたい。自分自身を見直す時間、これが思索の時間なのであります。瞑想にふけるのも結構であります。何を考えたら良いか分からない人は、何を考えたらいいかを考えていただきたい。そのようにして、この珠のごとき時間を大切にしていただきたいのであります。

それからこのライラの最も大切なプログラムの1つである、バズセッションとフォーラムというのがあります。バズセッションというのは、聞き慣れない言葉だと思います。これは、例えばここにおられる人達が、全体でディスカッションをしますと、喋る人は1人でマイクをとってベラベラベラベラ喋りますが、喋らない人は一言も喋らない。したがって、全ての人が必ず何らかの意見を出すためにはどうしたらいいか、そこで考え出されたのがバズセッションなのであります。ここにおられる約50人の人達を4人か5人くらいの小さいグループに分けて、それぞれその中でディスカッションしてもらいます。どんなことを言ってもかまいません。4人5人だったら必ずみんな何らかの意見を出します。それを4時間くらいやります。そのあと夜に、今度は皆さんまたレクチャールームに集まって、全体でまたディスカッションをします。これがフォーラムであります。そういう形で、全ての人がなんらかの意見を出すことができる。これがバズセッションとフォーラムのやり方なのであります。

それから最後にこの与島、もうお感じになっていると思いますが、素晴らしい自然環境があります。これは実は今井先生が、今から60年くらい前にこの島にやってこられて、まさに手造りでこの施設を造ってこられたものであります。初めは食堂もなかったのであります。この建物は、第1回のライラの翌年に、今井先生がこういうレクチャールームが要るだろうということで、建てていただいたのであります。したがって、第1回のライラの議論とかは全部あの食堂でしておりました。水道もなかったし、電気もなかった。それを60年間かかって、いろんな設備を作ってきて、今のこの与島の素晴らしい環境ができあがっているわけであります。したがって、この素晴らしい自然環境をみんなで守っていかなければならないと思っております。島での生活を大事にしたいと思うのであります。さて、このライラの3泊4日、一番大事なことは何か？それは皆さん方が本当に心から仲良くなることであります。心を開いて、キャビンタイムで、そしてフォーラムで、本当に存分に話し合っていただきたい。そしてこの3泊4日で皆さん方の心の中に何かぽっと火が灯れば、ということを願いながら、私の話を終わりたいと思います。ご静聴ありがとうございました。

オリエンテーション

ディーン　猪野恵一郎（松山南RC）
副ディーン　黒田　建一（西宮夙川RC）
余島野外活動センター所長　尾上　尚司
余島スタッフ　藤井　信人

○尾上　皆さんようこそ、余島にいらっしゃってくださいました。ありがとうございます。３泊４日の期間ですが、本当に有意義にお過ごし下さいますようにお願いしたいと思いますし、お祈りしております。その皆さんの学びの場所を、今から紹介しますスタッフと一緒に精一杯務めて、サポートしてまいりたいと思います。ぜひ楽しんで生活をしてください。スタッフを紹介いたします。阪田晃一と、藤井信人です。この二人は、余島のプロフェッショナルなスタッフです。余島の野外活動センターは、今井さんが60年前にこの島を見つけたということでしたが、第二次世界大戦のたった5年後に、民主主義教育のために、ここのキャンプ場を開設しました。子ども達のキャンプ場ですので、その時から大学生を中心にしたボランティアのリーダー達がたくさん活動してます。今も120名のリーダーがトレーニングをし、子ども達の奉仕に当たっています。それをプロのスタッフ達が指導し、生活していくというのを1年通してやっておりますが、そのボランティアリーダーの４回生で、３年前のライラセミナーの卒業生でもある松田啓希も、今回ボランティアで皆さんのセミナーのお手伝いに来てくれました。どうぞよろしくお願いします。

無人島のこの自然の中ですが、さっき蜂がさっそく登場してましたように、自然の中では、自分の命と体は自分で守っていただくのが原則なんですけれども、なかなか馴れていないと大変なものです。今から少し、藤井の方から、島で生活していく上でのちょっとした注意事項を申し上げたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○藤井　こんにちは。YMCA余島センタースタッフの藤井と申します。余島での注意点をいくつか説明させていただきます。まず、ワークブックの中の余島マップというところをご覧ください。今皆さんがおられるのが、大集会室とところですね。皆さんが受付をなさったインフォメーションセンターは、24時間、余島のスタッフが滞在しておりますので、何か緊急事があればお越しください。余島を使用される中で一番注意していただきたいのが火元です。ここは無人島ですので消防車が入って来られません。タバコをお吸いの方は、必ず灰皿が設置されている場所で吸うようにしてください。もう１つ、ドライヤー持ってきている方はいますか？ドライヤーを部屋で同時に２つ使用するとブレーカーが落ちてしまいますので、１つだけにしてください。以上です。

○猪野　私は、ディーンというお役目なんです。ディーンというのはどうも、校長というよ

うな役割だそうですが、ちょっと何かそぐわないですね。私は2670地区のライラ委員会の委員長をさせていただいてます猪野恵一郎です。よろしくお願いいたします。それから、2680地区のライラ委員長をされております副ディーンの黒田建一です。

このライラセミナーは2680地区と2670地区が交代で当番をすることになっておりまして、今年は四国の2670地区のロータリーが中心に担当させていただいております。この裏表紙の内側にライラ運営委員会の名簿が出ておりますが、みんなで、この４日間の準備をさせていただきました。セミナーの間も、この運営委員が皆さんのお役に立てればいいと思っております。それではこのライラのワークブックに沿って簡単に説明をさせていただきます。

ライラは毎年テーマがあります。大きなテーマ、2枚目をめくっていただくとテーマとして「新しい地域社会」とあります。人間は誰でも豊かで便利な生活がしたいというふうに願うものですから、それを追求しつづけて、それを達成するために効率性、利便性をどんどん追求してきた。先進国においてはかなりのレベルで達成されてきていると思いますけれども、しかしこれでいいんだろうか？これが本当に私達が望んできた心地よい社会なんだろうか？という思いにとらわれている方が次第に多くなってきているようです。でも私達はこれからもおそらく便利な社会、効率的な仕事、経済の拡大、グローバル化、それらを望みますから、それはどんどん拡大していくと思います。でも、その中でも、もうちょっと私達が人と人との関わりを大事にしながら、落ち着いて生活できるような、そういう社会を望めないもんだろうか。そういう社会を望むんだとしたら、どういう形になるんだろうか、それを考えてみましょう、学んでみましょう、というのが、今回のテーマです。

それから最初のページに戻って下さい。ライラについては先ほど深川先生からご説明していただきましたので、私は主にスケジュールについて説明をいたします。今年のライラは48名の受講生のみなさんに参加していただいております。この後4つの班に分かれていただきますけれども、班分けの発表を後でいたします。この後、その隣にある、上から見ると緑色の屋根の建物が食堂ですが、そこで6時からオープニングパーティをします。この開講式が終わった後、それぞれの部屋が決まりますから、部屋に帰っていただいて、荷物を置いていただいて、6時までに食堂に集合していただきたいということですね。最初が大事ですから和やかに、楽しくオープニングパーティを進めたいと思います。

その後にキャビンタイムというのがありますね。キャビンタイムというのは、それぞれの班毎にその部屋に集まってみなさんで自由に議論をしていただく。これは非常に大事な時間なんですよね。皆さんでコミュニケーションを図って、高めて、それぞれに知らない方ばかりですが、それがこの4日間でどれだけ仲良くなれるか？この4日間で仲良くなれるっていうのは非常に大事。これはリーダーとしても非常に大事な能力ですので、ぜひそれを心掛けて下さい。それから、その下にロータリアンの夕べというのがありますが、これは皆さんには関係ありません。ロータリークラブの会員のことをロータリアンと言うんですけどもね。ライラに参加した皆さんはライラリアンというふうに呼ばれるようになります。それから、お風呂は共同の風呂です。食堂の同じ建物の中にあるんです。共同の風呂ですので、できるだけそれこそ効率的に風呂をすませていただきたいので、カウンセラーの指示に従って、上手に風呂に入ってください。最初のキャビンタイムで、それぞれにその班のメンバーの名前を覚えていただいて、仲良くなり始めるまず最初のきっかけをつくっていただきたいと思います。

それから2日目、明日になりますと、朝食は朝7時半からです。そこの食堂で朝食をとっていただきます。明日は午前午後、講義があります。講義1は9時半からですね。ですから、それまでに必ずトイレやなんかすませていただいて、先ほどもお話ありましたけれども、ここの戸は、開け閉めすると音がするんですよ、講義の最中にこういう音がしますと、中の人にもあるいは講師の先生にも気持ちをそがれることなりますので、途中での出入りはしないようにお願いします。それから講義の10分前にはできるだけ、この中に入っていただいたらいいなと思いますね。昼食が11時半から。それから午後の講義は1時から3時まで。午前中の講義は先ほどご紹介しました野田松太郎さん。午後の講義は若松進一さんです。若松さんはオープニングパーティには来られておると思います。それが終わりまして、3時からはレクリエーションになっておりますね。レクリエーション、天気が良ければ外で、この島にはレクリエーションの色んな楽しみ方がありますけれども、たぶん最初の30分ちょっとくらいは班対抗のゲームやなんかができればいいと思っておりますが、これも余島のスタッフの皆さんにゲームの指導や何かをしていただけたらと思っております。よろしくお願いします。

オープニングパーティー
Opening Party

講話 ロータリアンの夕べ

国際ロータリー第2680地区パストガバナー・ライラセミナー顧問
深川　純一（伊丹RC）

皆さん暫くでございます。

今日はロータリアンの夕べで第1日にしゃべれという事であります。ここに書いておきました。「大いなる春といふもの来るべし　高野素十」、素十先生は私の俳句の恩師であります。今日は彼岸の中日も済みまして、いよいよ春本番であります。ロータリーで言えばライラの季節なのであります。万物の生命が躍動する季節でありまして、世の中も何かと忙しくなる時期です。皆さんには、はるばるこの与島、瀬戸内の小島までおいで戴きましてありがとうございました。忙中に閑あり。どんなに忙しくても自分の時間に都合をつける。それができる人をロータリアンというのであります。何故かと言いますと、ロータリアンというのは裁量権を持った業界のリーダーの集まりだからであります。暫くお付き合いを戴きたいと思います。

もう一つ右に書いておきました。「大榾（おおほだ）をかへせば裏は一面火」、これも高野素十の作品であります。この句は、おそらく囲炉裏の風景を詠んだものだと思います。榾というのは、皆さん馴染みがないかもしれませんが、木へんに骨と書きまして、これは囲炉裏に焚く薪の事であります。普通は山にある雑木を焚くのでありますが、時にはお客様をもてなすという意味で、桜の榾、桜榾、梅榾を焚いたりすることもあります。中には木の切り株を掘り起こした根っこ、これは、根榾というのでありますが、根榾を焚く事もあります。根榾というのは油が強うございますから2日も3日も燻りながら燃え続けるのであります。

こういう燻っている大榾をひっくり返してみたらその裏は一面の火の海であったという、ちょっとした驚きが、この句のモチーフになっているわけであります。表面は黒々として燻って、そしてその裏側に一面の炎を蔵している。いかにも大榾らしく、この句は大榾というものの特徴を的確につかんでおると思うのであります。

私はこの大きな榾が燻りながら燃えている姿に1962年から1963年のRI会長であった、ニティッシC．ラハリー（カルカッタ・ロータリークラブ）が言った「内部に火を燃やせ(Kindle the Spark Within)」という有名なターゲット思い起こすのであります。それと同時に、淮南子（えなんじ）の陰徳陽報の教えを思うのであります。隠れたる徳行には、必ず明らかなる報いがある、という意味であります。これは優れて東洋的であるが故に、ロータリーの美しい精神伝統の一角にある思想でもございます。

この大榾の燃える姿、それは表面はあくまでも冷静に、そして内心に燃ゆる情熱を秘めて黙々と実践をしていくロータリアンの姿を象徴的に表していると思うのであります。日本のロータリーの創始者であります米山梅吉先生、この方は自己犠牲の奉仕、Service not Self、この世界に生きた偉大なる指導者でございましたが、同時に、この陰徳陽報の世界に生きた人でもあったのであります。米山さんが常に自分

の名を隠して密かに人を助けた例は枚挙に暇がないほど沢山あるのであります。一つの例だけ挙げておきます。

ある若者が東京大学に入学して間もなくお父様が亡くなりました。それで勉学を続ける事ができなくなったという事を人から聞いた米山さんが、『一体毎月どれくらいの金がいるのですか？』と聞きました。すると『およそ30円くらいでしょう』とその人が答えました。すると米山さんは、『それは最低額でしょう、では私が60円出しましょう、ただし、私がお金を出した事は金輪際その学生に言わないでください』と言って毎月60円の金額をその学生に仕送ったそうであります。当時は大学出の初任給が50円ぐらいの時代の話であります。戦後、昭和22年の4月に米山さんがこの世を去られた時に、その学生は既に大学教授になっておられたのですが、間に立ったその人が、『貴方に学生時代に学費を貢いでくれた人はこの度亡くなられた貴族院議員米山梅吉先生ですよ。せめてお葬式には行かれたらどうですか』と言ったので、その教授はビックリして取る物も取り敢えず飛んでいったということであります。

この米山さんに限らず、昭和3年に東京における第2回リージョナルカンファレンス即ち、太平洋地域会議というのがございましたが、その地域会議の財政面を自分のポケットマネー200万円を投じて陰ながら支えた人がいます。この人は朝吹常吉さんといって昭和10年に第4代目の日本のガバナーに就任されております。その他にも日本のロータリーの先人達の多くは東洋古来の美徳であります陰徳陽報の世界に生きていた人達であったという事が判るのであります。

昭和3年と言いますと、その当時は我が国のロータリーにはまだ地区はありません。当然ガバナーもありません。無地区時代の日本のロータリーでございました。その昭和3年の翌年に、初めて日本に、全日本を1地区とするRI第70地区が始まるのであります。このリージョナルカンファレンスというのは、国際ロータリーが不定期に開催する大会でありまして、第1回はハワイのホノルルで行われました。第2回がこの東京で開催したわけであります。そして第3回目が昭和10年。これはフィリピンのマニラで開催されたのでありますが、この時に有名な話があります。マニラでの太平洋地域会議に出席する途中でポールハリスが日本に立ち寄りました。その時に日本のロータリアンが、ポールハリスに、『貴方は何故ロータリークラブを創ったのですか？』という質問をしたところ、ポールハリスは「私がロータリークラブを創ったのは格別な意味があったのではない。ただ寂しかったからだ」と答えたということであります。

ソーシャルのリージョンというのは国際ロータリーの管理上の組織でありまして、当時は全世界を6つのリージョンに分けておったのであります。この内容は省略いたします。このリージョン毎に国際ロータリーの理事の定数が決められていたのであります。しかし先般このリージョンという制度は廃止になりまして、現在は皆さんご存知のようにゾーンとDistrict即ち、地区だけであります。したがって地区大会というのは、国際ロータリーの大会としては最も小さい単位の大会なのであります。一番大きいのが国際大会。その次がリージョナルカンファレンス即ち地域大会。そしてゾーン大会。そして、そのさらに下に地区大会というのがある訳です。要するに、この太平洋地域大会、リージョナルカンファレンスというのは太平洋沿岸諸国のロータリアンの親睦と勉強の為の大会であります。

この昭和3年の東京大会では10ヶ国から568名が参加しております。今から考えると人数的には本当に規模が小さいのでありますが、皆さん粒選りのロータリアンであったようでありま

す。ところでこの第2回太平洋地域大会のホストクラブ、これが実は東京ロータリークラブでありました。この時はまだ日本全国には10クラブ未満しかありませんでした。そんな時にこの太平洋地域大会のホストをやったわけであります。どれくらい経費が要るのかと試算をしてみますと、だいたい200万円が必要。昭和3年の200万ですからものすごい大金であります。大学卒の初任給が60円くらいでしたから200万円はまさに大金であります。勿論地区ができる前でありますから、地区もありませんし、ガバナーもいません。したがって地区資金なんてものは勿論全然ない。地区資金というのは1940年以降になってからのことなんです。当時はまだ団体奉仕の考え方が定着しておりませんでしたから、東京クラブの人達はただ漠然と個人奉仕でやらなきゃならない、どうしようかというので頭を抱えたわけであります。勿論、当時のロータリアンは個人としては大実業家、大金持ちでありましたが、しかし東京クラブ自体はまったく金はありません。しかも米山さんは巨額の収入が入ってくるのでありますが、片っ端から湯水の如く、世のため人のためにみんな使ってしまう。そこで帝国生命の社長でありました朝吹常吉さんの登場となるわけであります。『では、私がその200万円を出しましょう。ただ一つだけ条件があります。それは私が金を出したことを金輪際口にしないことであります。』一番易しい条件であります。結局このようにして、朝吹さんのお陰で太平洋地域大会は成功裏に幕を閉じて、日本のロータリアンは面目を保つことが出来たのであります。これひとえに朝吹常吉の男気によるものであった。と記録に留められているわけであります。実はこのことは朝吹さんが亡くなったお通夜の晩に、亡くなられたのだから、もう話してもいいだろうと打ち明けられたと言われているのであります。

要するに、朝吹さんと米山さん、共に陰徳陽報の世界に生きた人でありました。しかし二人の金の使い方は非常に対照的なのであります。米山さんは今言いましたように、入ってくる金を片っ端から世のため人のために使ってしまう。したがって、最後は破産に瀕する。それに対して朝吹さんは、平素はダムの水のようにじっと辛抱して、節約して、大金を貯めておいて、乾坤一擲ここぞという時に一気にそのダムの水門を開いて、どっと金を出す。そして世のため人のために使ったのであります。そしてこの二人に共通している点は何か、金を出したことを金輪際人に言わなかったことなのであります。この陰徳陽報の教えは日本ロータリーの精神伝統になっておったのであります。米山さんは、“ロータリーは隠れた所に仕事がある。それは隠れているから妙味がある”と言っているのであります。

ご参考までに言っておきますが、昭和3年の太平洋地域大会はオーストラリアから元RI会長になりましたアンガス・ミッチェルが来ております。彼はロータリーに対する功績をもってサーの称号を与えられて貴族に列せられたのであります。

朝吹さんの話が出ましたからこの人がどんな人であったかちょっと紹介しておきます。米山さんのようにあまり有名ではなかったと思います。したがって人物像を紹介しておきますと朝吹さんという人は昭和10年から11年にかけての日本の第4代目のガバナーであります。明治10年5月28日に東京の三田の慶應義塾の図書館のそばにあった家で生まれたのであります。お父様が大分県の耶馬溪の生まれでありまして、中津出身の明治の先覚者、福沢諭吉先生を慕ってその門下生になったのであります。そして、先生のお世話で福沢諭吉先生の姪にあたる人をお嫁さんにもらい、福沢諭吉先生の一族として、当時福沢先生の持っておられた土地の一角に家を構えた、という事らしいです。

したがって、常吉という名前も福沢諭吉先生自ら命名したそうでありまして、民主的で庶民的なことの好きな福沢先生らしい命名であります。常吉の吉というのは諭吉の吉の字を一字譲っていただいたものであります。

19歳でイギリスに留学いたしまして、貨物船で75日間かかってロンドンに着き、ロンドン大学に学んでおります。そして当時流行しておったサイクリングをしながらイギリスの片田舎を回ったので、イギリスの事情には非常に詳しくなったという事が言われております。

21歳の時に帰国して、暫くして日本銀行に勤務しましたが、その頃からテニスを始めまして1911年にはフィリピンのマニラのカーニバルに招かれて山崎健之丞さんと二人で日本代表として参加しております。これが日本のテニス選手の最初の海外遠征でありました。

朝吹さんのロータリーとの出会いはどういうものであったのかと言いますと、父親の英二さんが、実は三井の重役をしておられた。そのためにロータリーの創始者である米山梅吉先生とは懇意にしておられました。そこで米山さんから、アメリカにはロータリークラブという社会に奉仕する大変良いクラブがある、日本にもそれを創ろうと思う、君も是非会員になってくれ、と言われて、朝吹さんは国際親善と社会奉仕を理想としておりましたから、大喜びで東京クラブのチャーターメンバーとして参加したのであります。

朝吹さんは、亡くなる直前に自分の生涯を回顧して録音されたテープの中で、『今ではチャーターメンバーの最後の生存者であるが、長い間ロータリーのような立派な会の会員として世の中のために尽くすことができたことを非常に幸せに思う』という事を言っておられます。

話は遡りますが、朝吹さんは日本銀行から三井物産に移り、ここで三井のドンと言われた有名な重役、益田孝さんの勧めもあって、三井物産を辞めて自分で商売をしました。そこで千代田組というというのを創立したのでありますが、その後に三越から迎えられて常務になりました。その後、三越を辞任いたしまして外遊をしたりして悠々自適な生活でありました。ところが大正13年に親友である古川男爵に懇望されて古川家の帝国生命の専務、そしてその翌年社長となりました。帝国生命の社長時代に、公と私を峻別する公私の別を厳格にしておりました。

これは今日のロータリアンも模範とすべきであるので紹介しておきますが、この帝国生命も後に朝日生命に名前が変わりますが、その時の会長である藤川さんという人が回顧談の中でこういう事を言っておられます。『朝吹さんは一枚の葉書を投函するのに、社用のものは給仕に託された。しかし私用のものは必ず自分でわざわざメールシュートまで入れに行かれた。』それからまた秘書をしておった齋藤さんの文章には、『朝吹社長は潔癖すぎるくらい潔癖な人で、社長室には一本別に私費で架設された電話があった。私用の場合は必ずそれを使って、料金は自分で支払っておられた。それからまたご自分の費用で自家用車を持たれて会社の車にはお乗りにならなかった。世の中には多大な財産を持っておりながら会社の費用に便乗しようとする者が多いのを嘆いておられた。そして自らはその潔癖を押し通されたという事であります。しかし、他の重役には能率と対面を保つため会社の車をあてがって、自分ができるからといってこれを他に強制しようとはなさらなかった事はいかにも尊いものであった』とこの秘書の方は記録されておられます。

朝吹さんという人は民間外交を随分推進された人でありまして、大正の終わり頃にアメリカ人のボーリスさんという人の設計による純洋風の家を建てて住んでおったのでありますが、昭和15、6年頃に戦争で時局が険悪になっていくまでは、毎週2、3回は自宅で晩餐会を開いて

接客しておられたそうであります。そしてその殆どが外国人であったと謂います。外国人の客の種類もロータリー関係、テニス関係、会社関係と多種多様であります。大使や公使、また音楽家も来ておったということであります。

先ほどの朝日生命の藤川さんの追悼文を引用しますと、『会社から派遣されて欧米に留学した時のことで、アメリカのシカゴの町を歩いておると路上で一人のアメリカ人に呼び止められた。お前は日本人かと言うのでそうだと答えると、自分は最近日本から帰ってきた者だが日本で一番楽しかった思い出はミスターアサブキに招かれてご馳走になった時のことだ。お前はミスターアサブキの名前を聞いた事があるか、と言うのであります。』藤川さんは『名前を知っているどころではない。ミスターアサブキは私の会社の社長だ、と答えるとその人はこれは奇遇だと、コーヒー店に誘ってご馳走してくれた』というのであります。ロサンゼルスに行っても同じような話もありますし、色々外交面で活躍されたようであります。

その後、朝吹さんも結局寄る年波には勝てず、昭和30年、1955年3月10日に、老衰からきた胃炎のために77年9ヶ月の生涯を閉じられたのであります。このお葬式は三越の社葬をもって青山祭場で行われたのでありますが、生前からの硬い意志によりまして供物、供花等は一切お断りした簡素なものであって、その当時の新聞にも花輪のない葬儀として大きく報道されたそうであります。

実は長々とそういう話をしたのは、朝吹さんのお父様に縁の福沢諭吉先生の出身地の大分県の中津という所は、向笠宏次パストガバナーの出身地でもありますが、この中津には茗荷家という料亭があります。食べると物忘れがよくなる茗荷のことです。その広い座敷に明治の元老の伊藤博文公が揮毫された扁額がかかっておるのであります。おそらくこれは酒の場で頼まれたものであると思われますが、その扁額に大きな字で「忘言亭」と書いてあって、茗荷家であるが故に忘言亭なのであります。このように昔の政治家というのは学問もあり、さらに政治にも通じておった一面があったと思われるのであります。

ところでこの“言を忘れる”という言葉の由来。出典は中国の古典の荘子の第26の所にその解釈が出ております。原文は漢文で分かりにくいので日本文に訳してみます。どんな事が書いてあるかといいますと筌（せん）というのは魚を捕る道具であります。筌（うけ）、とも言いますが筌（うけ）は魚を捕らえるための道具で、魚を捕らえてしまえば筌（うけ）のことは忘れてしまうものだ。それから罠は兎（うさぎ）を捕らえるための道具である。兎を捕らえてしまえば罠のことは忘れてしまうものだ。そこで言葉というのは意味を捕らえる道具だ。意味を捕らえてしまえば言葉に用は無くなるのだから、これは忘れてしまえばよろしい。私は言葉を忘れることの出来る人間を捜しだして共に語り合いたい。こういうことが書いてあるわけであります。

これはどういう事かと言いますと、この辺からロータリーの話がボツボツと入ってくるのでありますが、文字や言葉に囚われる愚かさというものをこの忘言という出典は語っておるわけであります。これは有名な文章でありまして、この“忘言”を出典といたしまして、筌蹄（せんてい）、蹄（てい）は兎を捕る罠で言筌（げんせん）とか忘言、忘筌（ぼうせん）という熟語が生まれてきたのであります。特に不立文字を唱（とな）える禅宗の家では、筌蹄、兎を捕る罠の言葉を愛用しております。

要するに、この言葉や文字に囚われる愚かさといいますとロータリーについても全く同じことが言えると思うのであります。例えばアーサー・フレデリック・シェルドンの言葉や文字を引用いたしまして、ロータリーとは何かを説いたり、職業奉仕とは何か、親睦とは何か、奉

仕とは何か、そういう事を得々として説いている人達もいます。しかし、ロータリーの奉仕とは何か、親睦とは何かということが本当に自分の身に付いているのか否かが問題なのであります。それではロータリーが身に付くとは一体どういう事なのか、まずそれはロータリーの知識を沢山知っている事ではございません。ロータリーの知識なんかはいくら詳しく知っておってもその人の態度、行動、まさに一挙手一投足がロータリーになりきっていなければロータリーが身に付いておるとは言えないと思うのであります。

すなわちロータリアンというのは、やはりロータリーの知識があるだけでは駄目でありまして、あくまでも、体験に基づいてロータリーが身に付いた人をロータリアンというのでありまして、そうでない人は単にロータリークラブの会員にすぎないのであります。この辺の所は1923年のRI会長のガイ・ガンディカーの書物にも出てくるところであります。それでは一体どのようにすれば自分の態度、行動、一挙手一投足がロータリーになるのか。それは毎週一回のクラブ例会に出席して仲間のフェローロータリアンとお付き合いをしている内に何時とはなしにその人の一挙手一投足がロータリーになっていくのであります。これは実は無意識的に無自覚的に感化されているわけでありまして、或いは、意識的に自覚的にも学び取っていくのであります。此故に米山さんはロータリーの例会は人生の道場であると喝破したのであります。

私自身がロータリアンの一挙手一投足からロータリーを学んだ事の一つの例があります。それは昨年亡くなられました西宮クラブの八馬啓さんの事であります。私がまだロータリーに入って日も浅い頃、八馬さんが伊丹クラブにメイクアップに来られました。その時、八馬さんは、例会の開始時間に1分遅れたのであります。すると八馬さんは「1分遅れてしまいました。したがって今日はメイクアップにしないでください。しかし折角来たんだから皆さんと楽しく過ごして帰りたい」と言って、ビジターフィーを払って例会を楽しんでお帰りになりました。私はこれを見た時、これがロータリーなんだと教えられたのであります。1分たりとも遅刻は遅刻。絶対に自分を欺かない。自分に厳しい日本ロータリーの精神伝統である時間厳守ということを身をもって実践しておられたのであります。

この他にもロータリーを身をもって教えられた体験は他にもたくさんあります。伊丹クラブの伴さんの話もありますし、このライラでの縁(ゆかり)のことで言えば西宮クラブの執行孝胤パストガバナーの話。この方にも色んなことを教えられました。その他ロータリアンの一挙手一投足から教えられたことは数限りなくあるのであります。しかし、これを話していたらきりがないので話をここで打ち切ります。

先ほどの忘言という言葉に話しを戻したいと思います。忘言というのは、私なりの解釈で謂えば「意を得て而して言を忘れる」という事であります。意というのは心のことであります。言というのは言葉でありますが、言葉は心の乗り物と考えてください。心が相手に届けば、即ち意思が通じれば乗り物は要りません。したがって言すなわち言葉は忘れ去ってしまった方がよろしい。必要なのは心の方なのでありますから、ロータリーの話とか文章、さらには俳句や短歌これ全部言葉でありますね。そういう言葉や文章に心を砕くのは、心を誤りなく読者に伝えるためなのであります。ここで心というのは概念内容の事ではございません。概念内容の事であれば例えば、皆さんご存知の松尾芭蕉の句に、“荒海や佐渡によこたふ天の川”という俳句があります。その荒海やの代わりに波荒しでも同じ事です。概念内容としては。さして変わりありません。しかし、相手に心を伝えたいのは概念の内容ではなくて情緒であり感情の強弱

なんであります。

先人から、先輩から、学ぶことはそういう情緒とか感動、それをひっくるめた、いわゆる品格であります。したがって自分の品格を高めるためには高い品格を持った先人の俳句に親しむことであります。人格を持った人たちと親しくお付き合いをして、そこから感化を受けていくことだろうと思います。それも実は一朝一夕のことでは叶えられるものではございません。毎日、毎日努力、精進して先人に学び、5年10年を経てようやくその一部なり一寸なりが高められていく、それが芸の世界の品格というものであります。ここで注意しないとならないのは先人の俳句から読みとるのはその心でなければならない。換言すれば、情緒であり、リズムであり、格調であり、人生観であり、そしてつまりは品格でなければならないのであります。決して俳句の“言葉”ではないのであります。俳句そのものはむしろ忘れた方がよろしい、言葉としては。つまり言葉を覚えてしまいますと、その言葉に囚われてしまいます。それは形ばかりの模倣、まねごとに終わってしまいます。これではいつまで経っても亜流でありまして、自分の物にはならないのであります。先人の俳句を多く記憶するということよりも、先人の俳句の心に一句、一句深く頷くのがいいのであります。そしてその次の瞬間に俳句そのものは忘れたらいいのであります。これが「意を得て而して言を忘る」、「忘言」の境地なのであります。

ロータリーの世界もこれと全く同じことが言えると私は思います。大事なものは“ロータリーの心”なのであります。ロータリーの論文とか言説とか文章、そんなものは忘れてしまっていいのであります。しかし例会やロータリーの会合でフェローロータリアンから何時とはなしに無自覚的に、あるいは自覚的に身につけたロータリーの心というものを忘れてはならないのであります。文章や理屈は忘れて結構であります。いつも謙虚に、その心に深く頷くことが大切だと思うのであります。このようにして初めて人は育っていくのだろうと思います。

ところでこの頃つとに思うことは、人を育てるということの大切さ、そして人を育てることの難しさなのであります。元来人を育てるとは言いますけれども一体どのようにして育てるのかという問題があります。　一つ問題を仮定します。それは私は一体どこに居るのかという問いかけであります。私の顔はここにあります。私の頭、私の胸、私の体、これ皆、目に見えます。しかし、今見えているのは私の姿、私の体であって私そのものではありません。私とは一体何か。実は目に見えている私の姿とか私の体というのは、私という目に見えないものをこの世に存在させている仮の姿に過ぎないのであります。これをギリシャ語ではペルソナ・personaといいます。ペルソナというのはお面のこと。仮面のこと。仮の面であります。

この、目に見えている仮面というのは現象であります。目に見えない私そのもの、これは本質なのであります。この仮面の内に潜む目に見えない私、目に見えない私の魂といってもよい、私の心といってもよい、これが実は私の本体なのであります。昔のギリシャ人はこういう考え方をしたのであります。このギリシャ語のpersona、これの最後のaを取ってください。person・人ということであります。

人を育てるということは、仮面である人の身体、肉体を育てることではございません。この仮面の内に潜む、内なる人を育てるということであります。人を育てるということは、すなわち人の心を育てることなのであります。昔の人は、内なる人を強くするという言い方をいたしました。これが人を育てるということなのであります。

この内なる人の中身はどうかといいますと、3つの意味があります。第一は理性の意味であ

ります。理性がないと何が正しいかの判断が鈍り、過ちをおかします。第二は良心の意味であります。人間はうっかりすると良心が鈍って倫理が崩れていきます。第三は意志の意味であります。正しいことを実行する意志であります。こういう内なるものを強くしていくことによって、はじめて人は育つのであります。そして私たち一人一人が育つこと、一人一人の人間的な成長が、社会改良のエネルギーになっていくのであります。

何はともあれ、人を育てるということは大変難しいことであります。しかし育てなければなりません。ことに最近の青少年の実態をみますと、非常に難しいという感を深くするのであります。今、我が国の青少年問題というのは、まさに危機的な状況にあります。毎日のように新聞紙上で殺伐な事件が報道され、日常茶飯事のように人が殺されています。親が子を殺す、子が親を殺す、特に最近は幼い子を狙った犯罪が頻繁に起こっております。人間というのは本来いかにあるべきかという人間の倫理、人の道というものが失われているのであります。どうしてこういう状況になったのか。その一つの原因は、人間は本来いかにあるべきか、ということを教える倫理教育が戦後は欠落していたのであります。したがって、今まさにこの人を育てる必要性が痛感されるのであります。ロータリーが倫理運動であれば、まさにロータリーの責務は重大でありますが、これは大変難しい。

現に今我が国の学校の現場が大変であります。私は、大阪の或る私立高等学校の理事長職を預かっております。大阪府の高等学校を例に取りましても、勉強ができる子とできない子がはっきりと分かれて、いわゆる二極化しております。しかも勉強ができる子も知識ばかりを詰め込まれて、人間として円満な人格が育っておるのかどうか分からない子もいる状態であります。したがって例え勉強ができる子であっても時として事件を起こす事があるのであります。そして勉強の出来ない子は落ちこぼれてニートになったり、暴力団に入っていくのであります。そしてさらに少子化の社会になっています。まさにこれは恐るべき事態なのであります。これは戦後日本の倫理教育、道徳教育の欠落が一つの原因であるとも思われるわけであります。したがって今日本の最重要かつ緊急の課題は、環境問題でも経済問題でも財政問題でもない、それは人を育てること、子どもの心を育てることであります。この意味でこのライラというのは大変重要なプログラムだと私は思うのであります。

人を育てるには、教育とかその他色々な情報が必要であります。しかし情報というのは単なる知識とかデータの問題ではございません。自分の周りを走り回ったり泣いたり笑ったりしている子ども達の、生の体験から発信してくる情報を的確に自分の心で受け止めなければ子どもを育てるために役立つ情報とはならないのであります。これは言葉や知識を越えた体験の問題なのであります。ロータリーで言えばまさに例会で顔と顔を合わせてそして話し合ってそしていつ知らず感化を受けていく、ということだろうと思います。

近来、子どもを育てることに関して、親子の対話が無ければ子どもが非行化するとか言われます。しかし、これはどこかの評論家の先生方が頭で考えたことであります。私の体験を申し上げますと、私と父親との対話は若い頃から殆どありませんでした。親父は忙しいし、私は私で遊ぶことに忙しい。しかし、私は父を心から尊敬しておりましたし、父も私を信頼してくれておりました。これは理屈の問題でも知識の問題でも対話の有無の問題でもないと思うのであります。それはどういう事かと言いますと、やはり幼い時から父の生活態度、一挙手一投足から何かを教えられてきたのだろうと思います。したがって人を育てるということはこういう感

化ということが重要でありまして、これに比べて最近はあまりに知識偏重になっておるのではないかと思います。ロータリーも知識や理論とか議論ばかりやっておっては駄目なのであります。私たちは近来あまりに豊かになり、あまりに便利になり、あまりに自由になり過ぎたために人間の能力というものを減退させてしまったように思うのであります。

自由であることは良いことであります。幸せであります。しかし自由な生活が出来る事はその反面におきまして人間の包容力というものを衰えさせる恐れがあります。そして便利であることは一方で人間の機能とか体力を衰えさせることになります。これらの点も今一度反省してみる必要があろうかと思うのであります。私たちは豊かに便利に自由になったがために子どもを育てる力、子どもを感化する力を衰えさせてしまったのかも分かりません。反省すべきことであろうかと思うのであります。

そこで今年度のRIのテーマは「こころの中をみつめよう、博愛を広げるために」というのであります。そしてそのロゴマークは心臓をデフォルメしたものだと言われております。しかし、心臓は目に見えますが心は目に見えません。まして心の中は見ることが出来ません。体をレントゲンで見てもCTやMRIで撮っても、心の中に何があるかは見ることができません。それじゃ一体どうすればいいのか。一つ方法があります。それは鏡を見ることであります。1936年にイタリア国立連合病院のエンリコ　ジュッポーニ博士が、「鏡の前の外科医」という素晴らしい本を出されました。この本の題名は、その中の一節で“鏡、言葉なき批判者”という文章がきわめて印象的であったので、鏡の前の外科医という題名が付けられたというのであります。

どこの病院でも手術室に入る前に消毒室があります。その消毒室の壁には大きな鏡が取り付けられています。外科医は手術室に入る前にここで手洗いをして消毒をいたします。そして鏡の前に立った外科医は、素早く消毒をしながら鏡の前に映し出された自分の目に語りかけるのであります。今から行わんとする手術は人の道に反していないか、良心にもとる所はないか、自分の全能力を発揮できるか、ということを心に確かめて静かに手術室に入るのであります。そして手術が終わって最後の縫合が行われると、元の消毒室に戻って、手術衣と手袋を脱いでマスクをはずしてから、また鏡の前に立ちます。この一連の動作は長年にわたって習慣づけられて、教えられたものなのであります。すなわち外科医は、今行ってきた手術の批判を鏡の中の自分の目に見るのであります。鏡の中の目から手術は正しく行われたか、全力を発揮できたか、全て良心に従って行われたかと反省をするわけであります。ここでエンリコ　ジュッポーニ博士は次の事を書き加えています。“鏡は一瞬にして全てを現わす。鏡は冷たく隠蔽するところを知らない。”と。これは実はロータリーの友の1976年5月号に載ったご当地・高松の三宅徳三郎パストガバナー（三宅洋三パストガバナーの御尊父）の話なのであります。

私は、この話の根底に、自分を厳しく見つめる、そして他人を優しく思いやる職業奉仕の心を見るのであります。ただ、現象としては心の中が見えない以上、人の行動の一挙手一投足を見てその人が何を考えておるか、どの様な悩みを持っているのか、どのような喜びを感じているのかという事を推し量るほかございません。他人の一挙手一投足から学んだことを自分の心に植え付ける他ないのであります。だからこそロータリーは、クラブ例会に出席せよというのであります。その事によってロータリアンは仲間から育てられる。フェローロータリアンに接触することによってフェローロータリアンから育てられるのであります。これがロータリーのクラブ奉仕の基本なのであります。他人の行動

を見て、自分の心を見つめることができるのであります。そしてその事によって人は育つのであります。心の中を見つめるという事は目に見えるものを見るのではなくて、目に見えないものを心で感じるのであります。では、心で感じるその自分とは一体何か。

例えば、私というものは今ここに居ます。しかし、この私は例会に出る前の私ではありません、また例会に出た後の私ともちょっと違います。しかし今の私として固定されるべきものでもありません。私というものの中身が絶えず色々な影響を受けながら他のロータリアンから教えられ、中身が絶えず高まっていく。そのエネルギーを与えてくれるものはフェローロータリアンなのであります。仲間のロータリアンの言動、一挙手一投足が、毎週1回の例会で奉仕のエネルギーを与えてくれるのであります。これが実は切磋琢磨であります。それによって自分の精神世界が無意識的に、かつ質的に高まっていくのであります。ロータリーというのはこのような動態的な概念なのであります。

このことを私の恩師は「心を求めて例会に至り、境地を得て例会を去る」と言いました。すなわち他のロータリアンとお付き合いをすることによって、自分というものが育てられていく。まさにロータリーは人を育てるのであります。これをロータリーのフェローシップとかロータリー精神を育む世界というわけであります。

一つの例を出しておきます。1974年度の国際ロータリーの会長でありましたウィリアム・ロビンスという人がいます。この人のターゲットは“ロータリー精神を奮い起こせ”（Renew the Spirit of Rotary）というターゲットでありましたが、これはまさにクラブ奉仕の中核をついているという意味で、ホームラン的な見事なターゲットであると言わなければならないのであります。

さて、今年度のRIのテーマは“心の中を見つめよう”というところまでは、精神的な提唱として受け止めればまず良いテーマであると私は思います。しかし博愛のためにと付け足したために、少し怪しくなってまいりました。はたしてその後の提唱を見ますと元の木阿弥でございます。やはり寄付金をはじめ人道的奉仕の提唱に終始しております。私は寄付金の提唱も人道的奉仕の提唱も結構だと思います。しかし、このような一つのことだけにこだわって、こうでなければならないというのは、現象に囚われて本質を見失っている。そうではなくて例外的なものも大事にしなければならない。ロータリーは広いものであります。ただそれは何でも良いと言っているのではありません。重点の置き方の問題であります。元々このロータリー財団の発祥の歴史をずっと考えていくと、ロータリーは倫理運動だというのであれば寄付金の提唱も結構であります。倫理運動によって奉仕の心を培っていく、その奉仕の表れとして自然に寄付というのは為されていくわけでありますから、それはそれで良いのであります。それを否定するわけではないのでありますが、ただそればかりを重点的にやるということが私はおかしいと言っているのであります。物には原則と例外があります。原則は絶対に忘れては駄目、そして例外を認める。だからこそ例外も光るし、原則も光るのです。これが時として例外が大きくなって原則が小さくなっていくと、これはもう本質を失ってしまうと言わなければならないのであります。

ロータリーにおける現象と本質という事を、私は以前から説いております。私の分析からしますと、ロータリーの本質というものは目に見えません。ロータリークラブは見えます、RIも見えます、ロータリアンも見えます、これ全部現象であります。ロータリーそのものは目に見えません。心で感じるのであります。ロータリーは心の問題あるというのはこのことであり

ます。心で感じるものを文字で表そうとしてもこれを正確に表現することはできません。例えば、“寂しい”といってもその寂しさは人によって感じ方は千差万別であります。これを文字によって正確に表現することなど到底できないのであります。この意味で言葉というものは大変不便なものだと思います。だからこそ仏教でも、その教義を説く時に文字で表す顕教というのが原則でありますが、その他に文字に頼らない密教の世界があるのでございます。

このように考えれば、思想の伝達には文字などは邪魔になるのであります。ロータリーの思想も、文字で表現すると、かえってその心を伝えるためには邪魔になると思うのであります。したがって、最近、私は、ロータリーは文字に書かれたものではない、と言い切っておるのであります。そこで、決議23の34号は、文字に書かれたものではないか、という反論が出てくるかもしれません。確かに決議23の34号は文字に書かれた素晴らしいドキュメントであり、目に見える一つの現象であります。しかし決議23号に内包されておる原理そのものは目に見えるものではありません。その原理というのは目に見えないが故に、そしてそれが良質であるが故に、時代を超越して永久に伝承されていくのであります。この事につきましては私は何回も各地で申し述べてまいりましたけれども大事なことでありますのでまだご存知でない方のために簡単に繰り返しておきます。

例えば、紀元前3世紀から紀元後3世紀まで隆々として栄えた古代ローマ帝国、これは紀元後3世紀に、ある原因によって滅亡しましたが、その滅亡する直前に、実はローマ法という素晴らしい法律を作り上げていたのであります。そこに説かれていた思想とかそのローマ法の原理は非常に優秀でございました。そのために、それ以後約1700年の歳月を超えて、今日の我が国の民法の第206条に復活しているのです。そのままの形でその原理が復活しています。これは所有権の原理なのであります。これは一体何を意味するのかといいますと、ローマ帝国というのは目に見える現象の問題でありましたから、跡形もなく滅亡してしまいました。しかし所有権の原理という、ローマ法に内在していた優秀な原理というものはローマ帝国が潰れてしまっても、それが優秀であったが故に時代を超越したのであります。そして現代に復活しているのであります。これは現象論ではなくて本質論であります。

例えばキリスト教の思想というものは2000年の歳月を超えて未だに私たちの心の糧になっております。道元禅師の正法眼蔵の提唱、これは650年の歳月を越えて今日に伝えられております。このように人類文化史における優秀な思想や原理というものは、それが目には見えないが故に時代を超越することができるのであります。

一つの例え話をいたします。二人の坊さんが刀を持って喧嘩をしました。一人の坊さんが他の坊さんの首を刀で刎ねました。すると、その首が中空に飛び上がってそこで止まり、そして、やがて2000年後のある坊さんの首にスポッとおさまった。この公案を何と説くか？まず、中空に飛び上がった首を思想と考えてください。そして倒れた胴体を制度とか組織と考えてください。制度とか組織というものは目に見える現象の問題です。したがって首を切られて命がなくなればそこで倒れて消滅してしまいます。これは目に見える現象の世界であります。しかし、思想というものは目には見えないが故に、それが優秀であれば時代を超越するのであります。これは目に見えない本質的なものであるが故に、時代を超越してやがてその思想とか原理を受け入れる人が現れた時に、その首にスポッと収まって、そこからまたその原理とか思想は世の中に蔓延していくという物語なのであります。これが現象と本質についての私の分析であ

ります。

ちょっとここで視点を変えてみます。“昨夜三更月窓に至る”、これはどういう事かと言うと、夜更けにお月様が窓に来たという事であります。三更というのは夜中の12時頃です。お月様が自分の部屋の窓に来てくれておったというのであります。これは昔、中国の南泉禅師が弟子の趙州禅師に語った言葉であります。どういう事かといいますと、真夜中にふと目が覚めると、お月様が自分の部屋を照らしてくれていた。便所に行こうとすれば廊下も照らしてくれる、実に有り難いお月様の行為であります。もし真夜中に目が覚めなかったらこの月の優しい行為に気がつかなかったかもしれない。もし気がついても月に感謝する人はいないかもしれません。また気がつく人がいてもいなくても、感謝する人がいてもいなくても、お月様は密かに優しい光を全ての人に与えてくれています。しかしお月様は、人からなんらの報酬を求めようとはしません。これはお月様だけではありません。太陽も草木も水も森羅万象全て私たちの命の恩人でありながらそれらは一切報酬を求めないのであります。

ロータリーの奉仕というものもこのようにありたいものであります。先ほどお話いたしました米山先生のように、ロータリーは隠れたところに仕事があり、それは隠れているから妙味があると言って、苦学生に学費を毎月援助しながらも、そのことを一切口にしなかったばかりか、一切の報酬も求めようとしなかった。まさに先生はこういう自己犠牲の世界に生きた人だったのであります。

このようにして、この世のありとあらゆるものが、その有るがままの姿で私たちの命の恩人なのであります。そのままの姿で仏性を表し、神の愛を示しているのであります。これを仏教では“山川草木悉有仏性”、山川草木ことごとく仏性あり、というのであります。実はこの言葉はロータリーの根底に流れる思想を表しております。すなわち、ロータリーの奉仕の思想の一つのあり方、それは何物も求めずにひたすら未来のために種をまくことであります。

このライラについてのコメントを一つ残しておきます。一つの話を紹介しておきます。これは九州の大村の佐古亮尊先生の説かれた話であります。ジョナサン・チャップマンという人の話であります。それは、彼がリンゴの木をこよなく愛したこと。そして一人でリンゴの種を死ぬまでまき続けたことであります。コーヒーを入れるズックの袋の口から顔を出して4つの穴を開けて、そこから2本の手と足を出すという、袋のお化けの様な格好で、頭には鍋をかぶり、裸足で50年間山や野を歩き回りました。サイダー工場で汁を搾った残りかすのリンゴを貰ってきまして、一つ一つの皮を剥いて、その種をほじくり出して、それを自分の着ている服よりも遙かに上等な鹿革の袋に入れて、オハイオ州の田舎から自分の足の及ぶ限りの土地にその種をまいて行ったのであります。日当たりの良い土地を選んでザクリザクリと穴をほって種をまくのであります。オハイオ州の上流のインディアンの住む部落にも、野獣の住む森陰にも、彼のリンゴの種はまかれていったのであります。そして疲れるとゴロリっと横になって、朝は小鳥よりも早く起きて仕事を始めていたのであります。いつの間にか彼はリンゴおじさんと呼ばれて、白人にもインディアンにも親しまれました。彼は芽が出て育っていくリンゴの木々を見て回って、人々にその育て方を教えます。さらに新しく種をまくところを探して忙しく働き、夜は人々の炉端に座って神様の話をする。自分の聖書の1ページを破って人々に渡したりしました。人里離れた開拓地の人達にとって、この聖書の何ページかがどんなに慰めになったかと言われております。

50年の間、誰に頼まれたのでもなく、ひた

すらリンゴのない土地に種をまき続けたのであります。それにも関わらず、何故このジョナサン・チャップマンがリンゴを植えたのか誰も知りませんでした。彼のこの長年の功績に対して、勲章もなければ銅像もありません。さらにお墓もなかったのであります。ただ毎年アメリカの田舎に、春になると薄紅色の花が霞のように匂って、秋に真っ赤なリンゴの実が実るだけなのであります。

これはマルチン・ルターの言葉でありますが、例え明日が世界の最後の日であっても、私はリンゴの木を植えるというのであります。このチャップマンの行いとよく似ているのでありますが、これはロータリーの思想と共通の境地にある言葉であります。ロータリーの役割とは一体何かと言いますと、結果を求めないで、ひたすらに種を蒔くことであります。その結果、ライラで蒔いた種が、若者達の心にいつか芽生えるかもしれない。それは、すぐに芽生えるかもしれないし、1か月後かもしれない、あるいは1年後かもしれないし、10年後かもしれない。あるいは永久に芽生えないかもしれない。例え芽が出なくてもただひたすらに種をまく。そして未来に夢を託す。これがロータリーの役割だと私は思うのであります。私はこの事を第1回のライラの記録書に書き留めております。

このようにロータリーは未来を夢見る思想なのであります。したがってロータリアンは皆理想主義者であるべきであります。ロータリーの理想主義者はただひたすらに種をまく、そしてロータリーをシェアするのであります。この善意とか愛についてさらに付け加えますならば、ポールハリスは、ロータリー財団の基礎を創ったアーチ・C・クランフ（1917年の国際ロータリークラブ連合会の会長）の提唱について、『原理としては決して正しいとは言わない。ロータリーの原理からいえば、彼の提唱は原理的にはおかしい。しかし、善意で提唱されて、善意で存在するに至ったものは大切にしよう』と言いました。そしてこれを一生懸命育てた。このことが今のロータリー財団が巨大な組織になっていく基になっているのであります。ポールハリスの考え方は、組織が大きくなればなるほど沢山の人が集まってくる。そして人それぞれの考え方は皆違う。しかし、人の善意とか愛とかは変わるものではありません。すなわち宗教が変わっても、また実践原理が変わっても、それぞれの根底にある善意とか愛とかは変わらないというものであります。宗教の違い、原理の違い、それらを超えて全てを包摂した原理として、ロータリーは寛容の中に宿る、と彼は悟ったのであります。彼は敬謙なクリスチャンでありますが、寛容でないあのキリスト教の不寛容を超えたものとして、ロータリーの中で寛容ということを説いたのであります。彼のこの考え方は大事にしなければならないと私は思うのであります。“ロータリーは寛容の中に宿る”。これが実はロータリーの思想としての原点なのであります。

ご静聴ありがとうございました。

講義 1

愛媛大学名誉教授
㈱愛媛キャンパス情報サービス社長
野田 松太郎 氏

PROFILE

[略歴]
1969年 大阪市立大学理学研究科修了(理学博士)
1970年 学術振興会奨励研究会を経て愛媛大学工学部助手
1991年 講師、助教授を経て、愛媛大学教授(工学部情報工学科)
愛媛大学評議員、総合情報メディアセンター長等を歴任
2005年 定年退職、愛媛大学名誉教授
2006年 愛媛大学発ICT系ベンチャー企業「㈱愛媛キャンパス情報サービス」を設立し、現在に至る

[学会・社会での役職等]
日本数式処理学会会長、情報処理学会四国支部長、ICPCプログラミング大会アジア予選実行委員長、ACA, SNC等国際会議実行委員長等歴任

おはようございます。

今ご紹介いただきました野田でございます。

こんなところに呼んでいただいて非常に光栄で、しかもトップバッターで講義をさせていただくというのは誠に超光栄でございましてですね、緊張でどうなるか分からんような状況ですけども何とか2時間をまともに乗り切れればと思っています。

今もご紹介いただきましたけども愛媛キャンパス情報サービスという会社は、今から20年ちょっと前にある日本の研究者で非常に基礎的なことをやっている人で、アメリカのテキサス大学にしばらく行っておられた方が、テキサスで教える非常に基本的な情報と数学を一緒にしたような分野の話は、もっと実践的な話をやってて、日本のようにゴジャゴジャ細かいことは一つもいらんのだという話をしておられました。エーッと思ってそれから何人かのアメリカの友人に、アメリカのコンピューターサイエンス、日本では情報科学、情報工学と言っていますが、アメリカは工学部っていうのは殆どありませんのでコンピューターサイエンスと言っているんですけども、そこの人達にお前のところの大学ではどんなことを教えるんだと聞くと、アメリカではそのコンピューターサイエンスを卒業した学生が企業に入ってもすぐ即戦力にはならない、役立たないということをさかんに言われているので、非常に実践的なことを教えなければならないという話を聞きました。

情報の世界というのは、日本はアメリカから大体10年そこいらは遅れているんです。今でも遅れているんです。少し前にもiPadが出てきたといって日本人が飛びついてましたね。日本で作ったのではなくてアメリカから来ていま

すね。全部アメリカの方が先に出て日本が遅れてるんです。その頃から、10年後には日本でも、情報工学を出た学生が役に立たないと言われるのではないかなと思いながら、大学の中でそういう風な組織作りを一生懸命してたんですけども、なかなか日本の大学っていうのはうまく動きませんね。案の定今から10年ちょっと前に日本の方でも日経連とか経団連どちらかが言い出しまして、情報工学出た学生を一生懸命雇ってみても役に立たないと。文系の学生にプログラミング教えた方が早いということをさかんに言われまして、当時文部科学省になる前だったと思いますが文部省も必死になってそんなことをやっていたんですね。

私はちょうどその様なパンフレットを作っていたので、この中におられたらいけませんけども私は官僚っていうのが大嫌いなんですが、私はこんなことを考えているんだよって言ってその官僚に渡しました。それからちょっと後に、用事がありまして文部省に行きましたら、その課の連中が皆、私の渡したパンフレットをコピーして持っているんです。あんたら著作権違反したなって話しをしてたんですけども、情報の学生が出てすぐ社会に役立たないということに危機感を持っていました。そういうことがバックにあって、私は愛媛大学の情報系の学生に、実践的な場を提供する必要があると思ってそれこそ先の官僚の人達とも話したり、愛媛大学の学長にも話したりして創ったのがこの会社です。

社長と言っていますけども召使兼小遣い兼社長でございまして、何でもかんでもやっているんですけども、あと社員というのは、愛媛大学の工学部の博士課程を出てきた人一人です。あと20人くらいは愛媛大学の情報系の大学院の学生とか学部の学生がアルバイトという格好で仕事をしています。

特に愛媛県中心に、愛媛大学をパイプにして頑張ってますけども、そこで必要な情報システムだとかあるいはホームページだとかそんなものを、大学の内情を知り尽くしてつくってますので、注文がきたら逆にこんな事をしたらどうですかと逆に提案したりしながらやってまして、そういう意味で喜んでもらっていると思います。それから非常に安いお金でやってますのでそんなお金で大丈夫ですかとビックリされることがよくあるんですけども、そのくらいでやっているのがこの会社でございます。

一応最初は出資金を取らないかんので株式会社にしていますけども本当にまともな株式会社かどうかは分からないんですけど、一応株式を発行してお金を集めて、年に１回株主総会を開いていますが、後の懇親会の方が楽しいと皆言っているんですけども、そういうところでございます。だからちょっと毛色の違った会社だと思ってください。

だから今日はそういう意味で、先もご紹介いただきましたが、情報系の話ですと気楽にしゃべれるんですけどもグ、ローバリゼーションの話とか何とかその辺が絡んできますと、なかなか流ちょうに話せるかどうか怪しげなので、おかしかったらおかしいぞと仰ってください。

ちょうど今日の皆さんがお持ちのパンフレットにも出てましたけども、フィロソフィーという言葉を、ちょっと考えてみてください。フィロソフィーっていうのは、横に書いてあるのがギリシャ語のフィロソフィーですね。ギリシャ語、一番始めのファイの字は英語ではＰＨになりますので、それからラムダでフィロですね。それからその次がシグマですけれども、これが英語でいうとＳですからフィロソフィアと言ってるんですけども、このフィロソフィーっていう言葉は印象的な言葉でして、大好きなんです。

フィロソフィーは哲学って言ってますけども、実際にフィロという言葉とソフィーという言葉の合成語です。フィロっていうのは愛す

るっていう意味です。それからソフィーっていうのは、例えば東京に上智大学っていう大学があるのはご存知だと思いますけれど、あの上智大学は英語名がソフィアユニバーシティといいます。その上智の智を取ってソフィーと言うんですね。

皆さんの中で「ソフィーの世界」という、易しい子ども向けの本があったのをご存知な方どれくらいおられますかね。非常に面白い本なんですけども昔、相当以前に私情報工学でやってましたけども、入ってきた一回生に君ら学校の勉強だけするんじゃなくて自分で本を読んでやれと、その為のセミナーはいつでもやってやるから時間外にやってやるからっていったら数人やってきて、それはいい事やといって、皆はどうも情報系の本を与えられて一緒に読むのを楽しみに来たらしいんですけども、そこでさっきのソフィーの世界を渡してやりまして、これをやろうと言ったらビックリしてましたけども、ものの考え方を勉強するのは非常にいいなと思います。例えばこの二つの言葉が合成語だということが分かるとフィロが愛なので、色んな言葉に波及してきます。例えばフィルハーモニーという、交響楽団っていうのがありますけど、これは音楽を愛するという事です。ビブリオフィーというのはこれは愛読家のことなんですけど、ビブリオというのは元々はバイブルもここから来ている言葉で、本という意味ですね。だから本を愛するので愛読家になったんです。

地名でもフィラデルフィアっていうアメリカの大きな都市があります。あれはやはりこのギリシャ語の二つが繋がって地名になってフィラデルフィアっていう。よく欧米でフィリップ殿下さんもいますが色んな人がいますけどこれもフィローということとヒポス、これは馬ですから馬を愛するということであります。それが今人名に化けてるんで、その語源を探索すると非常に面白いのが色々出てますから、色々な語源はたぐってもらえるといいと思ったりしてます。

だからそういう風に一歩深く入って言葉一つを考えますと、単にフィロソフィーは哲学ですよとやるよりも、もっと楽しさが沢山出てくるだろうと思います。余分な話を続けていきますと、ここで「一枝を切らば　一指を切るべし」というのがありますけれども、今例えばNHKのテレビか何かで、私はNHKも大嫌いなんで見ないんですけど、平清盛かなんかのドラマをやっているはずですね。清盛を見てですねあれは多分平家が隆盛になっていく頃をいっているんだと思うんですけど。その清盛が亡くなった後で平家がだんだん源氏に負けてきます。そのずっと流れを書いている平家物語という書物があります。平家物語そのものは色々書いてあるその中から私大好きなのが「一谷嫩軍記」というのがあるんです。歌舞伎の世界です。熊谷陣屋という、これご存知の方どれくらいおられますかね。歌舞伎なんて馬鹿げたことは見ないというかもしれない。

ここに公札、立て札が立っているんですけど、熊谷二郎直実という人が主人公なんですけども、源義経が鵯越で奇襲で平家をやっつけますけども、その時の部下です。

平 敦盛という名前知ってますかね、いわゆる平家方の公達で、悲劇の主人公で色んなところに出てくる。清盛の甥になります、形式的にはね。甥になるんですけども実はこの平 経盛の奥さんと称する人が今で言う不倫をしておりまして、後白河法皇との間に子どもをつくって、後白河法皇の子どもにしたら都合が悪いので、経盛の子どもにしてある、というのが筋なんですけども、そうするとこの敦盛というのは場合によったら何かのことで天皇になるかもしれない人なんですね。

直実が敦盛を仕留めることになるんです。敦盛を仕留めたというのでやってくるのがここなんです。首を持っているんですね。その時に義

経の家来の弁慶が、梅の木に例えて「一枝を切らば　一指を切るべし」というのをここに書いて、この「一枝を切らば　一指を切るべし」でその時に熊谷二郎直実がわかったのはこの枝という字、これ実は子どもの子である。子どものことである。「一枝を切らば　一指を切るべし」というのは梅の枝を切るという話じゃなくて一人の子どもを切るんだったらもう一人の子どもも切れということの意味だと悟るわけです。実際に首絞めたときに敦盛と、敦盛と同じ年代の小次郎という自分の子がいるんですが、その自分の子どもを身代わりに切って、その首をこれは敦盛の首ですよと持ってくるという劇です。いうなら涙を頂戴するんですけども非常にいい歌舞伎の舞台だと思います。

歌舞伎って言うのは非常に馬鹿げているようですけども、いっぺん虜になってしまうとどうにも離れられないというのが歌舞伎で、私は大学の初めくらいの頃に、切符が余っているから行けという風に半分命令みたいに言われまして、それで京都の南座に行って、ある芝居を見てビックリして、こんな凄いものはないと。それからずっと歌舞伎は大好きでよくよく行ってるんですけども、松山に行くと残念ながらあんまり歌舞伎が無いんで、出張して東京にいったら必ず見る。大阪に出てくると必ず京都まで行って見る、ってなことをやっていました。皆さんもいっぺんそういう日本の古典を味わってみると楽しいですよ。人によって非常に共感を覚える人もいるし、あんなもん嫌だと思う人もいる。それはそれでいいと思いますね。

で、これはそういうふうな言葉です。だから枝とか指、その死というものを子どもに置き換えてみる。そんな事をしていますと同じ清盛の話を聞いても多分ドラマで上っ面だけやっているよりははるかに楽しさが増えるだろう。という風に思います。だから私はテレビドラマは見ない。で、同じように書物っていうのは、そういう風な色んな事を考えさせてくれるっていうのが私も大好きなんですね。

まず先の歌舞伎にしましても、ヨーロッパに行くとオペラでしょうけども、あるいは絵画とか文学とかいうのも、例えばモナリザのような絵を見たときに、いいなと思うのは半分受け売りみたいな話があって「あの絵はくだらん絵だ」とあまり公言できないんですよね。だからそうじゃなくって、例えばこの絵の実物を見て、いいなと思うのもいいし、例えくだらんと思ってみても、このモデルは誰だろうかなんて話も出てきますし、本当のモデルの実物、今出会ったらとんでもない超超おばあさんでしょうけど、だからそういう意味で絵というのも見て、そこから考えればもの凄く面白いものが出てくると思います。

普通の小説とか見ても読んでみたら一回そのバックを考える。それが何故書かれたのか考えるというのはもの凄く楽しいことだと思いますね。私は昔からロシア文学が大好きで、外国に最初に行くのは、何しろロシアに行きたかった。今のロシアですね。昔のソビエトに行きました。最初はシベリアに行きました。シベリアにいった理由っていうのは比較的安く行けたというのもあるんですけども、ドストエフスキーの「罪と罰」ですね。これが最初にロシア文学に浸り込んだ最初の小説だったものですから、ラスコーリニコフが流されて行くのがシベリアなのでどうしてもそこへ行きたかった。行ってみて幻滅しましたけどもね。そういう暗いイメージじゃなかったので。もっと暗いイメージを想像して行ったんですけども比較的明るかったので、良いことなんでしょうけども「罪と罰」でのイメージとちょっと違ったのが残念だったです。それから何年か前に国際会議でサンクトペテルブルグに行きまして、その時はやっぱりどうしても好きなミュージアムがありますのでその辺をうろうろして楽しかったです。

だから、同じ旅行をする時でもバックに何かを持っていると、それを一生懸命考えていると、また楽しみが倍増してきますので是非色んなところで本を読んだりすることをやって欲しいなという風につくづく思っています。

よく学生さんにも言うんですけども、なかなか最近はそんなもん読むよりもアニメか劇画を見るほうが好きらしいんですけども、あれでは何も得られないように思うんですけどね。

本を読む時に、眼光紙背にとか、行間を読むとかいうんですけど、意味は似てますけどね、眼光紙背にというのは字句を解釈するだけでなく行間にひそむ深い意味まで理解することとか、行間を読むってのは文章に直接表現されていない筆者の真意をくみ取るというのが字引に出ている定義ですけども、英語ではどちらもリード　ビトウィーン　ザ　ラインスと言いますので、どちらの意味も英語的には同じになっています。

こんな事を言っていると、お前はITの専門家じゃないじゃないかと言われるかもしれませんが、電子ブックを見たら行間をなかなか読めないと思いますので、特に若い人には推奨すべきではなくて、年寄りになってくると、もう行間を読むのがしんどくなってきますから、そういう人には良いかもしらんのですけど、若い人は絶対に読んだらいかんと思います。今は逆で、若い人が一生懸命飛びついて、あれどうも私は人間の本来の文化を失っていくのかなと思ったりもしています。だから紙の書物を読むっていうことは非常に重要で、あまり今の先端技術に振り回されない事が重要。ただ売れるのでしょうがないですね。本を読まないという事は、結局は考えないという事になってくる。

今、年寄りはまだ本を読むんですね。若い人は読まないですね。年寄りの方が考えるんですね。若い人は考えないですね。これじゃぁこれから先はどうなるんだ、というのが一番気になっていることです。

昨日もちょっとお話したんですが、東北の地震と大津波があった後に、非常に不備な態勢から福島で原発事故が起こりました。私は正直いって福島県の東半分はこれから人は住めないだろうと思うんですけども、私らの年齢になると福島で採れたものを食べても問題ないんですね。セシウムがDNAを破壊してガンになると言われているんですけども、今から福島の米を食べたり、酒を飲んだりしても、ガンになるの

が10年はかかるでしょう。この頃医学が進歩していますから、ガンになってから亡くなるまでは短くても10年はかかるでしょう。そうすると今一生懸命食べても20年はまだ生きますので、ほっといても寿命になるので都合いいかな。ただ若い人と年寄りとは大分違うと思っていますけども。

若い人は特に、ぜひ本を読んで、色々考えてください。テレビをあまり見ずに考えてください。今は、テレビとか電子ブックがポンポンでてきた。そうすると一番悪いことは、考えるより前にあれこれ出てくるんです。そうするとそれで想像が出来なくなる。作者や解説者の話みたいのが表に出てきて、もう文句言えなくなっているんです。だから逆に言うと、私こんなこと言っていますけども、皆さんは、講義であんな事を野田が言っていたけども、実際には電子ブックの方がいいんだよと思ってもらっても構わんのですね。一番いけないのが解釈の押しつけなんですね。そういう事をすることによって想像力がどんどん減ってくる。今の時代はそういう時代になってしまっている。いう事が非常に気になっています。

今まで文明の利器と称するものが、本当に人間の世界に良かったのか。会社をやっていて学生にも言うんですけども、ICTがどんどん普及してきて、それでこんなシステム作りますといいますから、それを作った時に君は楽しいかもしらんけども、それが世の中に出たら本当に世の中に良いんだろうかと考えたことあるかと言ったら、無いというのが大半なんですけども、そこのところが一番重要なんかなと思います。

生きていると色んな意味でお金を稼がなければならない、そうすると世の中どうなろうと関係なくて、まず金を稼ごうという事が先に来ますので、何でもかんでも作るんですけども、やっぱり作る時に一歩引いて、本当にこれは人類にとって良いんだろうかと考えるのが一番意味があるのかもしれません。

いわゆるコンピューターの世界っていうのはデジタル的に量を処理するわけです。基本的に電気のオンとオフ、0と1だけで構成するものでして、それで森羅万象全てを表そうというのがコンピューターの基本的な考え方です。そのとびとびの量のことをディジタルと言っています。英語ではdiなのでディジタルといのが良いんでしょうけども、日本ではデジタル。

皆さんが滑らかに普通の物を見るようにスライドを見ておられたと思うんですけども、この中には沢山の点があります。もの凄い点があってその点が各々色を持っています。その色が非常に沢山あるから滑らかなように見えるだけです。こういう曲線があったとします。曲線はそのアナログ量といいます。それをとびとびの値に全部近似していきます。それがディジタル近似なんです。ここの間の線がもの凄く沢山ありますと一見連続しているような量に見えるんです。人間の知覚、目も鼻も皆アナログ量をコンピューターは、最近ですと全部TCP/IPというネットワーク接続用の物を使っているので、携帯で電話しましても普通の喋る声はアナログなんです。それをディジタルに変換するんです。そして通信する。最後耳で受ける時はまたそれをアナログ量に変換して聞くようになる。それはディジタルの方が扱いやすいという事があるんですけども、ディジタルというのはそういう意味ではアナログ量の近似なんです。近似という事は同じものじゃないんですね。近似する時にどこか抜けている可能性もあるんです。だからディジタルの世界だけでは物事の本質には迫れません。

さっきの話で言うならば本を読むということは、全部アナログの世界。電子ブックを見るというのは無理矢理にディジタル変換をしてそれを読ませているんです。だからどっかにギャップがある。昔アメリカの有名な学者でハウスホ

ルダーというのがいたんですけども、その人は飛行機には絶対に乗らないと言っていました。どういう理由で飛行機に乗らないのかというと飛行機を設計する時に必ずこのディジタル量で誤差のある量を計算している。だから本当に安全とはとても言えないから、飛行機にはよう乗らんと。どうやって移動していたのか知りませんが日本に来たんですけどね。まさか船で来たとは思えないんですけどそんな事を言っている人がいました。

恐らく原子力発電所にしても、設計するときにはもの凄く綿密な設計はするんですけども、どっかにミスがある可能性は絶対に残っているんですね。コンピューターでの処理っていうのは一見何でもできそうですけども、本当の真実は語ってないと、注意して見ていただくと世の中がまた見方が変わってくるんじゃないかと思います。あまりコンピューターは信用してはいけません。何でも鵜呑みにしないという事が重要です。鵜呑みの語源ていうのは、読んでますと、鵜が何でも呑むという意味と、ウンノミという意味から来たという説もあります。何でもウンウンと肯定して聞いてしまうという。これがその鵜呑み。英語ではこれをスワロー。ツバメですね。ツバメも似たような事をするんだと思いますけども。

日本の研究をリードしてきた人達は絶対に鵜呑みに物事を考えてなかった人達だと思います。湯川秀樹先生っていうのは日本で最初のノーベル賞を貰った人ですね。私らも、子どもの頃に湯川先生がノーベル賞を貰われたので湯川効果といって理学部の物理学科に行きたい学生がどっと増えました。私もそんなことで物理学科に行ったんですね。そういう効果を生んだ先生です。湯川先生っていのは、講演なんかをされる時はもの凄く話しの下手な先生ですけどね。話を始めると荘子の話をする。荘子というのは中国の思想家。湯川先生と同時期の有名な物理学者・朝永振一郎先生。この先生も京大の卒業ですが、東京教育大の学長もしておられました。今の筑波大です。この先生は話しの非常に上手い先生で、もの凄く楽しい先生です。この辺は古い、あと小柴昌俊さんが東大におられましたけれど、この中で人当たりが悪い人、業者いじめをしていた人ですけども、私は正直あまり好きじゃないです。あと最近ですと江崎玲於奈さん。ダイオードのあの人は話するとノーベル賞でどこやら受賞した話ばかり言うので大嫌い。まぁ貰ったからしょうがない。

数年前に貰った南部陽一郎先生。私が大学院に入りましたのは、南部先生が最初に立ち上げられた研究室なんで、孫弟子になるんですけどね。大学院を出る頃に、なかなか理論物理なんて職がないんですね。大学のポストがない時に、南部先生は当時シカゴ大学におられたんですけど、あるところから、シカゴにあるノースイースタン大学かな、そこにポストがあるから行かないかと言われたことがあって、よく考えたんですけど、結局当時は日本とアメリカの間もまだまだ遠い時代だったので、そんな所まで行かなくてもと思ってやめたことがあるんです。それは南部先生が口をきいてくださったんだと思うんですけども。

もっと若い世代になると益川さんとか小林さんとかいるんです。この辺は最近で益川さんはよくテレビに出てくるのでご存知の方も多いと思います。私はいろんな大学の人とパイプを持って行き来をしてた。だから益川さんなんかは、大阪に来ると私の家に泊まってたし、一緒に酒飲んで夏に合宿とか称して信州の奥の方に行くんですけど、そこに露天風呂がありましてあの風呂に行っていると男女混浴だから若い女性も来るんじゃないだろうかって、酒を持って行って延々と夜中まで頑張っても全然誰も来ないんですよね。その内に酒飲んで風呂入ってますから調子悪くなってきて等という覚えがあり

ますけどね。宿で他の連中があの二人はどこに消えたんだろうと探してくれてたんですけど。まぁ楽しい人です。小林さんは数年下で、彼は大人しい人ですけどね。

こういう先生方、人達は、今のようにディジタルが溢れている時代じゃなくって、もっと日本が貧しくって何も無い時代なんです。だから一生懸命本くらいしか読むことが無かった。当時ある先生が言ったんですね。ひがみと貧困は発明発見の父であり、母である。確かにそうだなって思っていますけれども、といってもういっぺん貧しくなれっていうのは皆さん嫌でしょう。だからせめてひがみくらいは持ってもらったらいいと思います。ひがみも悪い意味で言われますけど、やっぱり何で同じことやってもあいつが報われて、俺が報われんのだろうと思ってもいいんじゃないかと思うんです。リードしてきた人たちは皆そういう意味でアナログ人間です。やはりディジタルの世界が確かにひがみやら貧困は無くしていくのに貢献したでしょう。だけど人間が本当に考える人間の本質を失わすことにもディジタルは貢献したんかなと思ってます。

ディジタルの世界っていうのは、今の話をまとめていきますと、世の大勢に従順な国民をずっと作ることに、あまり考えない国民を作ることになってきた。日本はそうして世界の中に巻き込まれてきた。実際には、さっき大嫌いだと言った官僚から発する命令で世の中がそうやって変わってきて、今はそういう時代にいるのだろうと。だから色んな問題があるんですけどもそれに抵抗できなくなる。それをやっている原動力というのは今のグローバリゼーション。例えばこれもここにおられたら申し訳ない。私は大学では東京大学が嫌いなんですね。やっぱりひがみがあるんでしょう。例えばその東京大学が外国から留学生、良い学生を取るために入試時期を9月にするとかいう話をしてますね。そんな小手先だけではろくな事はできないと思うんですが、もっと自分の体力を付ければいいと思うんですけども。そういうのが結局文部科学省を動かして、恐らくその内に日本の大学で半分くらいは9月入学になるんだろうと思うんですけども、そんなんではなかなか良い学生は来ない。やっぱり体力をつけなかったら、本当の研究力つけなかったら駄目なんだと思っています。それが皆さん方、特に若い方々の使命だと思います。

言い忘れましたけども、これはご苦労を逆におかけするかもわかりませんけども、細かい話の所は聞き流しておいてください。もし必要ならいつでもおっしゃってもらったらこれのスライドであるとか何かいつでもお渡しできますから、著作権なんか主張しませんので是非欲しいなと思ったら仰ってください。

大半の方はご存知でしょうが、グローバリゼーションというのは社会的、経済的連関が、旧来の国家や地域などの境界を越えて、地球規模に拡大して様々な変化を引き起こす現象、と字引的な意味で出てきます。このプロセスをグローバル化といっています。グローバリゼーションは非常に良いことだと宣伝されているわけですけれども、国際的分業による低コスト化だとか全世界規模での物資、人材、知識、技術の向上による科学技術の進展、効率的な投資だとか、個人の娯楽の国際化だとか、まぁこれは肯定的側面です。負の側面としては多国籍企業の支配による世界のアメリカ化、地域文化の衰退、貧富の格差の増大などですね。こういう風に地球規模に拡大していくというのは、人類、動物が自分のテリトリーをできるだけ増やしていきたいという本質的に持っているものなので、自分の勢力の及ぶ範囲を増やしたいという意味でのグローバリゼーションというのは仕方がない。だけどそれをどういう風な方法で持っていくのかが非常に大きな話で今のようなプロ

セスっていうのはなかなかしんどい。

今のグローバリゼーション、グローバル化のバック、背景としては、新自由主義という考え方が中心。新自由主義っていうのは、規制緩和と自由放任を重視した経済学説です。例えば、色んな事を政府が指導して規制をするという事はもう止めましょう、ということです。それを最初に言い出したのはハイエクというオーストリーの人だった。この人の話は色んな意味で悪い方だけではないと私は思うんですけど、市場の情報や知識を人間が全て知ることは不可能である、という事を言っているんです。人間が全て知ることはできないので、そしたら必然の法則に従って勝手に競争してくださいよ、という話に結びつく。そういうのをアメリカで、ブッシュって親も子も私嫌いなんですけど、その親父さんの方が力説していたそうです。この時にこれをさらにアメリカで強烈に押し進めたのが、ミルトン・フリードマンという、ノーベル経済学賞をもらった人で、ちょっと前に亡くなりましたけども、この人が民営化と規制緩和による社会支出の削減を提唱しました。これが現在のグローバリゼーションのバックになっている。これに対してフリードマンの新自由主義を批判する学者も多いんですけども、南米なんかで政府を転覆して貧困に追いやって、そこへこういうのを押しつけてアメリカの多国籍企業がドーッと入ってって儲けると、そういうことはけしからんと書いてますけども、そういう批判も沢山あるんですね。

フリードマンが書いている話の中に、政府が行うべきでない14の政策っていうのがあります。これを見ていただくと、日本の政府のやっていることもこの線に沿っているなという風に思って貰えるでしょう。農産物の買い取り価格制度。これは政府が保証する制度です。そんなものは止めてしまえ、自由競争にせいということです。日本の場合、農業が非常に問題で、TPPなんかでよく言われていますけれども、本当に自由にした場合に今の日本の零細農家がどこまで頑張れるだろうかという話です。

それから、貿易の自由化と関税撤廃。全部市場に任せろということです。それから商品やサービスの規制なんかを止めてしまえ。物価や賃金に対する規制や統制は止めてしまえ。公定の最低賃金や上限価格の設定は止めてしまえ。今最低賃金は日本の場合でも地域によって全部バラバラ違っていますけども、そういうのは勝手に任せろということです。産業や銀行に対する詳細な規制も止めてしまえ。通信や放送に関する規制は止めてしまえ。これは現在でも深刻な問題である電波帯をどこに割り当てるとか、その電波帯を割り当てる時に、お金がいるとかなんとか話があるんですが、それでも止めてしまえ。それから社会保証制度や、福祉、特に老齢福祉だとか退職金制度を止めてしまえ。

あまり表には出てないんですけどね、今皆さんが日本の学校で身体検査とかありますよね、定期検診。アメリカの全部が全部とは言いませんけども、アメリカのかなりの州ではそういう制度はないんです。子どもの健康維持はどうしているのかというと、日本でいうと保険会社みたいなところと契約を結んでいるわけですね。それが定期的に子どもに対する日常のモラルの教育だとか、健康チェックとか、そいうのまで含んだ契約を結んでいると、そこの会社から子どもの健康診断をやってくれる。それを結んでなかったら何もないんです。

あと事業、職業に対する免許制度も止めてしまえ。公営住宅および住宅建設の補助金制度も止めてしまえ。この辺は日本には全くないんですけど、平時の徴兵制、アメリカにはありますが、それを止めてしまえ。国立公園なんて馬鹿げたことは政府がやるな。

それから郵便事業の禁止。これは郵政民営化で日本もそれに従いました。国や自治体が保有、

経営する優良道路も止めてしまえ。こんな事を言っているのが新自由主義の人達の基本的な考え。アメリカも当然そうですし、日本の場合もそれに従っていますので、段々そういう話が普及してきていると、日本も大変な事になるかもしれないな、という風に思います。

ただグローバリゼーションというのは、その時代、時代によって形態は違いますけども色んな意味で進んできた、という事は言えるわけで、技術が時代とともに進歩しますと、その技術の進歩に合わせてグローバリゼーションも非常に変わる。昔、風力とか水力が出てきて、それによって機械を動かすことができるようになった時、人間の代わりの動力を持った時もグローバリゼーションはありました。もっと進んで産業革命で蒸気とか電気が使えるような時代にまだ新たな技術の進歩を示してきました。こういう風な動力、あるいは技術の進歩でグローバリゼーションというのはずっと変わっていきました。その辺を見ていこうと思います。

最初に人の力とか馬の力、あと船ですね、この時代のグローバリゼーションは、基本的にはメソポタミアとかエジプト、あるいはギリシャ、ローマ、この辺までです。私は本当はメソポタミアには行きたいんですけども、今は行ったらどうなるか分からんのでなかなか行けません。エジプトは、行って驚きましたのは、私達西洋文明の故郷というのはギリシャだとずっと習ってきたんですけど、例えば建物の柱にしても、やはりあれはコリント式だ何だとギリシャ風に名前を言うんですけど、エジプトに行ってビックリしましたのはもっと凄い柱が沢山並んで居るんですね。ほとんどギリシャにあるような話はエジプトに全部あります。ただエジプトが西洋文明の故郷だとは誰も言わないんです。あれは不思議でしょうがないんですけども、一度行ってみるとエジプトは凄いなと思います。

考えると人間なんかはよくここまで来たもんで、ゴリラのように大きいんだったら動物をなぎ倒し出来ますけど、人間なんて細々としたもんなんで、人間がおるだけじゃちょっとした獣にはかないませんわね。せいぜい木の実を食べているかモグラ食べて終わるんですけど、それが色々な物を食べているということは、なかなか人間ていうのは凄いなと改めて思います。力と信仰、信仰っていうのは古くからあるわけで支配との関係が出てきます。大きな物、ピラミッドにしてもスフィンクスにしてもそうでしょうけど造る時には何しろ沢山の人に働いてもらわなければいけない。そういう意味で部族ができて支配者が出てきました。それが大きくなって、州、国家の概念がでてくる。これがこの時代なんですけどね。この人たちは豊かな土地、主に食料を求めてうろうろ動いて行きました。他の民族のいる地域への武力での侵略をして、その帝国がどんどん規模を大きくしていったというのがこの時代です。だからそういう意味では現在のグローバリゼーションと何ら変わりはありません。この頃のことはグローバリゼーションとは言いませんけども、やはり地球規模を目指している。特に最後の方のローマなんかになってくると非常に広くて、言うなればローマ帝国は元々はイタリアのローマ中心に出てきた所ですけども、北の方は今のイギリスのスコットランドの辺まで侵略していますし、その東も西も非常に幅広い所を占めている。

それがもうちょっと先、ルネッサンスの時代まで来ますと、中世っていうのはほとんど進歩しなかったんですけども機械化の時代っていうのが出てきました。この頃に非常に変わってきたのは皇帝への忠誠と都市の時代。皇帝の力と、ローマ法王は非常に力を持って、この二つは前の時代からの名残なんですけども、あとフィレンツェにメディティ家っていうのがあって、これがローマ法王まで出す所なんですけども、商業、銀行の概念がこの頃できてきました。元々

は薬問屋だと思うんですけども、商業だとか銀行というもので力をためる事ができるようになってきた。その力で色々な所に進出を始めました。それから、グーテンベルグが印刷技術を発明して、活版印刷を始めましたので、グーテンベルグ聖書っていうのができて、教会に行かなくても聖書の概念は自分で読めるような、ある意味では宗教の力も、信仰の力も増えましたけども時代は変わっていきました。

この時代にそしたら外へ外へ向かった一番の原動力は何かといいますと、もう食べ物なんかは一応あったんですけども、珍しい香辛料、それから後それを売って金を作ろうという、金というのがここの商業、銀行と一緒になって初めてグローバリゼーションの契機を作りました。この時代から後、大航海時代で色んな人が世界をまたにかけて航海する。

産業革命の時代になりますと、植民地というのをつくって段々富を蓄積して安い労働人口を求め、そして農村の人口が、都市にどんどん集中しだしました。これがこの時代の特色なんですけども一番大きな進出は天、然資源、鉄とか石炭を求めてやはり外国に出てきました。

だから本当に必須な食べ物のために最初は出ていった。それから嗜好品的な香辛料などを求めて出ていった。この時代には天然資源を求めて出ていった。だんだん動物の本質から人間的な話に変わってきている。産業革命の時代っていうのは、そういう意味では非常に大きな変化なんで、実はこの頃1800年くらい、その頃はいうなれば高品質な労働者を確保したいという事で、公教育が始まりました。日本でも教育っていのは昔からあったと思いますけど、実際に公教育が確立されたのはこの頃ですから、まだ200年にもならない。

産業革命っていうのはさらに色んな事を生み出しているんですけども、自動織機が出たり、石炭、コークスの製鉄法が出てきたり、蒸気機関、スティーブンソンが最初の蒸気機関車を走らせました。実は蒸気機関車が出たがために交通事故がでました。最初の交通事故で亡くなった人はやっぱりイギリスで出てきたんですけども、もし無かったら交通事故は無かったかもしれない。産業革命は、その前のルネッサンスの時代よりもう一つ大きな影響を与えています。工場が出来ましたので、労働者を集めて、工場経営者と労働者という対立が生まれました。それが現在の資本主義経済を生んできたというのが非常に大きな特色です。それから議会もできた。だから産業革命っていうのは非常に大きな影響を我々人類の歴史には及ぼしているという事が言えると思います。

面白いことにこの時期は電気も出てきました。電気は最初はエジプトの頃から動物電気が最初です。ナイルの雷神と呼んだそうですが、魚ですね。シビレエイとか電気ナマズだとか、そういう物のシビレから来ている。それからギリシャの時代には琥珀をこすると電力がパチパチという、それで電気のエレクトロンのベースは琥珀のエレクトロンに由来してます。正体を探る試みは色々あって、一番有名なのはカエルを吊してピクピクするというのをやって、本当に動物は電気が流れているのを見たという残酷な話ですけどね。電圧をボルトと言いますが、電池を発明したのがボルターという人なんです。今の電動機のもとを作ったのは、イギリスのファラデーという人で、この人は非常に有名な人です。そうやって、どんどん電気の利用も進んで来たわけです。

計算の機械というのは、チャールズ・バベッジ、日本ではなぜかバベッジの話が表に出ないのですが、この人はイギリスの人で、大蔵大臣をやっていた人です。日本で郵便を出すと、ハガキは50円、普通の手紙は80円か90円。私は松山に住んでますが、それを北海道の友達に送ろうと、同じ愛媛県内の人に送ろうと関係なく

同じ値段ですね。全国どこへ出しても郵便の価格が同じという、イギリスで郵便の定額制を初めてつくりました。

最初の計算機として、階差機関というのがあって、それから解析機関というのがあるんですけど、それを作ったというか、完成までには至らなかったのですが、アイデアを出したのはバベッジです。

バベッジは本当かどうかは分からないんですけど、これを動かすのに蒸気機関を使おうとしたらしいです。蒸気機関を使ってコンピューターが動いたら面白かったでしょうね。キーボードを押したらボーっと煙が出るってやつ。バベッジとは別ですが、蒸気で動く時計ってのは、実際今でもあるんですよ。カナダのバンクーバーの町中に蒸気時計があります。これは、例えば午後1時になると、ポーっと音がして煙が出るんですよ。

ロンドンにサイエンスミュージアムというのがあります。そこにバベッジの写真や階差機関とか解析機関が並んでいます。

彼は破産して、最後は狂人扱いされて亡くなったんですけど、日本ではほとんどの教科書にバベッジの話は出てません。だからバベッジの事はどなたもご存知ないんですけども、是非コンピューターの世界の最初の人としてはバベッジを憶えていただいたらと思います。

コンピューターと電信とを結びつけたというのがスティピッツという人で、これはモデルKという、Kというのはキッチン、台所です。台所でつくったコンピューターというのが1940年。これはコンピューターといっても今みたいな電子計算機じゃないんですけどね。これでニューヨークとダートマスという町の間を電話線を使って通信しました。それが最初なんですね。

産業革命って非常に大きな意味を持っている。その産業革命の後、今度は電気の力とか石油エネルギーが出て、工業化社会になっていきます。

今の時代を引っ張っている、引っ張ってきた大きな会社っていうのは、石油ですとエクソンモービルが1870年に設立されています。電気とか電力でしたらGE、これが1878年エジソンが創業した会社、エジソンっていうのは、子どもの時から化学の実験が大好きで、近くの汽車の駅に止めてあった貨物列車の中で化学実験をしていたらしいんです。学校なんか殆ど行ってないんじゃないかと思います。だから今の日本だったら落ちこぼれの代表みたいな人ですけど超大物になりましたね。

それから鉄鋼でいったらカーネギーでこれが1875年。ベルは1877年に、電話を発明者しましたけども、グレイという人と特許争いで、2時間違いでベルが特許を取ったんだと言うんですよ。自動車のフォードは1903年。計算機のIBMは1896年。という風に見ていただくと皆1800年の終わりの頃です。1900年初めまで。

その短い間にこういう現在の巨大企業がバーっと出来上がった。どこも本社はアメリカの東海岸。今それがどんどん新しい時代に変わってきて脱工業化社会という事で地球規模の意味がまた変わってきました。貨幣万能時代になってきて本当に物が無くても、お金だけでいい。だから株式の世界もそうでしょうし、今よく言っている通貨の話もそうです。アメリカ文化が世界の標準になってきて、新自由主義とか貨幣中心主義が表に出てきて、持てる階層と持たざる階層の格差が広がっている。

今の時代の企業群を見てみますと、インテルってのはコンピューターのチップを作っている。CPUです。これはカリフォルニア、できたのは1968年。マイクロソフトはビルゲイツが1975年に創立しました。これはエドモンドにありますけど、ビルゲイツの本拠はシアトルです。そしてアップル、こないだ創業者のスティーブジョブズが亡くなりました。これカリ

フォルニア。それからオラクル、これはあまりご存知ないかもしれませんが、ソフトウェアやデータベース管理システムの巨大企業ですけれども、これもカリフォルニアで、創立1977年。それから本で有名なアマゾン。これはシアトルで1994年創立。グーグルは1998年にカリフォルニアに出てきてます。だいたい1990年ぐらいに今度は全部アメリカの西海岸なんですね。どうも世の中の動きは少しずつ西に来ているなという感じがします。

グローバリゼーションの世界をずっと見てきましたけども、ちょっとまとめてみますと、世界の文化とは、技術革新の中心地というのは最初はメソポタミアとかエジプトで出てきました。それがローマ帝国に移りました。それがルネッサンスの時代はイタリア北部から北へ目指してドイツ等に行ったルネッサンスになりました。それが済んで産業革命はイギリスをベースに出て、それから工業化時代になってアメリカの東海岸に出ました。で、ICTの革命の時代には西海岸。こういう風に中心地は西に西に動いて、そうするとこの次はどうなる。大半の方は次は中国だと言います。この次に本当は日本に来て欲しいんですけど、その元気をつくっていただくのは皆さん方。もう僕らの世代では出来ません。出来ませんが協力はします。

ルネッサンスは約200年間、イタリア中心に変革して、産業革命は約100年間でもう全然違う世界。ICT革命はこれからすると、今度は50年くらいは続くだろう。50年とすると、2020年くらいにはもう今のICT革命は終わっている。終わってもうそれが駄目になるかもしれないし便利な物は生き残っている時代になるかもしれない。その次の時代に入るんだ。そこでここが重要なんですけども、コンピューターのハードウェアっていうのはボツボツ頭打ちになってるんです。コンピューターのチップを作っているのはLSIと称するもので、線を沢山詰め込んでいるんですね。2020年くらいには線の間隔が5ナノメートルになるだろうと言われています。現在は20ナノ。量子力学という物理の世界に、不確定性原理という根本原理があります。これはどんな物かというと、例えば位置と運動量、時間とエネルギーという風な量の間に片っ方を決めると片っ方は有る程度までしか決まりません、という関係があるのです。だから、線の位置とか、それはどこにこの線があるのかという事をはっきりさせることはできなくなる。そうすると、この時代にはどんな技術を用いても、今の量子力学が正しければ、もう線を引く事ができなくなる。線が判読出来なくなる。そうすると、これ以上にもうコンピューターの性能が上がりません。

通信速度も、1秒間に100テラビットまで行けると言われてます。もう現在数テラビットまで行っていますので、これもその内に頭打ちになる。そうするとコンピューターというのは、もうその頃には進歩しなくなる。進歩しなかったら古い物を使っても構いませんので、そうするとコンピューター会社は儲からなくなる。この時代には、そういう意味でインテルも何もなくなってしまうかもしれない。そうするとさっきの企業群がまた変わってくるだろう。よく見ていてください。嘘つくの、ホラ吹くのも自由だけど、多分ホラじゃなくてそうなるんだろうという話があります。

ICT っていうのは、あくまでディジタルの世界ですから、例えばネット中毒になったりオタクになったりネットいじめしたりするのはとても良くない。人間は本当は話をしてコミュニケーションするはずなんですけども、ゲームの世界に浸り込むとコミュニケーション不足になってきます。幼児にこういう事さすとろくなことないので、これはもう日本の教育政策の大失敗です。

大分前に、安保闘争、日米安保条約に反対す

る大学闘争、別の面で言うならば、各大学で教授の支配はけしからんとかいう闘争をやっていた。そういうのがバックにありまして、何とか大学に従順な学生を育成したい。先生に文句を言わない学生を育成したい、というのが人づくり政策です。それを受けて予備校とか学習塾がどんどん増えてきました。変なことをせんようにして塾に通わせて、そこで一生懸命受験勉強さすということにして、現在そうなってます。

是非グローバル化を進める為に今のグローバリゼーションと違った方向を目指していく必要があるんだろうという風に思っています。

絶対にディジタルに振り回されて押しつけられるグローバリゼーションというのはナンセンスだろうと思う。上から下へのグローバリゼーションではなくて、個とか地域から地球規模へ発展させていくようなグローバリゼーションを考えて欲しい。そういうことを皆さんでやって欲しい。そのためには、まずじっくり考えて、個人とか地域の自律をはかってほしい。立つという自立とこの律という自律は意味が違うので、自律って、敢えてこの律という字を書きました。その為には紙の本を読む。しかもその行間を読む。ただ、それを発信するにはICTの技術を使いましょう。これは便利なので使いましょう。上からの押しつけではなくて、個人とか地域からそういう発信をしていきましょう。

私は、学歴社会と決別しようと、いつも言っていますけれど、さっき出てきたスティーブジョブズは、オレゴン州の大学を２年生で中退しています。こんな大学の先生はバカばっかりだから俺はここで学ぶ必要はないって言ってインドに修行に行ってしまいます。非常に変な人ですけどね。

それからビルゲイツは中学生時代からプログラミングをやっていまして、非常に優秀だったんです。ゲイツのお母さん、俗称ママゲイツというんですけど、そのママゲイツが教育熱心で、ハーバードに行かせたんですけども、これも2年生で中退しているんです。

それから最近はやりのフェイスブックをやってるザッカーバーグもハーバードにいて、この人は私どんな人かよく知りませんけどもこれも2年間で中退しています。

本当にもの凄い影響力のある人っていうのは大学なんか出てないんですよね。だから学歴なんて関係ないと思います。エジソンの話もそうでしょう。昔からそうなんですね。個や地域に敵対して堅苦しい時代を望むのは官僚なのでそれで私大嫌いなんですけどね。官僚になるための近道は学歴社会。受験戦争。そのためには塾に行って、という今の時代の風潮をつぶさなければ駄目だろうと思います。

話ちょっと変わって、この1月24日にスウェーデンに行った理由は、昔はノーベル賞を貰えるかもわからなかったのでノーベル賞を貰ったらファーストクラスで招待してもらえますが、でもうその可能性もないと思いますので、私の師匠の師匠、ノーベル賞受賞者の南部陽一郎先生。アメリカに住んでおられて、奥さんの体調が悪くてストックホルムに行かれないですね。だから師匠の代わりに孫弟子がノーベル賞の授賞式の会場でも行こうかと。私、舞台の下からコンサートでも聴こうかというのが大いばりの理由だったんですけども、それじゃぁついでにと、北の方のキルナという町に行きました。キルナという町は小さい町ですけど、町の郊外に鉄鉱石の鉱山があるんです。その鉱山が町の下の方へずっと掘り進んでいるんですね。それで町の中心地が移動するんです。もちろん市役所は移動するし、鉄道の駅も移動する。皆移動する。そういう変な町です。そこへ行ってオーロラを見ました。

1月24日は、私知らなかったんですけども新月の日だったんです。真っ暗。それで快晴だった。しかも太陽爆発があって、とんでもなく凄

いオーロラが出ました。見られた方は多分おられないだろう。住んでいる人が10年ぶりだとか言っているほど凄いんですけども、これが上にブワーっと出てきたり、遠いんですけど、掴めるような感じで目の前にテープがフワーっと出てくるんです。自然の凄さは、コンピューターではシミュレーションできない。

最近、新聞に出てましたが、うるう秒を廃止しろという論議。地球の自転の、世界時の調整に1秒ずつランダムに入れているのがうるう秒。規則性がないのでややこしい。コンピューターで処理するのに非常に不便。ある時にうるう秒と一緒にコンピューターの方の時刻も1秒変えなければいけないので、それは面倒くさい。だからこれを止めようということです。これは今まさに科学が自然の上を行こうという、一種のバベルの塔の話であって、とんでもないことです。

そういう中でディジタルがどんどん威張ってきている。あの7個のオーロラを見ても、地球の自転を見ても、ディジタルというのは本当は限界がありますので、それだけでは世の中は駄目になってくる。今非常に重要なのは、地域の良さをもういっぺん見直すことだろう。地域から、農業にしても、食料にしても安全安心な社会をつくっていくためには、若い人たちが一緒になって、変なことにはノーと言って色んな事を疑って考えて、いわゆるアナログの良さを見つけ直そうという事を考えます。

歌舞伎の話に戻りますと、歌舞伎に限らず言えるのは、タガってのがありますね。桶にはタガがはまっている。タガを抜くと、板が1枚ずつバラバラになってしまう。タガが入っていると桶になって意味を持ってくる。水を溜めることができる。だから若い人たちが1人ずつおったのでは１枚の木の板みたいなものですが、まとまれば水を溜められるし、色んな事ができます。だからこういうセミナーは非常に良い機会だと思いますから、まとまって共通した目的を持って、変なことにはノーと言いながら過ごしていただければいいなという風に思います。

どこまで参考になったかは怪しげですけども、何か、ほんとに一言でも覚えてていただいて皆さんが頑張る時の糧にしていただければなという風に思います。

[質問] 情報サービスをしてらっしゃるのに敢えてデジタルを批判されるのは？

[答] そうなんです。ずっと大学で飯食ってきたのも情報なんですが、情報をやっている人間が本当は情報の危険性を一番逆に知っているだろうと。だから今、福島の原発問題で、専門家は原発擁護の説明を一生懸命してますが、本当はこんだけ恐いんだぞと知っている筈なんです。それをもうちょっと言っていれば防護策も少しは考えられた。だから私もそういう意味で、恐らく一般の方々よりは情報の事を知っていると思うので、敢えて情報っていうのは危険性があるし、もっといいものを見つける術がないだろうかとそれを模索している訳です。

[質問] ICTとITの違いについて？

[答] ICTはですね。Ｉはインフォメーション、Ｃはコミュニケーション、Ｔはテクノロジー。ITというのはインフォメーション テクノロジー。一般的に言うとITと言っていただいた方が分かりやすいだろうと思います。

[質問] 今食料問題とか、人口問題とか、いろいろな問題がありますが、ＩＴ革命の次は、どういう革命がくるんでしょうか？・・・・・？

[答] それ予測できると凄いんですけどねぇ。どの時代でもこのITというのは何らかの意味

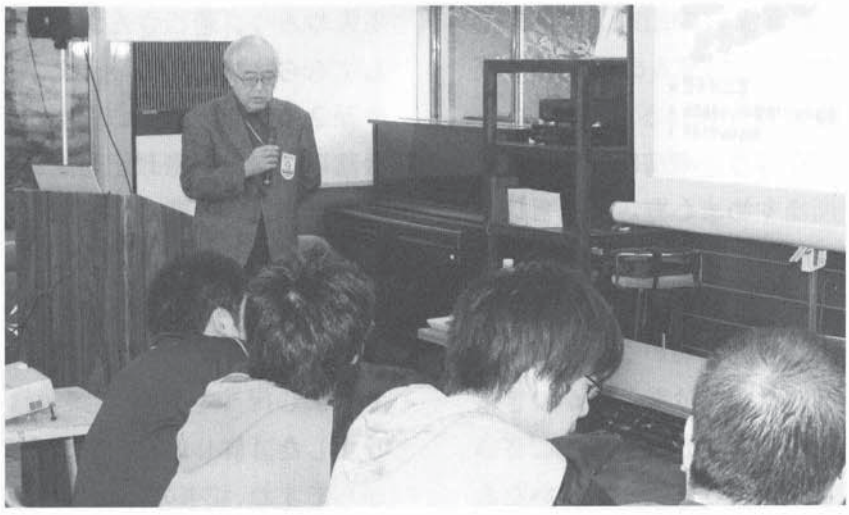
では使わないといけないと思うんですけどね。例えば食料問題なんかも、私も連携してシステムづくりを支援して、愛媛大学で植物工場っていうのをやっているんですよ。現在の植物工場では、作れる品種がごく限られています。トマトだとか葉っぱ物とかいうのは作れるんですけどね。一番食料問題で根幹になる米だとか麦だとか作れないんです。ただしそこで、米とか麦とか、あるいは根菜なんかをどうやって作るかをその植物工場の中でデータを取りながら実現できれば、食糧問題は一気に解決するだろうと思います。あまり答えにならないと思うんですけども、もうちょっとしたら今のICT革命の時代が終わりますから、次の世代は皆さん方に考えていただきたい。

[質問] 先生は、マラソンで土佐礼子に勝ったことがあると聞きましたが？

[答] 小豆島は本当に懐かしくて、ここでタートルフルマラソンっていうのが11月にあるんです。それによく出ていました。学生時代から山登りしていましたので、大学院時代も山岳会に入って登っていました。愛媛に石鎚山っていう山があって、そこに岩登りに行った時に、上から下見たら足がブルブルっと振るえまして、足が振るえたらもう岩登りできないというので、それで走り出したのが最初なんです。最初走った時は3時間33分かなんかで、2時間50分がベストですね。愛媛マラソンで、土佐礼子さんと同じ時に走ってて土佐さんがまだ速くなる前で、松山大学におられた時に3時間3分かなんかで走った、私は同じマラソンで2時間52分か3分なんで、出会ってませんけども勝っている。オリンピック選手に勝っている、と言い張っております。

[質問] 本屋さんに行くと、コミックが並んでいますが、コミックはアナログでしょうか、デジタルでしょうか？

[答] コミックのは、絵が連続しているだけなので、書いた人のイメージにどうしても浸ってしまうんじゃないか、想像力がもう一つ働かなくなるんじゃないかと思って、私はあまり好きじゃなくて見ないんですけど。もしコミックでストーリーがあるとするならば、あれを文章で読めればもっと違った感覚が出るのかなと思います。それをもっと発展させたのが多分今の動画だとか何とかいうインターネット経由のものだと思いますのでそちらは超駄目だと思います。



講義 2

人間牧場主・年輪塾々長・夕陽のミュージアム名誉館長
愛媛大学農学部客員教授・法文学部非常勤講師

若松　進一 氏

PROFILE

[略歴]
1994年　愛媛県双海町地域振興課長
2003年　双海町教育長
2003年　国土交通省「観光カリスマ百選」に選定される

[主な役職]
四国４県青年団連絡協議会会長
愛媛県青少年団体連絡協議会会長
愛媛県社会教育委員
愛媛県青少年保護審議会委員等を歴任

みなさんこんにちは。愛媛県伊予市双海町の若松と申します。宜しくお願いいたします。実はわたしは35年間、双海町という人口6000人くらいの役場に勤めておりました。役場と焼き場、よく似てる言葉ですね。若者と馬鹿者、これもよく似てるんですが。私は正真正銘役場の役人でございました。35年間勤めておりますと、郵便ポストをみても電信柱をみてもぺこぺこしなきゃいけないんで、やっぱりこう自由人になりたいなぁというのが私の願望だったんですね。

7年前に1市2町、伊予市、中山町、双海町という3つの町が合併をして4万人の街が誕生いたしました。そんなこともあってですね、せっかくだから自由人になろうと双海町という町の教育長を最後に役所をやめました。自由というものはいいものだなぁ、と4月1日朝起きてみて初めて分かったんです。空が青いし、それから空が高いし。あぁ、自由はいいなぁと思ったんですが、4月15日になってはたと気がつきました。4月15日は双海町役場の給料日でございまして、銭が出ないということに気がついたんですね。まあ、これは後の祭りと言うんでしょうか。くれたらいいわいと、そんなことを思って、今日まで7年間おりますけれども、首をくくることもなく、こうして元気に暮らしているところでございます。

その年の5月だったと思いますが、東京から1本の電話が掛かってきました。「若松さんですか？」「はい、そうです。」「実は私は参議院議員のだれだれと申します。」え、なんで参議院議員の先生からわしのところに、電話かかってくるんやろう。「若松さん、あんた東京にきて話をしてもらえませんか？」「え、誰に話をするんですか？」「参議院議員の先生が全員集まって、国会議事堂の横に憲政記念館という立派な建物がございまして、そこでお話をしてください。あなたの話は東京ではとみに有名です。」と、もちあげられたものですから、私は呼ばれたら刑務所以外どこにでも行くことにしておりますので、よし行ってやろうじゃないかという話になりました。「詳しいことにつきましては、こちらからですね、秘書の方から電話をさせますので。

若松さん、東京に来るんですから、ひとつふんどしをしめて来てください。」といわれました。「すいません、私ふんどしはないんですが」「まぁパンツでもいいでしょう。」こんな話でございます。

おっつけ高橋さんという秘書の方から電話がかかって、「若松さん、あなたの役職なににしておきましょう？」と言われてはたと困りました。もう私には役職がないんです。元教育長なんていやだから、「すみません。私もう自由人になってますので、自由人若松進一とゆうのはどうでしょう？」「そんな、火星人みたいなのはいかん。」と言うんですね。何がいかんなと思って、そうじゃ、おらは毎日休みじゃきに、「サンデー毎日若松進一にしてください。」言ったら、「そんなんもいかん」って言うんですね。

結果的に、愛媛大学法文学部非常勤講師という名前に落ち着いたんですが、はて、人間の値打ちってなんだろうかなって思ったりするんです。役職がある、あるいは肩書きがある、あるいは1枚の名刺を持ってる。ひょっとしたら人間はそういうもので役職、肩書き、それで人間の値打ちを決めたがるのであります。そう考えてみれば、今日目の前におる若者達はほとんど値打ちのない人間ですね、肩書きがないんですから。私と同じように値打ちのない人間でございます。ですから今日は、値打ちのない人間の話だと思って聞いてください。眠たい人は寝てください。良く言われるんですね。寝よったら、ある先生が「今日の人はなんとまぁ未熟な連中が多いのか。わしの話を聞いて寝るとは。」と言って。それは寝る話をした講師が悪いんでございますから、どうぞごゆっくりお休みいただきたい。しかし、人の迷惑がかからないように、寝ていただきたいと思うんですね。ご承知のように、35年間役場に勤めておりますので、そういった色々なことを話したりしながら、少し時間をいただきたいと思うんです。

実は私にとってふるさと作りっていうのは非常に大事な意味をもってます。というのは私はかつて、青年団というところに入りました。日本全国にはあちらこちらの村や町にですね、青年団とか婦人会というのがあって、青年の力と婦人の力が、二大政党と言われるように大きな力を持っていたものであります。ところが今、青年団というのは死語でございまして、あちらこちらに行って、青年団と言うと、それ何という話になるんですね。まあ昔からそのような形で青年の力というのは村作りに大きな力を果たしてきたんですが、18歳のときから26歳のときまで約8年、私は青年団の活動をやりました。

そしてその中で、大きく分けて５つの道具を手に入れました。これは非常に私にとってその後の人生を支えてくれる武器になったわけであります。

1つは仲間です。青年時代の仲間って言うのは悪ふざけもするし、色んなこともやりますが、とりたてて私は青年というものの心の葛藤の中で、青年と青年の向かい合いというんでしょうか。そういう意味では、私は青年の時期にしかできない仲間っていうのはあるんだろうなぁと思ったりしてます。今日は、一期一会といいますけれども、出会って間がない訳ですけれども、こういった研修会のなかでしっかりと友達をつくっていただきたいと思うんですね。1つの班に12人、これ二十四の瞳ですよ。これがわかるようにならないといけないんですね。24、それが4組あるわけですね。ですから二十四の瞳をまず覚えていくということ。仲間は非常にありがたいと思うんですね。

2つめには私はふるさととの関わりができました。自分のふるさととはなにか。自分の住んでいる町にやっぱり恩返しをしたり、自分の住んでいる町と繋がる人たちと共に歩みたい。そんなことを思うと、ふるさとというのはいいもんだなぁと思ったりしてます。ぜひみなさん方

も、ふるさとという道具を手に入れていただきたい。まあふるさとということについては、後ほど少しお話をしてみたいと思うんですね。

さて、3つめには主張ですね。自分の心の中にもっているさまざまな出来事を言葉にして伝える、これなかなか青年の時代にはできません。思っていても人の前でしゃべることができないわけですね。でも私にとっては青年時代に主張をするようになれたというのは、ありがたいことだろうと思うんですね。

4つめです。これは感動する心ですね。人間ていうのは感情の動物、感動の動物だと言われてます。動物の中にはたくさんの動物がいるけれども、やっぱり人間というのは人に恩を受けて感動をしたり、人の悲しみを見て、やっぱり悲しみとするような人間になっていく。感動というものを持たない人間は、感動を人に伝えることはできません。ですから私たちは人の喜びをみて喜びとし、人の悲しみをみて悲しみとするような人間になってみたい。これが感動だろうと思いますね。

さて5つめの道具って言うのは、夢なんですね。まあ人間にとって夢はたくさんあります。あんなものにもなりたい、こんなものにもなりたいと色んな事を、夢を描いているんでしょう。皆さん方は本当にたくさん、将来の時間的な余裕もあるものですから、夢はいくつもあるんでしょうね。ところが半分より向こうの人たち、ほとんど夢破れた人の集まりなんですね。私はこんなものになりたい、とみんな思ってたんです。でも思ってもできないことがあるんですね。でも、私たちはなにかしら夢という見えない部分にやっぱり思いを寄せて生きると言うことが肝心なのか。そう考えてみれば、私はこの5つの徳、5つの道具、これを手に入れたことによって、自分の人生がすっごくいいものになってきました。ですから青年活動で、この5つの道具をしっかり手に入れていただきたいと思うんですね。

さて私は8年間青年活動をやり、愛媛県青年団連合会の会長と四国4県の会長を最後に青年活動にピリオドをうったんですが、私にとってふるさと作りとは何かと言われたら、おおよそ3つのことに行き当たりますが、まず1つのショックはですね、青年達を約30人つれて、あの神宮の森に日本青年館というのがありますが、そこに北は北海道から南は沖縄まで、多くの若者達が集まる、青年問題研究集会というのに出かけていきました。日本全国の仲間達が集まり、そして悩みや、自分のふるさとをどうするか、夢を語ったものであります。

やがて夕べと同じようにウェルカム・パーティというものがあって、そして夜なべ談義というのが始まってくると、ここにネームプレートをつけて、そして皆さんそれぞれ自分のふるさとの自己紹介をするのであります。私は北海道から来ました。私は沖縄から来ました。こうしてみんな言うんですね。さて私の番になりました。「若松さん、自己紹介してください。」私はここに愛媛　若松進一と書いてました。ところが「愛媛県から参りました若松です。よろしく」といって、酒を飲み始めてくると、どこかで間違えられてくるんですね。「愛知県の若松さん」と言われるんですね。「私、愛媛ですが」「あぁ、愛媛ですか、愛知県！」というんですね。もう東京っていうのは本当にバカな人が多いなあって思ったんですね。

もう仕方がない。愛媛と言ったら愛知県と間違えられる。愛知県の方が東京に近いし、有名です。ところが愛媛なんて読めないから、もう愛知県と言われるんですね。仕方がないから「松山の近くなんです」と言うたら今度は、「埼玉県のどこらへんだ」とまた間違えられるんですね。埼玉県に東松山という有名なところがあって、まったく言葉が通じません。もう仕方がないので「道後温泉の近くですよ。」「いいところです

ね。テレビ見てますよ。聖徳太子さんが入ったお湯もあるんですってね。」ってこんな言葉で通じるんです。しかし私の町そこからさらに西に25キロいったところの瀬戸内海に面したあたりで、「失礼ですが、若松会長さんのところは電気が通じてますか？」と言われました。もうばかにするなよ、と思ったですね。自分の町を語るのに愛媛県松山市道後温泉西25キロ瀬戸内海。５つ枕詞を言っても自分の町が通じないということに気がついたんですね。私はなんて無名な町に産まれ育ったんやろう。こんな町になんでおらを生んだんやろう。親を恨んだこともあるんです。

こう考えてみれば、自分のふるさとを語るということがいかに難しいことなのかということが初めて分かりました。私と一緒に行った大州の青年団長、この方は実は当時樫山文枝さん、高橋幸治さんが出た朝ドラの町「おはなはん」、これですっかり有名になった時期でございますので、「おはなはんで有名な大洲から参りました」「ああ、いいところですね。テレビ見てますよ」こうして言葉が通じるんですね。ところがその隣に内子町という町がございます。今はもうね、町並み保存で有名になって三つ星の世界でございます。伝建地区にも指定されて、決定的にあそこを有名にしたのは大江健三郎さんがノーベル文学賞を頂いた、生まれた村として有名になったんですね。

しかし当時は無名でしたから、内子なんてあれもまた読めないから、彼はどう言ったかといったら、「おはなはんで有名な大州の隣の内子から来ています」というんですね。うまいこと言うなぁと思った。しかしいかがでしょうか？今日お集まりの方でおはなはんという番組知ってる人手を挙げてください。はい、ありがとうございます。後ろの方は賞味期限の切れた方ばっかしですよ。今、東京に行っておはなはんというと「失礼ですが、どこのばあさんですか」こうなりますよね。もう知ってる人がいないから。ところがその後、内子町は町並みで有名になり、そして大江さんで有名になって、いまはもうどこにいっても町並みで有名な内子町といえば三つ星の世界。

ところが大洲は何をしたのか分かりません。三層の櫓も建てました。芋炊きもやってます。鵜飼いもやってるけど、それは内向きの情報だったために、ほとんど知られることがない訳ですね。ですから今、大洲の人たち東京に行って、おはなはん言っても分からないからどう言ってるかといったら、「町並み保存で有名な内子の隣の大洲から来てます」と言うんですね。これが一週遅れのトップランナーですね。

私たちはいつの間にか自分の町を無名だと思ってたけれども、決して無名を嘆くことはない。思いをこめて、自分のふるさとをどのように輝かすのかということになってくると、ここから私たちの地域はやっぱりよみがえっていくのではないかという仮説でございます。

さて2つめですが、実は私には子どもがたった4人しかおりませんけども、4人の子どものうちの3人までが松山工業高校というところに行きました。子どもの教育というのは、母親の抱きかかえる教育というお母ちゃんの教育で、ほとんどお母ちゃんがＰＴＡにも小学校中学校いくんですね。ところがやっぱり中学校の高学年とか高校、大学になってくると、母ちゃんのあの抱きかかえる教育だけでは子どもは育たないんです。だから親父の突き放す理性の教育というのがいるのではないか。

私は長男が工業高校に行ったのを機にＰＴＡの総会に行って驚いた。なぜか？松山工業高校のPTAの研修会に行ってみると、もうすごいです。99,9％までが女性なんですね。この女性たるやまたすごいです。もう子ども1人か2人かしか生んでないですから、もうお乳なんかあげて寄せてつーん。皆さん方みたいなもん

ですね。すごいですよ。口紅なんかトウガラシ塗ってるみたいな色して。もう耳には重たいくらいの真珠をつけてですね、すけすけの服着て、びろびろの服着て、まあ不倫でもしてやりたいみたいな雰囲気ですね。うわあ、なんでこんな所にきたんじゃろうかと思いました。そしたらPTAの総会のときに、PTAの会長さんを選ばなければなりません。そうなったら、誰を選ぶかということになったら、まぁみんながひそひそ話をするんです。私も松山ではまあまあ顔の売れた方ですから、「あら、双海町の若松さんが来てる。あの人にPTAの会長になってもらったらどうやろうか」たったこれだけで、なんと85％の得票を得て、私はPTAの会長になったのでございます。

会長さん、就任のご挨拶を、と壇上にあげられました。困りました。私はPTAの会長になる予定もないから、挨拶なんか考えてないですよ。ましてや内気で口下手で無口なものですから、こりゃ困ったと思った。私とんでもない話をしたんですね。壇上にあがって「ただいまご紹介いただきました、PTAの会長に就任することになりました若松と申します」ここまではスラスラ言えたんです。そのあとが悪いですね。「松山工業高校のPTAとかけてなんと解くか。やぶれたブラジャーと解く。その心はチチが時々顔を出す。」「わあー今度の会長さんは言うことも砕けてるけど、本当に顔も砕けてる。面白い、座布団3枚。」たったこれだけですね、PTAの会長になったんです。

私の３人の子どもが松山工業いったんですね。PTAと消防団と暴力団、これ入ったら足抜けができませんから。都合6年間、PTAの会長をやらせていただきました。「会長さん、再任のご挨拶を。」もう色々な事を言われましたけども、PTAの総会のあとで必ず決まったようにゆうべのような懇親会があるわけです。PTA担当の先生、小野先生、もう癌で亡くなられましたけども、この方が私にこう言うんです。「若松さん、あなたの町の子どもたちは面白いですね。」「何でですか？」「実は私の教室に２人、双海町出身の子がいた。今日は入学式で、君はどこから来たのか自己紹介しなさい。」自己紹介になったらこの子がこういったそうですね。「先生ぼくは伊予市の向こうから来てます。」「ああ、伊予市の向こうといったら長浜か？」「いえ長浜のこっちです。」「どこじゃ？」「そこら辺。」といって今度、自分の町を語れないんですね。わずか25キロ離れたところですよ。だのに、自分の町を語れない。

これは大変なことだと私は思いました。考えてみれば、私たち親は子ども達にどんな言葉をかけて育ててきたのか。「おまえも勉強せんと、父ちゃん母ちゃんみたいに、こんな田舎でおらないけんぞ。頑張れよ。」こうして、勉強の良くできる子どもは都会の雑踏の中に消えていきました。ところが双海町という町に残っている子。親がいっつも「この町はつまらん。この町はつまらん」というから、つまらん人間になっていくんですね。そして彼らがどう言ってるか。本当につまらん、つまらんて言うから、つまらん町になっていくんですね。

私の町は、長男がイヤイヤ、ほとんど残ってますので、これある意味カスなんですね。このカスのところに来た長男の嫁がまたカスですから、もうカスばっかしですよ。これが子ども達に悪しきことをいっぱい言ってですね、この町はつまらんと語る姿をみたときに、私たちは地域作りとか町作りとか村おこしとか色んな言葉で言ってますけども、いい町にしていく。それは自分のふるさとに誇りを持って、この町の物語を語ってやり、そして親が語り部となって、自慢できるようなふるさとにしていかなければならない。これが地域作りだと、私は思ってます。だから、よし、この子ども達に自分の町を語るような物語をつくろうと思ったけれども、

私の町にはなんにもありませんでした。

3つめの出来事です。それは双海町という町でこれから21世紀にむけて町作りをやろうと、昭和26年を町作り元年と定めて、エプロン会議、青年会議、30人委員会、この3つの組織をつくって勉強会を始めました。私は家の横に私設の公民館、煙会所、煙の会う所と書いてますが、これを持っているので、そこに30人の若者たちを集めて、私は青年達に熱っぽく語ってやりました。かつて日本が近代化するためにはおおきな2つのトンネルを抜けた。

1つは何か。それは明治維新ですよね。あの坂本龍馬は34歳で亡くなってるんですよ。吉田松陰、30歳で亡くなっているんですよ。こういう人達が思いをこめてこの国を、やっぱり列強の国にしてきたのではないか。そう考えてみれば、あながち青年の力なんてものは、本当にあなどれないよね。だから、おまえ達の出番だと。

2つめ、これは戦争の悲劇に日本は会いました。そして、焦土と化した日本に多くの若者達があの戦場から復員をして、この国をGNP第2位へと押し上げてくれたのではないか。と考えたら、私は第3の時代とは君たちの時代だ。若者達の時代だ。どうでしょう？ 30になっても40になっても自立できないような若者達に、このような話をしたところで、若者達はなんらやっぱり策を持たないというか、若者の力で町をどうしようということは考えてない。

その時私の町の若者達が言った言葉が田舎嘆きの十箇条なんですね。おらの町には仕事がない。おらの町には活気がない。おらの町には文化がない。おらの町にはええ女がおらんし、嫁さんが来ない。おらの町にはプライバシーがない。言うたらいいって言ったらすぐ言うんですね。プライバシーがない。おらの町にはいい店がない。カラオケ喫茶もないのであります。おらの町にはいい店がない。私の町は高田衣料品店、米湊衣料品店というのはあるんですが、ブティックいうのがないですからね。おらの町には狭い道しかないと道の狭さを嘆いてました。おらの町には情報が少なくて遅くて、古いと嘆いてました。もうないかと言ったら、1番最後に言った言葉が良かったですね。おらの町には信号が3つしかないと言うんです。

へぇ、ここに暮らしている若者達がこんな田舎嘆きの十箇条しか言わないのかと思うと、私はこの若者達のこの田舎嘆きの十箇条をこれから私たちの力で田舎楽しみの十箇条に変えることはできないのか。そんなことを考えながら、1年間思いを込めてこの若者達にお話をしてやりました。今日あんまり時間がないので、はしょった話になって恐縮ですけれど、田舎に仕事がないという話ですね。私は日本全国、今はだいたい1年間120日くらい講演などに日本全国、北海道から沖縄まで出かけておりますが、仕事とはいったいなんじゃろうか、と思ったりする。

そして、いい町だなと思うところには必ず3つの条件がある。それは、人が集まり時間が守れて挨拶が出来る。2つめ、その町の公衆トイレがきれいかどうか。3つ目、その町の入り口から出口まできれいな花が咲いているかどうか。この3つでテストしてみると、だいたいその地域のやっぱり元気度っていうのは分かってくるんですね。

しかし私たちは、花をつくることやそれから公衆トイレをきれいにすること、あいさつや時間が守れて、みんなが集まるというなんでもないこのことを仕事と思えるかどうかであります。私は若者達に言いました。いい町というのはとりたてていいものがあるのではない。そこに生きている人たちが生かされて、生きる喜びを、ボランティアの原点と言われる、こういったことに対して思いを込めてやること。花が立派に咲いていることだって、この町はいい町だ

とみんな思ってくれたりすると思ったりするんですね。

若者達からさっそく手が上がって、じゃあおらの町、花いっぱいにしようじゃないかと、当時の青年30人が1000本の桜を買ってくれといって、1000本の桜の苗木を海岸16キロに植え始めました。ずいぶん批判があったり、いろいろとＪＲさんからはやめてくださいと言われたこともあるけれども、おかげさまで1000本の桜は順調に20年間育って、今16キロに1000本の桜の帯ができることを考えてみると、植えない木は育たないなぁ、そんなことを思うんですね。

昨日から種まきの話がありました。まさに種まきだってそうだと思うんですね。私の町のエプロン会議の皆様方が海岸線をずっと歩いてみたら、漁師町だから汚いねえ、じゃぁここに花を植えたらどうやろうか。あるいは掃除をしたらどうやろうか。ごみを捨てないように看板をかけたらどうやろうか。3つの提案がありました。でもね、「ごみを落とさないようにと看板かけたら、そこにはごみがたくさん落ちる。これを看板倒れと言うのよね、あっはっは。」と訳分からんことを言ってるんですね。そして掃除もいっぱいできないから花を植えようということで、このおばちゃん達、13人のエプロン会議のおばちゃん達がJR予讃線沿いやなんやに何かを植えようということでとりあえず、町花ツツジを5万本挿し木をした。

ところが折からの猛暑で4万9995本枯れました。なんでか？水やらなんだだけのことでございますね。その時けんかになった。役場の裏に花を植えてるのに、なんで役場の人は水やらないの。水かけて水掛け論すりゃいいのに、水かけずに水掛け論するんですからだめですよね。もう止めた止めたですよね。

でも私はこのおばちゃん達がなんとかやっぱりこういう暗いトンネル、失敗のトンネルを抜けてこそ初めて人生というのはあるんだろうということで、このおばちゃん達を徳島県の本町花の会という阿波郡阿波町に連れて行って驚いた。バーベナテレナという花を植えながら町をきれいにしていく姿を見て、町長さんや議員さんやみんながやってる姿を見て、あぁ、もう１回やってみたいよね。ということで、町長さんにお願いして今度は5万本、バーベナテレナという花を買って植えたわけであります。なんと３年間で植えに植え、そしてそれを皆さん方でこうして挿し木をした結果ですね、もうこれが3年間で国土省長官賞という大臣賞にのぼりつめていきました。

さあできた。じゃああのJR予讃線に菜の花を植えたらどうやろうか。若松さん、JRさんにお願いに行ってください。と行ったら、JRから言われました。「止めてください。JR予讃線沿いは、茅とか葛みたいなものが根を張り土を掴んでおかないと、あれは土砂崩壊するんです。そこに菜の花を植えたら菜の花は地下茎が弱いから、モグラが入って列車が転覆するからいけません。」「じゃああそこに生えてる野生の花はどうですか？」「いや、野生の花は言うていくとこありません。」「おい、良いこと聞いた。蒔いたら栽培やけど落ちたら野生の花か。やってみるか」こんな話になった。

さぁ13人のおばちゃん、もう田舎のおばちゃんですから腰が痛い足が痛いと言いますけど、地下足袋はかせて草刈り機をもたせたら、ピーンとしますから。さあやりまくれって草をビューンと刈りました。さあ明日雨かもしれんから火をつけて野焼きをしよう。私は東京に行っとったら、東京に電話がかってきました。エプロン会議の代表のおばちゃんですね。「あなたの言うことしよったら私は刑務所に行かないけんかもしれん。止めた」って泣いてガチャーンと電話きるんですね。役場に電話かけると、「あんた大変やった、あんたはおらんけど、明

日は雨かもしれんけん火をつけて野焼きをしよう」、ところが折からの突風にあおられて火事になって、消防車が５台出て、運のわるいことにそこを通りかかったNHKがローカルニュースでそれを流したんですね。

火を付けたら火付け盗賊改めっていうのが昔の話ですね。今は鉄道公安所の取り調べを受けるんですね。これはすごいことです。列車往来危険妨害罪とかなんとかいうんですね。大変な重罪だそうですね。泣くのは本当です。「心配するな。おれが帰ったらやってやる。」こうしてこの10人のおばちゃん達に手紙を出しました。ここに30センチ×30センチ、これを縫ってですね、そしてここにポケットを縫ってきてください。ただし、こまかく縫わずと種が落ちるように1センチ感覚で縫ってきてください。こうですね、さあライオンズからもらった菜種の種をこの中に入れて、みんなが歩くんですね。ブラブラブラブラ。もう13人のおばちゃん全員お乳も下向きですから、ブラブラブラブラ歩いた歩いた。ものの見事にきれいな菜の花畑ができてきたんです。

JRのおっちゃんが怒ってきました。「あれほど言うたのに、なんで種蒔いたんだ」「蒔いた人は1人もおりません。あれは野生の花です。」「野生がこんなに群生するか。」「知らん、花に聞け。」終わりですね。10年経ったら物語が出来て、今、双海町という町の海岸線には早春の彩りを添えて、JR予讃線沿いにきれいな菜の花がいっぱい咲いて、あれほど反対したＪＲは今、菜の花トロッコ列車を走らせて、儲けておるのであります。

考えてみればこういった美しくするという表現、これも地域の人たちの思いだろうと思うんですね。考えてみれば仕事とは一体なにか、確かに飯のネタ、あるいは働くということは給料をいただくことかもしれないけども、自分たちの地域を少しでも良くしようとする行動そのものが仕事であるということですね。

さて活気とは一体何なのか？もし私の町の人口6千人が、1人1人が0.5馬力だと、なんら3千人の町と変わりはありません。ところが１人の人が1馬力だと6千馬力。この人達が２馬力になったときに1万2千人の町に匹敵するというゲンシリョク運動というのが起こりました。私の町から約30キロのところに伊方町という原子力発電の町があります。あれは原っぱの原に子どもの子に力をつける。私の町の源私力というのは原っぱの原にさんずいをつける。子どもの子を私にする。レ点をつけると、力の源は私であるということを考えたら、人間の数が多いだけが町作りではない。たとえそれが少なくても、その人が２馬力、３馬力4馬力になったときに、はるかに高い大きなエネルギーになっていくんじゃないかと思います。

さて田舎に文化がないと私たちの地域の若者達が嘆いてました。皆さん文化とは何ですか？自分に問うてください。そこに書いてください。文化とは何か。トインビーという人は文化をこう書いたと訳しました。農業のことをアグリカルチャーとも言います。私たちは文化というのは分かっているようで分からない。言い換えれば東京発のものが文化であったり、あるいは文化会館があるから文化だと思っている人が非常に多いんですけど、そうではないと思うんですね。先ほどの先生のお話をかりれば、日本全国が本当に平凡化した文化の中に生きてますけども、私たちがもう少し自分たちの地域にしかない文化とは何かということを考えていくことが肝心なのかな、と思ったりするんですね。

文化とは何か？私はここに来るにあたって、せめて余島に来るんだから文化の話をしなきゃいけないと、県庁に行きました。県庁、生活部文化県政というのをやってます。文化振興課長さんがおりました。「課長さん、今度実は私は四国・兵庫の人達の前で話をせないかんのですが、

文化いうてよく分からんのですが、教えてください。文化を一口で言ったらなんですか？」言ったら彼が言いました。「若松さん、文化を一口で言うのは難しい」って言うんですね。「そうですか、じゃぁ二口で言ってください。」「二口でも難しい。」わからんのと一緒ですね。

私流に言えば文化とは人間がより良く生きるために考えを形にする営み。もう1回言います。人間がより良く生きるために考えを形にする営みですから、お茶を飲むことだって、お花を生けることだって、これは文化だと私は思ってるんですね。田舎にはおじいちゃんやおばあちゃんの暮らしの知恵がいっぱいあります。でもこんなものは都会からみればもう　何にもならないように思われているけども、私たちはこれから文化とはその地域の人たちが営々ときずいてきた歴史であって、あるいはその人達が生きてきた証ではないかということを考えていくと、文化の意味はなりたつのかなぁと思って、私は今、若者達と一生懸命、文化というものの意味を考えている訳であります。

水は必ず、高いところから低いところに流れていきます。低いところから水が高いところに流れるにはポンプアップしない限りはできません。ところが人間が、なぜ私たちのような田舎が過疎になっていくのか。それは文化がないからですね。水は高いところから低いところに流れるけど、人間は文化の低いところから必ず高いところを目指していく。東京になぜ人が集まるのか。それは文化の意味をもっている高いところだと思ったりするんですね。

だから私達は、田舎の産業、特に農業とか漁業、こういったものを文化化していかない限りは、地域のいわゆる要らないものになっていくんだ。そう思うと私たちは農業をやはりグリーンツーリズムに、あるいは漁業をシーツーリズムにしていくという運動を通しながら、いわゆる産業を文化化する。健康を文化化する。こういったような動きをしていくと地域は良くなっていくんではないかと思うんですね。

さて、田舎に嫁さんが来ないとか、田舎にええ女がおらんと私の町の人達は言ってますが、私はその若者達に言いました。ええ女がおらんのじゃない。ええ男がおらんだけじゃと。だからええ男を作らなきゃいけない。どうするのか。これが人作りであります。「若松さんは子ども４人も作ってるから、人作りってよく言うよね。」ってあれは子作りです。違うんですね。人作りとはなにか、このことなんですね。

私は自分自身が初めて総理府派遣第10回青年の船でアメリカに行ったときに、アメリカのあの博物館で1枚の世界地図に会って、カルチャーショックを受けました。何か？それはアメリカが真ん中にあって、日本があるか無いか、無いかあるかのところの世界地図をみたときに私は驚きました。先ほどの野田先生のようなグローバルな話はできません。ローカルな話なんですけども、私はこのことが非常にキーになって、ああ、真ん中に日本の無い世界地図を見て来さすことだって人作りやないのか。そう思って私は2人の青年をアメリカに約1ヶ月間ずつ100万円掛けて派遣しようという事業を思いついたんですね。

金は全額出す、レポートはいらない、1ヶ月アメリカ研修いかがでしょう？広報で募集をしたら、約2ヶ月間誰一人として出ませんでした。何でか？それは1ヶ月は長いと彼らは言うんですよね。「じゃあ何日なら行けるの」「まあ3日か4日なら行けるけど。」それは3日か4日で行けるのはニューヨークやない、入浴や。こんな話をして大笑いをしたんですね。でも私が彼らに言ったのは、1年の1ヶ月は長いかもしれない。でも人生80年生きるとしてこのわずか1ヶ月というのは、すごいことじゃないのか。皆さん方にとっても、1ヶ月の今日の4日は非常に長いかもしれないですね。でも1年の4日ならな

んとかなる。人生の4日ならなんとかなる。この選択をした皆さん方に大きな拍手を送りたいと思うんですね。

私は2人の青年に、アメリカに行かないか。おまえの知らない世界があるぞ。おまえの人生にとってこの1ヶ月は大変なものなんだぞ、といって私が言葉巧みに言った結果、2人がその気になって、行こうって話になってね。荷物を纏めて、松山の飛行場に連れて行って、行ってこいよと送りました。ところが彼らは飛行機に乗って初めて気づいたんですね。英語がしゃべれないということに。皆さん笑ってるけど、あのアメリカ大陸になんら英語も語れない者達が2人だけでほっぽりだされてみなさいよ。本当に、クソと小便がひれないんです。飯が食えないんですよ。熱が出たといってましたからね。

シアトルと言うところから電話がかかってきました。コレクトコールという電話でございましたね。着払いだそうでありまして、知りませんでした。「若松さん、アメリカはすごい国ですね。」「どしたん」「シアトルでは小学校2年生の子らが英語でしゃべりよる」言うんですね。「おまえバカとちがうか」でも彼らは大学4年高校3年中学3年10年間英語習って、自分の英語が通じないというこのショック、これをカルチャーショックと言うんですかね。

彼らは帰ってから100枚のレポートを書いてきてくれました。そしてこれを1冊の本に、2人の青年アメリカ見聞録という雑誌をつくって1000部やったら、彼らは36の集落を報告会と称してどんどん出掛けていって、人作りの必要性を説いてくれたお陰で、双海町ではなんと10年間で100粒の種が町内にばらまかれてるんですね。これが人作りです。行政がやる人作りですね。

私は橋一本止めてでも、道一本止めてでも、人作りに金を掛けないような地域はつぶれていく。そう思ってるから今行政は銭がないという理由でこうした事業をどんどん止めてるけども、人に金をかけないような地域はつぶれていくんじゃないか。そんなことを思うと私たちはいい男を作る、このことは大事なことだろうと思ってます。おかげさまで今この事業はですね、隣の町と合併したために没になりましたけども、私の町が今元気なのはこの100粒の種が町内に深くばらまかれて、そしてまかない種は生えないとばかりに思いを込めてやってくれた結果、今しっかりと根付いた地域作りができているのではないかと思ったりするんですね。

まぁこのようなことを言っていくと、きりがないくらいなんですが、プライバシーの話や遊び場の話やあるいは狭い道の話、信号、情報、もう全てが私たちの町では劣っているように思えたけども、私たちは思いを込めて活動をした結果、この田舎嘆きの十箇条に隠された裏側に田舎楽しみの十箇条がある。田舎には仕事を作り出す喜びがある。田舎には活気を燃やすエネルギーがある。田舎には文化、東京にはない文化がある。田舎には女に惚れられるような男が居る。こう考えていけば、もうまさに私達の地域というのは、裏返しの中にですね、さわやかな町が蘇ってくる訳です。しかしその蘇りは少なくとも青年達自らの力でこの地域をどのようにしたらいいのか。そんな思いをこめてやっていくこと。そのことによってのみですね、地域がよくなっていくのではないか。まあこのようなことを考えていくと、私たちは自分の地域にはもうなんにもないと思っていたけれども、何かあるということに気がついたわけです。

さて、ここでちょっと話を変えてみたいと思うんですが、新しい発想ということで話をします。実は2つの三角形を書きました。ここにコップがあります。このコップの中に水をいれます。そして冷凍庫から取り出した小さな氷をこの中に入れます。さてこの氷はある部分が浮いて、ある部分が沈んでます。さてこの氷は何対なん

ぼで浮いて、何対なんぼで沈んでるか。分かる人手を挙げてください。はい、今日はこの程度の人の集まりだと思っておきましょう。失礼なことを申しましたが、実は広辞苑という辞書にこう書いてあります。分厚い辞書ですね。帰ったら読んでみてください。氷山の一角とは、おおよそ7分の1の浮いた部分を言うとかいてあるんです。7分の1ですね。これを分数にしていくとどうなるかということですね。実はこの話を全く同じように新居浜のある社会人の皆さん方の中で話しました。さて皆さん、この氷はどのような分率でしょう。ぱっと手が上がりました。さすが新居浜ですね。新居浜は別子銅山のふるさとでありまして、東大京大を出たような技術者がいっぱいいて、その人達が終の棲家を持ってるわけですが、パーっと手が上がりまして、「9対1です」っていうんですね。これ分数的に言うと私もあの勉強していないので分からないんですが、沈んだ部分が9，浮いた部分が1だそうでございます。さて皆さん、Bという氷、北極南極に浮かぶタイタニックを沈めたような大きな大きな氷山ですが、これは何対何でしょうか。分かる人、はい。1対9．どっちが1？それは9対1というんですよ。そうです。9対1ですね。実は氷は小さくても大きくても9対1であるということ。このことを覚えてくださいね。他のことはどうせ覚えないんですから、これくらいなら覚えれるでしょう？ここにきた意味があるんですね。これ、9対1です。じゃぁこれ人間に例えましょう。いいですか。人間はお母ちゃんのお腹から生まれるときに、生まれるとすぐにできる顕在能力というのを持って生まれてます。なにかと言われると、オギャーオギャーと泣きますよね。これは生きているという証拠、シグナルです。2つめ、クソと小便をひるという排泄行為です。3つめ、お乳をあてがうと飲むという食欲でございます。この3つはほとんど健常に生まれればできるわけであります。

ところがここに、潜在能力というのをもって生まれれてまいります。さて皆さん、自分の潜在能力とは何なのか、知ってる人？分からないですよね。私にはどんな希望や夢や、あるいは自分の可能性があるんだろうかと思ったって、たぶん分からないと思いますね。実は私は国立大洲青少年交流の家と今呼んでますけど、かつて国立大洲青年の家の誘致運動を愛媛県青年連合会の会長をやったときに、誘致をさせていただきました。まあそういったいきさつもあるわけですから、今私はこの国立大洲青少年交流の家の運営委員長を長らくやらせていただいております。

運営委員長になると、そこの企画会議などにも出席をして、今の若者達がどんな話を聞きたいのか？どういうことで感動するのか？そのプログラムの可能性などについてずいぶん相談を受けるんです。私はその時に、やっぱり今の若者達にすてきな話を聞かせてやるというのは肝心なことだなぁ、と思って、作家の椎名誠さん呼んだり、あるいは数学者の秋山先生を呼んだり様々な人を呼んできました。そしてその都度、私は椎名誠さん、それから秋山先生、そういう人たちと対談をさせていただく訳でございます。

秋山先生を呼んだときのことです。秋山先生といえば数学者でありまして、私はこの人がすごいというのはですね、世の中には4つのタイプの人がおります。難しい話を難しくする人。難しい話を分かりやすくする人。分かりやすい話を難しくする人。分かりやすい話をわかりやすくする人。いかがでしょうか？今日私の前壇で話した先生はどちらのタイプなんでしょうか。私は凡人ですから、分かりやすい話をわかりやすくしかできない。でも、僕は一番すごいなぁと秋山先生を見て思ったのは、この先生が難しい数学の話を小学生、中学生にでも平気

で分かるように話をしてくれる、これはすごい学者だなあと私は思いました。そこで先生との対談を、質問という形でしました。「先生、人間というのは生まれつきというのはあるんですか？」先生が言いました。「生まれつきはほとんどない。」「でも先生は子どものころから利口だったんでしょう？それは先生、生まれつきでしょうが。」そうしたら先生はムッとして、「若松君、それは違う。」人間は０歳で生まれたとき、ヨーイ、ドンは一緒だそうでございます。ところがいかがでしょうか？長年たつと、お医者さんになる人もおれば普通のおっちゃんになる人もおれば、様々なんですね。「何でこんなに変わるんですか。」と先生に尋ねたら先生がいみじくも言った言葉は3つ。人間は３つのことによって考える、あるいは勉強する動物である。

1つめ、本を読むことだそうであります。私たちはそういえば今日も先生のお話の中にありましたように、読書力が少なくなったと言いながら、今日までの自分の人生、本というものに、いわゆる活字によってすごく勉強してきたと思うんですね。

2つめ、聞くと言うことですね。今日も聞いています。このように人の話を聞くわけであります。小学校の授業は45分ですね。これは子ども達が45分間集中して聞ける時間だそうです。中学校になると50分の授業が組まれます。高校になると１時間の授業が組まれます。大学になると90分以上の授業が組まれます。でも平気で聞けるんですね。「先生、ちなみに今日お集まりの後ろの方におる一般社会人は何分型なんでしょうかね。」「そうですね、強いてあげたら30分型ですね。」考えてみれば、後ろの方にいる型は30分型ですから、もう完全にシャッターがしまってますね。ほとんど帰りの船便は何時にしようかとかですね、今晩酒とビールはどこにあるんか？こんなことばっかり考えてるんですね。ですからもう、寿命ですから、もっと簡単な話をしておかないといけない訳ですね。まぁこのように聞くということが肝心。

３つめ、見るということが肝心だそうですね。「先生、私は見るということもやってきましたよ。」「それは見方がちがう」と言うんですね。これは先生の言うとおり、人間というのは読むことによって、聞くことによって、見ることによって人生限りなく、死ぬまでBという大きな氷を目指していくそうであります。ですからどうか皆さん、こうした読むことや見ることや聞くこと、先生が口酸っぱく今日読みなさいよと言った言葉はそこにあるのかなと思うんですね。先生に聞きました。「先生、人間は何歳まで成長するんですか？」そしたら先生が言いました。強いて挙げれば、個人差があってもほとんどの人が上げ止まりは30歳だそうでございます。30より若い人？はい、その人だけ残ってください。あとはお帰り下さい。

もうね、他の人、30過ぎた人は読んでも分からん、聞いても分からん、見てもわからんのですよ。30歳までの人は登っていくんですね。ですからほとんど後ろの人は、登りきってもないのに下り坂。もうずっと下って。ちなみに67歳になった私はここら辺ですね。読んでも分からん。聞いても分からん。見ても分からん。私はこの話を聞いたときに、あぁ、なるほどなと思いました。その時に先生にお話しした。「先生、30過ぎた人間はじゃぁ、もうなんちゃやることないんですか？」と聞いたら、先生が言いました。「いいか。氷は小さくても大きくても９対１だけども、人間は生まれたとき９対１であっても、必ず9対1のままでは死なない。」と言うんですね。

言い換えれば８対２の人もいるそうです。松下幸之助さんという人。この人は電気王と言われるほどすごい人ですが、小学校６年生しか出てません。学歴がどうのこうのと言うけれども、学歴で成長するのが分かるんだったら、松下幸

之助なんて人はあのように出世なんてしないと思うんです。考えてみれば、松下幸之助さんはこの中にある何かを浮かび上がらせてひょっとしたら2対8の世界にいるのではないか。そう考えてみると、氷は小さくても大きくても９対１だけども、人間はやりかたによっては８対２やら７対３、時には２対８になっていくのではないか。

そう思うと、「先生、僕たち社会人は何をしたらいいんですか。」と尋ねたら、「３つのことをしなさい」と言われました。それは、知識は読む、聞く、見ることによって入れて大きな氷になるけども、知恵は出すもんじゃと言われました。これどうしたらいいか。「読んだら書きなさい」と言われました。「聞いたらしゃべりなさい」と言われました。「見たら実践しなさい」と言われました。良いこと聞いたと思いましたね。みんな書いてますか？いや、背中かいた、汗かいた。恥もかきました。かきかたが違うんですね。先生がおっしゃるのには、「文字を書きなさい。」「先生、書いても書かなくても覚えるのは一緒でしょうが。」「違う。記録しないものは記憶されない」と言うんですね。これは私の町から25キロ沖合に浮かぶ、あの周防大島の宮本常一という民俗学者が言ってる言葉の中に、記憶と記録という言葉があります。この中に記録しないものは絶対に記憶されないとあるんですね。たぶん皆さん方、何かでメモをしておくとこれは記憶のかなたにあるんですね。だからぜひそのことをやっていきなさい、ということですね。

私はそんなことを考えていくと、本を書くとか、色んな事がありました。私も何冊か本を書いてますけれど、例えばこの本ですね。55歳の時に１冊の本を出そうと決意をしました。これ、『昇る夕日でまちづくり』といって、なんで夕日が昇るんですかとよく聞かれるんですね。逆立ちして見たら夕日が昇っていくんですよ。これ逆転の発想なんですね。私はこの本を55歳の時に出そうと思いました。ところがうちのかみさんに「これ見積もりとったら、1500円の本を3000部つくったら、なんと自費出版で250万のお金が要るんやけど、出してくれんかな」「何をバカなこと言ってるの、私の家にはそんなお金なんてありません！ましてや子ども4人も育てて、お金なんかありません！」言うんですね。「おまえ考えてみ。これ1500円の本、3000部もし全部売れたら、これ450万で、250万出しても200万儲けるかもしれんからやらんか。」言うたらうちの嫁さん、計算高いですね。「カッカッカ。出そう」言うてこうなって。なんとこれが紀伊国屋や明屋さんという愛媛県の有名書店に横積みに置いていただいたおかげで、10ヶ月で3000部全部完売したんです。これね、当時英語でベストセラーって言うんです。すごいじゃないですか。愛媛県でちょっと有名になったんですよ。なんとこれほどもう本当に、本で儲けるんやったらもう1冊出してやろう。

実は無人島に子ども達を20年間私は連れて行きました。家の横の私設公民館、煙会所で子ども達と話をしよったら、煙が目にしみて涙がでるという子どもの話が出て、せめてあの子ども達に煙が目にしみて涙がでるんではなく、心の感動の涙を流すような子どもをつくってやりたい。おい、そのためには何にもないところへ連れて行こうじゃないか。ここのような立派な施設がない、こんな無人島、そしてひょうたん型由利島共和国と名前をつけて、私はここの大統領でございますけれども、そこに行って子ども達と無人島キャンプをやりました。この無人島キャンプはまさにサバイバルです。テントを持って行きません。流木をひろって小屋をつくり、まるでほんとにホームレスのような形で4日間暮らすんですね。風呂がないから、あの果汁試験場に出掛けていってですね、バレンシアオレンジの入ったドラム缶をもらってきて、ド

ラム缶の風呂を星空で入れる。もう子ども達ギャーギャー騒いで、感動するんですね。そして丸木船をつくって瀬戸内海を航海したり、まさに八面六臂の活躍をしたんですが、これも1冊の本にしてやらないと。1200円の本でございます。3000部つくって200万。これも出してくれって言ったら、こないだ儲けとるからすぐに出してくれましてですね、なんとこれも1年間で3000部売れて、なんと150万儲けちゃいました。いやあほんま儲けるで、やらんかい？こうなるんですが、なかなか本は売れんもんです。でもこう考えてみれば、私はこの本を書くためにどれほど自分の知的なエネルギーを出してきたことかということを考えると、書くというのはすごいことだなと思いますね。

さて、しゃべるという行為ですね。皆さん方、特に青年の皆さんは人の前に上がる機会も多いと思うんですが、皆さん方の中で、私はあんまり人の前に出るのが得意じゃない、苦手、それから自分の思っていることを半分も言えない。それから赤面症だと、どちらかというとしゃべることの意識がもう苦手だと思っている人、手を挙げて下さい。結構いるんですね、はい。でも今、手を挙げた人が一番おしゃべりですよ。しゃべらんでもいいことしゃべるんですが、しゃべらないかん時にしゃべらんのです。例えばここで先ほど先生が言って、なにかご意見ございませんか。手が挙がった。嬉しいですよね。でもほとんど挙げなかった人は、外に出てですね、私あの先生のあのことを言ってやろうと思ったんだけども言わなんだんよ、とこうなんか訳の分からんこと言うんですね。やっぱりね、喋らなきゃいけないときに喋る。これ大事なことなんですね。正直言って私も人の前でしゃべるのは最も苦手とするところだったんですが、なんとか自分が失敗、経験の中でやっぱり人の前で喋らなければいけないと主張ということができるような人間になりたいと思って、第14回NHK青年主張の県代表になったりしながら、思いを込めて人の前でしゃべる訓練をした結果、どうにかこうして思ってもないようなことを言ったりですね、出来るわけですね。これやっぱり訓練だと思うんですね。ですからこの訓練は特に若い間にしっかりと人の前でしゃべるという訓練をすることによって私は成就することだと思うので、ぜひ皆さん、これからやっぱり青年の時代に人の前でものが言えるような人間になってほしいと思うんです。

さて３つめ、実践なんですね。実はこれ今日本では非常に欠けていることなんですね。総１億総評論家。わしも思ってたんよ、とか、あれは止めた方が良かったんよとか、評論家というのは人の半分の知識で、人を批判することを評論家というんですね。今日も多いですよね。評論家ばっかしかもしれません。でも自分でやるということが肝心だろうと。そのことをやったら、人生は広がっていくんだということでございます。

例えばここに、『葉書はうれしい活力素』という1冊の本があります。これは半田さんという広島向島の方が講演をした講演集であります。わずか50ページの小さな本です。私がこの人に初めて出会ったのは、天声人語の集いというのがありますね。実は朝日新聞の一番下に「天声人語」というコラムがある。あれマイクロフィルムで永久保存なんですが、そこにこの半田さんという人が書かれました葉書には葉書道がある。1日3枚葉書を書いたら人生が楽しくなる。そして３０枚書いたら人生が変わる。そして100枚書いたら社会が変わると豪語した。

このことが天声人語に紹介されました。私も天声人語に、無人島に子ども達を連れて行って、感動の涙を流させたというのが書かれました。お茶会、天声人語の集いに招かれて行ってお話をしたら、この人が１日３枚の葉書を書いたら人生が楽しくなるという1冊の本をくれま

した。読んでみるとなんのことはありません。1日3枚の葉書を書いたら人生が楽しくなると書いてあるんですね。

でも私は、この言葉を信じて良いものかどうか、疑わしいなと思ったのが最後の奥書でございます。広島向島郵便局局長と書いてあるんですね。なんじゃ、この人は切手や葉書売らないかんけん、こんなこと言いよるんかなと思って。でもこの人に会ったら「若松さん、1日3枚葉書かいたらおらも楽しくなったんじゃけどやらんかね」と言うから、「おらでもできるか？」「やったらええよ」こんな話になって27年前、1日3枚の葉書を正月1日から書き始めました。おお楽勝じゃ、書ける。おお3日、書ける。10日、書ける。ところが1ヶ月くらいしたら、誰に出そうかという話になってくると、なかなか奥が深いなぁと思い始めました。

私は葉書を書くに当たって忘れていたことが2つあります。1つは、葉書を書くということは文字を書かないけん。文字、もう本当にね、先生と一緒です。私のは符号みたいなもんですね。自分でも読めんくらいのものですから、人が読める訳がないですね。でも私は葉書はやっぱり書かなければいけない。私の字は、普通みんなが言ってるのは疣痔、切れ痔、脱肛痔、痔瘻っていって、汚いですよね。でも汚い葉書は届かないと思いながらも、思いを込めてやった結果、どうにか読めるようになった。もう1つ忘れてた。それは1日3枚葉書を書いたら、お金がいるということを忘れてたんですね。当時42円。ところが私に相談もなくある日のこと50円に値上げされました。

私、郵便局の局長に怒っていきました。「誰に相談うけてやったん」て、「おらに言うたっていけん、そんなことは郵政大臣に言え」って、私実は郵政大臣の住所を調べて、拝啓郵政大臣様とシリーズで3枚葉書を書いたばかな男です。ところが1週間したら私の所に郵政省のえらい局長、そこら辺の局長くらいじゃないですよ。大臣、次官、局長、という人から巻紙のお便りをいただいたんですね。書いてあることは42円をなぜ50円にしたのか。第二の国鉄にならないために、赤字にならないためにとかですね。これは42円を50円にしてもイギリスより安いとか、もう訳の分からんこと書いてるんですね。一番最後が良かったですね。お詫びの印に別便にて切手シートを送らせていただきます。なんと12500円分送ってくれました。言わんけんくれんのよ。言ってみるとくれるんですね。

でも、42円が50円に値上げされても、コーヒーやたばこも飲みません。今はお酒も断ってますが、50円×3だって150円くらいはなんとかなるんじゃないかと思ってやった結果、いま正月も明けたので、27年間毎日3枚の葉書を盆も正月も、体が悪くってふせっているときにもずっと27年間、毎日3枚の葉書を書きつづっているところでございます。あの1日3枚の葉書くらい書いて人の前で大きなこというな、というかもしれませんが、書いてみなさい。奥が深いですよ。1日3枚の葉書を27年書ける人っていうのはそんなにはいないんですね。だから私は素晴らしいと自分で思うんです。

それは凡事徹底ですよ。大きなこと考えてもできません。高い富士山の山になんてなれる訳がないですね。でも、砂の1粒程度のことならできるかもしれないと思うのが私の持論でございます。凡事徹底。このことをやることによって、少しずつ人生が変わっていくわけであります。葉書によって大きく変わりました。この方ですね。温泉郡中島町、離島でみかん農家のおばちゃんです。婦人会の総会に行って、「おら1日3枚の葉書書きよるが、あんたも書かんかな」とみんなに言った。そしたら葉書が来たんですね。あなたのようにヒマではないので、1日3枚の葉書は書けません。でも1ヶ月に1枚なら出せるかもしれないともう8年間、私のところ

に毎月１枚葉書がくるんですね。私は確かに１日３枚葉書を書くことの方が良いことに決まっているけども、この人はこの人にしかできない自分での約束なんですね。

人間はもう一人の人間というのが体の中には巣作っております。故に若松進一、明日から3枚の葉書を書くぞと言ってもなかなか書けないところがあるんですね。でもそれは、自分というもう一人を強くするほかないといった結果、彼女はこの葉書をくれます。私は自分の家の横に葉書博物館をつくろうと思ってますけれども、その時にはこの竹下千鶴子さんの毎月1枚の葉書は私の大きな大きなやっぱり励みになった葉書だと思ってます。

この方、皆さん方ご承知ありませんかね？もう知らないでしょうねえ。愛媛県では大変有名になった人ですが、実は北極まで歩いていった、河野兵市という冒険家です。しかし彼は1人で行って、そして今度帰るときに北極から自分の愛媛県の瀬戸町というところの三崎半島の突端の母ちゃんが元気な間に、川を鮭が上るが如く帰ってきたいということで、歩きながら冒険をして帰りつつ、彼は氷の裂け目の中に沈んで行方不明になり、5月29日、本当に彼は氷の中に氷漬けになって会えない最後を発見されました。悲しいですよね。彼が行くときにみんなでお金をカンパして行った彼はもういない。帰るときにおらがこの町を歩くときには一緒に歩いてと固い握手をした彼はもういません。

たぶん彼の行動計画によると、あのアムール川から流れてくるあのオホーツク海に接岸した流氷に乗って帰ってきたい、ということだったんですが、1週間程前私が佐呂間町に講演に行ったときに、あのサロマ湖の向こうにオホーツクがあり、そしてそこに接岸した流氷の上に立って、これを見せてやったときにもう本当に涙が出ましたね。こういった人間の出逢いというものはあるものなのかなと思ったりします。

今日は赤とんぼという歌の話はなかったんですけども、さっきね、昨日ですか、歌を歌ったときに「みかんの花咲く丘」っていう、本当にね、作曲された先生がお父さんという人に巡り会って、ドキドキしましたね。僕の所にはこういう葉書もきます。面白いなあと思ったりする

んですね。もうひとつ紹介しますと、これ永六輔さんという方からの葉書なんですね。

永六輔さんを呼びたいと思ってました。今彼はちょっとですね、脳がぼけてきたのかなと思ったりしますけど、彼が元気な時だったと思うんですが、永六輔さんを双海町に呼んだらどうかということになって、よし、呼ぼう。しかしあの人はなかなか来んぜ。調べてみたらなんと、90分話して150万やけんなあ。おらとはだいぶ違うなぁってこんな話ですね。でも、ひょっとしたら来るかもしれんで。私は永六輔さんに葉書を出そうということになって、この竹下千鶴子さんにあやかって毎月1枚永六輔が来るまで出してやろう、とこうなったんですね。そして、拝啓永六輔さま、初めてお便りすることをお許しください。あなたの話を聞きたい人が私のフロンティア塾にたくさんおります。ぜひ来てください、と書いた。そしたらここに1日100通以上のお便りが来ます。乱筆にてお許し下さい。と書いたその横にその内行きます、と書いてありました。来たんですよ。その内行くっていうんですね。ですから次の月に私こう書きました。その内とはいつでしょうか、と書いた。そしたら永六輔、うまいよねぇ。その内とはその内である。うまいこと書かれましてね。でも出しも出したり、来も来たり、5年間、私は永六輔と葉書のやりとりをすることになりました。

ところがこのことがNHK松山放送局の知られるところとなってある日のこと、2001年5月5日こどもの日に、夕日を見ない子ども達へのメッセージというテレビ番組、永六輔、若松進一夕日絵手紙紀行という90分のBS番組をつくるというんですね。「若松さん、出てください、その顔で」と言われました。その顔で出ることになったんですが、そして永六輔さんはやってきて、ロケをして帰って行った。その時に、「あなたですか、その時の兄ちゃんは。」「あなたですか、その時の先生は。」と固い握手をして2001年5月23日、永六輔は双海町に講演にやってきてくれました。そして永六輔さんに。お金がないんですけど、ただでやってください。怒られましたけどね。でもね、みんなにティッシュを配りなさいといって、ポケットの小銭をこうやってティッシュでくるんで、そして投げ銭をつくって、よっ！永六輔！とみんなが投げるんですね。それが約30万集まって、そして皆さん方から会費を約4000円、150人の人が集まりましたので、おおよそ100万をこえたお金をとって帰っていただいた訳ですが、考えてみれば、たった小さな小さなこの実践というのが、どれほど自分たちの人生を変えてきたのかということになると、ささやかでもいいからこんな小さな実践を積み重ねていくことではないかと思うんです。

永六輔はこんな葉書をくれました。NHK, BSロケお疲れ様。夕日はどこかの朝日。永六輔、という千社札を貼ったこんな手紙が届きました。私は頭を殴られるようなカルチャーショックを受けました。えぇ、おらの町の夕日がなんで朝日やと思いましたね。国立科学博物館で調べてみると、なんと双海町の3月20日の新聞の日のなんと夕日はブラジル、リオデジャネイロの朝日であるということに気づいたんですね。そして永六輔さんにお願いし、NHKにお願いして、BSやいろんなことを駆使して、双海町の夕日とブラジル、リオデジャネイロの朝日を二元中継で結んでやった結果、それが非常に大きな日本全国の話題になった。そして今、双海町にアクセスすると双海町の夕日が何時何分とリアルに映像ででてくる姿を見ると、たった1枚の葉書が人生を変えることだってあるのじゃないか。と思うと、私はこの実践という積み重ねがこれからの人生を変えていくような気がするのであります。

大変横の話が長くなってきましたけれども、

実は私の町はきれいな夕日の町で有名であります。なんで夕日なんかで町おこしをしたのかと、とみに色んな人から聞かれます。双海町という町の下灘駅（しもなだ）という、日本で1番海に近い駅がございます。その駅で夕焼けコンサートというのをやりました。寅さんがやってきた駅として有名であります。日本で行きたい駅の必ず3本の指に入るほど今では有名になり、キムタクがやってきたり、小柳ルミ子がやってきたり、けっこう有名人もくるものですから、人知れずあの無人駅が有名になって、その駅を今フィールドミュージアムにして、夕日の情報を発信しようということをやってます。

何でもないことなんですが、私の明るい農村というテレビ番組を撮りにきたNHKの方が上灘駅で降りるのをまちがって下灘駅におりて、私がそこに迎えにいったときに、双海町の下灘という駅の向こうにきれいな夕日が、あのだるまの夕日、ワイングラスの夕日がおちていた訳であります。これを見たNHKの方が「若松さん、ここの町の夕日はきれいですね。ひょっとしたら日本一かも知れないよね」と言われたときに私の潜在能力に火がつきました。

気がついたんですね。1番目、双海町の夕日に生まれ育ち、毎日夕日を見てました。2つめ、30になったらアメリカに行こうということで、建国200年のアメリカへ青年の船で約2ヶ月半行きました。日本丸という船。この船できれいな夕日を見てました。3つめ、皆さん方2001年2月10日、覚えてますか？と言ったら、自分の年や名前も忘れるようになって、なんで2月10日なんか覚えておりますか？でも、皆さんひょっとして、あっと思い出すかも知れない。これが潜在能力なんですね。2001年2月10日、愛媛県立宇和島水産高校の練習船、愛媛丸というのがぶち当たって、ハワイワイキキの500メートルの海底に沈んで、貴い18人の命が亡くなったんですが、私は18歳の時にこの初代の愛媛丸に乗ってオーストラリアまで約4ヶ月間、マグロを捕りに行って、南十字星かがやく、あの南十字星の近くの夕日をもう朝な夕な見てました。このときにはなんの意味もないことが夕日がきれいですねと言われて、ぽっと浮かび上がったわけであります。

小さな事なんですけども、こうした気づきの部分というのが誰にでもあるんだろうと思うんですね。なぜ皆さん方はここに研修に来るのか。たぶんその研修のなかで自分の知らない自分を知ること。自分の知らない人を知ること。まさにこの2つのことだろうと思うんですね。私は正直言って自分の中にまだもっともっと潜在能力があると思うんですけれども、気づきません。でもたった1人のNHKの方が、夕日がきれいだよねと言ったときに、初めてこの3つの夕日がリンクして、8対2にあがった瞬間であります。へえ面白い、この夕日は町作りに活かせるかもしれないと思って、当時の青年達をあつめて、おい夕日でなにかしようやないかと言って、夕焼けコンサートというのを思いつきました。

金がないから、町長さんのところにいって金出してもらおうやないかと、町長の所に行って怒られました。おまえなにを考えとる、朝日は昇る、夕日は沈む。沈むような町つくってどうするんだ、バカタレがと怒られました。その時、思ったんですね。町長が反対するくらいだから、ひょっとしたら成功するかもしれんと思ったんです。よし、やってやろう、こう思って私たちは1口1万円の寄付を50口募りまして、50万円集まりました。私が25万、青年30人で25万。1週間後集めてこい。私は3日間で集めました。ところが青年30人でなんと3万円しか集まらない。お金をいただくというのは信頼がいる。お金をいただくということは説得がいる。このことを考えていかなきゃいけないということで、青年達と集まって、青年達を連れて行って50万のお金を集めた。

さぁどうする。私の町ではコンサートをやったことない。誰呼びたい？ほとんどの青年達が、漁村ですから、北島三郎、三波春夫とかなんとか言うんですね。こんな人呼んでどうする？私はヴェートーベンやろうと、「若松さん、熱があるんと違うか。ヴェートーベンの運命なんか聞きよったら、網が海まで落ちてしまう。」「なんで？」「ドドドドーン！」てね。人が来んからコンサートと言われました。上手いこと言うんですね。全然相手にならない。でも私はフィルハーモニーのトロンボーン奏者呼んで、とにかくヴェートーベンやってくれ、さぁできた。さあ今度どこでするかと言ったときに、私の町には文化ホールがありません。どうする？寅さんのやってきた下灘駅という無人駅がある。あそこのプラットホームを使ったら、ステージも作らんでもいいじゃないの。

やろうよ。さぁJRに行きました。あそこを貸してください。とんでもない話です。日本全国調べましたけども、無人駅のあの危険なところでコンサートなんかはできません。そこでもし事故でもあったら、若松さんどうするんですか？誰が責任とるんですか？こういわれました。私はそのとき大げんかをしました。あんたらそんなことばっかし言うから、赤字になるんよね。国鉄、できたときから赤字なんですよ。あれ国、金、失うと書いて、コクテツ。じゃあJRはどうして儲けるんですかと駅長が言ったので、これ名前全国公募したんですよ。ゼニアル（ＪＲ）と書いてると、まぁこんな話をして、本当に色んな事を言ってしぶしぶ認めさせました。

さあ当日を迎える。私達はPAさんが来て、電源なんてものはそこにさしたらできると思ってたけども、あの本当に無人駅の電源をさしたら、全部信号が落ちるなんてことは全く分かりませんでした。もう本当に未熟この上ないですね。でも何とかしようということになった。でも町長さんに来てくださいと聞いたら、町長が上灘駅から乗って、そして下灘駅に降りていったら、町長の挨拶で始めようというストーリーをつくったわけであります。やがてパンパカパーン！ファンファーレがなりました。列車が入ってきました。町長さんが降りてきました。「町長さんご挨拶を」町長、私からマイクをもらって、何をバカなこと言っとるか、人なんか集まるかえと思ったその瞬間、自分の目の前に1000人の人が来て会場が人で埋まったんですね。町長なんて挨拶したと思いますか？「ただいまご紹介いただきました私が町長です。みなさん、私も常々思ってました。双海の夕日は日本一です」と言うんですね。

これがブラウン管にのってわぁーっと出たんですよ。たった一つのコンサート、たった一つの西日本の旅というテレビ番組が入っただけで、この町が変わるなんてだれも思いませんでしたよ。やがてこのコンサートのきれいな夕日がどんどん一人歩きするようになって、そうじゃ、もうパンツの色まで夕日にしてしまえと、こんなことになって、全国公募して、海岸国道の名前を、夕焼け小焼けラインと付けました。町のキャッチフレーズ、全国から公募した2661の中から、沈む夕日が立ち上る町、まあこんなことをつけて、やっと夕日のきれいな町ということになってきた訳です。

さあそこでこの若者達のために、若者達が来てもここでなにげなく手を繋いで、キスをしたっていいや。夕日の前で楽しむ所を作ろうとここに道の駅シーサイド双海というのを造る計画をたてました。10億円です。町が10億円。そして県がこの周りにですね、450メートルの人工砂浜をつくるということで15億円かけてくれました。25億円。さぁ議会で質問がありました。「町長、質問、双海町という町はお墓参り以外、人の来ない町である。もしここに10億円もかけて人がこなくて赤字になったらどうするのか？町長、明快なご答弁を。」町長おも

むろに手を挙げて、「この件に関しましては若松課長に答弁させます。」

私実はその時日本で一番小さな課の課長になっておりました。課長じゃない。まったく部下がおらんというかですね、たった1人の課です。でも1人ですから、もう日本一まとまりのいい課で、手を挙げてこう言いました。「議員、お答えいたします。赤字になったら、黒いボールペンで書きましょう。」怒られました。滅茶苦茶怒られました。「おまえは私をバカにしてるのか！」町長さえも後ろを向いて、「若松課長、次回はもっとまじめに答弁しなさい。」と言われました。おおまじめですね。私はその時、再度手を挙げて、田舎は盆栽と大根が特産品といわれるように、まさに芽を摘まれ足をひっぱられる。この町はソフトから産まれたハードが生き残っているから、やらせてくれ。」「それほど言うならやれ。その代わり赤字になったらおまえはクビだぞ」と言われました。クビ覚悟で私が思いを込めてやった結果、なんと今この道の駅、年間55万人の若者達でにぎわっている訳であります。

どうでしょうか？あの赤字になったら黒いボールペンで書くというのが今、議会の議事録で残って居るんですけども、この議員さんがこないだ僕の処に来てこう言うんです。「若松君、あそこは私も最初から人が来ると思ってたんよ。」今頃になって言ってくれるじゃないかと思うんですけども、まぁこんなものですよ。でもね、そんな思いをこめてやった結果、地域というのは少しずつ少しずつよくなっていくものであります。考えてみれば、私たちのやった夕日なんていかほどのものもない。私たちがやったことがもうバブル全盛時代で、朝日のような追いつけ追い抜けといわれるような、あの昇ることをよしとするような国づくりや町づくりはしてきたけども、ひょっとしたらあの阪神淡路大震災以来、東北のあの東日本大震災以来、なにか夕日のような穏やかな、人間と人間の本来の絆を感じるような地域づくりが求められてきたのではないか。

そんなことを思うとですね、私たちのやってきたことはあながち嘘でもなかったし、あながちやって問題もないのではないか。そんなことを思うと私は、自分という人間の潜在能力、町というものの潜在能力、ひょっとしたら日本というものの潜在能力も、先生がお話になったグローバル化していく社会の中で、なにか私たちが忘れてきたこと、これがこの潜在能力のなかにあるのではないか。この潜在能力に気づくのは私たちではなかなかできません。

考えてみれば、君たち若い人たちがこうした潜在能力に気づいてこそ200年とか100年とか50年とか、先生がグローバル化の時代のあり方を教えてくれたけれども、ひょっとしたらこれから30年後の未来というのは、あなた達のこの潜在能力の見つけ方によって、日本というのは蘇っていくのではないかということを、今日の先生の話を聞きながらしみじみと考えたわけであります。

こうしてみると私達は、思いを込めてやったけれども、結果的には思いを込めたほどの実績も出なかったし、ひょっとしたら今やっていることも意味があるのかなあという疑心暗鬼のところもあるんですが、私たちはこれからどういう地域をつくっていけばいいのか、あるいは自分がどう生きていけばいいのか、このことを少し残された時間お話をしてみたいと思います。

さて、人間はですね、大きくわけて４つの願望をもって生きていると言われております。まず１つめ、幸せになりたいという願望ですね。幸せになりたいと思う人、手を挙げてください。はい、なんか不幸せな人の集まりみたいですね。手がさっと挙がりますね。２つめ、お金持ちになりたい人、手を挙げてください。あぁ、貧乏人が多いですねぇ。さて３つめ、健康で長生き

がしたいという人、手を挙げてください。後のない人が多いなあと思うんですが。４つめ、心に持っている望みを叶えたいと思う人、手を挙げてください。これがなかなか難しいですよね。こうしてみるとこの４つの願望は人間が本来もっている願望だろうと私は思うんですね。

じゃぁまず１つめ、幸せになりたい。今日の先生の話をきくと、幸せというのはレントゲンにも写らないんですね、不思議なことに。世の中には目に見えるものと見えないものがあるけれども、人間の思いとか温かい心なんてものはまったくレントゲンにも写らないのであります。これは人間が生きるための究極の願望だろうと思うんですね。しかし幸せとは何か？幸せにはどんな幸せがあるのか？私なりに考えれば3つくらいありますね。1つめは、やっぱり人にしてもらう幸せです。まぁ皆さん方はまだ、お父さんやお母さんの比翼、社会の比翼、ずいぶんな比翼の中で生きていますから、やっぱり自分自身がですね、人にしてもらう幸せっていうのが多いと思いますね。今日も皆さん方はロータリークラブのみなさんの恩恵によって、この研修に参加することが出来ました。これは人にしてもらう幸せなんですね。しかし人間というのは不思議なことに、生まれたときから死ぬまでその間は別として、最初と最後は必ず人にしてもらう幸せの中に生きてきます。自分がおらは思いを込めて生まれてきたんじゃって言うけど、お父ちゃんとお母ちゃんがちょめちょめせなんだら、君たちは生まれて来んわけでしょ？ましてや死ぬとき、おらは誰にも迷惑かけんと言いながらも、やれご苦労さんといって自分が棺桶の中に入って、そして葬式する人なんか誰もいませんよ。だから私達は、人にしてもらう幸せの中に生きてるんですね。

人にしてもらう幸せの次に来るのは、自分でできる幸せなんですね。自分でできる。皆さん方は来たいと思えばここにも来れるじゃないですか。しかし来れない人だっているわけですよね。こうしてみるとと自分でできる幸せいうのを永く自分でできることが自立の道だろうと思うんですね。

さて、究極の幸せ。これは人にしてあげる幸せなんですよ。このことをやれる人がたくさんいる人、いる町がいい町だと私は思います。特にこういう障害者に対してとか色んな形でですね、弱者と言われる人たちに対して温かい思いやりを持つ心っていうのは、非常に地域づくりにとって大事なことだと思うんですね。この究極の幸せを持つか持たないか、これが人生の分かれ道だと思うんですね。四国は八十八カ所遍路の国です。あちらこちらに、なんと1500キロの道のりのなかに88のお寺さんがあります。今治というところに、８８カ所の中の58番札所・仙遊寺というお寺があります。ここの小山田憲正というのは八十八カ所を世界遺産にしようという運動の中心人物なんだけれども、彼とこないだそのお寺で、夜なべ談義をしておりましたら「若松さん、あの世とこの世はどこが違うか知ってるか？」「おれはあの世に行ったことがないからわからん。」どうもあの世とこの世の入り口の所には閻魔大王という人がおってな、向こうのところ行ったら必ずそこで自己申告をするんですね。税金じゃないですよ、自己申告。「あなたは前世でどんなことをしましたか？」「はい、自分のために一生懸命生きてきました。」「ああそうですか、ご苦労様。」とレッドカードというのをいただくんですね。これ地獄行きの切符ですね。しかし今日来てる人はこれみんなロータリアンの卵ですし、みんな人のためになってる人ですから、今日来てる人は全員天国に行く切符を頂きます。問題は今日来てない人ですよ。これ、危ないですよ、あの世、地獄に行くかもしれませんね。結局は、私たちは人のためになにができるのか。このことをしっかり考えていくということが肝心。

さて２つめ、お金持ちになりたい。どうでしょうか？お金はどのくらいあった方がよろしいんでしょうか？といったら、そら少ないよりは多い方が良い。1億円持ってたら2億円が良い。必ず言うんであります。しかし昨日ロータリアンの人達に、色んな話、歴史の話なんかを聞いてみると、人間というのは持つべきものをあの世に持って行くことはできないから、思いを込めて使い切って死ぬと言うことを考えていかなければなりませんね。その使いきりというところはなんなのか。それは目的を持って生きるということに違いないと思いますね。ホリエモンという人がいた。あの人なんかご聡明で、東大出てですね、色んな事やってきたけども結局は塀の向こうに消えていく。

考えてみれば私たちはお金なんてものはそうそうもっとったからといって、あまりいいものでもないと思うんです。困りますよ、お金持ってると。困ります、私も。そう思うとですね、お金はホドホドがいい。これはチャップリンのサム・マネーという言葉のなかにありますように、ささやかな蓄えでいいのではないかということで、諦めていかなければいけないと言うことですね。

さて3つめ、これは健康で長生きがしたいというんですが、皆さん方いかがでしょうか？何歳まで生きるご予定ですか？といったら、死ぬまで生きるんですね。今日お集まりの人、限りなく死亡率100％ですから。死ぬことになってるんですね。ですからもう、特に後ろの方の人は50年経ったら、ほとんど地球上にいないんですよ。人間何歳まで生きるのかと言われたら、これ困るんですが、おおよそ100まで生きます。私は双海町の灘町という町の自治会長をですね、何年間かやりました。その時に敬老会というのをやったんですよ。そのときに愛媛県にどれくらい100歳以上の方がおるんやろうかと調べてみると、なんと双海町含めてですね、当時愛媛県内に650名ほどいましたね。へえ、こんなに100歳以上の人がいるんかと思いました。高齢化時代だなと思った。ところがよくよく調べてみると、100歳以上の人の85％以上が女性なんです。ですから女性は100まで生きられるんです。でも男は100まで生きようと思っても生きません。気をつけてくださいね。85くらいで死にますよ。

双海町というのは100歳条例があって、100歳になると100万もらってあの世に行けるという条例を持っとったんですね。ですから何人かのおじいちゃん、おばあちゃんは、100万もらって天国へ行きました。ところが合併をしたんですね。そしたら、双海町だけの100歳条例はもう要りませんってやめられてしもたんです。99歳と11ヶ月まで生きて、100万円もらおうと思ってたこのじいちゃん大変ですね。もうあの世に行けないですよね。このじいちゃん、こないだ亡くなったんですが県病院でうわ言のように、「町長はいつわしのところに100万円もってきてくれるんじゃろうか」と言って死んだんです。あの人はまだあの世には行ってないだろうと思うんですね。

でも今の時代は確実に100まで生きるという想定はできるだろう。ですから、みなさん一本線を引いてください。そしてその線の中に自分の年齢を書いてください。そして自分が生きたいという年齢を書いてください。なぜこのことを訊いたか？実は23歳のときに、私が双海町の青年団長をしたときに、全く同じような青年学級という夜学会でこのことを教わりました。「さあ皆さん、一本線を引きましょう。そこに自分の年齢を書きましょう。何歳まで生きたいのかそこに書いてください。」私は85と書きました。「あぁ、若松青年団長は85まで生きるんですね。じゃぁ次の目標を書いてください。」そうやな。26歳で結婚したいなあ。「じゃあ若松さん、あなたは何歳で結婚するんですか？」

「26歳です。」「じゃあ何歳違いの誰と結婚するんですか？」「そんなん分かりません。」「書きなさい」と言われて書きました。24歳2つ違い。名前ケイコ。どこに住んでるんですか？南予。まあ愛媛には東・中・南予といって、南予のあのボサーっとしたのがいいと思って、南予にしたんですね。この3つの条件の人を25歳から探し始めました。この顔でございます。いません。

いたんですね、1つ違い25歳です。後妻じゃないですよ、25歳。そして名前、ケイコではありません。シゲコという人ですね。南予・八幡浜。結婚することができました。これは僕の生活設計のたまものだと思うんですね。ところがこの生活設計を見て、初めて気づいたんです。私が85になったときに、このシゲコさんという人がなんと84であるということを発見したんです。あんた発見っていって、ここで1つ違いならここも1つ違いじゃろが。なかなかこれわからんもんですよ。これも大事なことなんですね。子どもを4人つくろうと、ここに書いてました。そして子どもの順番も決めてたんですね。女男男男、名前もつけてました。若松進一ですから、1番最初の子は一子、2番目一心、3番目一生、4番目一休ですね、こう決めてた。なんとこの通り子どもができて、この通り名前をつけました。計画出産です。世の中には男ばかり生まれたとか、隣のおっちゃんなんか6人男の子生んでるんですよ。「若松君、わし6人も男の子生んでもう女の子を欲していけんのじゃ。教えてくれや」って言って、「そんなんいけん。実技指導以外できんのや」って言って、したんですが、これすごいですね。

僕は本当にね、生活設計して良かったと思うのは、この子ども達が全部、計画したとおり子どもができて、計画どおり名前をつけたんですね。嬉しいことですね。でも、名は体を表すというんですけども、一子という子どもは産婆さんになってですね、子どもを授かる仕事をしてみたり、おもしろいことしてるんですよ。やっぱりこれはすごいと思いました。

そして30歳になって、アメリカに行きたいとかって、先ほど言ったように。でもね30でなんでアメリカに行きたいのかって、それは十何歳の時に『ジョン万次郎の生涯』という本を読んだときに、ああ、漁師さんでもアメリカに行けるんか。当時私は漁師だったんですね。でも、30になったらアメリカに行こうと思ってたんです。やがて30になりました。金がない。どうする？ということで、そして私県庁にいってですね、「すみません。私30になったらアメリカに行くことになっとるんですが、ぜひアメリカに行く方法なんかないでしょうかね？」言うたら、あるんですね。第10回青年の船がアメリカに行く、メキシコに行く、ハワイへ行く。その船に一般団員で乗ったらお金が15万要る。ところが指導者、班長という資格で乗ったらなんと15万、政府から指導手当が出るというんですよね。やったと思って、「町長、行かしてくれ」と言ったら、町長が「何をばかなことを言っとるんじゃ。わしが行ってないのに、君が先に行くのか」言うて、20万出してくれた。やがて行くことになった。

ところが、同じようにアメリカにタダで行きたい人がなんと30人の定員に対して350人。試験に行ってください。行ったら、あの時は総理府だったんですが、総理府の講堂に集められて全国からなんと350人の人が集まってですね、試験があるんですね。すごいですよ。英会話のテスト、日本史のテスト、世界史のテストですね。口頭試問ですね。私、英語苦手なんですね。順番に呼ばれたものですから、"Hello. Mr, Shinichi WAKAMATSU come on. What's your name?" って言うんです。英語で自分の名前を言った。それから全然分からないんですね。この外務省の方が、「若松さん」って言って私の履歴書見て、「あんた遠いところからご苦労

様ですね。要項読んで来られましたか？要項に何と書いてましたか？」班長の資格、なんと英会話1級程度と書いてあるんですね。「私は酒は特級、超特級飲んだことありますけど、そんなん知りません。」言うたら、「ああ、そうですか。次の方どうぞ。」落ちたなと思いましたね。その時私、とんでもないことしたんですね。「先生、どこのご出身ですか？」普通、試験する人がされる人に「どこの出身？」逆なんですね。そしたらこの人が怪訝そうに、「私、山口県出身ですがなにか？」私はこのときピンピーン！と一休さんみたいですね。きましたね。「先生、すごいですね、山口県出身ですか！」実はかつて咸臨丸がアメリカに行ったときね、すごいですよ。97人の人が乗って、37日間かかってアメリカへ行ってるんですが、その中に勝海舟、福沢諭吉、みんな乗ったけど、みんな英語がしゃべれなかったんですね。ところが1人だけ、四国出身のあの土佐清水出身の中濱万次郎が通訳で乗った訳ですね。「先生、100年前の船にみんな英語がしゃべれんで、四国出身の人が1人しゃべれた。今度、昭和の咸臨丸、みんな日本全国の人がしゃべれて、四国の私だけがしゃべれない。これも何かの運命なんでしょうねぇ。あなたは私を行かせないと不幸になる。」訳の分からんことを言った結果です。「ああ、そうですか。まぁあなたの思いはなんとか考えておきましょう。」

ああ、落ちたなと思ったですね。それから4時間くらいしてそこに張り紙がされるんですね。1番どこの誰で、もう無いわいと思って見た瞬間、「15番愛媛　若松進一」あるんですね。もう僕の人生においてこれくらい嬉しいことはなかったです。ヤッター！と思いました。帰ってからこの試験官の住所を調べて、双海町のハウスみかんとチリメンジャコと地酒を送ってやったら、そしたら賄賂に当たるから受け取れないってすぐに送り返されてきました。でも、ばかなこと言うな、受け取ってくれと、受け取ってもらって、あれから忘れもしません。昭和51年6月23日、私の旅立ちの記念日と定めて、毎年自分のカレンダーに旅立ちの記念日と書いて、その日になったら双海町の特産品を彼のところに送り続けて、もう35年になりますかねぇ。すごいですよ。去年、一昨年は私が全国委員会の委員長をしたんですけども、その時に彼がやって来てですね、「あの時の若松さんは面白かったね。今だから言うんだけど、あんたのあの時に英会話のテスト何点だったか知ってるか？」「先生、何点やったん？」言うたら、なんと350人中348番だったそうでございまして。まだ2人いるんですから、後ろに。「でもね、あなたを行かせて良かった。あなたは思い込めてやってくれた。もうあんた何にも送って来なくていい。」「いや、あんたが死ぬまで送ってやる」たぶん今年も6月23日旅立ちの記念日、彼の元に送り続けていくでありましょう。

考えてみれば思いを込めてこんなことをした結果、あの本当に世界地図の真ん中に日本がない世界地図という、きわめて面白い世界地図に会ったりしながら、自分の人生が変わってきたわけですね。これは双海町という町からオーストラリアに行った若者が私にプレゼントしてくれた世界地図でございます。もうボロボロになってですね、こないだ県立中央病院の先生達に話してくださいと行ったら、「若松さん、あんたの家はセロテープが無いんか。」なんて言われて。これがオーストラリア発行の世界地図なんですね。「若松さん、反対やろが」なんて言うんです。そう、これが日本の常識ですよ。日本の常識は北半球が上なんです、北極が。これ誰が決めたんですか？日本人が決めた。ところがオーストラリアに行ったら、オーストラリアが上なんですよね。

このことを考えてみると、人間の考えは自分の位置によっていくらでも変わるということで

す。いいですか、左におる人はみんな右に見えますよ。前におる人は後ろに見えるじゃないですか。そう考えてみれば、考えが変わっていく。当たり前のことなんですね。だから私たちは、自分の位置を変えて、見てみる。そうすると、自分の考えがめちゃくちゃ変わってくると思うんですね。そのことが私にとっては大切な人生である。そして、私達はそうした人生をつむぎながら生きるということであります。

今日、「若松さんの役職名に人間牧場と書いてありますが、何をする人なんですか」と尋ねられました。「はい、人間を放し飼いにするところなんです。」50代で人生を楽しもうと思えば、40代がどうしたか問われる。私は鈴木健二さんというNHKの元アナウンサーにそのことを教わりました。そして、私は60代から始まるであろう人生を50代で勝負をしようと思って、50から60までの間に約10年間、1千万を貯めようと思いました。だって、田舎の役場の職員の安月給で、1千万を10年間で貯めるなんてばかなことを考えたって貯まるわけがないと自分で思ってました。

しかし私は日本銀行松山支店の金融広報アドバイザーを35年間やって、皆さん方に生活設計の大切さやお金の貯め方などを教えてきたものですから、まず自分が実践しなければならないと思って、それを全部細かく割ってみると、1年間に100万貯めたら、10年で1千万貯まるということに気がつきました。それを12ヶ月でわっていったらどうなるか。本を出して何百円。あるいは自分がお酒を飲まない日に飲んだつもりのお金を貯める、飲んだつもり貯金。こんなことをしてなんと60歳までに1千万を貯めることに成功いたしました。

さあ僕はこれからこの1千万を使って、自分がこれから人のためになにができるかという幸せを考えていこうと思いました。そして人間牧場というのを思いつき、山の上の、自分のお袋が作ってたミカン畑を開墾して、そこに水平線の家、それから桶風呂という五右衛門風呂、それからツリーハウス、かまど小屋、それからこないだピザ釜というのもできた。農場もつくりました。こんなところに子ども達をあつめて、色々なプログラムをやってます。もう無人島に子どもを連れていくような馬力もありません。よしんば連れて行っても、事故でもあったときに大変ですから、今、丘バージョンで、子ども達と楽しいプログラムを開発しながら今日まできているところでございます。

もうひとつやりたかったことは、私が若い頃に永六輔さんや竹村健一さんなどを呼んで1年に4回、12時間ずつ、時計一回りの12時間ずつのフロンティア塾、これを再建しようと思いました。春は青春塾、夏は朱夏塾、秋は白秋、冬は玄冬という４つを組み合わせて、40回の塾を一応終えたものですから、フロンティア塾から今度、年輪塾という塾をやり始めました。この年輪塾は2年一回りでありまして、２年間で宮本常一さんを学ぶ、２年間で二宮尊徳を学ぶ、ジョン万次郎を学ぶということで、現在3クール目に入ってますけれども、およそ60人の塾生のところにインターネットでこの例えば宮本常一の生き方を、情報を１週間に１回塾頭が流していくわけですね、メールで。そしてそれを自己学習しながら、年4回の学習をやっていくということをやった結果ですね、この塾が私塾として非常に認められて、色々な賞をいただいているところでございます。考えてみれば、こういうことをしながらですね、自分がこれから生きる若者達に新しい生き方を考えてもらおうということで、やっているところでございます。

そんな思いを込めてですね、今私はこういう落伍というのをやってるんですね。落伍者の落伍です。楽しい話じゃないですよ、落ちる話でもありません。落伍する落伍なんですね。実はこれ、高知県馬路村産の柳瀬杉という杉の切り

株、150年の切り株ですね。千本山という山に立っていたそうなのですが、この切り株の年輪をかぞえてみると150。私の人生はたかだか85年と考えていた。なんぼ生きても100年。ところがこの切り株は千本山という人知れない里の奥の奥の所で、こうして年輪を刻んでいく姿を見ると、私もこの150の年輪にあやかりたいということになってきました。

そうじゃ、おれはこの上に座布団を敷いて150の話をできるようになってみたい。これを4年前に立ち上げて、5年間で150話をつくろうと。そして30話が出来たら地の書、30話ができたら水の書、30話ができたら火の書、30話ができたら風の書、そして今年5年目になるので30話ができたら150話、空の書というのをつくって、宮本武蔵の五輪の書にあやかろうということで作りました。実はこれワンコインで販売をして、そして1000部作ってですね、約25万円費用がいるんですが、これワンコインで出したら、1000部売ったら約50万ですよね。25万円のお金でこの年輪塾をやっている人間牧場をずっと運営をしたいということでやっていることでございます。このようなことでずいぶんと新しい発想で人が集まる場所をつくり、人と共に色んな事をやってきました。考えてみれば、そういう思いをすることがですね、自分の人生を変えていくのではないかと思うんですが。

最後に皆さん方に2つだけ、ちょっと面白いことを紹介したいと思います。まず一つはこれです。私は東京に1ヶ月に1回くらい行きますけども、東京に行って、あの新宿に降りるとですね、お祭りみたいに人がおるんですね。でも、「若松さん、元気ですか」と言う人は1人もおりません。ですから癪だからこれをつけて歩いてやるんですね、これ電光掲示板になってましてですね、ここに付けて歩くんですよ。面白いですね。これ付けて大阪の道頓堀を歩きました。そしたら、大阪のおばちゃんは違う。「兄ちゃん兄ちゃん！」誰のことやと思ったら「そこの吉本新喜劇みたいな兄ちゃん。」僕のことでした。「あんたの町、夕日がきれいなんかい。おいでおいで」10人のオバタリアンにズラーっと取り囲まれて、「ねぇみんな、行ってみたいよねぇ、夕日。行こうや」こんな話になって伊丹空港から10人のオバタリアンが飛行機に乗って、松山の飛行場に降りて、双海町に一泊二日でやってきました。飲むわ食うわシャベクルわ。すごい。帰りに「若松さん、お礼がしたいんですけど」「いやお礼なんていいですって」「まぁそんなこと言いなさんな。」って言うんで、なんか汚い状袋の中にお金を入れとったようであります。どうせ大阪のシブチンじゃあくれるわけないわいと思ったらなんと帰ってびっくり玉手箱。なんと1人1万円です。10万円くれましたね。ロータリークラブとはだいぶ違うなぁ。

考えてみれば、こういうことをやるというのは、動けば動くほど、自分がどう生きるのかということを考えて生きるということですね。これすごいですよ。このことだけで、ぼくはめちゃくちゃ面白く目立った人間になって、愛媛県では飛んでる兄ちゃんになってるんですね。

もう1つ紹介しましょう。若松進一という名刺を持って歩いてます。実はこの名刺ですね、面白い逸話がございまして、山口県に行ったときに、「若松さん、話をしてください」と言って、岩国の錦帯橋のふもとで記念講演をやりました。全国大会ですね。「今日来てる人の中で若松さんに質問はありませんか？」一番前に座ってる人で渡辺悦子さんと呼ばれる方が手を挙げて、「実は私は今日、若松さんの似顔絵を描きに来ました。あなたの顔はなんか三枚目ですので、3枚書きました。」うまいこと言うなぁ。「あなたの町は夕日がきれいですってね、サンセットです。」ってうまいこと言うんですよ。それで3枚こんな似顔絵をいただいたものですから、「今日一番遠いところから来ている人いません

か」といっても、なかなかうまくいかないんで、「一番高齢な人、手を挙げてください。」なんと100歳の方がいらっしゃいました。いやあ嬉しいですね、と言って1枚渡しました。「今日一番若い人？」って言ったら、なんか30歳くらいの人の手が挙がりました。もっと若い人いるのになぁと思ったら彼女がマイクを持って、「実は私は胎内に子どもを身ごもっておりまして、この子が一番若いんですよ。」うまいこと言われましてね、差し上げたんです。ところがこの子が出来るようになったら、この似顔絵が気に入ったのかどうか分かりませんけれども、「若松さん、名前をつけてください。」なんとこの親子、毎年１回僕のところに遊びに来てくれるんですよ。これご縁ですね。

これで私は教育長をやめたので、これくらい砕けた名刺もいいだろうということで、名刺を作ったんですが、なんとみなさん、名刺の裏側って言うのはほとんど何も書いてないんですね。そうじゃ、この名刺の裏側をつかって何か広告はできないだろうかと考えました。そして全県下の社長さんが、早朝ミーティングっていうのをやってますけど、そこに招かれたときにですね、「私の名刺の裏側が空いてますので、広告出す人いませんか？私は年間120回全国に行きますので、あなたの会社を宣伝してあげますよ。その代わり、この名刺の裏と表印刷したら３万５千円いりますので、出してください。」なんと松前町というところの義農味噌の社長さん、田中正志さんが「その話買った。」って、言っていただきました。そしてここに書いたんですね。で、私ここに、名刺の裏に味噌屋さんですから、裏がミソって書いたんですね。これがなんと愛媛県の名刺コンクールで特選になりまして、10万円賞金をいただきました。もう銭のいらん人間にはなんぼでもくるんですね。そして今はこう二段構えでやってるんですけども、今度は義農味噌ですから、ワザをここは大事にしてますんで、「技・脳味噌」とやったら、これがまた売れちゃってですね。もうあちらこちら行くときにお味噌を持ってですね、日本全国旅をするんですが、考えてみれば小さな事なんですけども、こうした出来事、既成事実をつくることによって生き生き生きるということ、このことができるのではないかと思ったりするんですね。

私はいまそんな意味ではですね、もう自分も年だと思ってたけれど、昨日の話などきいてみると、年ではない。大事なことは自分がどう若く生きるかということですね。私は年をとっても若松ですから、相当若いんでね。そんな思いをこめて、これから生きていきたいなあというふうに思うわけであります。今日は３時の船で帰る予定になってるんですね。ですから５分前には終わりたいと思ってるんですけども、もう5分前があの時計でやってまいりました。ここで終わりたいと思います。それでもし私に対する質問とかいうのはですね、私、ブログ「進一さんの日記」というのを書いてまして、朝2本、夜2本、もう7年間毎日２本ずつのブログを書いてますんで、それを読んでの感想でも結構です。今日みなさん方の悪口などもぞっくり書きますんで、ぜひ読んでいただきたいと思うし、もしそういったことでヒットすれば、私に対する質問は、そこら辺でお願いをしたいなあと思ったりするんですが。まだ５分間ありますんで、質問があるようでしたら受けたいと思いますが。とりあえず、以上で終わります。

○これまでに失敗したことがあれば、教えてください。

失敗はたらふくあります。そういえば廿日市という広島から来られた方に、「若松さん、あなたの失敗談を聞きたい。」と言われました。私たちは成功談を聞くことよりも、ひょっとした

ら失敗談のほうがいいのかもしれません。あのイチローさんだって、100回うっても35回しか当たらんのですよ。あと65回は失敗してるんですね。だったらわしらはもっと失敗をしてもいいと思うんですけれども。もう失敗の連続。むちゃくちゃ失敗。失敗を聞きたい人は、どうか我が町に来てください。

あの、若者でもなんでもそうですが、人でも仕事でも、愛するところに集まってくるっていうのが僕の持論なので。愛するということは、ちょっとこう気障に聞こえますけども、そういう思いさえあったら人は来るんじゃないかと思いますね。人が集まらないというのは、集まらないようなことをやるからであります。人が来るために何をしたらいいのかということを考えていけば、けっこう集まってくるんだろう。私の町も正直言って、人が来ないと言われていた町になぜ55万人が集まってくるのだろうかということは、それは物語をつくるという運動をしてきたからではないか。そう思うと、物語をつくるときプロセスそのものにやっぱり人の集まる思いがあるんじゃないかと思いますね。

言い換えれば、できあがったところに人を集めるよりも、集めようと努力するプロセスの中に人を巻き込んでいくということをしたほうが、その人達と楽しみを共有できるんではないか。もちろん失敗の共有もありますけどね。ぜひやっていただきたいと思いますね。

今日あのみかんの花咲く丘の話をきいて僕は感動したんですが、実はここにきた秋山先生というのは音楽めちゃくちゃイヤだったそうですね。でも今、アコーディオンを弾いて、めちゃくちゃ弾けるようになった。それは訓練だということで、「若松さん、あんた何ができるんで？」「私はハーモニカ吹いてます。」「おお、ホラも吹くけど、ハーモニカも吹くのか。」と言われましたけれども、でもハーモニカを吹くと面白い。今、日本の学校教育でハーモニカ消えてるんですね。ご存じですか？学校でハーモニカ吹いたことのある人、手を挙げてみてください。今手を挙げた人は賞味期限が切れてます。今はリコーダー吹いてるんですね。縦笛ですね。これバカな子が吹いてもリコーだっていうんだから、すごいですね。(ハーモニカ演奏)。はい、あの、拍手をしないでください。アンコールと勘違いをするから。

でもね、たった1本のハーモニカでも人生を豊かにしてくれるんです。僕はいま子ども達にとにかくこういったハーモニカでもいいから、なにか楽器がひけるようになったら楽しいのになあということでやった結果、いま人間牧場にくる子ども体験塾の子ども達は、本当に童謡が好きな子どもになってきました。最初は童謡と言っただけで動揺してたのに、今は動揺せずと童謡が歌えるようになりました。みかんの花咲く丘なんか、滅茶苦茶僕は子どもの頃から、おかあちゃんとミカン畑に行った経験があるので、もうこの歌を聴くだけで涙が出てくるんですね。人間ていうのは歌の中にやっぱり過ぎこし人生の思い出がからんでくるので、ぜひ子ども達にも、次の世代には歌をやっぱり聴かせたいなあと思うんですよ。昨日ウェルカム・パーティの時に、みんなで歌を歌ったじゃないですか。なにかやっぱりこう、歌っていうのは人と人を結びつける暖かいものがあるんじゃないかなと思ったりして、懐かしく聞かせていただきました。

かつての青年団なんてものはもう労働歌から含めてさまざまなものを歌って、肩を組み合い、酒を飲みあいながら、歌ったものです。もっと私たちは歌とかそういう音楽の中にですね、入って感性を磨いていく。何のために生きるのか、と言われたときに、私たちはその何のためというところをですね、もっと突き詰めて勉強していかなきゃいけないのかと思っております。以上でございます。

講話

鈴木正三の思想とロータリー

国際ロータリー第2680地区パストガバナー・ライラ顧問
安平　和彦（姫路RC）

昨日、深川先生に、魂に響くようないい話をして頂いたんですけど、私の方はとてもそんな能力はございません。ただ最近、鈴木正三（すずき・しょうさん）のことを、ちょっと勉強したりしゃべったりしておりまして、私は、ロータリーの職業奉仕の考え方と東洋の実業倫理、これは互いに全く交流がないわけですけども、比較文化史から言うと、考え方が大変似ているところが面白いなと思って、ちょっと斜交いの方から、鈴木正三とか石田梅岩（いしだ・ばいがん）という人のことを勉強しておりますが、今日はその中で鈴木正三を中心に、話をしたいと思っております。

ロータリーの職業奉仕というのは、深川先生がずっとおっしゃっていることですけれども、「愛情の世界の考え方を持って、打算の世界をコントロールしていこうという考え方である。これが職業奉仕の根本原理である。ロータリーでは、愛情の世界に生きる心、すなわち世のため人のための心を持って、倫理に適った商売を営んでいると、その結果として信用という保護膜で包まれて、長期的に安定した利潤を着々と獲得することができる強靱な体質の企業を作り上げることができる。この原理の総体をロータリーの職業奉仕と呼ぶのだ」というふうに常々おっしゃっている訳であります。この“結果として”という所が大変大切であります。長期的に安定した利潤、先にそれを目的として世のため人のためにやろうというのは、話が逆転してる訳でありまして、まず世のため人のためにやろう、ということであります。

最近ロータリーでも、持続可能性とか持続可能な発展とか、Sustainable developmentと言っておりますが、事業が持続可能な発展を遂げるためには、まず最初に、世のため人のために倫理に適った事業を懸命に励む、それが回り回って、そのご自分の事業の安定した持続可能な発展につながることになる、というのが職業奉仕の神髄かな、というふうに思っております。

その中で、比較文化論風に言えば、ロータリーの今の考え方というのは、日本の伝統的な実業倫理の精神と、考え方において一脈を通じると思っております。例えば、今日の話の中心とする鈴木正三の『万民徳用の教え』、それから石田梅岩の『石門心学』、二宮尊徳の『報徳教』、そして近江商人の『「三方良し」の商人道』、そして江戸から明治にかけての澁澤榮一の『論語と算盤（そろばん）』、こういう中で、東洋の実業倫理というのはずっと語りつがれてきた訳でありますけれども、その東洋というか、日本の実業倫理の考え方とロータリーの職業奉仕の考え方というのは非常によく似ているなあと、それがロータリーというバタ臭いものが日本に導入された時に、たちまちにして日本において発展し、日本が世界のロータリー大国というかアメリカに次いだ第二の大国になった基盤というのは、日本の伝統的な実業倫理、それが日本人の心の中にあったからじゃないのかと思ってい

る訳であります。

そこで、今日中心にしゃべる鈴木正三でありますけれども、42歳の時に出家いたしましたので、出家前は「しょうぞう」とか「まさみつ」と言われていたらしいです。出家してから、偉いお坊さんに名前を付けてくれと頼んだら、自分の元々の名前でいいではないかと言われて「しょうさん」と名乗ったそうであります。この人は1579年、三河国加茂郡足助町という、私も一回行きましたけれども、足助渓谷という綺麗な渓谷がありますけれども。そこに鈴木重次の長男として生まれたということであります。鈴木家は徳川の家臣のまた家臣みたいなものでありまして、関ヶ原の戦いの時に秀忠の家臣の本田正信の家来として参戦しようとしましたけれども、関ヶ原の戦いは一日で終わってしまいましたので間に合わなかった。秀忠は中央道から行って、真田幸村の抵抗に会って、結局手間取って関ヶ原の戦いには間に合わなかったので、家康がずいぶん叱ったという話もあります。あれはいろんな話がありまして、家康はむしろ、もし負けると徳川の元々の旗本が、それがペケになっちゃうので、秀忠には徳川の昔から恩顧の武士をいっぱいつけて、負けても保全しようとしたので、むしろ家康と秀忠と相呼応しながら、故意に遅れたという話もあるようです。どっちにしましても、関ヶ原の時には間に合わなくって戦いには参戦できませんでした。その後、冬の陣の時には、今度は本田正信の家来として参戦し、夏の陣の時は、秀忠の直系の家臣として参戦しまして、戦後徳川将軍の旗本として徳川家に仕えることとなります。しかし1620年、もう42歳になってましたけれども、何の断りもなく突然に出家いたしまして、「正三は気が狂ったと言ってくれ」と老中に言ったらしいですけれども。この頃は、出家する場合には、仕えている殿様の了解がないと、切腹、お家断絶ということだったんですけれども、それも覚悟の上で出家した。ところがこの秀忠というのが、大変思いやりのある将軍だったようでして、老中が恐る恐る、「どのように処置致しましょう?」と尋ねると、秀忠はしばらく考えて、「それは、正三は隠居したんだろう。だから許してやろう」と。だから隠居したことになって、甥の重長を養子にして家督を継がせたわけです。

その後正三は、「風呂敷と一本の杖」という姿で、諸国を修行したと言われております。1622年には、法隆寺において、出家修行中のお坊さんが受ける、沙弥戒（しゃみかい）というのを受けました。翌年1623年には、あんまりにも激しい修行のために死にそうになったそうです。その時、医者だった弟の重成は、「これは栄養不良だから、肉を食べると治る」と言ったそうです。ところが出家したお坊さんですから、肉を食べるなんてとんでもないことなんですけど、正三はそういう所は融通無碍でありまして、肉を食べて、体力を回復して２年にして元気になったと伝えられております。

その後、1631年に「四民日用」という本を書きましたし、1632年には、もとの三河の国・石平に寺を建てまして、石平山恩真寺と名付け、そこを宗教活動の拠点といたしました。そのため彼は「石平道人」という風に言われております。座禅についても、仁王や不動尊のように厳しい心を持って座禅せよと言い、「仁王不動禅」と言われていたそうであります。一般の座禅のやり方と違って、非常に厳しくやれよという話であります。それから「息を引ききり、眼（まなこ）を見据えて、拳を握り、胸を張り出して『南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏』と念仏を唱えよ」と言いまして、これを「果たし眼念仏」と言うようです。そういう風に修行でも非常に厳しい修行を行ったようであります。

その後、59歳の時に、1637年ですけれども、「島原の乱」が起こりました。この島原の乱と

いうのはキリシタンへの弾圧があったわけですけれども、それと合わせて、過酷な年貢への抵抗があったようであります。この時に、弟の重成と、重成の養子になっていた息子の重辰（しげとき）、それが松平伊豆守信綱に従って出陣をいたしました。そして島原の乱を制圧したというか、収めた訳です。そして、島原の乱の後、1641年に重成が天草の初代代官となりまして、要するに徳川の直轄領にしたわけですね。代官を置いた。そして島原の乱によって荒れ果てた天草の土地と人々の心の立て直しに努力したと言われています。

その時に正三が、弟の重成から請われたというか誘われて天草に行きました。そして重成を補佐して、キリスト教に代わって仏教を広めようとした。そして島原に32の仏教寺院を建てまして、キリスト教の論理を破るよという「破吉利支丹」という冊子を書きまして、各寺において、その地元の民に広めたということです。「破吉利支丹」は、なかなか面白い論文であります。その後、正三は、1644年頃に「二人比丘尼」という、これは仏教による因果応報のことを書いたような小説、それから1650年に「三宝之徳用」を、1652年には「修行之念願」を書きまして、これと「三宝之徳用」「四民日用」と合わせて「万民徳用」というのを完成いたしました。その後1655年に江戸で亡くなったというのが正三の一生であります。

この話に付随した物語がありまして、さっきも言いましたように、重成が初代天草の代官として赴任したわけでありますけれども、その天草の乱というのは、やはりキリスト教に対する弾圧もあったわけですけれども、年貢が非常に厳しかった。重成は改めて天草の検地をしたんですね、そうするとそれまで石高が4万2千石とされていましたけれども、せいぜい2万1千石しかない。検地の石高で年貢が決まるわけでありますから、あまりにも厳し過ぎるということで、重成はそれを2万1千石に半減して欲しいということを、民のために一生懸命幕府に願ったんですけれども、幕府はなかなか叶えてくれなかったので、彼はついに江戸に戻って、将軍への上表文というかお願い文というか、そういうものを書き遺して、江戸の自宅で切腹したというようなことがあったようであります。

その後二代目の代官に、養子の重辰が任命されまして、彼も一生懸命重成の遺志の実現に努力し、この結果、結局1659年に、幕府は松平伊豆守、阿部豊後守の証文をもって、天草の石高を半減いたしました。4万2千石から2万1千石に半減をしたということでありまして、年貢が半分になったということであります。天草の民は大変に喜びまして、島内の各地に鈴木大明神とか鈴木塚というものを作って、鈴木重成、正三、重辰の三神を奉って、今日に至っているようです。天草の本渡の町からずっと内陸に入ったところに、鈴木神社という大きな神社が今も残っているようでありまして、今度見に行ってみようと思っております。

鈴木正三の思想を表わした主な著作には、「盲安杖」「万民徳用」「二人比丘尼」「念仏草紙」それから「麓草分」「破吉利支丹」など、その他に「驢鞍橋」、これは弟子の惠中がまとめたもの、それから「石平道人行業記」「反故集」、これも惠中ですね。「因果物語」これは弟子の雲歩らがまとめたもの。これらを全部まとめた鈴木鉄心編集の「鈴木正三道人全集」という本があります。絶版になっていますがインターネットの古本市場に出ておりましてね、2万円となっておりました。勉強しようと思いまして大枚をはたいてそれも買ってみたら、最初から最後まで小さい文字でびっしり。「うわぁ～」と。こんなものも出ていますけれど。

最近、鈴木正三の著作がわりあい見直されてきています。と言いますのは、最近、たくさんの解説書が出ていまして、「宗教における思索と

実践」(中村元)、これは有名な仏教学者ですね。すばらしい方ですけれども、この方の本の中に出てまいります。この新版が2009年に出てる。安行さんに教えてもらって買ったんです。それから旧い本では、水上勉の「禅の道紀行」、同じく「良寛・正三・白隠」、水上は、そういう本を1975年に出しております。

それから山本七平さんの「勤勉の哲学」が1979年に出ておりますが、新版が2008年に出ています。「驢鞍橋講話」(大森曹玄)、これも新版が2009年に出ております。それから「鈴木正三 現代に生きる勤勉の精神」、これ文庫本ですけれども神谷満雄著、これが増補で2001年に出ております。それから堀出一郎さんの「鈴木正三　日本型勤勉思想の源流」1999年。それから「仏教と資本主義」(長部日出雄)。この本もいい本ですね。「鈴木正三・武将から禅僧へ」、童門冬二という歴史物語をうまく書く作家が2009年に書いています。それから森和朗さんという方が、「甦る自由の思想家 鈴木正三」(2010年)。というように、最近、いっぱい鈴木正三に対する解説本が出ておりますし、インターネットを見ていただいても、参考の記事が出ております。

お薦めの本は山本七平さんの「勤勉の哲学」、それから神谷満雄さんの「鈴木正三 現代に生きる勤勉の精神」。それから何よりも長部日出雄さんの「仏教と資本主義」。こういう本が大変勉強になりました。

さっき申し上げましたように、鈴木正三の代表的な著作としては、「修行之念願」とか「三宝之徳用」とか「四民日用」、これを全部一緒にした、「万民徳用」という本であります。「四民日用」の中に、「武士日用」「農人日用」「職人日用」「商人日用」というのがありますけれども、大変解りにくく、読みづらいですが、なんとなく読んでいただくと意味が分かると思います。

「武士日用」には、「仏道修行の人は、まず勇猛の心なくして叶いがたし。怯弱の心を持って仏道に入ること有るべからず。堅く守り、強く執せずば、彼の煩悩にしたがって苦患を受くべし。堅固の心をもって、万事に勝つを道者とし、着相の念にして、万事に負けて苦悩するを凡夫とす。されば、煩悩心をもって、血気の勇を励ます人、一旦鉄壁を破る威勢ありといえども、血気ついに尽きて変ずる時節あり。丈夫の心は、不動にして変ずることなし。武士たる人、これを修して、なんぞ丈夫の心に至らざらんや」—こと細かく説明は致しませんけど、なんとなく意味わかりますよね。強い心を持ってやらないと駄目だ。ロケットみたいなものをピューっと打ったって、始めは勢いがあっても、途中でヒョロヒョロヒョロと落ちてしまうよ、それでは駄目でしょう、というような意味で、不動の心を持ってやりなさいというようなことを言っているようであります。

「農人日用」というのは、「農人問うて云う。後生の一大事、疎かならずといえども、農業時を逐って隙なし。あさましき渡世の業をなし、今生むなしくして、未来の苦を受くべきこと、無念の至りなり。何として仏果に至るべきや。」—農業で一生懸命やっていると時間がないよ、修行するにしても時間がないよ、そんなことで一生懸命農業をやってて結果的に地獄に堕ちてしまうのは無念だ、どうしたら極楽往生できるんですか、という話であります。

「答えて云う。農業即仏業なり。意を得ること悪しきときは賤業なり。信心堅固なるときは菩薩の行なり。楽を欲する心があって、後生を願う人は、万劫を経るとも成仏すべからず。極寒極熱の辛苦の業をなし、鋤鍬鎌を用い得て、煩悩の叢茂きこの心身を敵となし、すきかえし、かり取りと、心を着けてひた責めに責めて耕作すべし。身に隙を得るときは煩悩の叢増長す。辛苦の業をなして、心身を責める時は、この心に煩いなし。かくのごとく四時ともに仏行をな

す。農人何とて別の仏行を好むべきや。」—ということで、一生懸命その農業をやることが仏行なんだというわけです。

「それ農人と生を受けしことは、天より授かり給うる世界養育の役人なり。さればこの身を一筋に天道に任じ奉り、かりにも身のためを思わずして、まさに天道の奉公に農業をなし、五穀を作り出して仏陀神明を祭り、万民の命を助け、虫類などに至るまで施すべしと大誓願をなして、一鍬、一鍬に、南無阿弥陀仏、なむあみだ仏と唱え、一鎌、一鎌に住して、他念なく農業をなさんには、田畑も清浄な地となり、五穀も清浄食と成りて、食する人、煩悩を消滅するの薬なるべし。天道この人を守護したまわざらんや。もし貪欲の心に住して、一大事を忘れて農業なせしめば、田畑も不浄地となり、作り出す五穀も不浄食なるべし。」—と言いまして、田畑を耕すときに、ひと鋤、ひと鍬ごとに「南無阿弥陀仏、なむあみだ仏」と言って一生懸命にやると、結果的にはそれが仏行となって、極楽の往生の道になるんだと言っているわけですね。

「職人日用」には、「職人問うて云う。後世菩提大切のことなりといえども、家業を営むに隙なし。日夜渡世を稼ぐばかりなり。何としてか仏果に到るべきや。」—職人が何かしないといけないけれども、忙しいから仏行をやる暇がないよ、どうしたら極楽往生できるんでしょうかと問います。それに対して正三は、「答えて云う。いずれの事業も皆仏業なり。人々の所作の上において、成仏したまうべし。仏業の外なる作業あるべからず。一切の所作、皆以て世界のためとなることを以て知るべし。本覚真如の一仏、百億分身して、世界を利益したまうなり。鍛冶番匠をはじめとして、諸職人になくしては、世界の用いる所、調うべからず。武士なくして世治まるべからず。農人なくして世界の食物あるべからず。商人なくして世界の自由、成るべからず。この外あらゆる事業出て来て、世のためとなる。唯これ一仏の徳用なり。」—これもさっきの「農人日用」と同じように、全ての職業がそれに励むことが仏行なんだ、それに一生懸命励むことがいずれは成仏の道につながるんだと言ってるわけであります。

それから「商人日用」。江戸時代では商人が一番下の位だったわけですけれども、「商人問うて云う。たまたま人界に世を受くると言えども、つたなき売買の業をなし、得利を思い念じて、休む時なく、菩提に進むこと叶わず、無念の至りなり。方便を垂れ給え。」—商人が、「たまたま商家に生まれて、つたなき商売をして利益のことばかりを思い患っている。どうやったら極楽往生できるんですか?」という質問に対して、正三は「答えて云う。売買をせん人は、まず得利の増すべき心遣いを修行すべし。その心遣いというは他のことにあらず。身命を天道に抛ちて、一筋に正直の道を学ぶべし。正直の人には、諸天の恵み深く、仏陀神明の加護ありて、災難を除き、自然に福を増し、衆人愛嬌浅からずして、万事心に叶うべし。私欲を専らとして、自他を隔て、人を抜きて得利を思う人には、天道のたたりありて、禍をまし、万民の憎しみを受け、衆人愛嬌なくして、万事、心に叶うべからず。」—と言って、商売人も利益を増すような心遣いを修行しなければならない。だけども、その心遣いというのは、ひたすら正直の道を学ぶんだ。正直に商売をやっていると、それが諸天の恵みを受けて万事心に叶うんだ。それを自分の利益だけを専らとして他人を抜いて、他人よりも自分だけが利益を得たいと思う人には、天道のたたりがあって、万事心に叶うべからず、と言っているんですね。

ちょっと長いんですけれども、「私欲の念を捨て、この売買の作業は、国中の自由をなさしむべき役人に、天道より与えたもうところなりと思い定めて、この身は天道に任せて得利を思念することを休め、正直の旨を守って商いせんに

は、火のかわけるにつき、水の下れるに随って流るるごとく、天の福、相応して、万事心に叶うべし。・・・この身を世界に抛ちて、一筋に国土のため万民のためと思い入りて、自国の物を他国に移し、他国の物を我が国に持ち来たりて、遠国遠里に入り渡し、諸人の心に叶うべしと誓願をなして、国々を巡ることは、業障を尽くすべき修行なりと、心を着て、山々を越えて、身心を責め、大河小河を渡って心を清め、漫々たる海上に舟を浮かぶる時は、この身を捨てて念仏し、一生は唯、浮世の旅なることを観じて、一切執着を捨て、欲をはなれ商いせんには、諸天これを守護し、・・・自然に菩提心成就して、無碍大自在の人となり、乾坤大地に独歩すべし」—と言っている訳であります。

このように、鈴木正三の思想というのは、この世の中のいずれの事業、業もみな仏業なんだ、仏業の他なる作業、業はないと。すなわち、「鍛冶番匠をはじめとして、諸々の職人なくしては世界の用いるところ調うべからず。武士なくして世治まるべからず。農人なくして世界の食物あるべからず。商人なくして世界の自由成るべからず。この他あらゆる事業出てきて世のためとなる。ただ一仏の徳用なり。」と言っていますように、世俗的行為は即、宗教的行為だということで、「世法即仏法」と言っています。そして「職分仏行説」。すなわち、江戸時代は「士」「農」「工」「商」ということで身分関係があったわけですけれども、正三は、それを上下の階級じゃなしに分業と捉えたわけですね。現実の家業に精励する中に仏教の本質があり仏教が実現されるという仏教の職業倫理を述べたということでありまして、優れて近代性を持つ経済倫理だと言われております。

さっきもありましたように、「売買をせん人は、まず得利の増すべき心遣いを修行すべし。その心遣いと言うは他のことにあらず。身命を天道になげうって、一筋に正直の道を学ぶべし。正直の人には諸天の恵み深く、仏陀神明の加護ありて、災難を除き、自然に福を増し、衆人愛嬌浅からずして、万事心に叶うべし」と、「商人日用」の中にも言っておりまして、商業利潤の正当性を評価したと言われております。これが日本人の労働観・職業観の先駆けとなって、やがては日本的資本主義の精神的な原泉になっていったと言われております。

マックス・ヴェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」という本がありますけれども、マックス・ヴェーバーはその本の中で、「西洋のプロテスタンティズムの中で市井の市民達が自分の職業を神から与えられた職業、「ベルーフ」とドイツ語で言っておりますけれども、神から与えられた職業なんだと。そしてその中で修道院の中でなく、市井の中で、神から与えられた職業ということで一生懸命その仕事に励む、そうすると結果的に利潤が生まれる、その利潤が蓄積されてそれが西洋の資本主義につながっていったんだと言っています。この正三の仏教の職業倫理、そのなかで商業利潤の正当性を評価したということと、マックス・ヴェーバーが言っていることを比較すると、同じようなことを言ってるね、ということで興味深く思っているわけであります。

そういう中で今、正三をとりあげましたけれども、日本の勤勉的哲学というのがありますよね。正三から出発して石田梅岩は、ちょうど100年後ぐらいなんですけれども、石田梅岩は「石門心学」と言われておりますけれども、「都鄙問答」とか「倹約斉家論」を著しました。彼は、「商人が売買によって獲得する利潤は、武士が主君から受ける俸禄に相当する貴重なものである」として、売買による利潤を正当化した訳であります。「実の商人は、先も立ち、我も立つことを思うなり」。「先義後利」、先に義理の義で“先義”、後で利益の利で“後利”、と言っております。商人道の本質は、勤勉・誠実・正直の

精神に立ち戻ることが必要なんだと。その中で「仁」・相手を思いやる心、「義」・人としての正しい心、「礼」・相手を敬う心、「智」・知恵を商品にいかす心、仁・義・礼・智の4つの心を備えれば、客の「信」・信用となって、ますます商売は繁盛するんだと言いまして、倹約の奨励、富の蓄積の擁護を言ったわけであります。

その次のまた100年後に、二宮尊徳という有名な方が出ましたけれども、この方は「報徳の教え」と言いまして、道徳経済一元論、道徳と経済の融和・両立をいいます。「経済を忘れた道徳は寝言である。道徳を忘れた経済は罪悪である。私利私欲に走るのではなく社会に貢献すれば、いずれ自らに還元されるのだ」と。天地の道、親子の道、夫婦の道、農業の道と四つの法則を言いまして、商法は、売って悦び買って悦ぶようにすべし。売って悦び買って悦ばざるは道にあらず。買って悦び売って悦ばざるも道にあらず。貸借の道もまた同じなんだ、ということを言っております。そして「報徳仕法」と言いまして、「至誠」「勤労」「分度」「推譲」、一生懸命、誠実に働く、そして自分の度を守る「分度」ですね。そして生まれた利益は人に譲るんだと「推譲」、そういうふうにやって行って、はじめて人は物質的にも精神的にも豊かに暮らすことができるんだと言うわけであります。

皆さんも御承知のことでありますけれども、二宮尊徳が箱根湯本の温泉場の露天風呂の縁に座って、弟子達に説いたという話がありますね。湯舟の中で尊徳は、「一方から温かい湯が流れて来たら、みんな自分の方に掻き寄せたいと思うだろう。だけど、いくら温かい湯を自分に掻き寄せたって、その湯は君の傍らを通ってよそに行ってしまうじゃないか。そうではなしに、温かい湯が流れて来たら、それを人のために人の方へ押してあげなさい。そうすると温かい湯はその人を温めて、いずれはぐるっと回って自分のところへ戻って来るじゃないか。それが人の道だ。」「動物を見てみなさい。犬でも猿でも、その手は自分の方に向いて自分に有利にできているけれども、向こうの方に向けることはできない。だから、他人の方に湯を押すことは動物にはできない。だけど人間は相手の方に押す道があるじゃないか。そういう風にできているではないか。だから人の方に押してあげなさい。それが“仁”だ。それを人のために押すのを忘れて、自分の方にばっかり掻き寄せるのは“仁”ではなく“不仁”であって、餓鬼畜生と同じじゃないか」と言ったという有名な話がありまして、わたしは、この話を、かって姫路クラブの亡くなりました大長老の多胡パストガバナーに教えていただいて大変感動したという思い出があります。

次に、例の近江商人の「三方良し」。「売り手良し、買い手良し、世間良し」という話であります。これは中村治兵衛宗岸が15歳の養嗣子に認めた書置が原典と言われておりますけれど、商いの基本は、売り手買い手の双方の満足ということの他に、「世間良し」として、その取引が世間に認められ、社会全体への幸福につながる倫理に適った商いをする、これが商売の秘訣なんだ、こういうふうに意識して商売をすることが、お得意様の間に信用という目に見えない財産を築いていって、家業を未来永劫に存続させていくのだと言っておりますね。

それから、これはあまりちゃんと読んでませんけれども、澁澤榮一の「論語と算盤」というのがありますね。最初の方に「論語と算盤は、甚だ不釣り合いで、大変に懸隔したものであるけれども、私は、不断に、この算盤は論語によってできている。論語はまた算盤によって本当の富が活動されるものであって、ゆえに論語と算盤は、甚だ遠くにして甚だ近いものであると終始論じておるのである。人間の世の中に立つには、武士道精神の必要であることは無論であるが、しかし武士道精神にのみに偏して商

才というものがなければ、経済の上から自滅を招く。ゆえに士魂にして商才がなければならない。論語は最も士魂養成の根底となる。商才も論語において十分に養える。道徳上の書物（論語）と商才は何の関係もないようではあるけれども、商才というものも、もともと道徳をもって根底としたものであって、道徳と離れた不道徳・欺瞞・浮華・軽佻の商才は、いわゆる小才子、小利口であって、決して真の商才ではない。ゆえに商才は道徳と離るるべからざるものとすれば、道徳の書たる論語によって養える訳である。」として、大実業家でありますけれども「論語と算盤」という本を残しております。もっとも、自分で自ら書いたんではなく、弟子たちがまとめたもののようであります。

こういうふうに見てまいりましたけれども、この伝統的日本の実業倫理の思想的特徴は何かと言いますと、企業が本業から得た利益をもって社会のためになることをしよう、いわゆるフィランソロピーですね。それからライオンズ風に言いますと「がっぽり儲けてがっぽり奉仕しよう」というようなことではなくて、事業活動・ビジネスそのものの中核に社会をより良くするということを組み込んでいこうとする考え方、これが日本の伝統的実業倫理の特徴だと思うんですね。つまり企業の存在そのものを社会のために良いこと（Good Business）であるようにする経営原理が日本の伝統的実業倫理だと。そういう意味で、彼らの商人道は、現代の企業におけるCSR（企業の社会的責任 Corporate Social Responsibility）に通じるということです。

彼らは何を言ったかというと、因縁論ですね。このようにやっていると、回り回って、自分の企業が栄えますよ、という優れて因縁論の世界を説いて、目先の利益に目がくらんで破滅に至ることの愚かさを説いたと思うわけであります。

これもちょっと前の話になりますけれども、目先の利益を追い求めて破滅に至った例というのはいっぱいありますね。カネボウにおける中央青山監査法人の粉飾決算加担事件。それから姉歯の耐震強度偽装事件というようなものがありました。姉歯は懲役5年の実刑になりました。食品業界では雪印食品、日本フード、ミートホープ、比内鶏、船場吉兆、いろいろございました。雪印食品、日本フードは会社が消滅いたしましたし、船場吉兆も結局は破産をいたしました。従業員は解雇になりました。ミートホープは経営者が懲役4年の実刑になりました。比内鶏も懲役4年の実刑になりました。ダスキンは、代表訴訟で取締役に52億円の損害賠償命令が出ました。こういうふうに、ミートホープにしても日本フードにしても、目先の利益を求めて結果的には会社も無くなった。そして代表者は懲役何年かの実刑になってしまった。そこに働いていた従業員は解雇になって職を失ってしまいました。経営者の責任は大変重いわけであります。

私は日本の伝統的実業倫理の考え方というのは、何もロータリーと同じとは言いませんけれども、ロータリーの職業奉仕の理念と考え方において相通じるものがあると思っております。ロータリーは1905年に日本の伝統的実業倫理と全く関係なく生まれました。両者の間には何の交流もないと思います。しかしながら、その物事の発想は大変似通っております。日本にはそういう伝統的実業倫理の発想があったということが、日本にロータリーが持ち込まれた時に、日本におけるロータリー運動の受容と発展に大変寄与したんだろうと思っております。

ロータリーの職業奉仕の理念は、もうご承知のように決議23の34の第1条に典型的に出ているわけでありまして、これはもう皆さんご承知だと思うんですけれども、これを図解すると「ロータリーはひとつの人生哲学」(Fundamentally, Rotary is a philosophy of

life）なんだと。それは「利己的な欲求」（The desire to profit for one's self）と、それから「他人への奉仕感情」（The duty and consequent impulse to serve others）この2つの内なる心の葛藤を調和する、それが「ロータリーはひとつの人生哲学」なんだと言っているわけでありまして、ロータリーの職業奉仕の理念というのはここに象徴されているのだろうと思います。

つまり「利己と利他の調和の哲学」というのか職業奉仕だと思いますし、それが23の34の第1条では、その哲学は“Service Above Self“であり”He profits most Who serves best“という実践倫理原則に基づくんだと。それでは、この「He profits most Who serves best」とは何かというと、私は、この利己と利他の調和原則、すなわち奉仕の理想の哲学を自己の職業に適用し、他人のために倫理に適った職業を営むこと、こういう風にして自己と自己の企業の倫理性を高めていくことが自らと自らの企業の信用を高めていき、結果的に自己の企業の安定的かつ永続的な利潤を確保していくことに繋がるんだ、ということを言うんだろうと思いますし、「Service Above Self」も、自分のことより先に他人のために尽くすことは、やがて巡り巡って、つまり結果的に自分の人生を照らし明るくする、ということだろうと思います。バブル後の日本の迷走というのは、日本の勤勉哲学を日本人自身が忘れてしまったということが原因だと思いますし、そういう中で企業として未来永劫に生き続けていくためには、つまり持続可能性とかSustainable development、そのために何が必要かというのは、ひとつは今こそ鈴木正三らの、日本の伝統的実業倫理、職業倫理を思い起こすこと。それから、我々ロータリアンですから、ロータリーの職業奉仕哲学を思い起こして実践することが必要だろうと思っております。

ご参考までにCSR、ISO26000の話を。もう覚えていらっしゃらないかも知れませんが、「ロータリーの友」2011年10月号で、R.I.の職業奉仕推進委員会の委員長をなさっておられる黒田正宏R.I.直前理事が、バネルジー R.I.会長の提言を紹介しています。バネルジーさんは、エレクト時代から、奉仕部門の中で特に職業奉仕に注力をと言っておられたそうです。

「ロータリー独自の職業奉仕はロータリー全体の土台なので、公式訪問やガバナー月信で職業奉仕の重要性の強調してほしい。そして、お金や物を所有することにとらわれがちな今の時代に、職業奉仕の重要性を強調することが私達ロータリアンの役目である。」ということをエレクト時代に言っておられた。今年度、会長に就任後も、1. 会員の勧誘と紹介において職業と職業分類を強調する。2. クラブの活力維持のため職業を強調する具体的な方法を決める。3. クラブと地区レベルにおいて、高潔性を基本にした職業上のネットワークを作る。4. 新世代を惹きつけ指導する方法として、高潔性を伴った職業上のネットワークをつくる。5.「四つのテスト」と「ロータリアンの職業宣言」との関連を強調し、ロータリーにおけるこの二つの大切さを強調する。6. 倫理と高潔性を推進しながら、新世代とともに奉仕する。こういうことを言っておられるそうであります。

今回読み直してみたんですが、具体的に何をするかというのはよく分からないんです。「最近のR.I.の会長は、職業奉仕についてはあまり強調して来なかったんだけれども、バネルジーさんはインド出身のR.I.会長で、職業奉仕のことについて強調していますよ」と、黒田さんが書かれているわけであります。

その中で、バネルジーさんが、「CSR（企業の社会的責任 Corporate Social Responsibility）、特にISO26000の活用が、現在のロータリーの職業奉仕と会員の維持増加につながるのではないか」と、言ってるんです

ね。それを受けて黒田委員長は、「ISOで言ってるようなことは、これまでロータリーで職業倫理を含めた奉仕活動で実行してきたことだ。」と言いながらも、「現代の社会や新世代においては、職業奉仕の説明にISO26000を活用する方が理解されやすいのではないか」と言っておられる訳であります。

そこで今日は、ちょっと余分なことですけれども、若干コメントさせていただくと、この“ISO”というのは、国際標準化機構（International Organization for Standardization）。今回の26000というのは、「組織の持続可能な発展（Sustainable development）に貢献するために、世界最大の国際標準化機関ISOによって、マルチステークホルダー・プロセスで開発された、あらゆる種類の組織に向けた社会的責任に関する初の包括的・詳細なガイダンス文書、これは認証用ではなく手引書（Guidance on social responsibility）である」という風に定義されておりまして、2010年11月1日にISOから発行されました。

このあらゆる組織に向けたという所がミソでありまして、これまでCSR（Corporate Social Responsibility）ということで、企業の社会的責任と言っていたんですけれども、このISO26000というのは、それだけではなく、企業以外のあらゆる組織、つまりロータリーという組織も含めて、全ての組織に適用されるような手引書、ガイダンス本を作ったということであります。その中で、この“持続可能な発展”（Sustainable development）、これがキーワードですけれども、「現在の活動を継続しても、将来のニーズを満たすことが可能である」という定義であります。

ステークホルダーというのは、その組織の利害関係を持つ個人、グループのこと。企業で言えば、顧客や取引先、株主、従業員や労働組合

などはもちろん、企業が事務所・工場などをおいている地域住民まで含まれる。その中でこの26000というのは、マルチステークホルダー・プロセスと言っていますけれど、企業、消費者、労働組合、政府、それに加えてNGOとか、その他の有識者などから幅広いステークホルダーが参加した。途上国やCSR関連の国際団体からの参加者の合計は470人に及んだと言う風に言っております。

最近の企業にしろ、あらゆる組織は社会的存在でありますので、単に、企業の場合の会社の役員、従業員、株主、取引先、消費者だけでなく、NGOなどもステークホルダーになるのだと。NIKEシューズという有名な会社がありますけれども、NIKEの東南アジアかどこかの子会社が、未成年、16歳ぐらいの子を非常に安い賃金で雇って労働させていたということが社会問題になりまして、それがNGOやNPOから大変批判を受けました。NIKEの経営者は、「そんなことはしていない」と最初否定したのが悪かったようなんですけれども、そのために世界的な不買運動に発展して、NIKEの株が6割にまで下がってしまったということがあったようであります。

そういうふうに、企業でも、またロータリーでもそうでありますけれども、単に直接的利害関係にあるものだけではなく、もっと世界的にいろんなNGOとかNPOもステークホルダーになって、彼らからも信頼を受けないと組織としてやっていけないんだというのが今の時代でありますし、インターネットなどの書き込みや何かで、いくらでも評価を受けるのでありますから、そういう意味では企業も経営上大変な時代になっていると。そういう中で、この26000というのは単なる企業だけではなく、あらゆる組織が持続可能な発展をするためにはどんなことが必要かということを考えたというわけであります。

その中で社会的責任を果たすための7つの原則として、「説明責任」「透明性」「倫理的な行動」「ステークホルダーの利害の尊重」「法の支配の尊重」「国際行動規範の尊重」「人権の尊重」を考えること。この7つの原則と併せて、ロータリーで言ってるのと同じような中核主題として、「組織統治」「人権」「労働慣行」「環境」「公正な事業慣行」「消費者課題」「コミュニティへの参画及びコミュニティの発展」、こんなことを中核的な問題として考慮しなさいというのが26000であります。

ところで、このISO26000とロータリーの奉仕の哲学でありますけれども、黒田さんがおっしゃっていますように、こんなことは基本的には今までロータリーが既に唱えてきたことであります。その中で企業倫理、職業倫理の向上というのは大変必要なんだ、そして企業の社会的責任を自覚するのは大変重要なんだというわけでありますけれども、それでは、このISO26000が、ロータリーの職業奉仕を若い方に理解してもらうために大変手掛かりになるんですかといえば、私は少し違うんじゃないかなと思います。ロータリーでは古くから、「ロータリーの綱領と道徳律」、「ロータリー通解」、「決議23の34」から「四つのテスト」、「奉仕こそ我が務め」、「ロータリアンの職業宣言」など、ロータリーの職業奉仕、職業倫理について提唱されてきたことがたくさんありますので、やはり若い方に職業奉仕を理解してもらうためには、まずこれらを勉強してもらう、知ってもらうことが重要なのではないかなと思っております。これを飛び越してISO26000が役立つよというのは、ちょっと行き過ぎではないかなと思っております。そんなことで、ISOの話まで触れさせていただきましたけれども、これで私の話を終わらせていただきたいと思います。ありがとうございました。

フォーラム

「今の社会はこれでいいのか？私達は何をすればいいのか？またそれをどう考えて行動すればよいか？」

― 個人として、そしてロータリアンとともに ―

フォーラムリーダー　深川　純一（伊丹RC）
進行　安行　英文（三田RC）

○黒田　皆さんバズセッションでお疲れになってまたそれを文章化するということで大変な作業をされたと思うんですが、これからがいよいよ本番です。このセミナーのメインイベントの一つですから、皆さん頑張ってください。いよいよフォーラム、集中!!多少前の委員長と違うんで、厳しくいきますけど、では今日の司会を安行さんにバトンタッチしますからよろしく。

○安行　まず最初に皆さんに発表してもらう。それからいろんな質問などを受けていって、我々からも質問していく、いうことをやっていきたいと思います。このフォーラムの中で皆さんに、テーマを与えてバズセッションしてもらって、いろいろ発表してもらうということについては、別にチームで対抗してもらうというつもりは無いです、多様性のある考え方を皆さんから伺うということですから、班がＡＢＣＤあれば、すべての人が回答をもっているということです。その発表に対する、こちらからの質問は、どこかに我々が、こういうことを聞きたいなあというところがあって、それがたとえばＡ班で3つ聞くか、Ｃ班で1つ聞くか、Ｄ班には聞かないかもしれません、それはご了解いただきたいと思います。

班毎に終わったときに、解らない言葉とか、もうちょっとそこのとこ説明だけをお願いしますというようなところは、質問します。それから深い質問は全ての班が終わってから、トイレ休憩をはさんで、それから後にやろうと思います。それから、ロータリーはどういう考えをもっているのかということに関しては、深川先生の方に僕が振って、深川先生のコメントを頂きたいと思ってます。よろしくお願いします。

○深川　一つだけお願いしておきます。皆さん今バズセッションでそれぞれいろんな意見をだされまして、それを今ここでまとめてフォーラムするんですが、このフォーラムというところは、この場の意見をまとめて決議をするところではございません、安行さんにいろんな意見を引き出してもらって、いろんな意見を発表して、それぞれの人がぞれぞれの意見について、あれは参考になるな、俺はあの意見に反対だ、そういう風に一人ひとりが心に頷いて、あれ初めて聞いた、勉強になるな、自分を高めるために、全部自分で主体性をもって取捨選択して、そしてこの場を去っていただく。お互いに学び合うところ、これをフォーラムといいます。憲法が保障している思想良心の自由というのがありますね、みんなそれぞれいろんな考え方をもっている、それが人間の社会なんで、ロータリーもそうなのでありますから、いつも他の人に対する思いやりの心を持って、そして自分を磨くという気持ちでお付き合い頂きたい、そのことだけお願いしておきます。

○安行　ということで、発表には、たっぷり時間をとります。でその発表誰からするかということは何も決めてません、この場で代表に出てきてもらって、ジャンケンで決めましょう、それぞれＡＢＣＤ代表どなたでもよろしいです。出てきてジャンケンをしてください。発表順を決めたいと思います。

それでは、まずＣ班から発表してもらいましょう。もう一度テーマを言っておきますね、確認のために、今の社会はこれでいいのか、私達は何をすればいいのか、またそれをどう考えて行動すればよいか、個人として、ロータリアンと一緒にどうするのかということを考えてくださいということでしたね、じゃ、よろしく。

バズセッション報告　C班

○　それではＣ班発表させていただきます、よろしくお願いします。Ｃ班は別名を上月班というんですけど、私は、司会進行を務めさせていただきます長井と申します。よろしくお願いいたします。始まる前に、ちょっとリーダーが挨拶したいということなのでお聞きいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

○　すみません、さっき紹介もらったんですけど、Ｃ班の上月といいます。僕あんまりしゃべるん得意ちゃうんですわ。でも、それなりに頑張ろう思うんで、よろしくお願いします。いま3日目になりますけど、Ｃ班は本当に最初どうなるかと思いましたけど、もう団結力がすごくて、今はもう3日前に会ったの初めてちゃう？ぐらい楽しいです。Ｃ班の話をこれからしますけど、まあ記録には残らんでもいいんですけど、記憶には残して帰っていってもろてもいいかなと、はい、これぐらいにしときます。

○　斬新なあいさつありがとうございました。それでは、拙い進行になるかと思いますが、司会進行させていただきます。私達は、「今の社会これでいいのか」というテーマの中から課題を

見つけだして、それにどうやって立ち向かっていくかということを紐解いていきながら議論を進めてまいりました、それでは、課題の方からまず少し説明さしていただたいと思います。柳さんから説明さしていただきたいと思いますので、柳さんよろしくお願いいたします。

○　はい、すみません。少しバタバタときましたが、ゆっくり、課題点、私達が考えたところ発表さしていただきます。まず、今回のテーマなんですけれども、『いまの社会はこれでいいのか』という課題に対しまして、私達は、“このままではよくない”という答えを出しました。それでは順番に一つずつ説明加えていきたいと思います。まず一番上に書いてあります“画一化された社会”ということなんですけども、私達が考えた画一化とは、街が画一化、同じように同じようになっていっているんじゃないか、ということがまずあります。皆さん、大きい自分の近い駅、想像してもらえればわかると思うんですけど、必ず出たところにケンタッキーがあったり、ミスタードーナツがあったり、マクドナルドがあったりということで、欧米の社会に私達の日本は支配されてる、というと少し大袈裟かもしれませんが、そういう感じで、どの駅にいっても同じ風景だったり、同じようなものを売ってたり、同じような味のものを売ってるていうことが、すごく言える社会なんじゃないかなという課題点が一点目に挙がりました。画一化されることによって、日本の綺麗な川ですとか、そういう日本のいいところ、魅力が少しづつ薄れていってるんじゃないかなという話もしました。私が個人的にすごく興味をもった話題なんですけども、私達が喋っているときには、商店街派ＶＳイオンモール派ということで話が進んだんですけれども、私達ほんとうに30後半の方もいらしゃるＣ班、上月班なんですけれども、かたや20歳のメンバーもいる班でして、そういう世代間の違いがあって、小さい頃に商店街に通って過ごしたという人達と、商店街じゃなくて、もう生まれたときからイオンモールでお買い物をしてましたと、大きいショッピングモールでお買い物をしてましたという、その2パターンあって、その両者、どっちがいいのかという話にもなりました。これも画一化された社会のところで少し課題点として議論したことです。

続きまして孤立死という言葉について少し加えます。これは、私達が考えたところには、人間関係の希薄さがすごく目立つ社会になってきて、その希薄さゆえにこういう出来事が起こってしまったりするんじゃないかなということです。またメンバーの中に一人暮らしをしているメンバーもおりまして、この一人暮らしをしているとどうしても地域の方と関わりを持ちにくい、持ちずらいということがあります。そういう意見も出ました。地域の方との関わり、そういう居場所があるということは、こういう課題点を紐解くときにすごく大切なことだと思って、キーワードとして、まあ居場所というのもあげられたらなと思います。

続きまして年金というキーワードです。これは皆さんもよくご存知かと思いますが、私達の世代は年金が今の半分ぐらいですかね、になるという問題があります。私達の世代で考えると半分ぐらいになるということなんですけども、私達の子ども、私達が生んだ子どもたちの世代はどうなるのかということも含めまして、この課題点として挙がりました。格差社会、次のワードなんですけども、こちらはもう読んで字のごとくで、所得の差が日本でもすごく著しくなってきているんじゃないかなという課題点がありました。

5点目、子どもを育てる環境、少子化ということなんですけれども、この少子化に関わるキーポイントとして、子どもを産みやすい環境

なのかどうかっていうこともすごく大事なんじゃないかなと思っています。回りの人がサポートしてくださったり、そういう子どもを育てやすい施設、託児所とかですね、そういうのが日本にはやっぱり少ないという問題もありましたので、ここに挙げてます。あと、未婚率というのもすごくキーポイントになっていました、結婚する男性女性の数が少なくなるにつれてやはり少子化もどんどん進んでいく課題になりますし、そうすると子どもが少なくなって、上の世代を支える人達がいなくなるということは、年金の問題もどんどん加速していくということで、この課題に挙げています。

最後に環境問題ということなんですけども、これは去年ありました東日本大震災の瓦礫をどこに置くですとか、あとは地球規模で考えますと温暖化ですとか、北極の氷が溶けてるですとか、これは本当に私達が取り組んでいく、いかなきゃいけない課題点だと思って最後に挙げました。このようなかたちで、すべて課題点を上げたうえで、次には、これを解決していくにはどういうことがポイントになってくるのかなということを、次の2枚目のこの模造紙の方で説明させていただきます、ありがとうございます。

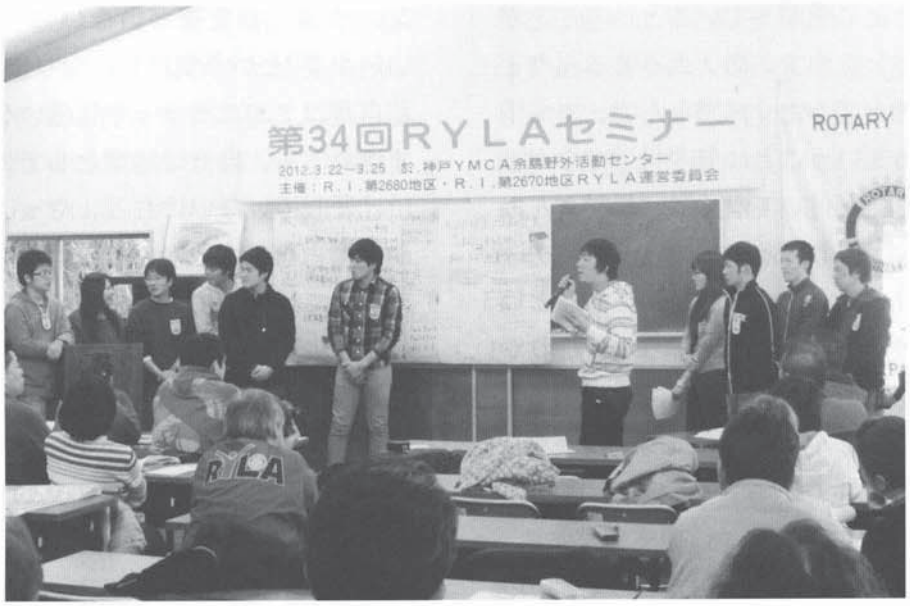
○　はい、ありがとうございます。そうですね、私達がこの議論をするにあたり、最初に着目したのは、この社会は暮らしやすいのか？ということですね、まあ暮らし難いという人間がほとんどやったんですけども。その中に見い出していった課題というものが、課題というものを見つめることが一つめの気づきになったのかなと思います。じゃあその気づきに対してですね、我々はなぜその気づいていることに対して行動ができないか？ということを踏まえてですね、近野くんから少し方法論について説明していただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○　お願いします近野です。ただいま挙がりました課題を、私達で現実的に解決していくにはどうしたらいいか？というときに、課題には気づいているのになぜ行動に移せないかということになりました。まず課題に立ち向かう方法が解らない。次に主張したいが一人では行動に移せない、ということが議論になってきました。その中で、人と繋がることの大切さということになって、それは何かというと、身近なことだったらコミュニティがないのかなというふうになりまして、コミュニティというのは地域ですと、先程も言われましたように、地域にある自治会、あと消防団だとか、あと老人会、婦人会、組織では学校、会社、NPO、ボランティア団体、あとイメージなかなかし難いと思うんですが、ネットワークでもコミュニティというふうになりまして、Facebookとか、twitter、mixi、人と繋がる形いろいろありますけど、これらをコミュニティというふうに、これが現実的に問題解決していく中で重要というふうになりました。それで、次にそれぞれ違う地域から違う環境でC班の方に参加されている3名の方から現在の所属している地域のコミュニティの現状を話していただきたいと思います。よろしくお願いします。

○　そうですね、私達が議論を重ねていくにつれて、すべての課題に対してアプローチができやすいのは、人との繋がりが大切でなのではないかということに話が進んでいったんですね。一人の力では解決することができないかもしれないけれども、思いを共有して一緒に働きかけていくことで解決することができることではないかということで、このコミュニティというキーワードが挙がってきました。それでは実際、自分達の暮らす地域で、コミュニティとはいったいどうなっているのか？という実例を踏まえて、次の説明に入らせていただきたいと思いま

す。最初は、松村さんの方から説明をしていただきたいと思います。はい、よろしくお願いいたします。

○　よろしくお願いいたします。松村と申します、私の事例はこの紙の一番上の1番の事例になるんですけれども、30代の独身男性です。いま住んでる所、一人暮らしのアパートですけれども、もう約17、8年ぐらい、震災前ぐらいから住みはじめてるんですけれども。僕、1回も自治会あるいは子ども会とか青年団とか係わったことはないわけですね。自治会があるということはなんとなく分かるんですけれども、どこに会員さんがいて、どこにこう顔役のおじさんがいるのか、ということすらいまだに把握してないわけです。コミュニティ、コミュニティ、ってまあ耳障りのいい、一種のマジックワードですけれども、よく聞くんですけれども、僕にとってコミュニティって今までピーンってこなかったわけですよね。こちらの方に私自身のことをあえて不可視化された弱者っていうふうに、ちょっと過激な言葉でちょっと定義づけてみたんですけれども。母子家庭とか、父子家庭とか、或いは高齢者の単身世帯、或いは身体障害者の世帯みたいに、可視化された弱者というのは、すぐに行政の手がさしのべられるんですけど、僕のようななんかこう一見健康で、まあ普通に仕事をしてて、普通に税金を払っているような人間は、まず弱者としてはカウントされてないわけですよ。でもその内実というのは地域社会から一切、こう遮断された、まあキツイ言葉でいうと排除されてるような、現状であります。というようなことを鑑みても、いままでかなり画一化された行政のそのセーフティネットというものからは、網の目からはこうすくい漏れていくような人達というのは案外多いんじゃないかということを、この議論の中で、自分自身の問題として改めて話し合う中で気づいたわけですよね。なんか僕って結構、行政のセイフティネットの中の荒い網の目から漏れ落ちた存在なんだということが、改めて気付いたわけですよね。だからといって僕は、じゃあ完全に受け身で、じゃあ、お前は弱者、自分は弱者なんだから何とかしてくれっていうふうに言うのはたやすいかもしれないんですけれども、僕の方からももっともっと働きかける必要があるわけです



よね。僕が自治会の存在、或いは青年団、或いはそいいう、例えばロータリークラブのような、奉仕団体の存在をいままでほとんど知らなかったというのも、自分の責任でもあるわけですよね。僕自身がもっともっと関わっていく、アンテナ等、張り巡らして関わっていくというような主体性をもっと持つべきだったという、同時に反省もしているわけです。ということでまあ今回、このC班の皆さんとの議論の中で自分の勉強じゃなくって、自分のリアルな生活の問題として、僕はコミュニティということを強く意識して考えることができました。

○　そうですね、コミュニティという存在は意識せずに、それからそのセーフティネットから漏れた弱者を認識した。そこからどうやってアプローチしていくのかという心の変り方が松村さんの発表から汲みとれたのではないかなと思います。続きまして、皆さんお待たせしました、上月くんの方から、少し発表していただけたらなと思います、よろしくお願いいたします。

○　上月といいます、私は松村さんと少し違った考え方で、まず地域の消防団に入ってまして、この消防団に入っていることがコミュニティに参加していることに繋がっているということがC班で話し合いした中で、あ、入ってるんやというぐらい、僕もまったく鈍感なんで、まあ消防団に入ってるということに気が付いてなかったんですよね。気が付いてなくて、松村さんみたいに羨ましいと思われるわけです。このチームもそうですけど、グループで何かをするということはすごい、いいことだと思うし、これから頑張るんですけど、地域コミュニティというのではなしに、ちゃんと自覚を持ってこれからも歩み続けていきます。

○　あのすみません、まだ終わりじゃないので、拍手はまたあとでお願いします。ありがとうございます、彼は地域の消防団であったり、草野球であったり、地域の関わりという面で、その糸口はあったんですよね。ただそれに対してまったく気付いてなかった。で、今回この会に参加することによってそこに気付きを得られた。で、それを明日に生かそうと思っているということでいいよね、上月くん。はいそういうことみたいです、ありがとうございます。続きまして、家庭の、地域のコミュニティと二つ続いたので、今度は家庭というコミュニティの中での課題というものを、柳さんの方からちょっと教えていただけたらなと思います。

○　柳でございます。お願いいたします。私は、ここにありますように自分ではそんなに自覚はしていませんでした。家族の中、地域のコミュニティに属しているものと、そうでないものに分かれていたっていうのを昨日の議論で新たに発見することができました。それはなぜかと言いますと、私三兄弟なんですけれども、義務教育を私だけ公立の小学校に行っていなくて、地域のゴミ拾いですとか、あとグラウンドを使った夏祭りですとか、盆踊り大会とかあると思うんですけれども、いつもそういう所に行った時に、地域にお友達がいないので、すごく私はいいかな?という気持ちになりました。それで、私自身コミュニティって面白いなと思ったんですけれども、自分は地域としてのコミュニティには属していないけれど、やっぱり学校ですとかお稽古事ですとか、その他のコミュニティが充実していたので、この地域っていうコミュニティを少しぞんざいに思っていたのかなという気持ちもしました。でも、上月さんの話ですとかこういう地域の草野球チームの話ですとか、消防団に属しているということは自分の幸せに繋がっていくんだなということも思いましたし、そういう意味で、コミュニティっていうワード

は人生を楽しく、すごく素晴らしいものにするのに重要なキーワードになってくるんじゃないかなというふうに改めて考えました。

○　そうですね。彼女の場合は家庭の中で、より身近なコミュニティの中で起きていることを糸口に、解決の方法を見出したということなんですけれども、今お話させてもらった事というは、これは結局我々の身近なコミュニティ、地域の問題ということ。じゃあ、我々の班には海外からの留学生もおられまして、果たして海外、外から見た日本の現状っていったいどうなんだろうっていうことも意見として挙がったんです。姚さん、よろしくお願いします。

○　皆さん、こんにちは。姚です。よろしくお願いします。さっき紹介いただいた、私は中国からの留学生です。今、松山大学で博士課程に入っています。9年前、私は中国から日本に来ました。その時、日本に来て、ああここすごくいい国だと思って、環境も良いし、いろいろ施設も全部揃って、中国より何倍、何十倍いいと思って。でも日本の方と深く接触すると、やはり日本という社会はちょっとおかしいところもあると思います。今日のテーマで言うと『今の社会は良いか?』ということですね。私の理解では、社会というのは人と人のつながり、それでできた環境は社会と言います。その人と人とのつながりは、地域があるんですけど、地域は一人の人間にとってはすごく大きな範囲になると思います。私達自身、一人の人間として自らの社会でいうと周りの人とのつながりになります。そして、周りの人でいうと一番近いのは、やはり自分の親族になります。父親、母親そして兄弟、従姉妹とか。私、すごく不思議なのはいろいろ日本人の友達から聞いた話では、自分の従姉妹とか1年間、1回・2回しか会えない。これは私から見るとすごく不思議だなと思います。なぜかというと中国では血のつながり、縁をすごく重視しています。私は、だいたい中国でいる時、少なくとも1ヶ月に2、3回ぐらいは会いますので、すごくみんな仲よくして一緒に遊んだり、ご飯食べたりとかしますので。日本に来て、親戚関係がこんなに離れているとは思わなかったですね。そして、親に対する関係、ここにいるロータリアンの方も含めて自分が良い親子関係を持っているかどうか、この質問をしたいです。なぜ、親子関係と言いだしたかというと、やはり人間としては親に対する親孝行は一番基本になると思います。中国は昔から今まで発展してきて、どんな時代でも一国の基礎としては、親孝行を基礎として作られました。今の中国は日本と同じように、政策的に経済を優先して社会がすごく発展してきたんですけれども、でも発展する間には失ったこともあります。人間と人間のつながり、そして親孝行の考えが失われてしまいました。日本も同じように子どもと親が離れて、1年に1回しか会えないとか、これはあんまりよくないことになると思います。ですから私から見ると、国として親孝行の考えをこれからの世代の若者の頭の中に入れると、今日うちの班が挙げた『年金問題』そして『少子化問題』『孤立問題』とか全部解決できると思います。なぜかというと、自分が親孝行すると周りの人はみんな見てます。そして、自分の行動で周りの人を感動させて、そういう親孝行の考えを周りの人に広げることになります。それを全国に広げるとすごく良い環境を作れると思います。それは僕の意見です。

○　私達がそれだけ大事にしようとしていたものを忘れていたっていう現状があるから、姚さんの言葉っていうのがすごく届いてくるんじゃないかなと僕は思ったんですけども。姚さんの言葉や議論を重ねていく上で、じゃあ我々は課題に対して目を向けて、これから何をするべき

かということを一人ひとりが言葉にしていったんですね。《私達が生きる社会を良くするために私達にできること》、ということで12名分、一人ひとりができることをここに書いて、最後は閉めさせていただいたんですけれども、この一つ一つの行動というのは、先日ですね、若松先生の言われた『万事徹底』の一つなのかなと思います。この一つ一つをすることで、たとえば上月さんのことだったら『夢中になる』、この一言に対して共感できる人間が集まってくる、これがひとつのコミュニティになっていくわけです。そのコミュニティが課題に対してアプローチをかけていく。そうすることで社会がどんどん変革していく。その社会が変わっていくということを楽しむというか、社会を支えるということが将来我々が支えられる立場になった時に役に立つということではないでしょうか。これでC班の発表を終わらせていただきます。ありがとうございました。

○安行　内容についての質問は、みんなが終わってからにしたいと思いますので、言葉上解らなかったとか、こことここのつながりをもう一つ説明を聞いた方がいいかな、と思うことを質問してください。姚さん、中国では『チンニー』と言うのね?連帯とか深い関わりのことを『チンニー』と言いますね。そういうのが大事だということですね。非常に大切にします。はい、どうですか?　じゃあ、今のところでちょっとこの言葉とかこの説明ではもう少し説明をしていただきたいというのがありますか?受講生の人には分かると思うんだけど、ネットワーク『twitter』『mixi』というのは、あんまり分かっていないおっちゃんたちが多いので、ちょっと説明してもらえますか?　SNやね『ソーシャルネットワーク』

○　たとえば『Facebook』っていうのは、ハーバード大学を中退したマーク・ザッカーバーグっていう人がハーバード大学の新入生向けに、新入生がFacebook っていう新入生リストを作っていたんですけれども。ハーバードの伝統的に。それを電子化するとどうなるかっていうのをやって学内向けに作ったのが始まりなんです。それがアイビーリーグに広がって、全米の大学に広がって、世界中に広がって、公開の履歴書みたいなものをネット上、Web上に構築してそれを参照できるような仕組みなんですね。それの日本版が『mixi』です。mixiも同じようにSNSと言って『ソーシャルネットワークサービス』って言うんですけれども、人と人とが繋がりあえるような仕組みをネット上に構築してるわけですね。『twitter』っていうのは、もっとフランクに140字という字数の制限があるんですけれども、それで自由に議論を出しっぱなしにできるという。もし、気に入った議論があったらそれを取り込んだり、そして議論したりできるわけですよね。そういうネット上でやりとりするようなシステムが一番右側に書いてあるネットワークというものなんですけど、ちょっと実物をお見せできるともっとわかりやすいと思うんですけど、口頭で言うのは、少しすいませんちょっと言葉足らずで、申し訳ないです。

○安行　大変、おじいちゃんたちにはよく分かる。『Facebook』には実名が入るわけですね。はい。じゃあ他に、この言葉とかないですか?最後のところがみんながまだ読んでもらってなかったかな?。どういうことを結論的にきましたかということ。読んでください。

《私達が生きる社会を良くするために私達にできること》

○　僕は、自分を変えられるのは自分だけとい

う風に書かせていただいたんですけれども、今回この様なライラセミナーに呼んでいただくきっかけを得るっていうのは、人から得たものなんですけれども、そこから自分がどう活かすかというところが重要になってくるなっていうことを今回の、3日目ですけれども、今回それを改めて思い知りました。これからは僕自身、4月から社会人になりまして全国転勤になりますので、実際こういうような地域のコミュニティってところにはおそらく入っていけないって状態になるんですけれどもその中で先ほどにそこにあったようなパス組織であったり、ネットワーク上であったりっていうコミュニティを十分に自分から活用していろいろなコミュニティに自分から参加できるような人になりたいなと思いました。

○　ちょうど真ん中のアンテナを張るというところを書かせていただいたんですけれども、要は話し合いの中でコミュニティはすごく重要であると、そこに所属するがいいのではないかということなんですけれども。やっぱり、それに所属するためには、そういう風な情報がないと思っている人もいると思うんですけれども、やっぱり多かれ少なかれ情報はあると思うんです。その情報をやっぱり自分からキャッチしようとするようなアンテナを常に立てておくと、ちょっとした情報であってもそれに気付くことができる。今回ライラセミナー、僕も来させていただきましたけれどもローターアクトでそんな話があって、自分の中でもコミュニティというのは大事だということを思っていたので、アンテナを立てていたので、今回来れたのかなと思うので、これからもアンテナを立てていろんな情報をキャッチしていけたら、もっと良くなっていくんじゃないかなと思いました。以上です。

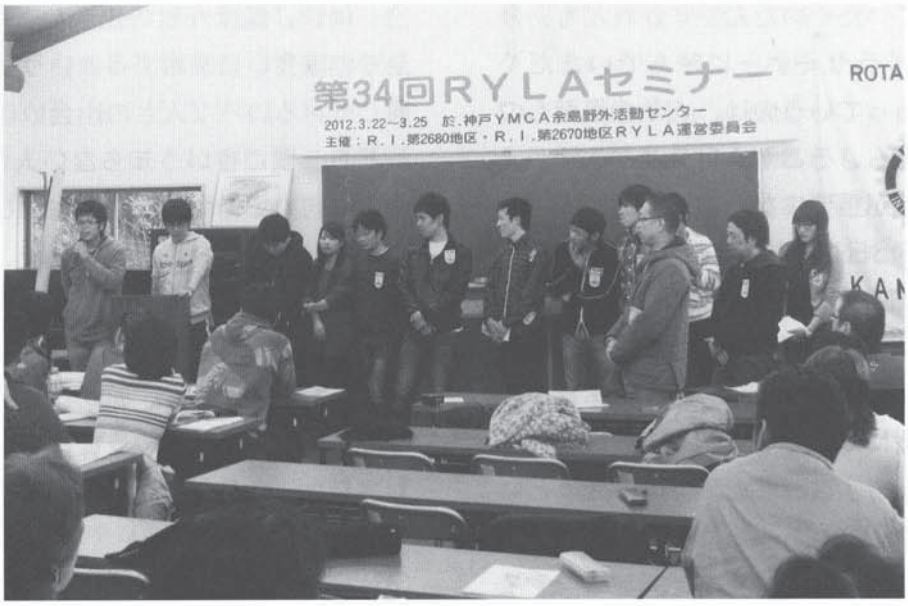
○　はい。僕は今日の出会い、明日の出会い、全ての出会いに感謝するということで、仕事を通じていろいろな人との出会いはあるんですけれども、僕こういう知らない人と4日間生活するのは初めてで今日、今回生活してみてすごくフレンドリーになれたというか、知り合うのはいいことだなということがあって、あたりまえのように起きてる日常の出会いっていうのに、できるだけ感謝して、繋がった人とできるだけ深い繋がりを持つということでこういう言葉にしました。ありがとうございます。

○　私は右の下から二番目を書いたんですけれど、私も地域のコミュニティに全く参加してなくて、でもこう自分で入ろうと思えば、多分どれにも入れたし自分で人を集めることもやろうと思えばできたのに、してなかったから、やっぱり待つだけじゃなくて自主的に参加していかないといけないと思って書きました。

○　私は一番右下なんですけど“積極的に人と関わる”という事です。皆さんとこうして出逢えたのもそうなんですけど、毎日一つの課題に対して話しをして刺激を受けました。今後も積極的に人と関わってどんどん視野を広げていきたいなという風に思います。

○　私は一番上の“感動させる、そして感動される”という事を書きました。何でかといったら、人と人、良い繋がりを作るのは感動が必要になると思います。そして友達作れるのも感動がありますから、自ら人を感動させてそして人に感動されて、これで良い社会ができるかなと思います。

○　私は“未来を明るく元気に”という事で書かせてもらったんですが、私は地域で少女バレーのコーチをしていまして、スポーツクラブ



21っていうんですけど、その女の子たちにバレーを通して今繋がっている繋がりを大切にするような事を教えながら、未来まで繋がっていけるような関係を保っていけたらなぁっていう事を伝えたいなぁって思いました。また高齢の方とか今の私たちが高齢になった時でも、そのスポーツクラブ21とかそういう形で明るい、元気な未来が作っていけたらなぁと、少しでもそういう風にできたらなぁとこういう言葉を書かせてもらいました。

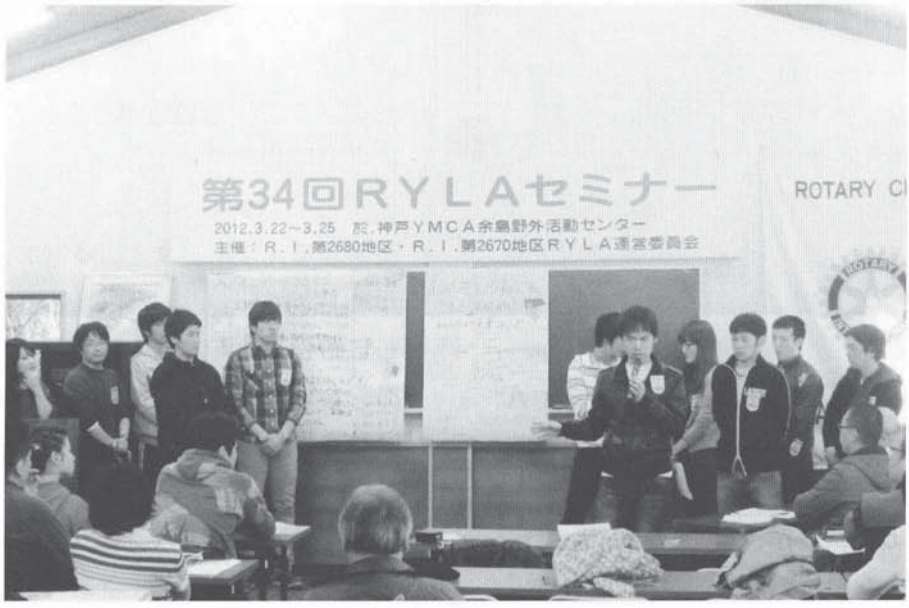
○　私は“夢中になる”というテーマにしました。これは何事にも積極的に取り組んでそれに対して夢中になるという事です。

○　こんにちは。僕は左下の“バランスの良い人間になる”と書かせていただいたんですけど、一応野球をやっていまして、野球に例えさせていただきますと、バッターで相手が投げてきたボールに対して、どんな球にでもどんな相手が投げかけてきた球にでも対応できるような、そういった人間にならないとやっぱり自分の都合の良い時だけ助けたり、都合が悪くなったら助けられなくなったりするようじゃ成り立っていかないと思うので、できるだけ頭にも心にも余裕を持ってバランスの良い考えそして人間になっていこうと思います。ありがとうございました。

○　私は“誰かを支えること。誰かに支えられることに喜びを見出す”と書かせていただきました。コミュニケーションというのは、意志疎通という意味もございますようにお互いが理解でき合って初めてコミュニケーションができると感じております。そのことを大事にして人と繋がっていくことに喜びを見出していけたらと思っております。ありがとうございます。

○　ピンクの大きいやつなんですけども“未知の世界へ飛び込む勇気、行動力、発信力”ということで書かせていただきました。ここで得た経験、そしてここに来られた事、それもある意味行動力だと思いますのでそれはこのまま頑張っていきますし、ここで得た経験を自分から発信していけたらなと思っています。ありがとうございます。

○　一番下の真ん中の松村です。“人を巻き込み、巻き込まれる”と書いたのは、私自身よく人に自己完結しているというように言われるので、それは自分でも自覚しているので、もっともっと人を巻き込んでそして巻き込まれるように、今日巻き込まれているまさに今日がそうなんですけど、そんなふうにちょっと変えていきたいなと思いました。



バズセッション報告　A班

○　こんにちは。最初A班の内容を読ませていただく小林といいます。では今からA班の発表を始めます。今回のテーマ『今の社会はこれでいいのか』この問いに対する私達の考えなんですけど、「好きだけど　大好きじゃない」引っかかりを取りたい、これからずっと大好きでいるため。ここで皆さんに聞きたいんですが、できていますかコミュニケーション。ここで劇をご覧下さい。

題名は『挨拶から始まるコミュニティづくり』です。

“すてきなトキちゃんは毎日とことこと歩いていました。”
“こんにちは”
“トキちゃんは挨拶をしません”

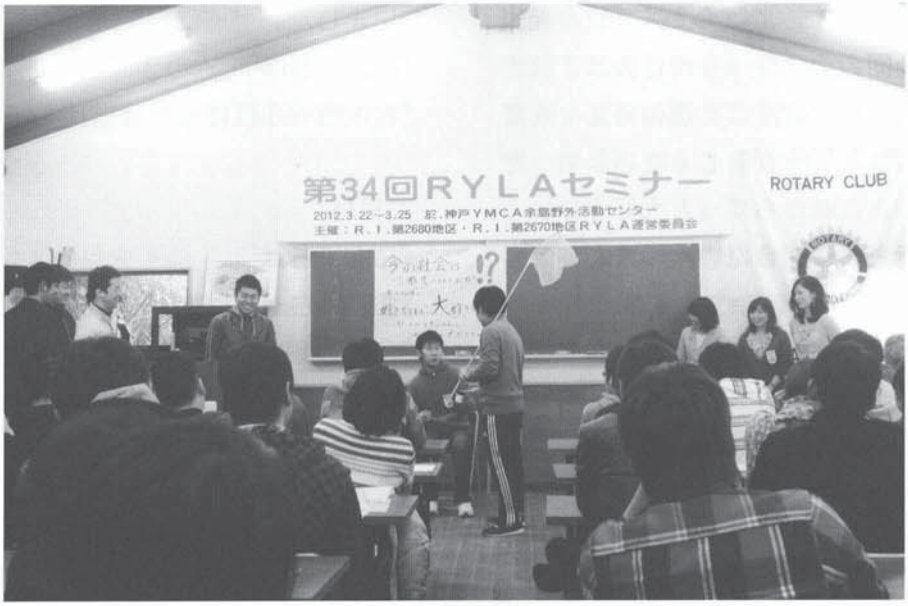
二日目
“こんにちは”
“おじいちゃんは挨拶をしました。”
“今日もトキちゃんは挨拶をしません”

三日目
“こんにちは”
“こんにちは”
“挨拶ができるようになったね”

“はい”
“君ひとり？”
“そうですね、これ捕りました”
“あっ、ありがとう”
“分かんないんです”
“ゆっくり行ってください”
“はい、行ってきます”
“何を捕ったんだい？”
“やー、わからないんですよ”
“じゃ、おじいちゃんがちょっと見てあげよう”
“失礼いたします”
“これね、クワガタ虫というんだよ。結構大きいんだ”
“えーそうなんだ”
“挨拶もできるようになったし、おじいちゃんの君らの年齢の子たちと交流しないかな、よかったら君もこないかい”
“ああ、いつやるん、うん、暇やからいいよ”
“じゃ、君いこうか”

トキちゃんは、挨拶をすることにより交流のきっかけができました、そして将棋という小さなコミュニティにはいりました。時は経ち、トキちゃんは大学生になりました。
“あー、帰っても何もすることないよなー、うん、まず子どもと海外つなげれるような社会、まず見つけよう、まずインターネット使わなあかんな、うん、最近は便利や”

トキちゃんはインターネットで調べることにしました。
“おー、すごいな最近は、なんか子どもの国際社会で吉川先生ておるみたいな、とりあえずアポとらなあかんのな、でも電話ってなー、緊張するんよな、けどしゃあないな、トゥルールー、トゥルールー”
“もしもし”
“あ、もしもし、はじめまして”
“はじめまして”
“あのー、子どもの国際的な政治をしてるとインターネットで見てお電話さしていただいてるんですけれども”
“はい”
“あのー、先生って時間あります？”
“え？今からですか？”
“今からって、今からです。あ、すみません。



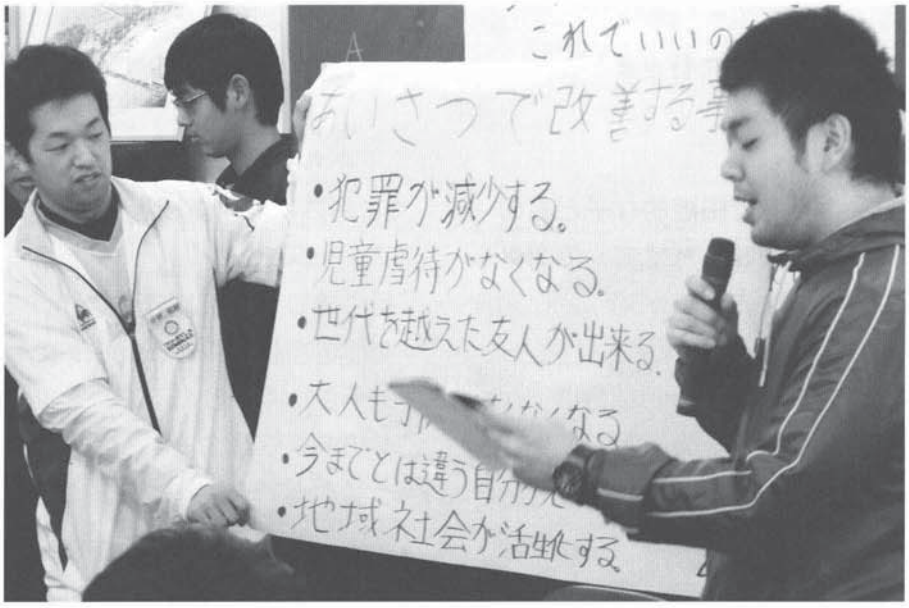
名前忘れてましたね、僕、時任といいます。”
“私、広島に住んでいるんですけども来てもらっても大丈夫ですか？”
“あー、夜中ぐらいになるんですけども大丈夫ですかね”
“はい、私もそういうチャレンジを尊重するの、はい、夜中でも待ってます”
“あー、ほんまですか、じゃちょっと特急電車で行きますんで”
“はい、お待ちしてます”

トキちゃんは、広島にすぐに行きました。
“あ、どうもはじめまして”
“はじめまして、はい”
“あのー、インターネットで国際的な子どもの活動というのを見て、興味もってて、で海外に行きたいんですけど、先生誰か知り合い知りませんかね？”
“そうねー、私のところは、もう知り合い、ケニアの、えーと、スラムでその子どもを保護する活動をしている人がいるので、その人紹介しますよ。ケニアの子ども達はね、日本の子どもと全然違いますよ。もうねー、ケニアはスラムはたぶんビックリすると思いますよ、是非見に来てください”
“それって、いつごろ行ったらいいんですかね”
“明日から行ったほうがいいんじゃない”
“ほんまですか、じゃちょっと、なんかロケットみたいな、ロケットみたいな飛行機で一気にに飛んで行ってきます”
“はい、是非いってらしゃい”
“ありがとうございます”
“ありがとうございます、ちゃんと最後まで挨拶できてよかったわ”
“ありがとうございます”

トキちゃんは、ロケットのような飛行機ですぐに海外に行きました。
“ブーンンンンン”
“初めまして、吉川先生の方からご紹介していただきました時任と申します”
“お待ちしてました”
“あの、スラムの方に行かせていただけるという話なんですけれども、大丈夫でしょうか”
“はい、是非、私達の活動をご覧になってください、どうぞ”

トキちゃんはスラムの子ども達をみてたくさんショックを受けました。
“ウアッ”
“これは日本の子ども達と違うやんけー。でも、日本の子と海外の子とやっぱり違うから、国際的に交流しないとダメ、早速日本に帰って、こういうフォーラムみたいなもの開かないといかん、帰ろう。すみません、一日しか居なかったんですが帰ります”
“ありがとうございました”
“ケニアの子、連れて帰ってもいいですか？”
“さあ、こちらの準備が整ったら、是非ケニアの子どもを、連れて帰ってあげてください”

２日後、トキちゃんは、急いで日本に帰りました。日本に帰って、トキちゃんは
“そうや、まず子どもを見つけなあかんねん、幼稚園いかなあかんねんな。けどここ最近は先生すっごい減ってるんですよね。少子化とか、なんかいろいろ。と、とりあえず先生に会わな。先生いますか？”
“こんにちは”
“こんにちは”
“さっきケニアから帰ってきたんですけど”
“すごいですね”
“ロケット飛行機で帰ってきました”
“子どもに乗せてあげたいわ　是非”
“ケニアの子も乗ってきまして。先生に相談なんですけど、あの、日本の子どもとケニアの子でちょっとイベントみたいなのを開きたいなと思うんですけども、先生のとこの保育園の方をケニアの子と混ぜていただけたらと思うんですけども、ちょっと参加してもらえませんか”
“わかりました、こんなにたくさんの子ども達もとても喜ぶと思います、みんな笑顔がすてきな子ども達ですから”
“先生、何にするか、さっきおったな、どっかのおじいさん　このおじいさんに日本の遊びを教えてもらおう。ケニアの子と日本の子を、あの幼稚園の子を、まあ、あのー、イベントを開いて遊びをしようと思うんですよね、おじいちゃん、確か知恵ありましたよね”
“忘れてしもうた”
“そうだ将棋だ！それで教えて欲しいんやけど、元気ある？”



“うん、元気だからね”
“やりませんか”
“いいよ、君も大きいなったし、礼儀も正しいし”
“ありがとうございます”

あの、挨拶ということがきっかけで、こう、世界で繋がることが可能であるということが、今回分かりました。すみません、挨拶をすることで、僕の大好きな社会になった気がします。

“トキくんおはよう”
“お、谷やんおはよう”
“トキちゃん、こんにちは”
“こんにちは”
“ユウくん、ありがとう”
“ありがとう”
“ウメちゃん、こんばんは”
“こんばんは”
“ジャンボ！ジャンボ！”
“アシャンテ！アシャンテ！”
“ハロー！　ハロー！”
“グーテンダーク！グーテンダーク！”

○　皆さん社会を大好きになるために、もっと挨拶をしましょう。紹介が遅れましたA班の谷口と申します。挨拶をすれば社会が明るくなります。社会が明るくなれば希望が持てます。コミュニティの絆を生み出していくのは挨拶です。挨拶でコミュニティを改善して今の問題をうち勝っていこう、そこで問題を提唱し直していこうというのが今回の挨拶というものの僕らが導き出した結論です。

挨拶で改善する事。挨拶をすれば地域の犯罪が減少します。そして児童虐待は絶対になくなります。挨拶をすれば世代を越えて友人が出来ます。大人も子どもも恐くなくなるんです。それまでの自分と違う自分を見つけられます。地域社会が挨拶で活性化します。挨拶をすることでまず自分の周りの人々との繋がりが持てるんです。人種の壁を越えるのもまず挨拶をすることからです。コミュニティを作るためのコミュニケーション、挨拶、誰にでもできる、決して難しくない簡単なことです。大好きな社会を作るために僕達は挨拶をしていきたいと思います。以上A班の発表でした。ありがとうございました。

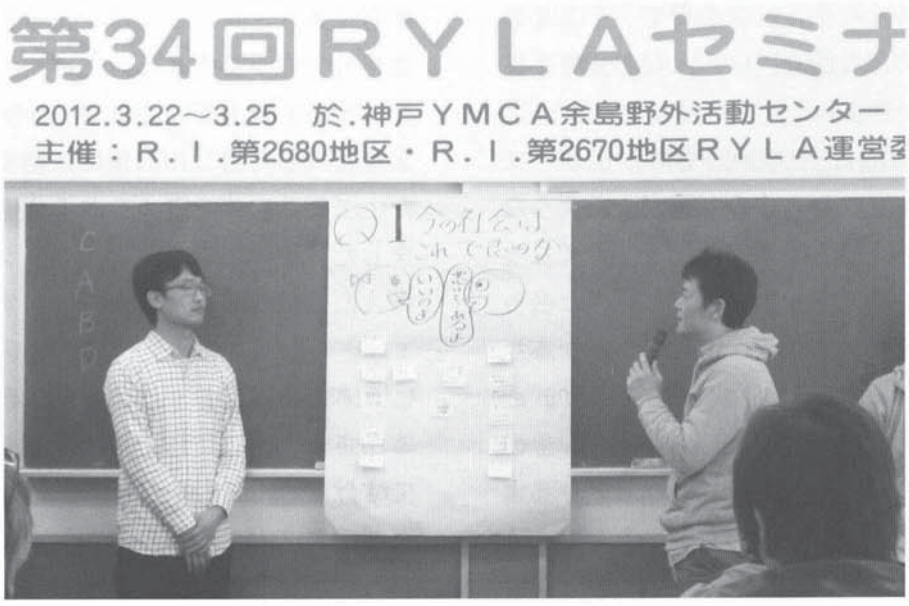
○安行　はい。寸劇を挟んででしたけども何か分からない言葉とかありますか。聞いておきたいこととかありましたか。また後で聞こうと思います。はい。じゃああありがとうございます。

バズセッション報告　B班

○　本当に素晴らしいプレゼンでしたね。僕らB班のプレゼン今から始めさせていただきます。よろしくお願いします。僕が前説担当・阪本龍太郎。前説担当同じくB班岡田依里です。よろしくお願いします。我々けっこうシャイなメンバーが集まっていまして、僕も含めなんですけど。とは言え、熱い気持ちとともにメガネが曇る。そしてキャビンの窓が真っ白に曇っていくくらい熱い議論を交わしたわけです。で、こんな話をさせていただきました。このB班の中で、私は大学生で最年少なんですけれども、昨夜も私の思いをどんどんどんどん皆さんに伝えると、社会人の先輩方、大学の先輩方が凄くまとめてくださるんですね。私が伝えたい言葉を違うボキャブラリーで、違う言葉で、ちょっとずつ背筋を正すように道筋を作ってくださるんですよ。その場にいるだけで心臓がキューってなるくらい熱くなるこの思いを3枚にまとめるのは難しかったんですけど、B班なりに面白く伝えれたらなと思います。今回B班は3つのトピックについて話をします。

『Q1，今の社会はこれで良いのか？』『Q2，これから私たちはどう考えて、どう行動するのか？』『Q3，ロータリーの皆様と今後どのように関わっていくか？』です。コミュニティとか色んなキーワードが出てきてるんですけど、多数決で決まる民主主義に僕たち住んでいるんですけども、やっぱり少数の人の意見というのもちゃんと発表できる、主張できるような場づくりっていうのも大事かなと思ったので、まとまらない意見はまとめるために頑張っていたんですけども、結果的に僕たちは一人ずつ自分が思ったことをそれぞれ発表していこうという方針で、皆様に一人ずつ僕達がお話させていただきます。皆さん色んな思いがあると思いますけどもまた後で聞かせていただければと思います。今から皆さんで聞いていただくわけですけども、まず西山店長からお願いします。

○　これからQ1という事で発表をさせていただきます。張さんと私、西山の方で発表させていただきます。『今の社会はこれで良いのか？』



これが一番大きなテーマということで与えられていたものです。他の班でどちらかという意見が出ていたと思うんですが、私どものB班では良いという所と、悪いという所と、どちらでもない、という3つの意見が出ております。それぞれ思い思いの言葉で書いてこのポストイットに貼っております。良い所から張さんの方に発表していただきます。どうぞ。

○　張と申します。よろしくお願いします。まず良いと思う点なのですが、その中では“自分の意志で活動ができる”という事があり、あとは“良くても悪くてもありのままを受け入れるところから始めるのだ”、あとは“選択肢が多様”“チャンスは平等”“頑張り次第”“個を尊重”があります。

○　次は悪いと思うところを発表させていただきます。悪いところ、良くないと思う所なんですが、“人と人との繋がりが希薄である”“他力本願な所がある”“他人任せになっていて自分では何もしていかない”という所があると思います。それと、仕事は教えるんですが人としての付き合い方っていうのを教える人っていうのが今は少ないんではないか、という意見が出ております。もう一つ、よく似ているんですが、コミュニケーションがとれていない。先ほどもありましたけど挨拶なんかでの軽いコミュニケーションというのが今の現代の社会では無くなってきているのではないかと思います。そして、先ほどとはまた逆なんですけどチャンスが不平等というところがあると思われます。そして思いやりにかけているというのが今の現状じゃないでしょうか。最後なんですけど、どちらでもないという意見をまた張さんの方から発表してもらいます。

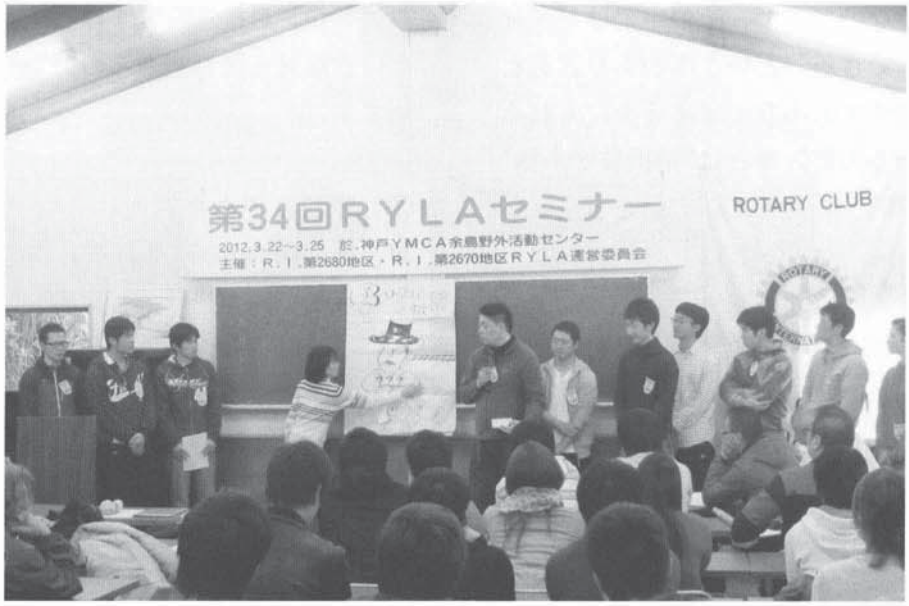
○　どちらでも良いというコメントなんですが、その中の1つがそれぞれ自分の考えによって違う。良いと思う人もいるし、悪いと思う人もいる。まだ分からない。ただ不安が多い、年金問題、また少子高齢化問題、それぞれ問題が出ております。

○　次はQ2にいきます。今の社会、選択肢の多様性から色んな可能性が広がりました。一つ

努力すればいろんなチャンスを得て、そしていろんな人がいろんな職業、いろんなお金を手に入れることができました。しかしどうでしょう。Facebook、twitter、そういうものが広がってコミュニケーションというのが繋がったような気がしてるんだけど、本質的には分からなくなっているんじゃないでしょうか。実際に相手と会って相手の立場を考えて相手と付き合う事が本当のコミュニケーションじゃないでしょうか。そして色んな情報が広がっているのですが、そのせいで自分で考える事が出来なくなっているような気がします。それが他力本願になっているんじゃないでしょうか。その結果、孤独死がおきたり、大人は子どもと付き合う、接っし合うことのやり方が分からなくて子どもを不安にさせてしまったり、色んな可能性があるのにそれに気づけないでいるんじゃないでしょうか。

本当にこれで良いのでしょうか。私は全然駄目だと思います。そこで私達はこういうアクションプランを考えました。私達はこういうアクションプランを考えた上で基本的な理念をまず説明したいと思います。私達のアクションプランの前提としては、他力本願でない人、自分で考える人、自立と自律を掲げました。自立とは自分で立って考える。もう一つの自律は自分を律する。自分をコントロールする。そういう人を育成して自分の人生に余裕や充実を味わった上で相手の事を考えられる人を作れると考えました。その上でこういうアクションプランを考えたので説明したいと思います。

○　本山さんありがとうございます。熊木です。本山さんみたいに頭の良い事はしゃべれないんですけど、俺は家族という事を任されて、ちょっと愛を語ろうと思います。たぶん自分はこのロータリーの皆の中で一番親から愛を受けて育ったと思います。何故そう感じているのかというと、子どもの頃は旅行とかに連れて行ってもらって、そこで美味しい物を食べたり、今でも家族旅行とか、妹がいるんですけど家に帰ってきて暖かいお布団で寝る、家族と別れたりして僕はちょっとそういう人らはちょっと悲しく思います。最近共働きが増えてきてコミュニケーション不足が増えてきているというニュースがよくあるんですけど、僕の親も共働きなんですけど、お母さんは夜勤とかでいなかったり



お父さんは昼間働いていていなかったんですけど、それでも会話は十分うまれてたので、そこは努力次第で何とかなると思うんですけど、僕がこういうセミナーに呼ばれて保護者に語れる会があるなら是非いっぱい愛語ると思うのでお願いします。

○　熊木君ありがとうございます。続きまして私は家族というコミュニティの一歩外に出たコミュニティ、隣人とか友人のコミュニティについて話したいと思います。昔は近所の付き合いというのは昔の方が良かったなぁとか、古き良き時代が良かったなぁ、と言います。そういうのも時代が進むにつれて便利なツールが出来てきた事により、お互いにコミュニケーションをする機会というのが失われてきたことにあると思います。

具体的に例をあげますと会話が電話になり、会うことがなくなりました。メールができ、話すことがなくなりました。メールができたことにより、ハガキによる筆跡から読みとれる心とかそういうのも得られなくなりました。またインターネットができたことにより、家にいる時間とか、家で全て事足りる環境ができてしまいました。こういうことによりコミュニケーションの機会が減ったものと思われますが、昔に戻すためにはこれらを無くさないといけない。でもそれは物理的に今の時代無理ですので私達は昔に戻すのではなく、今のこういう便利なツールを使って昔のような環境を繋がりを作り上げていくという事を考えました。

具体的には先ほども出ましたが例えばFacebookなどのソーシャルネットワークというサービスを使用して、隣人の方がFacebookをやられていたら友達申請をしてみるとか、インターネット上の繋がりをまず作ります。そしてインターネット上で作った繋がりを利用して、実際にじゃあどこで会おうとかいうことに現実のミーティングを作り上げると。こういう事を繰り返していくことにより段々段々とどんどんどんどんコミュニティが隣人との繋がりが広がっていくものだと思います。中にはFacebookを知らないという、そういうの聞いたこともないという人もいるかもしれません。そういう人たちにもFacebookというのは人と人とが繋がれるサービスですと説明をする事によって全ての人がこういう便利なサービスを使うことができる環境を作っていくことが大事だと思います。

ただしSNSに制限するのではなく、SNSにとどまるのではなく自分でその一歩を踏み出していくというのが先ほどの本山さんの言われていた二つの意味での自律という事に繋がっていくと思います。

○　奥田さんありがとうございました。実際に私達にこれから何ができるのか？何をしていけばいいのか？という点で一つ考えてみました。実際にここ3日間来て、こんな仲間と腹わって話し合えるなんて全く思ってみませんでしたけども、いざ始まってみると凄く熱い会話をする事ができて凄く貴重な経験が出来たと思います。これを各自が地元へ戻り、それぞれが小さなコミュニティを作る。それをまた自分達で繋がっていけば小さな輪が段々と大きくなっていき、最終的には世界の方へ発信できるくらい、よその国が見て、あぁ日本て凄いなと、凄く繋がりが出来ているなというのができればいいのじゃないかと考えました。

○　はいどうも、ありがとうございました。では、ロータリアンとの今後をお話したいと思います。ここに書きました。皆さんこれね、もちろんどなたか分かりますよね。分かる人？

はい、ロータリアンの方です。はいロータリアンのダンディなおじさまでございます。こち

らに素朴な僕ちゃんとお嬢ちゃんはもちろん今回参加した私たちライラリアンの皆さんです。

僕たち“ロータリアンとの今後”という事に対して、まず自分達からロータリーについて学び知るというところに答えが出ました。ロータリーの理念であったり、思想というのを知らないという事は自分達にとって非常に勿体ない事なんです。ここにこのおじ様が持たれているハテナという手持ち札が3枚あるんですけど、今これ伏せられている状態なんですけども、僕達が自分達からロータリーについて学び得た知識によって、ここでこの札がオープンになるんです。ここにさっきまで伏せられていたんですけどもオープンになりました。これっていうのは今まで知らなかったんです。自分達、僕達は学んでないから。ただ僕達から、ロータリアンの方と距離を縮める事で僕達が持っている、例えばAプランというものがあったとします。Aプランがこの方達との協力を得ることでさらに上のA＋というプランにアップグレードされる。距離を縮めるという事、それはチャンスが増える、お互いの夢を共有するという事。僕達の夢を今以上に膨らますためにもロータリーの方々と良い意味で巻き込ませていただく。そうして自分達が社会へ、明るい未来を見れたらなと思います。今はまだ種かもしれませんけど、自分達が自分達から学び得た知識を、種を蒔くことでこういった綺麗な花が咲いて自分たちの足跡というのをまた作れるのではないでしょうか。以上です。

○　まとめに入らせていただきたいと思います。その前にB班のテーマについておさらいをしたいと思います。まず一つ、今の社会はこれでいいのか？第二、策としてどう考えてどう行動するのか？第三、ロータリーの皆様と今後どのように関わっていくのか？ですね。

一人一人の意見を出させていただいたんですけども、議論をした結果多くの意見が出て、まとめきれなかったという事で、私個人の感想でまとめさせていただきたいと思います。

多く話した結果、一人一人何らかの形で今の社会にウズウズした感じ、心の中に何かモヤモヤしたものを持っているということで、変えて行きたいという事を願っているようです。

一人一人が自分の夢、目標を持ち、行動、意

見を交換する事で社会というものが少しずつ動いていくんではないかと思います。一人一人、仕事も違います、目標も違います、それでも前を向いて進んでいく事で社会というものは変わっていくと思います。私個人の意見ですがそう思いました。

○　最後になりましたが、東郷君が頑張ってくれたので僕の言う事はほとんど無いんですけれども、こうい発表の形をとらせてもらって、皆で話す大切さと自分が話すという難しさを学んだので、自分にとっては財産だなと思いますし、これからも頑張っていきたいと思いました。これにてB班の発表を終わらせていただきます。最後までご静聴ありがとうございました。

バズセッション報告　D班

○　私達のグループは、“和敬”という名前を付けました。“和”というのは聖徳太子の『和を以て貴しと為す』の“和”、そして“敬”というのは『尊敬』の“敬”。素晴らしい意見が出たというのが本当に嬉しいと思います。どうですか？と当てたら、それぞれ思い思いに自分の持っている意見を大いに出して、こういうふうにして日本というのをこれから創っていこう、あるいはこれから日本を考えていこうと熱く語ってもらいました。

一人一役で今から発表していただきますが、本当にこのチームはチームワークが良かったです。“今の社会はこれでいいのか？”とまずテーマをいただいたときに、どうしてもマイナス思考で考えてしまう。でも東日本大震災で日本人の美という事で本当に世界から賞賛されました。またこの日本というのは武士道のある国なんです。本当にこれからの次世代の子ども達に自信を持って日本に生まれて良かったね、と胸を張って伝承できるような国だと思います。愛国心を持とうという話、そういう話をしまして掲示法という方法で皆の意見をバッと貼っても

らって、それでどういう感じでこれを、日本というのを考えていったのかっていうことで、流れとしては日本の現状の良い点、そして日本の現状の見直さなければいけない点を発表してもらって、そして課題から見る改善点、国として、あるいは地域として個人としてあげました。国あるいは地域、ここでロータリアンの方に地域の名士の方が沢山おります。私たちが提言させていただいたことをまたお助けいただければ本当に嬉しいなと思います。その後、具体的な提言ということで最後にまとめたいと思います。それでは最初に日本の現状の良い点ということで発表してもらいます。お願いします。

○　では最初に現状の良い点を永城と中尾で担当させていただきたいと思います。現状の良い点、各自意見を出しまして大きく5つのテーマに分けました。まず上から順に行きたいと思います。

まず、国民性とくくりました。その中で入っている項目は、気配りや思いやりの心を持っている。また先ほど東日本大震災の話もありましたけれど、人とのつながりを大切にしている。また助け合いの精神、心を持っている。これら全て合わせまして日本人の心と言えるのではなかろうかと思います。また個々の倫理感が高い。ちょっとこちらにも出てくるんですけども、基本的に皆さんの中に倫理感というものがあってそれがちゃんと根付いているというのは日本人の国民性ではないのかなと思います。また班の中にもいるんですけども、細部にまでこだわる日本の職人の気質とあります。日本の技術というのは各国から賞賛されていますし、職人ならではの気質というのは日本が持っている武器なのではないかと思います。精密さや技術なども持っているということです。また勤勉な国民性も日本の良い点ではないかと。

続きまして下いきます。教育を受ける場がある。諸外国に比べましたら教育をちゃんと受けることができると思うんです。ここにいる皆さんもちゃんと義務教育を経験された方も多いと思います。これも日本の良い点でないかと。

一番下ですけども、言論の自由とくくらせていただきました。この中には敗戦国として戦争のむごさを色々な手段で伝えています。原爆ドームですとか、皆さん修学旅行とか行かれると思いますけども、そういった負けた歴史を残していて諸外国にも伝えることができている。またマスコミが多様だという。テレビも色々なチャンネルがありますし、ラジオも新聞も雑誌もあります。インターネットもありますけども、それらを自分の好みで選択して受けることができる。これも日本の良い点ではないかと思います。

また政治とあります。政治に関しては見直す点にも入ってくるんですけども海外では独裁の国とかもありますよね。そういう所と比べましたら、ちゃんと国民が自分の意思を持って投票して選んでいる。ここは政治として良い点なのではないかという意見が出ました。

続いてこの生活と伝統なんですけども、生活の面では、水や電気、食事、今は水道ひねったら水が出てきたりお腹がすいたらスーパーに行ったらすぐ食べ物もあります。あとは安全。乗り物が安全とか電車とかも時刻もきっちりした時間に到着しますし、あんまり電車の事故って聞かないと思うんですけども、そういう面では日本って凄いなって思います。あとは伝統なんですけども、正月や節分、七五三など季節や行事によって家族が集まる機会もできますし、そこでまたコミュニケーションなど生まれてくるので、それも日本の良い伝統だなと私は思いました。日本の現状の良い点はD班ではこのようなことがあがりました。

その様な本当に素晴らしい国だということを前提にして、ただこういう点は今後変えていこうという点を報告していただきたいと思います。

○　それでは日本の現状の見直し点ということで、秋定、森本、北野で報告したいと思います。まず5つのグループに分けました。１つ目が経済ということで格差社会であったりとか、失業されている方が多いとか、後はデフレであるとかいう意見が皆から出ました。二つ目に規範意識の低下ということで、良い点にもあげられたんですけれども、最近モラルの低下があるのではないかとか、礼儀を知らない若者や子どもがいるのではないかとか、犯罪が多くなっているのではないかという意見も上げられました。右に行きまして、少子高齢化ということで少子化が進んでいることや年金の問題、高齢者を支える若者が少なくなっているということもあげられました。コミュニティの希薄化ということで、デジタル化、先ほどからあるようにfacebookやtwitterで、そういう所ではコミュニケーションがされているのかもしれませんが、顔を付き合わせたものが無いという意見とか、地域の付き合いが薄いとか、子ども達の自然体験の場の不足があるのではないかという意見もありました。

この少子高齢化の枠とコミュニティの希薄化の枠、どっちもに当てはまるのではないかというのは、まず過疎化ということで、都会に人がどんどん行って町の人口が減ってきているという話とか、産業の後継者不足ということで、こちらにも伝統が良いというふうに言ったんですけども、それを継いでいく者がいないという意見とか、あとは地域医療ということで、名医といわれるお医者さん達は都会に行きがちになってきて、田舎とよばれている人口が少ないところにはなかなかお医者さんの確保も難しくなってきているという意見もありました。悪いことを悪いと言える大人の減少ということで、コミュニティの希薄化の中にも当てはまるし規範意識の低下という中にも当てはまるんじゃないかってことで、この図の四角がかぶった形になっています。

その他としては、死刑制度があったりとか、食べ物の変化によってアレルギーの人が増加しているとかいう意見もあげられています。日本の現状を見直す点から具体的な例としてお二人に話してもらいたいと思います

○　森本といいます。僕は生まれも育ちも小豆島です。小豆島に住んだことがある人、住んでいる人というのはこの中に少ないとは思うんですけども、今の過疎化、少子化についての現状を話したいなと思っています。

今現在小学校の数が8校くらい。僕が小学校を出たのが16年前になりますが、その頃は16校ありました。その時から比べますと半分、5年後には3つから4つに、さらに半分になるという計画になっています。保育所、保育園、幼稚園も統合され、幼児園として今残っているのが現状です。一応高校まで小豆島にあるんですけども、高校を卒業して島に残るのが2割、3割程度、小豆島を出て大学、専門学校に行き、その大学がある所で就職というのが大半で大学卒業後に戻ってくるのもまた2割から3割、というのが小豆島の現状です。産業とか代表されるものはあるんですけども、小さい企業になりますと後を継ぐ者がいない、どんどん廃れていくというのが現状となってます。

地域との関わりなんですけども、僕が小学校の頃は老人会の方、地域の自治会の方が昔からの伝統というものを小学校の授業に取り入れて普通に数学とか国語以外のそういう授業も、中心とまではいかないんですけども伝統を守る、受け継いでいくという事でずっと続けてきていたんですけども、今現在はそれも若干少なくなってきているのかなと感じているのがこの小豆島の現状になります。

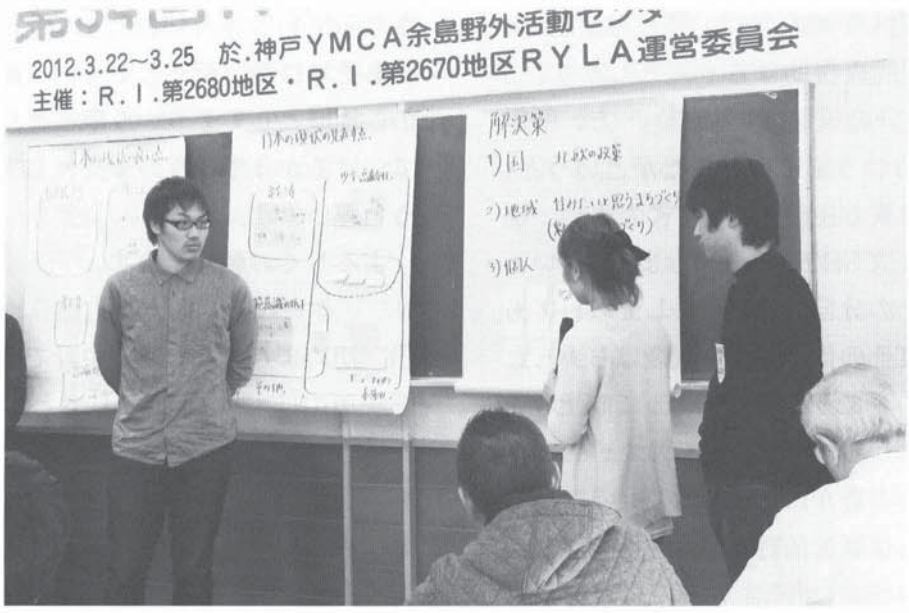
○　こんにちは。D班の北野と申します。上手くしゃべれるかどうか分からないんですけども

ゆっくり聞いてください。私は介護職をしているんですけども、この中にも何名かおられると思うんですけども、私は前は施設で働いていたんですけども今デイサービスという所にいます。朝迎えに行ってお昼食べておやつ食べてまた夕方帰るという形なんですけども、このデイサービスを始めてから結構ビックリする事が多々ありました。例えば、朝迎えに行きました。利用者は一人暮らしです。インターホン鳴らしました。出てきません。中で何されてると思いますか？そうなんです亡くなってるんです中で。でも勝手に入ることもできない。僕らはまだペーペーなので、ケアマネージャーさんという方に連絡して警察に連絡してやっと窓を割るなり何かしらして入るのが現状なんですね。

私は明石の方でデイサービスをしているんですけども、利用者は一人暮らしなんですけど玄関までしか入れません、基本的に。中でタバコ吸われる方はまだ煙が上がってます、ストーブついてます、でも決まりは玄関までなんですね。でもあまり言えないんですけども入ってます、正直なところ。それは同じ明石市内で集まったり、部会で皆さん言うんですけども、なんでやねん、おかしいんちゃうか？っていうのがあります。私の働いている職場のすぐ近くにコミセンという高齢者が集まってカラオケ大会とかゲームをする場があるんですけども、若い人が全然いないんですね。僕自身、こういう仕事しているけど参加していない私もいるんですけども、もうちょっと若い人が参加して高齢者とコミュニケーションを取るなどしていったらまたより良い町作りになるんじゃないかなと思うんですけども。僕は20歳から始めたんですけども、高齢者の方も何で若い人に見てもらわなあかんねん、という結構距離があったんですね。その距離を埋めるのも時間はかかりました。まだ全然距離がある利用者もいます。今どうやってその距離を縮めようかなと考えている途中なんですけども、昭和一桁の方が今多いんですけども、プライドが凄い高いんですね。戦争を経験しているんですね。でもやっぱり色んな事を知っています。色んな事を経験してます。だから話を聞くだけでも凄い勉強になります。将棋もかなり強いのでまた違う一面で勉強になるので。そういう一人暮らしの方が近所にいても、僕も悪いんですけども挨拶しないんですね。私、県営住宅に住んでるんですけども1階の人が救急車で運ばれました。誰が運ばれたのかも知らない。どんな人、男、女どっちかな。というそんな現状なんですね。もうちょっと知っていたら僕もこういう仕事で、本当は時間外はダメなんですけども情報があったら、こうこうこうとか教えれたんじゃないかなと思いました。介護については挨拶で高齢者と若者が仲良くなれたらまた良い地域とかになるんじゃないかなと思います。

犯罪について、僕は神戸に住んでいるんですけども、友が丘の事件知っている方っていますかね？そうです酒鬼薔薇事件。あのとき僕は小学生だったんですけども、もの凄かったんですね。集団下校。行くのも集団です。ベルは絶対持たないと駄目。一人で外は出れない。凄い時があったんですけども、あれも事件があってからそういう取り組みをするんじゃなくて事件が出る前にするべきだったのではないかなと思いました。ありがとうございます。

○　はい、ありがとうございます。本当に色んな問題はあるんです。都会に住む私らと田舎の方に住む森本さんありますけども、人が集まらないと地域ができないですね。コミュニティができない。そういう、人がだんだん減っていくという課題もありますし、これから高齢者の時代になっていきます。その時代をさけて通れない高齢者に対して我々はどうしていったらいいかという事で、色んな経済とか規範意識の低下



とか、コミュニティの希薄化とか、いろんな事が叫ばれますがここでザクッと私たちの考えを発表してもらいたいと思います。

○　初めまして、D班の平川と申します。ザックリと解決策を言っていきたいんですけど、今までに僕達の班は、良い日本だけどこういう問題もあるよねと。僕たちが解決していきたい、どこから解決するかっていうのが大切になると思うんですけど、初めは日本がどうするか。その次に地域が、各県だとか各地方だとかそこがどうしていくか、さらにその下の僕たち個人だとか、ちっちゃな共同体がどうやってそれを解決していくかっていうのを落とし込むように話し合っていったので、まず僕からは一つ、国がどのようにこれを解決したらいいのかなっていうのを話した僕たちD班の意見を述べさせていただきます。

今すごいデジタル化というのも叫ばれているんですけど、一つはこの国事態がアメリカナイズされてきた。アメリカにならえで敗戦後経済も成長してきたんですけど、その末僕たちが今悩んでいる問題はここにある少子高齢化とかっていう問題に凄い悩んでます。今税金を上げようだとか、そういうふうにして若い者の力が足りないのを国民全員の税金を上げて補おうとしてるんですけど、それはちょっと違うんじゃないのかなって。税金を上げても全然困らない人たちもいるけど、一方凄い困る人たちもいるじゃないかと。それでどうにかいいようにできないかなっていうので、ここに北欧の政策って書いてあるんですけどヨーロッパっていうのは2000年来の歴史があって、長い歴史の中でこういう政策をしたら間違ったとか、こういう政策をしたら良かったとかいう歴史があって、歴史に基づいた政策を行っているんですね。今、昨日の授業で言われたような新自由主義が問われる中で北欧の国がとっている政策、彼らは100年以上前から高齢化社会になっているんですけど、彼らは今一定より低い生活水準の人、要するに賃金が一定より低いレベルの人たちは社会主義的な暮らしをするようにするんですね。ていうのは職は絶対に与えると、絶対に働いてくださいと、引き籠もったりニートはやめてください、その代わり保険だとか全て国が保証します。怪我しても大丈夫。病気しても大丈

夫。子どもも産んでください。子どもが2人いたら2人分の国的な援助はちゃんとします。3人だったら3人分の援助はします。一方、所得の上位層はどういうふうになったかというと、所得の上位層は資本主義でやってください。別に給料が20万って決めることはしません。いっぱい稼いだらその分自分の財産として取ってもいいんですけどその代わり高い税金はちゃんと納めてください。こうする事によって向上心を持っている人とかもっと豊かになりたいと思っている人はもっと豊かになる事はできるし、一方所得が低い人は職に悩む事とか生活に苦しむ事がなく円滑に生活ができるっていう社会になってきて、結婚はできるかなぁとか、子どもは一人じゃないと無理かなぁっていう心配もなくなってきたから、少子化で出生率が下がっていたのに歯止めがかかって、こういう政策のお陰でどんどん今登り調子で来ています。

今アメリカ、アメリカ、アメリカにならえと、アメリカは良いよと言われている中でこういう歴史があるヨーロッパの政策というのを見直していったり、自国の文化っていうのも一つ考え直していくことが国として大事なんじゃないのかなっていうふうに僕たちは話し合いました。でもそれは凄い漠然としている話なので一つ下の、地域としてそういう事にどうアプローチしていけるかっていうのを交代して話してもらおうと思います。

よろしくお願いします。

○　初めまして。D班の中野です。先ほどこの解決策の(1)国の対策としてどうしていければ良いのかっていうのを平川君にお話していただいたんですが、正直もっと自分達がどうしたらいいのかっていうのを明確に具体的にしたいと思うので、地域レベルまで掘り下げて考えていこうと思います。地域活性化する事が目的なんですが、まずその前に大前提としてその地方に人がいなければ始まらないと思います。じゃあどうやって人を地域に集めるのかという事についてなのですが、ここに書いてあるようにまず誰もが行きたい、住みたいと思う町作りや魅力がある町にしていかなければいけないなと思います。どうやって魅力ある町にしていくのかという事についてですが、地方独自の良さを活かして、全国レベルにまで全国に発信していけれ

ば良いんじゃないかと考えました。その為には僕らだけじゃなくロータリアンのここに集まっている方々にも職業を通じてですが、町おこしのサポートをしていただければ良いんじゃないかなと思っています。よろしくお願いします。

○　では、私たち個人で実践していけるっていう事を水島、公文、田中で発表します。まず、本当に実践できるもの、地域の関わりとかを自分達で作っていくのが大切だと思うんですけれども色々な意見が出まして、発信としてそれ以上でもそれ以下でもない、自分に自信を持ち自分の意見を人前で怖がらずに言えることが大切という意見や、地域独自の特徴、売りとなるものを見つけだし誇りを持つということ。あと高齢者の集まるコミュニティーセンター、カラオケ大会、ゲートボール大会などに少しでも参加していく。そういう集まる場所っていうのでイベントとかを考えていこうという中で、行事食を意識した料理教室を行ったり、歌を歌ったり学生と地域の交流会を持ったり、その中で子どもや大人まで関われる場所を作っていければという事で、季節毎の取り組みを行うという事と、地域のお祭りで地区単位で一つずつお店を出すという意見が出ました。

実際どういう事をしているのかという事と、これからどういう事をやっていくのかっていう事を学生の立場と社会人の立場で発表してもらいたいと思います。

○　こんにちは。公文です。僕は社会人の立場から話させていただきます。個人としてやっている事と企業としてやっている事をあげさせていただくと、まず挨拶運動、これが一番大事だというのがあります。また企業としてやっている事なんですけど、地域でどういった仕事をしているのかっていうことを小さい人からお年寄りの人まで見学してもらって、僕は高知県から来ているんですけど、高知県はこういう仕事をしているんだなっていうのを見てもらって、将来そういう仕事をしてみたいなって思ってもらえるような子どもを育てていってもらったり、年輩の方とかだったら、そういう仕事をしているから今の社会があるんだと思ってもらったり、またこれから社会人になるという人とかだったら、県外ではこういう仕事もあるけど高知に残ればこういう仕事もできるんだっていうのをもっと広めてもらおうという取り組みをやっています。

また個人的にやっている事なんですけど、僕はテニスをやっているんですけど、大学で地域の人達とコミュニケーションをとれるように大会を開いたりして、いろんな各クラブだったり、高校、中学、小学生だったりに、こういう大会があるけど参加しませんかっていう手紙を送って募って、皆で集まってワイワイやって最後にはまたそういうのが終わった後に打ち上げをやったりという事をやっています。

○　こんにちは。学生の田中大貴です。僕は大学でコーラス部に入っていて、地震があった後で皆さんテレビとかで見られた事があるかもしれないんですけど、故郷っていう童謡などを被災された方の前で歌って、心を癒されるという光景見たことある方もおられるかもしれないんですけど、僕の入っているサークルでは、老人ホームなどで実際会場に行って童謡など日本の曲などを歌って皆さん心を通わせたり、小学校や中学校で、最近はおじいちゃん、おばあちゃんからそういう曲を聞かせてもらえるっていう経験は少ないみたいなので、そういう歌を実際に行って歌ったりするとありがとうと感謝されて僕たちも心の中で凄い充実感を味わえるんだと思います。

他にも大学ではボランティア活動とかを熱心にされている学生もいたり、個人的にできるこ

となんですけど、先週住宅地で歩いてたら、転倒されていたおばあさんがいて、声をかけるとちょっとフラついてという話をしてて、大丈夫ですかって話をしてたらよく見たら頭をぶつけてて血が凄い。大丈夫ですかと声かけてて救急車連絡したんですけど、その時に誰か助けてくださいって言ったら周りの住宅の住民の方が駆け寄ってくれて、僕一人じゃなくていろんな人が協力してくれて一人の女性を病院に送ったり、声を掛けてくれる人が、優しい人が沢山いたんです。そういうのは国民性だと、日本人の本当に良いところだなと思うんです。最近の若者は初めの一声をかけるのは凄い勇気がいるんだと思います。挨拶だとかそういう親切な心を差し伸べるというのが凄い難しい事なんだと思いますけど、やっぱり困っている人が周りにいるっていう事が分かれば自分から率先して手をさしのべていく事が僕は大切だと思います。ありがとうございます。

○　では究極のまとめという事でお願いします。

○　はい。竹村と申します。よろしくお願いします。高い所からすいません。最初に和敬というのを決めたという事なんですけど、何故かっていうところにここで入ってくるんですが、実は私が愛媛県の松山市という所でこの6月に日本料理「和敬」というお店を独立して開業しております。ただ別に宣伝しにきたわけではないんですけど、たまたまこうなったのでご了承いただきます。和敬という意味は和食の和に尊敬の敬と書いて和敬という。これ何故かというと和敬静寂という禅語があるんですが、そこからいただきましたが四規七則という茶室に入ると万人が平等であるという考え方があります。その中で和やかな中にもお互いを尊敬しあい敬う心を持とう。お客様が来たら、今の料理屋だったらお客さんが偉いのではなく、やはり食べる側もある程度のルールを持ってやっていこうという考え方、そういうお店を作りたくて僕はこの名前を付けました。その考え方が今この3日前に集まった12人の中にもすでに根付いていて、ロータリアンとかライラセミナーというものとマッチするんではないかってことで名前を付けたわけなんですが、そこで色々と議論する中で確実に見える形に残るものを何かしたいっていうか決めたいっていう結果になって、今日が3月24日ですので来年の3月24日に一応僕のお店なんですけど和敬の会っていうのを取り敢えずは1回目は松山市でやろうって事をこの12人で決めました。そして1つだけ約束事があるんですけど、今12人はある程度思いを共有できています。それぞれが地域に帰って1人でいいから同じ思いの近い人を連れて次は24人で集まろうって事にしています。僕のお店は何とか24人入りますので、再来年はちょっと難しいかと思うんですけど。それでまだ説明はしてなかったんですけど、カウンセラーの久保田さん吉岡さんももし参加していただけるのなら28人になるんですけど、ここで勧誘してもよろしいですか。賛同いただけるという事でこれで28人になりましたので一応3月24日責任を持って僕が幹事でやらせていただきますので。これを一応確かな一歩として、それは小さいかもしれないんだけども、ただここで僕も1つ思うんですけど、この3月24日に集まるのはちょっとおかしい感じもするんですけど、これだけそれぞれが生活している中でこの1日を今から空けておくっていう事、これから努力しないといけないことだと思うんです。そしてもう1人も連れて行くっていう、その日に必ず参加するっていう責任感を持って生きていかないといけないっていう1年間を過ごせればそれがやがて大きなうねりになっていくんではないかっていう事を考えております。そしてそれを確信しております。

フォーラムディスカッション

○安行　少し時間を長くとりすぎたかなと僕も反省している点ですけども、そのことも含めてこれからのみんなのフォーラムのあり方は、こういうふうが望ましいかな、こういうふうにやってくれたらいいかなということを、深川先生からお話しをいただいて問題点に入っていきたいと思います。皆さんちょっとお疲れだと思いますが、もう少し辛抱してくださいね。

○深川　今、バズセッションの報告で、大変いろんな意見をいただきまして、またそれぞれの人がそれぞれの意見に深く頷かれたり、あるいは反対意見を持たれたと思います。ただ、よく考えてください。これでもう2時間20分の時間が経ったわけであります。こういう形で50人ぐらいだからいいですけど、ロータリーでは500人、600人の人たちが一同に集まって意見を発表していくわけです。そうすると、よっぽど能率的に発表しないと発表者が発表する時間が満足にとれない。たくさんの発言者が1日かけて議論するんです。その人達が一堂に「わぁー」となると議論になりませんから、順番が決められる。ロータリーのルールなんかを話す時には、広い会場で500人、マイクロフォンが3本まず立ちます。そして発言者が順番に出ていって、マイクロフォンの前で一人が話し出す。そしてそれが終わったらすぐマイクロフォンを渡して、順番に話していく。それしか時間がないから結局発言時間を制限されます。3分とか5分とか。だんだん時間がなくなってくると、発言時間1分になります。1分で自分の意見をまとめるのは大変なことなんです。言いたくても言えない。だから、短時間で自分の言いたい意見を集約して発表する。そういう訓練をする必要があります。

これは、皆さん判決文を見たら分かりますが、最初に主文として結論が出てきます。被告人を懲役何年に処す。そして、その次に理由として1.2.3.4とあって重要なものから順番に羅列的に言う、そういう形であって、まず結論があっ

てあなたは何を言いたいかと。そしてその理由は何かということを重要な理由から順番にしゃべっている。そうすると3分の持ち時間で1.2.3ぐらいで、後の4.5ぐらいがしゃべりたくても、もう重要なものはしゃべってしまっているから、それでも意志は通じますね。日本人は得てして結論を言わずに順番に理由からしゃべっていくから、聞いている人はあいつ何を言っているんだ？最後にあぁこうかと。どんなフォーラムでも、会議体でもそうですが、短い時間に自分の言いたいことを簡潔直裁に相手に意志を伝える訓練をしていく必要がある。ライラリアンになるのですから、これからそういった訓練をやるということを忘れないで、そのことだけお願いしておいて、今からフォーラムをやっていきます。

今から別に3分という訳ではなく時間制限はないのですけれど簡明直裁に自分の言いたいことを言ってください。そしてできるだけ短い時間でまとめてみんなに自分の意志を伝えるようにやっていただければと思います。以上です。

○安行　はい、ありがとうございました。それではですね。今までは説明をしていただいて皆に理解を得ることを旨としましたけれども、今度からはこの意見について、もうちょっと僕はこうだ、私の班はこういう意見だけどどうだろうと、そういうフォーラムに移っていきたいと思います。何かこう、いろんなところのいろんな班の意見で、僕はこうだと思うんだけど、こう書いてるけれども、ここはどう考えていらっしゃるんですか?という質問がまずないでしょうか?どなたでも結構です

○　私たちのチーム（班）は、最初に日本というのは本当にこうテーマをいただいた時、マイナスからみんな考えるのかなと、でもマイナスも我々も考えたんですが、プラスを最初に持ってきました。学生の若い人達いる、果たして皆は、やはりマイナスが強いのかな?どうなのかな?と皆さんに聞きたいのですが

○安行　どうでしょう?マイナスの面が多いと思う人は?良い面が多い?なぜ、どんな面?書いていただいた以外にもない?良いっていう人が多い。

○　マイナスの面が多いっていうのがあったので、ちょっとそこはおかしいなと思って

○安行　では、マイナスの面が多いと思っている人は聞きたいですか?いいですか?

○　私は追加の意見とかではなくて、さっき皆さんの話を聞いて、やはり結局出た結論は自分もボランティアに参加したい、そしてロータリアンと一緒に行動したい。ここで宣伝になるんですけれども、私は松山ローターアクトクラブから来ました。今、四国と2680地区、全部で17のローターアクトクラブが存在しています。そして会員の条件は20 ～ 30歳まで。もしここで座っている皆さん、20 ～ 30歳の方は、興味があればぜひ私たちローターアクトクラブに入って一緒に行動して地域に貢献しましょう。以上です。

○　姚さんが言ってた“親孝行について”には僕もすごく感心して、僕自身も生きていることがすごく楽しくて、親に生んでくれたことにすごく感謝していて、自分の誕生日に親にアップルパイを毎年作ろうと、結構前から続けているんですけれども。中国では、どういう親孝行をしているのかなということを気になって、質問したいなと思いました。

○　質問ありがとうございます。中国ではどう

いう親孝行をするのかというと、昔から中国には諺があります。『親がいる間には遠い所へは行かない。』ということです。なぜそうなのかというと、やはり親として一番幸せなことは目の前に自分の子どもがいて、子どもがどういう状況なのかを知りたい。そして一緒にいたい。別に子どもから親に何しても悪いことでも良いことでも、親は怒るわけないと思います。そして良いことをしたら喜んでくれるだけです。だから僕らは、親孝行というのは、できる限り親の傍にいて、それが一番の親孝行になります。今の日本では、結構転勤とか多くて仕事が忙しくなると思います。でも僕はこの前こういう話を聞きました。一人の若者が親から離れてすごく遠い所へ仕事に行きました。ある日、この子はお母さんと電話して気がついたことは、家に1年間に1回しか帰らなかったそうです。そして母親も60歳になって、1年間に1回しか帰らないので、1年に1回しか母親に会えないのです。今、人間の寿命が延びていますが、80歳と考えて、60歳の母親と会えるのは、これから20回しかないのです。そういう風に考えると、私たち長い人生の中で親と一緒にいる時間はすごく短いです。だから、親がいる間には親と一緒にいる時間を大切にした方がいいと思います。以上です。

○安行　親も含めてコミュニティ。人の繋がりの大切さということでしょうね。前田さんがおっしゃっていたように、良い点を知らせるにはどうしたらいいんでしょう?良いと思ってらっしゃる方はいらっしゃいますか?良い点に思っていない方には、どうしたら伝えることができるでしょうか?D班どうですか?誰でもいいです。人の良い所、日本の良い所、自分たちの良い所をどうやって伝えよう。僕、少しお昼に海沼先生とお話した時、今の日本の良い所を伝える人っていないよねという話をしていました。実は、みんなで分かってないことが伝えられていない。分かってきてることっていうのかな。それを説明する人がいないっていうのがあった。僕は前にカウンセラーミーティングの時に話をしたのは、日本の屋根というのはヨーロッパの屋根の形ではなく、日本の伝統的な様式を融合しています。これをテリムクリという。反り返るのと、凹凸するのと。これは日本のいい所で、全てのことを融合してきた独特の伝統形式である建築様式。こういうものを日本は持っているのに教えてない。それをただ単に僕らは見過ごしている。伝える人って大切だと思いますね。そういうためには人の大切さはたくさんあると思います、いろんな役目が。話は飛びますが、他にありませんか?

○　話は飛ばないんですけれど、すいません。自分たちの良いことをいろんなことに対して不安とか人って感じるじゃないですか。それって何が原因かというと、やっぱり自分と違うところが怖いっていうのが不安に思ったりすると思うんです。その逆で、喜びというのはその人と一緒の共通のものを見つけた時に喜びを感じる。そんなところをよりどんなところが違うか、どんなところが一緒なのかと明確に一つずつしていく。それが多ければ、多いほど絆っていうものは繋がっていくのかなと思います。それをする上で『あなたのこんなところ素晴らしいですね』と一つでも見つけることによって、向うがこの人ってこんな良いところがあるなということを見つけてくれるチャンスになるんじゃないかなと僕は思います。

○安行　この意見に対しては、どう?賛成だと思う人?これはそうじゃないと思う人?いろんな意見がある人?じゃあ、これもやりたい、やってほしいなと思う人?

○　伝えるということで議題になっているんですけど、伝えるものはあっても、触らないとどう伝えたらいいかと言ってて、その為に多分今こうやってA・B・C・Dの4班が例えば挨拶をするだとか、さっき言われたように対象がいないと始まらないことなので、挨拶をすることでその対象を作っていく。地域のコミュニティに入ることで、その対象となっていく対象を見つけていくというのが僕たちA・B・C・D班どの班も言ってたことじゃないのかなと思っているんですけれども。逆にじゃあロータリアンの方とか、さっきどこかでお話されて『触らないという風なものに対しては、どうしたらいいと思う』というのは最後に議題が飛ぶなら聞いておきたいと思って。お願いします。

○安行　いい質問していただきました。ロータリアンはめちゃくゃでと言いながらロータリアンは挨拶するんですよ。歌にもあるんです。今、いい質問してくれたんですよ。挨拶をしようと言ってくれたところはすごく最初の段階だと思いますよね。この挨拶ができるかどうかというところが本当に動機付けになっていくのだろうと思いますので、これは大切なポイントを指摘していただいたと思いますね。その点で少し深川先生から

○深川　挨拶のことで、一つの例を申し上げます。今から40年位前かな、あるテレビ会社が倒産寸前になったんです。もう会社の全体が冷え切って、空気が沈滞して、その時にあるタレントがそのテレビ会社に行ったら皆沈み込んでやっている。これはいけない。それでそのタレントは『おはよう運動』をやり出した。掃除婦のおばさんとかどこで会っても『おはよう、おはよう、おはよう』って声を掛けていった。そのうちにそれが段々と広がっていって、テレビ局全体に挨拶が広がっていってみんなが挨拶するようになった。それからその会社は活性化して結局また立ち直って倒産を免れたという話を私は昔聞いたことがある。いい話だなと。これは一人の人間のその『おはよう』って言い出したそれが全部に広がっていく、これ大事なことなんですね。こういうのも人間の絆っていうのが出ていく一つのきっかけになろうかと思います。それから同じように心の問題で、先程中国の方がおっしゃってた親孝行の問題でね、1年に1回しか会えない、ほとんど会う機会がない、だからある意味では日本は親孝行ができていないんではないかと聞こえたんですが、ずっとそばに親と一緒にいることが確かに親孝行として一番いい。だけれども、いろんな事情で離れなければならないこともある。母親と子ども、父親と子ども、親っていうものは子どもと離れれば離れるほどその子どもを思う心が強いし、子どもも親を思う心が非常に強いです。このことについて、涙を流すような物語を知っているんですが、今からしゃべり出すと話が長くなるので割愛します。

とにかく、そういうふうに離れているから親孝行の心が薄れるとか、そういう問題ではないんです。皆さん方は、おそらく経験なさってる。だから、お盆にしか墓参りに帰れない。たしかに、親には申し訳ないと思っているかもしれないけれど、親の方も一生懸命にやってくれたらいいと、いつも子どものことを思っているのが親であろうと。それと同じように、子どももいつもお母さん、お父さんのことを思って、そして一生懸命働いて、盆や暮れには帰ってくる。そのために離れているから会っている時に余計に心の絆が深まっていく。そういうこともあるということを忘れないでほしい。ですから、現象的に見えてる状態だけで幸せかどうか、孝行か不孝行かということは判断できない。問題は心の問題。親の心、息子の心、それから娘の心、心、その人たちが何を考えているということが

一番大事なことであって、これはロータリーでも、どこでも同じだと思いますからそのことだけを申し上げておきたいと思います。

○安行　はい。他に何かないですか?今、挨拶は大切な部分で入っていこうとであって、もう一つ挨拶はそれでも「おい」「おまえ」とかいう挨拶ではないですよね、絶対。そういうものではないですね。最後のD班なんかでは、日本料理作るのかな?「和敬」「和敬清寂」の部分でロータリーはやっぱり、挨拶するときにはその物事を心にしみてやってる。そういうことに対しても少しコメントもらいたい。実はロータリーはそういう態度で望んでいるということがわかる。和敬というのに入ってくる。

○深川　和敬ですね。先程、竹村さんかな?これは、茶席の論理を持ち出されましたね。茶席に入ったら万人平等だと。これ皆さんご存じだと思うんですが、お茶席には武士も入ってくるし大名も入ってくるし、それからお百姓さんも入ってくる。いろんな社会的な階層の人が入ってきます。しかし、一端茶席に入ったら完全平等の世界なんです。ですから、大名も武士も茶席に入る時には必ず腰の刀をぬいて丸腰で入ってきます。そして一端茶席に入ったら、お百姓さんも町人の商売人も大名も武士も全部平等、対等の立場にたって静かにお茶を喫する。そして去って行く。これを喫茶去といいます。これは実は茶席の論理。和敬と先ほどおっしゃったのは、そういうことを言って、そういう集いを作りたいというようなことで言われたんでありますが、実は茶席の論理というのは、ロータリークラブの論理そのものなんです。ロータリー自体もそうなんです。ロータリーも大会社の社長もいます。大病院の院長もいます。私みたいな一介の弁護士もいます。それから魚屋さんもいます。それから八百屋さんもいます。いろんな社会的な階層の人がロータリークラブ、一つのクラブに入ってきます。地域社会、或いは業界ではいろんな階層があって上下の区別があっても、一端ロータリークラブに入ったら完全平等体となるのです。ですから、ガバナーを終えたパストガバナーであろうが、今井先生のように国際ロータリーの理事であろうが、私みたいに一ロータリーアンであろうが完全平等。ですから今井先生やら私やら三木先生なんか、お互いの話は全く友だち様式で、上下の関係全くなし。だけど、それは上下の関係はないんだけど私達は今井先生のことを心から尊敬しているし、今井先生も私達のことを信頼してくださっている。そういう心の繋がりというのは、ロータリークラブであり、ロータリーと全体の組織であり、またこのライラの組織でもあります。ですから、ライラの皆さんも私達ロータリアンと完全平等、対等です。私たちも皆さん方を一切、下に見たりしません。だから対等にやってますから、そのことは分かっていただきたいと思います。

それと同じように茶席の論理というのは、まさにロータリークラブそのもの。それからロータリーの論理でもあります。だから、いろんなことで友達のように、みんなと話し合っていただいたらいい。雲の上の人とか、そんなふうに思っている人もいるかもしれないけれど、それは大間違いであります。そんな堅苦しいものではありません。単なる社交クラブでありますから、それだけちょっとコメントしたいと思います。

○安行　おわかりをいただけたと思います。我々は、あなた方に目上の方から、高いところから見るというようことは全くございません。対等で、あなた方からいろんな意見を聞いて、我々は成長しようと思っていますので、是非是非対等な部分でお付き合いいただきたいと思っております。そしたら、また戻ります。こうい

う所でみんな意見はないですか?

○　神戸の垂水というところから来ました尾崎と申します。今回、このバズセッションして、うちのも問題ですし他の班も問題出た『関係性が希薄になっている』ということで、これ僕自分のことなんですけれども、訳があってちょっと親が10年前からアメリカに住んでいて、実家でずっと10年前から一人暮らししていて、30年間ずっといてる家で、フロアの住民たちも30年間変わらずにずっと一緒の人なんです。挨拶とかしますし、関係性は持てていると思っていたんですけど、二年前に結婚しまして、それから今実家で奥さんと一緒に住んでいるんですけど、その際に甘えというか、挨拶に一緒に二人で行ってないんですよ。『一緒に住みます』っていうので。そういうのって自分から関係性を潰してしまっているというか、自分の気持ちがあれば『お願いします』と挨拶しておけばよかったんだなと。今、だから後悔していますし。家に帰ったら、遅ればせながら挨拶に行きたいと思いました。

○安行　それは、なぜ行けなかったの?

○　はい。甘えがあったんだと思います。多分、いつでも行けるという。そういう甘えがあったと思います。

○安行　他には、それについてどう思いますか?私もだとか、私はこうだとか。よろしいか?今の意見変えていいですか?はい。どうぞ。

○　すいません。私も愛媛から来ました大川と申します。先程、尾崎さんが言っていたお話を聞いていて、私も一番初めに発表されたメンバーが抱えるコミュニティ事情の話の一番初めに話された方の、不可視化された弱者というのがすごく気になっていて、弱者というと普通障害者とか高齢者とか、そういう方のことを思っていたんですけど、見えない弱者のことを彼は考えているんだなと思って。けど本当にこういう元気な体を持っていて全然周りからみたら何も問題がないんじゃないかというような感じの人でも、実は何かの問題を抱えているという、まあそれを言うとみんなそうなのかもしれないけど、それをもっと何か見つけていくという作業って、こちらから必要なのかなと。あと、自分も弱者、ちょっと問題を抱えているっていうのを発信していくことも大事なのかなと思いました。はい。ありがとうございます。

○安行　いいですか?今の。はい。

○　今を聞いて思ったんですけど。私はしてないんですけど、私の弟は結婚しているんですね。奥さんが子どもが生まれたら本当に24時間子どもと一緒で、働けなくて全く逃れられる時間もなくて、こんなに子育てが大変だとは思わなかったという話をしていて、私の弟と母に、うちの母はとっても近くに住んでいるんですけども。何かちょっと子育てとかしてるお母さんって、当たり前って思われているけど、そんなもんじゃないみたいな話をしていて、二人で何かしようという感じで、私の実家でノンナのお茶会っていうのをしているんですけど。ノンナっていうのは、イタリア語でおばあちゃんっていうんですけど、うちの母がおばあちゃんになって、月に2回、周りにいる子育て中のお母さんに声かけて集めて来てもらって、いつもお食事会をしたりとか、たとえば一人講師を呼んで今日はベビーマッサージの人ですとか、こんなのがあるんですけどとか、お茶をしたり、ご飯食べたりして悩みとかを話したりしてるんですけども、そういう小さいできることが、特に見えないところにはあるんじゃないかなと、今ふと

思いました。

○安行　やっぱり、人の繋がりというのは大切だということがあるんだろうと思いますけれども。たとえばC班が最初に言ってくれた『人の繋がることの大切さ』というのは、コミュニティの中で細かく地域と組織とネットワークをやってますよね。これはどっちかというと現象面が大切だろうと。それに対して割と心の問題を結論に結びつけている。ここの違いというのはどうだったんでしょうか?どっちがより大切だという結論に結びついたんでしょうか?どっちも大切なんでしょうか?もうちょっとわかりやすく言うと、こういうようなハードな面も要るのか？いや、やっぱり心の問題なのか？それはどちらを重きにおいているのか？まずC班から

○　松村と申します。結論から言いますと、両方不可欠ということですね。ハードとしてのコミュニティというのが僕らの共通の問題意識としては地域コミュニティとか、地域コミュニティは形骸化していて、例えば会社はコミュニティという代替物としてずっと戦後機能してきたんですけども、でも最近だとものすごい競争社会なので、成果を上げられない社員は、そのコミュニティに属することができない。学校もそうで、コミュニケーション能力がない人達っていうのは、コミュニケーション力がないってことで学校からもはじかれていく。ということで、地域コミュニティを代替するコミュニティとして組織コミュニティずっと機能をしていたんですけれども、グローバル化とかいろんな問題があって、会社とか学校とかそういう組織の中にも競争原理が持ち込まれて、そこから脱落していく人はどんどん脱落していく。その人たちは学校から排除されて、引きこもりになってしまったりする。引きこもってしまう人達はどんどん見えにくくなっている、というようなハード面の問題が非常に大きくあると思います。一方ですね、多分ここに集ったC班のメンバーはそれなりにこういう場に来させていただいたというある程度恵まれた存在であるという、我々は一人一人がこのセミナーを通じて気付きを得たわけですよね。そういうことで、改めて自分が置かれている立場を再認識してそれぞれのコミュニティに帰っていくことで、十二

者十二様の答えを出しました。なので、最後に意見を一つに集約して機能が大事、心が大事という結論を出すのではなくて。12人が12人、別々のコミュニティからやってきて、ここで気づきをして、それぞれまた12人が12人別々のコミュニティに帰っていって、4日前よりもさらに良くしていくというふうにしていこうという気づきを得たわけですね。すいません、もう一回最初に戻すと、結論として両方大事である。我々は既存のコミュニティを最大限利用しながら、新しい息吹を吹き込んでいく。という意味でこれからは新しい心を駆動させていきながらそれぞれのコミュニティに帰って行ければと思っております。

○安行　そうですね。A、B、C、Dはそれぞれみんな心の問題、現象よりもやっぱり心の問題だろうということを投げかけてくれているわけで、実はそれはみんな心の中の思いでは、物質的なもの要するにハード的なものも大切だとする上での結論だと思うので、それは十分わかると思います。両方大事だと思います。1880年くらいにドネリー社というところが電話帳を作ったんです。全米で初めて、全世界で初めて電話帳を作った。電話だけのハード面というのは、実際は役に立たない。それは、相手の電話番号と相手の住所が分かってこそ初めて電話の機能としての役目ができてくる。そこから始まったのがオノマトロギー。オノマトロギーというのは、姓名判断。姓名判断学の研究がものすごく盛んになった。これは違う面での文化を創造していったらいいことなんです。なぜかというと、ハードの面だけでは通用できない。そこから発生するところで人々は非常にいろんな面での文化を創造していく。そこに人の係わりがあったり、人との大切さがあったりそういう部分ができてくるわけで、だからハードな面だけでは絶対できない。それ以外にも人の心が必要になってくる。そこから初めてアルファベット順の名前、名簿、あるいは職業別、今の職業別の黄色のページのもあるでしょ。あれができ始めてきた。これが1880年にできたということですね。それも含めて、やっぱりハードの面も大事だろうということもあります。さて、これについて聞きたい、これについて反対とかこれについてどう思うとかありますか?はい。

○　神戸から来ました時任です。先程、劇で何かやりました。僕自身なんですけど、耳に障害がありまして補聴器を付けて生活しています。今は、マイクとかあるんで、付けてないんでけども。『挨拶が重要』ってこの班で決まったんですけれども、挨拶が重要って分かるんですけれども、僕自身耳が悪いので、周りから見ても分からないんですね。普通の体してるんで。障害がある方、見た目でわからない障害のある方に挨拶をする時にゼスチャーとかもありだと思うんですけども、具体的にどうしたらいいのかということを聴かせていただけたら嬉しいなと思っています。よろしくお願いします。

○　身体的不自由でそれが外見上全然普通に見える人に対してどのように挨拶したらいいのか、ということだったんですけれども、挨拶っていうのは『こんにちは』『おはよう』だとかさっき紹介されたことだと思うんですが、それって声だけのものじゃくて、たとえば歩きながら普通に隣にすれ違っていく人にこっち向きながらするんじゃなくて、一応顔を見て少し会釈して『こんにちは』とかってやるじゃないですか。そういう工夫っていうのかな、そういうのは一般的にやられているのでと思うんですけど。それでもやっぱり分かりにくかったり、もうちょっと明確な何かが欲しいと思われたりすることが多いんでしょうかね。

○　ありがとうございます。顔を見てそうされると、分かるんですけれども。一対一だったら大丈夫なんですよ。こんなに大勢居られたら、後ろの方かな?とか、横から来られても分からないことが多かったので僕らみたいな身体障害者自身も、ちょっと注意してやるべきではないかなと今、感じました。ありがとうございます。

○　兵庫県伊丹市から来た田中大貴と言います。挨拶なんですけど、僕はこのライラに、伊丹市から小豆島に来て、この人ライラの人かな?どうしよう、どうしようと思って、なかなか声も掛けずらかったんですけれども、ここの余島に来て、ロータリアンの方が挨拶してくれることによって、こっちからも『こんにちは』『お願いします』と挨拶ができるようになったんですけど、実際挨拶をしようって掲げてるんですけども、誰に挨拶をするべきなんだろうかなと僕は思うんです。僕、コンビニでバイトしてるんですけれども、さっきも中野くんが言ってたみたいに中身が伴っていないと挨拶って意味がないじゃないですか。例えば、コンビニにお客様が来ても『いらっしゃいませ』と言っても挨拶として成立しないと思うんですよ。やっぱり『ありがとうございます。』と、そういう心が伴っていないと実がないと思うんです。挨拶を誰にどこまでの範囲ですればいいのかという。もちろん近所の毎朝犬を散歩しているおばちゃんに『おはようございます。犬かわいいですね』とそういう挨拶くらいはするんですけれども。あとサークルの友だちとか。大学の講義で初めて横に座った女の子に『こんにちは』と言ったら、何か変な奴ですし。挨拶を始めようというのは、どういう所からはじめていけばいいのかなと思って。例えば自分がどういうコミュニティに属しているのかと認識するのが難しいなというのは思いました。以上です。

○安行　はい。これについてはどうですか?

○　挨拶の件なんですけれども、私の班では人が少なくなればなるほど挨拶はできるけれど、たとえば大都会にいる時に大都会ほど挨拶が減るということがありまして、実際に感情がないとかじゃなくて現実的に不可能なんですね。挨拶を場面場面で使い分けていく必要がありまして。たとえば、ライラでこの島に入ってきてこれからお世話になっていくことは分かっているんですから、そういう意味も込めて視界に入った人ぐらいは会釈しながらしていけばいいんだと思うんですけれども、別に横にいる女性にも講義で会ったら横に座るんだったら、挨拶じゃなくても『失礼します』とかでいいと思いますし、そういう風に考えれば難しくないと思います。以上です。

○安行　はい、ありがとうございます。他にはないですか?

○　基本的に誰に対しても別に挨拶してもいいと僕は思うんですね。コミュニティの話なんですけれど。コミュニティというと何かこう枠組みをやっぱり想像するじゃないですか。枠組みを想像すると、自分の内側と外側ということで区別するっていう感覚が生まれてくると思うんですけど。挨拶できない時っていったら、隣に女性が座っていて挨拶したら変な奴って思われるんではないかっていうのは、ある意味その人自分から排除しているっていう風な感覚なのかなと思うんですね。恐れとかそういうことで。だから、気に入っていたら絶対内側入るでしょ。かわいいなって思ったら挨拶するじゃないですか。だから、そのむしろ自分との差との境目、境界線をどれだけ取っ払えるかとか大きくできるかという、そういう感覚を持つことによって挨拶する人間が一人、二人って増えていくんで

はないかなと僕は思うんですね。

○　高松市から来ました谷口です。僕らの班は挨拶を大事にしようっていって、ちょっと勘違いはしてないと思うんですが、挨拶して終わりじゃないんですからね。挨拶して、よし挨拶したぞ、良かった、良かったじゃあないですからね。挨拶をして、それで仲良くなってコミュニティ力を強くすることが目的です。だから横の人に話して変に思われたらどうしようって話をしなかったらそれで終わりですけど、話をすることで仲良くなることが目的ですから。挨拶、目を合わせない挨拶とか誰にしてもいいと思います。時ちゃんが言ってくれた何の挨拶が響いたかというと、駅の改札員の人に挨拶したらいいじゃない、みたいな発言。自分の行動範囲にいる人は全部したらいいと思います。挨拶って難しいと思うんですけど、慣れることが必要で、多分挨拶に慣れていない若者も多いと思います。慣れたら、こういうところでお話をするのも、僕も緊張していますけれど、慣れていい話ができるようになってきますし、慣れていくってことの一つとして、人に慣れていくっていうことの一つとしての挨拶で、大きな火を燃やすために薪を集めるのと同じように、大きなコミュニティを作りたいから挨拶をしていこうみたいな、下手な例えですけど。そういうことが大事なのかなと思いました。あと、笑顔で挨拶したらいいと思います。はい、以上です

○　いろいろ意見が出ているんですけれども。年齢的なものもあるんだと思うんですけれど、挨拶をして、これしなかった方がよかったのかな?と思うパターンもあると思うんです。だから、それは失敗をすればいいと思うんです。それで、こういう時はこういう風にした方がいいんだなと失敗によって学ぶことがあるから、そこで失敗が生まれなかったらそのことがどうだったかと自分の中で判断もできないから、その適材適所を自分の中で覚えていくために失敗をするってことが重要なんじゃないのかなと思います。

○安行　はい。ありがとうございます。みんなの意見の中では、いろんな提案をいただいたところの導入として挨拶だ大切であろうとい

うことでして、それは最初のきっかけには大変必要だろうと思います。心理学的には“付き合う”というは、角を付き合わせるという意味があります。“かど“っていうか”つの“っていう。人とコミュニケーションをとる時には、角同志がぶつかり合うということ。だから多様な人達の価値観をどう認めてやってあげるかがコミュニケーションの始まり。それを認めて、自分でOKを出すかどうかにかかるっていうのが最初のコミュニケーションに使う付き合い方の最初だろうといわれています。

もう一つは、信頼と信用は違うということがあります。信用金庫でお金を貸してもらおうとしたら、どこの馬の骨ともわからない人にお金を貸してあげられませんよ、何かお金を貸す引き合いになる物もらえますか?だから担保を要求される。信用というのは担保を取ります。信頼関係を築くと担保は取らない。親に、兄弟に、親友にどんなことがあっても『なぜ?』とは疑わない。『何かがあったんだろうなあ』ただそれだけです。信頼関係というのは、そういう関係を築くということなんです。担保をとらない。担保をとるから裏切ったとか裏切られたとか、これだけやってあげたのにということになってしまう。人と付き合うコミュニケーションの始まりは信頼関係を結ぶということです。

B班は大変面白いことを書いてもらいました。『結局、チャンスは平等と不平等がある』これ面白いんですよ。良い面でチャンスは平等にあるんだと、悪い面ではチャンスは不平等なんだと。相反することで良い面と悪い面を書いている。B班教えてください。チャンスは平等だ、チャンスは不平等だ。今の世の中どっちなのか。どっちもあるのか?

○　チャンスは平等だということについて説明したいと思います。たとえば今、お金も裕福になってそこそこの中流地位にいて、何をしようかとなったら、資格とったりして仕事を選べたり、情報を得て自分がやりたいことをやろうと思ったらできる。だから、いろんなチャンスがあるよっていう意味でチャンスはあるよっていう意味です。以上です。

○　はい。不平等と書かせていただいたんですけれども、日本ではそれほど見られていないのですが、たとえば他の国に行ったら、ずっと一生ゴミ拾いの職のままで一生終わったり、そういう職業的にそういう職業の親のもとで生まれたらずっとそういう職業、たとえば掃除の職業だったらずっと掃除の職業をしていく一生を終えていくような気がして、上に上がっていくチャンスは資本主義の方がほんとはないのかなと思ったりもしました。

○　はい。不平等の方の補足なんですけれども日本社会にも、たとえばホームレスの方とかっていうのは家がないので就職される時とか不便、大変ご苦労されているところもあると思うんです。それは、ホームレスになったおまえが悪いんじゃないかというところもあるんですけれども、何か違う外的な要因でそういうこと7になったという可能性もありますし、そういう面では日本社会でも不平等なところが見られるとことがあると思います。すいません。以上です。

○　チャンスは平等の方の補足なんですけれども、ぶっちゃけチャンスの量的には不平等だと思うんですけれども0か1かというと日本の社会では平等だと思います。結局何かというと、頑張れば成果が認められる社会に僕たちは生きているんではないかと僕らは思うんで、そういう意味で平等かなということを僕らは書きました。

○安行　これ面白いですよね。『格差社会というのは、まずこれでいいのか』ってC班も書い

ているし。多分今の社会の問題を改善するのにはそういうことが重要だろうし、D班でも北欧とか言ってくれたね。そういうところでチャンスがあるようだけど不平等だと感じてるっていうのは両方あると思う。僕は昨日の午前中の講義にはちょっと外国から帰ってきたところだから来られなかったんでよく聞かなかったんですけれども、リベラリズムとリベタリアズムがあるということをさっき言ってましたよね、D班が。リベラリズムというのは自由主義っていうのがあるんですけれども、これはスタートラインを一緒にします。簡単にスタートラインはゼロにします。スタートラインをゼロにして社会構成をゼロにするから貧者とか困っている人たちを政府が或いは大きな政府が保障しないといけない。スタートラインを一緒にしましょう。これはリベラリズムっていいます。でもリベタリアリズムというのは、個人の自由を前提に起きます。だから、たとえばビル・ゲイツやマイケル・ジョーダンが儲けたけれども、それに対する税金をとるのはよくないと思っている人、これがリベタリアリズムの人たち。リベラリズムの人たちは、そうじゃなくて、そういう人たちからはたくさんとればいいと思っているわけ。その違いが自由主義と新自由主義の違いだと出てくるんだけども、そこはチャンスが平等か不平等でないかということがあると思うので。

今アメリカで問題になっていたのは「Affirmative action」黒人の人たちが多分昔は差別を受けていたから、だから今は大学に入るチャンスをあげようということで、点数のかさ上げをしちゃう。平等をゼロにしてしまう。そこには大きな議論が起こった。これ良いのか悪いのか？過去のことを問題にして今はゼロにしてもいいのか？じゃあ努力してやった人はどうする？今の資本主義の社会では。それはどうなのかと言われると北欧型になるかもしれない、というのは、D班が言ったこと。でもD班の北欧型社会というのは本当に良いのかどうかというのは、今まだわからない。実験をしている最中。北欧で問題になっているのは、高い税率。60%ぐらいとられるのかなあそこは。働かない若い人たちが多い。大学で同棲すれば全部ただになる。移民の問題が出てきている。それをどうするのかっていう問題が出てくる。でも良い社会だろうと思っているし、今もそれでやっている。できている。でもそれが本来どうなのかというのは、これから議論が出てくるだろうと思う。みんなの選択肢をみて考えなければならないことはたくさんあると思います。

それでたとえばB班に聞きたいんですけどもロータリアンがやろうとしていることを君達は応援してくれるの?あるいは君達がやろうとしていることにロータリアンは応援してくれるのか？どっちですか?ロータリアンがやろうとしていることに君たちが賛同するの?あなたたちがやろうとしていることにロータリアンが一緒にやらないかというのか、どっち?みんなも考えて欲しい。

○　今この問題はうちのローターアクトクラブも直面している問題です。だからこの問題について、自分の意見を言いたいです。別にどっちがどちらの活動に賛同するのではなくて、これ一緒に協力することだと思います。なぜならロータリアンのやることは、簡単に言うと経済面では私たち若者にはない部分ですから、やりたくても、一回何十万出せと言われても出せないですから。でも逆に言うと私達のやりたいことは自分の能力のできる範囲で、多分掃除とか体力的な仕事になるわけですから、ロータリアンの方は歳をとっている方もいるし体力労働できない場合もあります。だからこういう時は、うまくバランスをとって一緒に協力するのは一番大事だと思います。別にどっちがどっちに依頼するわけではないです。以上です。

○安行　さすが、ローターアクトの問題点を指摘しています。他にはどう?意見ない?

○　さっきチャンスの話から支援を受けるのか、支援を要請するのかっていう話になったんですけど、支援を受けるのではなく一緒にすればいいじゃないかとおっしゃって、その前にチャンスの話があったんですけど、チャンスの平等、不平等ってよく言うんですけれども、チャンスは何を比べて平等とか不平等って言っているのかなと。平等とか不平等じゃないと思うんですけれどもチャンスっていうのは。たとえばゼロの人は、いないと思うんですよ。チャンスを与えるとか言って、そういういろんなものを与えるよって言っていって、与えられる側がいて、その中の人たちもチャンスを受ける人、だから掴みに行く人とそうじゃない人がいてっていうふうに、何ていうのかな、チャンスっていうのは平等、不平等じゃなくて、元々みんな生まれも違うし、育ちも違うし、その中で自分が持っているもので、別に比べるものじゃないと思うんですけども。皆さんはどう思われますかね?

○　また田中です。僕はチャンスっていうのは、今置かれている現状をチャンスと思うか思わないかはその人次第だと思います。例えばTPPの問題だったら、ある人にとってはチャンスだと思う人もいれば、また違う農家の人でもたとえばチャンスだと思う人もいるし、これはピンチだと思う人もいると思います。このライラのセミナーも『嫌だなあ～』と思っている人もいれば『これはチャンスだ』と思う人もいると思います。僕はチャンスが平等か不平等かっていうことよりも、多分その人の主体性にかかってる問題だと思います。以上です。

○安行　面白いこと言うんだね。主体で動くかどうかでチャンスのタイミングが違うということ。それ、面白い。

○　チャンスなんですけれども、チャンスを持つ権利っていうのは全員が持っていると思うんですよ。仮にチャンスを持つ権利がないのは、それは不平等だと思うんですね。今、おっしゃったように本人の捉え方次第だと思うんですよ、全ては。

○　僕は東京でも修行していたことがあるんですが、その頃に、生きている頃にはお会いできなかったんですけれども、帝国ホテルの村上信夫さんていう、東京オリンピックの時に総料理長をやられた料理長がいたんですけれども、その方が『チャンスっていうのは、練って待ちなさい。』ということをずっと言っていたんですね。それを僕がいたお店の料理長も直接交流があったので、それを僕達に教授していただいたんですけれども。さっきも言ったように、自分がこれをチャンスと思うか？それまでに自分が思いを巡らせていろいろなものにアンテナを立てるということもそうだと思うんですけれども、そういったことを自分が普段から考えているからこそ、それがチャンスであり、ふってきたときに掴むことができる。だから僕料理人として修行していく中で、今やっていることの次を考えながら、次に僕がああなったときにはどうしようということを思いながら考えることでチャンスの巡ってくる回数が変わってくるのではと僕は思います。もちろん、生まれ育った環境も加味してくるとは思うんですけど、行動では変わってくると思います。

○安行　そうだと思いますね。その地域によっても、年齢によってもいろんな所でも違う。でもチャンスに巡り合ったら、A班が言ったように、今までとは違う自分を見つけることができるかもしれない。B班の、チャンスが不平等

で、さらに良くないことにコミュニケーションがとれていない、これができるかもしれない。またC班が言った、こういう事情というのは克服できるかもしれない。いろんな所でチャンスがあるかもしれない。そのチャンスをどう見つけるかどうかっていうのは、それぞれによって違うかもしれない。

このライラの狙っているところは、あなたたちに勇気づけを与えようと思っている。指導者として、これから人生を歩んで引っぱっていく人達に勇気づけを与えようと思っております。その勇気づけというのは、ただ頑張れよと言うんではない。リスクを背負う能力を与えてあげるということです。分かち合うということです。人と協力する力を与えるということです。困難を克服する努力がいるってことを教えること。これが勇気づけるということだと僕は思う。

もちろんロータリーの精神っていうのは、先ほど深川先生がおっしゃったように、対等の人同士で話し合おう。対等の人達と一緒に協力しよう。対等の人達として困難を克服しようよ、今直面している問題について、あなた達と我々と一緒にやろう。そういうことをやろうと思って、我々はあなたたちと共に4日間を過ごそうとそういうことです。人と協力しようよ。12人あるいは14人、お父さんとお母さんと含めて班のみんなで協力しようよと4日間過ごしたんじゃないですか。みんなと力を合わせて、この難しい発表をどうするのか？困難を克服しようよと努力してきた。人と話をする、人の前で話をする、私はあがって話はできない、そういうリスクを背負う。我々は、勇気づけとはそういうリスクを背負うことだよと考えています。

リスクは避けられない。必ず失敗もするだろう。それを乗り越えようという努力、能力をみんなと一緒に分かち合おうと。俺がいるから大丈夫だよ。私がいるから大丈夫だよ。そうやって人の痛みが分かって、人と一緒に乗り越えていこうというそこが勇気づけるということ。そうすると、おそらく次の世代のあなた達が何かできることが残せるのかもしれない。我々はそれを望んで、あなたたちと一緒にやっていこうと思っている。そういうことが多分、このライラの狙いではないだろうかと思っている。

今から28年前です。僕はライラリアンでした。第6回。このライラに来て、私は奉仕とは何かということを教えられました。その時の深川先生も若い、今井先生も若い、僕のその時のお父さんが今ライラの委員会で一緒。いまだに一緒。そして私は大変な人達と知り合いになって、大変な人達と一緒に、沢山の人達と一緒に勇気をもらいましたし、共に活動してきた、というのが今の私。何とかして皆さんにもこのライラの大切さを分かっていただきたい。

今日、みんなに言いたいんですけれども、A・B・C・D各班の答えはそれぞれ正解の答えを書いてもらっています。私達ロータリーのメンバーは、思わぬところでこういう問題点があるんだなと気が付いたり、実はこういう解決策があるんだろうと思ったし、実はこういう違った観点から我々は現状を見ているなあと思ったりしました。だから、全てが正しい回答です。これは必ず報告書として、全部掲載させていただきたいと思います。

これを基として例えば来年35回に来る人達にどうしようかと我々は考える。だからいろんな栄養素になってます、我々の。全ての人達に聞こうと思っても聞けないことがたくさんあります。でもこの心は僕らは大変大切にしようと思ってます。よくよくこういう発表をしていただいたし、いろんな指摘をしていただいたということを感謝を申し上げたいと思います。もう時間は本当にないんです。いくらでも話をしたいんですけれども、多分これから今日のカウンシルファイヤーの説明をしていかなければならないと思います。このフォーラムを胸において、

そして最後の静かな夜を過ごしたい。そしてキャビンに帰ると、最後の夜を心に染み入るまで残していただきたい。思い入れを。少し時間が足りなくなってきました。一言、深川先生にコメントいただいて閉めようと思っております。

○深川　安行さんが素晴らしい締めの言葉を言っていただいたんで、もう何も言うことありませんが、ただ一言だけ申し上げておきます。人間というものは生まれましてからこの世を去る時に至るまで、たくさんの人と出会います。この出会いを大切にしていただきたい。そしてロータリーではこの出会いを保証するということをロータリーの綱領に掲げております。それぞれ一人ひとりがお互いに出会いを大切にしようと。なぜかと言いますとね、たくさんの人と出会う。その中には、悪い人と出会うことも分からないけれども、素晴らしい人に出会うかもしれない。そして、自分の一生をかけるような本当の自分の師匠に出会うかもしれない。そういう師匠のことを『正師』。正しいに師匠の師と書いて正師と言います。ことわざに『正師にまみゆること難（かた）し』、本当の自分の一生かけた信頼できる師匠、数少ない何人かかもしれない人に出会うことは非常に難しいよと言っております。せっかく沢山の人に出会いながら、自分に正師を見抜く力がないばかりに通り過ぎてしまっている。そのために先ほど言われたチャンスがどんどんどんどん逃げていく。この人は素晴らしいという見抜く眼力を、能力を身につけなければ、せっかくきたチャンスをつかむことができないのです。

いろんな職業の人が、いろんな立場で、いろんな能力を持った人達が集まっているのがロータリーなんです。まさに、人材の宝庫なんです。ですから、皆さんもロータリアンに会ったら、どんな素晴らしい人がいるかもしれない。そういうことを心に留めて、良い人に出会ったらまさにそれを掴むチャンスをつかんでください。それは、自分の一生を支配します。ある人に出会ったために自分の人生が変わっていくかもしれない。

例えば、先ほど安行さんが言いましたね。ここへ来たために、それからやがてロータリアンになった。そしてその前にもあの人はね、禅宗のお坊さんでしょ。しかも曹洞宗の永平寺の専門道場で鍛え上げた筋金入りの坊さんなんです。あんな馬鹿なことばかり言ってますけど、偉いんですよね。そういうこと、奥目にも出さないところがまた偉い。だから、こういう人物を見抜けないと、ああ、愉快な人がいるぐらいに見過ごして過ぎて行く。

私はたとえば、500人、600人を相手に講演をしていても、そういう恐れをいつも持っていますから、いつも全ての人に対して謙虚に自分を律していく、これが大事だと思います。これから皆さん方、地域に帰られていろんなことがあります。今夜最後の今井先生のお話がまた素晴らしいですからね。それを聞いて皆さん方の心の中にポッと暖かい火が灯るかもしれない。あるいは灯らないかもしれない。1年後に灯るかもしれない。10年後かもしれない。永久に灯らないかもしれない。しかし、灯るか灯らないかに拘わらず、ロータリアンは皆様方にやがて育って欲しいという種を播くためにこのライラセミナーを続けております。そのことは忘れないでこれからの一生を送って頂きたい。そのことだけ申し上げて、挨拶にかえさせて頂きます。ありがとうございます。

○安行　長時間ありがとうございました。僕は坊主なんですけれども、今井先生に引っぱられて、僕はずっとYMCAにいます。YMCAの役員でおります。お前は坊主をしなくていいからYMCAに来なさいと、若い時からYMCAに引っぱられました。次の職業は牧師かなあと

思っております。それでは、ありがとうございました。

ではお互いに自画自賛、あるいは人の班の栄誉を願って拍手でもって終わりたいと思います。

『拍手』

はい、ありがとうございました。では、黒田委員長より夜のカウンシルファイヤーの説明をします。カウンシルファイヤーは普通のキャンプファイヤーではありません。みんなで騒いでやろうというのではなく、今日までのことを心に噛みしめて、黙ってその場に臨みます。だから、自分の思い入れをもう一回繰り返してするのがカウンシルファイヤー。一体、僕は何を過ごしてきたのかなあ?いい日だったなあとか、あるいは良い友だちと出会えたなあ、これから一生の友だちになるなあ、と、そういうこと自分で思って、話をしないで、カウンシルファイヤーという場に臨みます。いつも子ども達がやっているボーンファイヤーとは違います。そこをまず理解していただいて説明を受けてください。

○黒田　それでは、カウンシルファイヤーについて、集合時間とかそういった説明しておきます。この後6時くらいから食事に入ってもらいます。それで、カウンシルファイヤーそのものは、７時から始めます。集合場所なんですけれども、7時より少し前くらいにインフォメーションセンターの前に全員集まってください。基本的に班別に集まっていただきたいと思います。その時に歌集、この間最初の日にお渡しした歌集がありますね。あれを、全部覚えている人はいいんですけれども、覚えていない方は歌集を持ってきてください。カウンシルファイヤーの内容そのものは、百聞は一見にしかずで、今説明ありましたけれども、実際に体験していただくまで特に説明はしませんが、今年はやり方といたしましてローソクを使います。この部屋の中でローソクを使うことになります。ローソクを全く何もなく持っていると熱くなりますから、こういう物を一人一本ずつ差し上げます。ここに釘が出ていて、ローソクを立てるようにできてます。この銀色のアルミ箔の部分はロウがこぼれないようにと、そこまでは考えております。釘でケガしないように気をつけてください。

火とかライターとかは、こちらで用意しますから、その時に順次できるようにしておきます。これを、今どの時点でお渡しするか決まってないんですけれども、受講生には、１人１本お渡しします。ロータリアンの方については、実は数が足りないものですから、足りない方に関しましては、こういうアルミ箔をお渡しします。手に非常に自信のある方は、このまま持っていただいていいんですけれども、多分つらい思いをすると思いますから、適当にロウがこぼれない程度に包んでいただいて、これは基本的には手を守るっていう意味なんですけれども、この部屋を汚したくないっていうもう一つの重要な目的もありますから、できればこういう風にこぼれないように持ってください。ただ、あんまり傾けると結局意味がなくなりますから、持ち方にも注意していただきたいと思います。

それと、カウンシルファイヤーのもう一つの大きな慣習なんですけれども、こういう紙、付箋を皆さんに1枚ずつお渡しします。そこへ自分の気持ちなり、どんなことを書いてもかまわないんですけども。皆さんが入って来られたら、椅子が丸く並べられていて、真ん中に箱を用意してありますので、そこに自分の思いを書いた紙を入れていただきます。それでそれを燃やしたりするんですけれども、またその時に説明します。あとは、終わるときにランタンがありまして、そこへ班ごとにランタンに火を入れて、その火を部屋へ持って行ってもらいます。それが９時頃かな?それからキャビンタイムがありますから、その時に置いておいてください。だいたい概要はそういうことです。

カウンシルファイヤー

元国際ロータリー理事・パストガバナー（2680地区）
RYLAセミナー顧問
今井　鎮雄（神戸西RC）

3月末のたいへん忙しい時期に、ロータリアンが時間を割いて皆さんと一緒に集まろうとするのはなぜか。“平和な世界を創りたい”というロータリーの願いを皆さんに伝えたいからです。それは、私達の時代には達成できないでしょう。次の世代の人にもその次の世代にも取り組んでもらわねばならない課題です。国と国との間の問題を解決するには国連で話し合うという方法はありますが、自国の国益を考えた駆け引きがあってなかなかうまく機能しません。

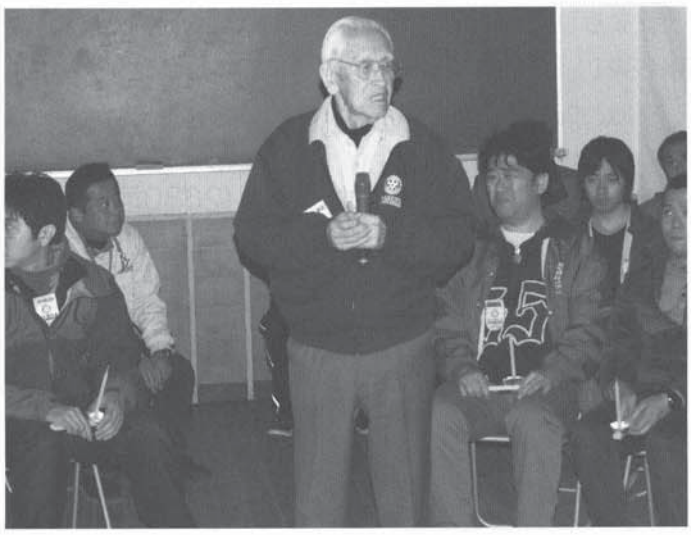
1905年2月、シカゴの街に4人の若い実業家が集まり、互いに分かち合えるものは何だろうと考えるところからロータリークラブが始まりました。そして1909年、地域の人達のためにと、シカゴの街に公衆トイレを作ったのがロータリーの最初の社会奉仕（コミュニティ・サービス）と言われます。そういうことに取り組むグループにあなたも参加しませんかと呼びかけて、現在、世界には120万の仲間がいます。

ロータリーは、悲惨な状況にある子ども達のために何ができるだろうとか、世界からポリオをなくそうと考えながら、それぞれの地域や国で活動を続けています。そのような活動のために世界中のロータリアンが国を超え、手をとり合って協力をしています。けれど私達だけでは手に負えない。協力してくれる人を探そう。次の新しい社会を創るのは若い人達だから、若い世代に加わってもらおう。その人達と時間を共に過ごしてロータリーの思いを伝えよう。そういう願いのもとにＲＹＬＡセミナーを続けています。

皆さんの地域にも先輩ライラリアンがいらっしゃると思います。その人達と一緒に、地域のロータリアンとも協力し合って“みんなで平和な世界を築こう”というメッセージを地域へ伝えてください。地域の中の一人ひとりが平和を願い、その願いが地域から地域へと広がっていけば、世界の平和へ近づけると思いませんか。私はロータリアンとして、また一個人として、あなた方若い人達に世界の未来を頼みますよと言いたいのです。“ロータリーの志を引き継ごう”と言ってくれる青年が1人でも多く現れ、その人達が自分のコミュニティで、また世界のどこかで、ＲＹＬＡで得たことを活かしてくれるよう願っています。

このカウンシル・ファイヤーは、ＲＹＬＡの第1回目から続いています。カウンセラーの皆さんは、この火をご自分の班の一人ひとりに渡して下さい。真っ暗だったけれど、見て下さい。みんなの顔がよく見えるでしょう。小さな明かりでも、これだけの人が灯したら皆が照らし出されますね。コミュニティを照らすのは、決して大きなサーチライトでなくていいんです。この火は消えますが、ライラリアンの皆さんの心の中に今日の決意と情熱が光となって灯り続けることを願っています。

カウンシル
ファイヤー



講義 3

元国際ロータリー理事・パストガバナー(2680地区)
RYLAセミナー顧問
今井　鎮雄 (神戸西RC)

PROFILE

[略歴]

1980～1981年	RI第2680地区ガバナー
1982～1983年	国際協議会グループリーダー
1984～1989年	国際ロータリー青少年委員
1995～1997年	国際ロータリー理事
1999～2000年	国際ロータリー RYLA委員
2003～2008年	ポリオ・プラス・パートナーグループ委員長補佐
	メジャードナー、米山功労者

[主な役職]

四国4県青年団連絡協議会会長
愛媛県青少年団体連絡協議会会長
愛媛県社会教育委員
愛媛県青少年保護審議会委員等を歴任

今日は講義というより、あなた方若い皆さんに考えていただきたいことをいくつか提起し、いまロータリーが何に取り組んでいるかについてお話します。

まず、新しい時代とはどんな時代なのか。昨日は、現在の課題とそれに対して何をすればいいのかを考えました。これからはあなた方が世界を担う時代になる。けれど、それは今すぐじゃない。新しい世界をつくるために、近い将来どのような変化が起きるのかを予測し、その変化を念頭において、では、いま何をすればいいのかを考えてください。

人類は進歩したのか

昨日の野田先生のお話は参考になりましたね。あの時代から今までにいろんな発見があり、発明がされて、現在は情報化時代と言われる時代になった。1980年にアルビン・トフラーが『第三の波』という本を書きました。第一の波は農業革命。人類の祖先は植物や果物や魚など、食糧を求めて移動していましたが、種を捨てるとそこから同じ植物が生えてくることに気が付いた。人間は定住し、種を播いて植物を育て、グループを作って生活するようになります。この農耕中心の社会は現在まで続いています。第二の波は産業革命。18世紀後半にイギリスで産業革命が起こり、産業、経済が発達します。蒸気機関で大きな船や汽車を走らせることができるようになり、交通網が整っていきます。第三の波は、1980年代くらいから始まった「情報革命」。情報化社会とも脱工業化社会とも呼ばれますが、インフォメーション・テクノロジーを中心に新しい文化が生まれてきた。日本でお金を振り込んだらロンドンで受け取れる、そういうシステムの発展が世界経済の仕組みを変え、金融資本主義への移行を加速させました。

2010年12月にチュニジアで起きた「ジャスミン革命」は、2011年には人間の権利や自由を

求めて「アラブの春」と言われる反政府運動というか暴動が中東や北アフリカへ一挙に広がりました。いくつかの国で政権が倒れ、リビアのカダフィ大佐は民衆に殺され、エジプトのムバラク大統領は、人民を抑圧したというので刑務所に入っているということです。今はシリアのアサド大統領がさかんに責められていますね。

2008年のリーマン・ショックで世界的な金融危機が起きて、いまもその影響を引きずっています。アメリカでも失業者が増え、昨年秋、ニューヨークでは人々が「1%の人間が米国の富の99%を握っている」と言って、富める者の象徴であるウォール・ストリートを占拠した「静かなデモ」は、アメリカ全体へ広がりました。

こういう運動がなぜ一挙に広がったかというと、インターネットやツイッターやフェイスブックで人々の間に一斉に呼びかけの情報が流れたからです。ロータリーでも、若者はフェイスブックやツイッターでコミュニケートする、ロータリーの情報もそれで発信しないと若者には届かない、と言っています。

かつて日本が経済的に優位にあったときは、世界へ向けていろんな情報を発信することができました。けれど、経済状態が悪くなったこの頃は決してそうではない。私たちの国をもう一度作り直すために、これまでの歩みの延長上で新しい社会を考えてはだめです。

未来を見よう、今を捉えよう

今年のＲＹＬＡのテーマは2670地区がつけてくださったのですが、コミュニティについて考えようということです。

まず、日本について考えると、日本はかつて第二次大戦に負けて焼け野が原になりましたが、経済的には今のように豊かになった。そして、超高齢社会を迎えようとしています。100歳になると、市長さんとか町長さんが「ご長寿おめでとうございます」と言ってお祝い状と記念品を届けてくださるそうです。日本の100歳以上の高齢者は、1989（平成元）年は3千人、1998（平成10）年は1万人、昨年2001（平成23）年9月は4万7千7百人。

1921年（大正10）の平均寿命は、女の人は43.22歳で、男の人は42.2歳。それが毎年延びてゆきます。2010年で、女の人は86.39歳、男の人は79.64歳ですね。高齢者の健康については、65歳以上の人の約8割が、自分は健康状態がよい、あるいは、私はまだ若い、と思っている。65歳以上の女性で、オシャレをしたいという人は70%、男の人でも47.9%。

昔は長寿の人の多い国は、理想でしたね。100歳まで生きるなんて考えられなかった。100歳ですか、おめでとうございます、と言葉だけでなく、高齢者の人たちが安心して生活できる社会になっているかどうかが問題です。

昨日、皆さんのお話の中で、土庄の人が、土庄はだんだん過疎地になっていくと話してくれました。過疎地になるとどうなるか。例えば、鉄道路線は人口が減少した地域で採算がとれなくなると廃線になります。過疎地の交通の便はますます悪くなり、しまいに絶縁都市になっていくわけです。すでにこのような減少は農村でも都市部でも、日本のあちこちに現れています。それではどうしたらいいのか。次の新しい社会の青写真を描くのは若者の役目です。暮らしは今の延長のようにはいかない。

日本は人口の年齢構成が変わってくる。もう20年すると、リタイアしている人が40%、働く人が50%。働く人たちにはあらゆる面で重荷がかかることになるでしょうね。そして少子高齢化ですから、あなた方を支えてくれる人たちの数は減ってきます。ですから、高齢者の人たちとうまくバランスをとりながらやっていかなくちゃならない。この状態は20～30年位は続くでしょう。

会社で働く人は65歳でリタイア、これから

は悠々自適でゴルフと園芸が私のライフ・ワークなんていうけれど、つまり元気なんですよ。肉体的には現役時代と変わらないくらい元気な方が多い。年配の人は男の人も女の人も「もう年だから」なんていうけれど、本当は「私、元気よ」と言いたいんです。全ての高齢者が認知症になったり、足が悪くなるということではありません。では、その元気な人たちにはどんな社会的役割があるのか。若者はどんな役割を担うのか。それをお互いに共通理解しなきゃならない。そのためには、今からそういう仕組みになるような方向を考えなきゃだめです。

日本学術会議が出した『長寿社会の課題と可能性』という提言があって、これをまとめたのは秋山弘子さんという東京大学高齢社会総合研究機構の方です。これからの社会を分析してみよう。高齢者が増えるということは、介護が必要な人が増える。その一方で、元気な高齢者も増えるだろう。その元気な高齢者が社会の中でなんらかの役割をとるようにならないと、若い人たちだけに全部負わせることはできなくなる。今までは12人で1人の高齢者を養っていたけれど、これからは1人を3人で養わなければならない。大変ですよ。その準備がありますか。そのシェアの仕方をどうすればいいのか。これは本当なら政治家の仕事ですけれど、いま大学が『長寿社会の課題と可能性』を考えないと日本はたちゆかなくなるという危機感があります。その危機感を、あなた方が共有しないといけないんです。今から30年後に60歳以上になる人、手を挙げてください。はい、あなた方の問題なんです。今の生活が満足かどうかということじゃない。今から20年後、30年後、状況は刻々と悪くなります。体調を崩しても、今はバスが通っているので何とか病院へ行けますが、将来はどうなるか。

この提言は本になりました。『2030年　超高齢未来』というタイトルで、東洋経済新報社から出ています。新しい時代をどう構築するかということをいろいろ考えている。経済力を落とさないように社会を発展させていくには、今から準備しなければ間に合いませんよ、ということです。20年後、30年後のことを考えるのは、あなた方ですよ。

さきほどの秋山先生によると、超高齢社会の“Aging in Place”とは、住み慣れたところで

年を重ねることだそうです。地域の中に高齢者の居場所をどのように作っていくのか。2030年には日本の人口の3分の1が65歳以上という、世界のどの国もまだ経験したことのない超高齢社会が訪れますが、元気で一人暮らしができる期間の延長や地域社会で人のつながりを築くことが必要だと指摘されています。これは日本だけの問題ではなく、世界全体が今そういう曲がり角に来ています。日本がその曲がり角を一番早く曲がろうとしている。ということは、日本は新しい超高齢社会の社会モデルを世界に示すことができるんです。これからも寿命が延びて、世界の中で高齢社会のよきモデル国となるためには、今からその準備が必要です。そのためには新しい夢と新しい課題を持たなきゃならない。

もし皆さんが、日本はこのままでいいじゃないか、どこでも水道が使えて安全な水が飲める、病気になればお医者さんに診てもらえる、しかしそれで満足していてはいけない時代です。だから前に進もうと、皆さんは考えてくれますよね。

延長線上に未来はない

いままでは、「テクノロジーの発展はいいこと」と神話のように思われていました。テクノロジーは社会を豊かに便利にするものと考えられていたから、科学技術の進展をどんどん進めればよかった。けれど、実は悪い面もある。その両面を考慮しながら新しい社会を作らなければならない時代になりました。効率がいいと言われるものは同時に危険を孕んでいるということを、私たちは考えて置かなきゃなりません。

日本は昨年、東日本が大地震、大津波に襲われ、多くの犠牲者が出ました。東京電力の福島原子力発電所の大事故で、放射能に汚染された地域ができて、流れ出した汚染水や漂流物がアメリカ沿岸へ流れ着いている。韓国の海岸も汚染度が高くなって、日本は韓国から抗議を受けている。原発で事故が起きればこういう事態になることは、スリーマイル島の事故（1979年3月）やチェルノブイリの事故（1986年4月）のときから予測できたはずです。

ウルリッヒ・ベックというドイツの社会学者がチェルノブイリ事故のすぐあと出版した『危険社会』（リスク・ソサイエティ）という本の中で、これから社会は危険社会に入る準備をしなければならないと書いています。彼は昨年5月、福島原発の事故のあと来日し、7月に『リスク化する日本社会』という本を出しました。これはベックの講演や座談会の記録、日本の学者の言葉などを一冊にまとめたもので、今の時代をどう考えればよいかということについて提起しています。

私たちは核の恐ろしさを知っている。広島や長崎が一瞬のうちに破壊された事実を知っている。けれど、その力を平和利用しようと言われると、賛成といって、50近くの原子力発電所ができたわけでしょう。原発ができて電気をどんどん使えるようになり、便利な生活ができるようになった。便利さ、効率の良さだけで捉えて、放射能汚染というリスクを度外視していた。それを急に「全て廃炉にしろ」「節電を」といわれて、一体どうすればいいのだろうと戸惑う人も出てきます。原発が事故を起こせば空気が汚染され、学校の運動場が汚染され、農作物が汚染される。そういうリスクを伴いますよ、それを考慮したうえで原発を運転するかどうかを考えなければなりませんよ。これから私たちは、科学の発展は常にリスクを伴うということを意識しながら、ものごとを判断しなければなりません。それをはっきり自覚しよう。いまの生活の延長上に未来はないんです。より良い社会をつくろうと思うなら、「良い社会」とはどんな社会かを考えてください。それがＲＹＬＡの重要な課題です。

ロータリーとコミュニティ

昔は、コミュニティとは人が集まって顔を会わせ、力合わせて何かをする地域社会でした。

ロータリーはいまから107年前の1905年にアメリカのシカゴで生まれました。当時のシカゴはヨーロッパから移住した人たちが、ここはイギリス人のコミュニティ、ここはイタリア人、ここはギリシャ人というふうに、国ごとに一つの地域を作り、住み分けていたわけです。シカゴの街は「生き馬の目を抜く」ほど繁栄していて、儲けさえすればいいという風潮があった。商売人は、他の商売人を見たら敵と思え、いつ欺されるかわからない。商売で大儲けした金持ちが「強盗貴族」と呼ばれることもありました。互いに疑心暗鬼で、自分の利益を第一に考えて生活するのに精一杯でしたから、他人のことなど考える余裕はなかったんでしょう。その頃のシカゴはそんな状況でした。

そんなとき、1905年2月23日に、4人の若者が集まってロータリークラブが生まれます。信頼できる仲間の集まりで、あなたは洋服屋さんだから、洋服をつくるときはあなたにお願いするから適正な値段で作ってくださいね。石炭は石炭屋さんのあなたから買うから、ふさわしい値段で販売してください。グループの中でそういう取り決めを作っていました。

ある人がそれを見て、「あなたたちは自分たちだけで融通しあって、それでいいかもしれない。けれど、それは個人エゴからグループ・エゴになったに過ぎないじゃないか。仲間以外の人たちにはどうなの？」。こう言われて中心人物のポール・ハリスは、大切なことに気がつきます。ああ、そうか。では、地域社会の中で皆に親切にする方法はないだろうか。考えて取り組んだのが、みんなが困っていたこと。公衆トイレをシカゴの街につくりました。これがロータリーの社会奉仕活動の始まりです。そして「世界でよいことをするため」に設置された基金（最初の寄付金は26ドル50セント）が発展して「ロータリー財団」となり、1929年、この財団は500ドルを「国際障害児協会（National Society for Crippled Children)」へ補助金として授与しました。ロータリーのいう「コミュニティ」は、やがて世界大へと広がっていきます。

ロータリーは最初から今のような夢みたいな大きなことを考えていたわけじゃない。ロータリーはいくつかの奉仕活動をやっていますが、その基本的な精神は、自らの欲望を押さえて他者へ愛情を分かち合うというところにあります。ロータリーは、お金を持っている人の集まりではない。ロータリーはなにか産業を興して、お金を儲けているというわけではない。しかし、ロータリーには、夢があります。

ロータリーは、学生、大学を卒業した若い人、大学院クラスの人たちに、ロータリーが2年間の学費、生活費をだすからもう一度マスタークラスのディグリーがとれるクラスに入って、将来、平和のために働いて下さいませんか、と呼びかけています。世界中からそういう人を集め、彼らは卒業後、ある人は国連で、ある人は難民救済のためのNGO等々で働いているようです。卒業生が互いにそれぞれの経験を世界大の大きなネットを組んで語り合うことも、世界平和の構築のためには有益だとロータリーは考えています。「ロータリー平和フェローシップ」の奨学生は、全世界の候補者の中から、毎年110名が選ばれます。日本では国際基督教大学の中にロータリー平和センターがあります。世界の平和と紛争解決、こんなことは個人で取り組むことは出来ない。けれども、世界に120万の仲間を持つロータリーなら、十分できるのではないか。

ロータリーの大きな運動の一つが、ポリオ（小児マヒ）撲滅運動です。取り組み始めた頃は、3年、4年と長期にわたるプログラムはやらない、1年か2年でそのプログラムを打ち切ろう、とロータリーでは考えていた。だから2

年目になると、もう応援の費用はありませんよと、新しいプログラムを開発しました。ところが1979年、ポリオの後遺症で身体が不自由になった人たちのために何かしようとロータリーは考え、フィリピンでポリオの免疫摂取活動が始まりました。ポリオという病気は伝染性の高い病気で、ある地域で1人か2人が発症したら国中に伝染するんです。日本でも一時流行ったことがあります。けれどこの頃は、野生株という伝染性の強いポリオはなくなってきました。日本では子どもが産まれたらポリオのワクチンを投与してもらいますね。

初めは簡単に“世界からポリオをなくそう”、3年くらいでなくなるだろうと言っていたのが、3年どころか20年経ってもまだ終結していません。けれど、世界の約200の国の中で、ポリオが残ってる国は3つだけになりました。パキスタン、ナイジェリアとアフガニスタンです。あとの地域はポリオ・フリーになりました。世界から完全にポリオを撲滅するには、もう2、3年かかるでしょう。もちろん費用もかかるけれど、世界の子どもとの約束を私たちは最後まで守ろう、そういって頑張っているのが、いまのロータリーです。

新しいコミュニティをともにつくろう

日本でもロータリーは各地にあります。ロータリーが、その地域をどのように活性化するか、そのためにどんな方法があるかと問うとき、私たちだけでは対応できない。若いあなた方に、こういう問題があるけれど一緒に地域の中で取り組んでくれませんか、と呼びかけます。そして、若い人たちにロータリー運動を理解してもらって、社会人になったらロータリーに入ってもらって、今度はあなた方にそういう計画をするロータリーの側にまわっていただきたい。そのために出来たのが、ＲＹＬＡというプログラムです。ロータリーはコミュニティの中で、表にはでませんが、そういう形で働いていることを覚えていただければ有り難い。

私の若いとき、多くの若者が、日本が新しい方向へ動き出すために命を捧げました。戦争です。私たちはその生き残りです。そして敗戦を迎え、東京も神戸も大阪も、今の東北の被災地のように、なにもかもなくなってしまった。そこから努力して、日本はここまできました。次は皆さんがそれを担う番になった。

新しい世界、それは今までとは全く違った世界です。外国との関わり方も違ってくるでしょ

う。異文化の人であっても特別な眼で見られることのない世界になる。経済の考え方も社会の構造も何もかも今とは全然違っていく。将来の世界のあり方を今から読んで、新たな世界を豊かなものにするためには、いま何を準備すればいいのか。それを見極めるには相当な努力と苦労をしなければなりません。それほど大きな変化が起きています。それを乗りこえて新しい世界を創るのが、あなた方の役割です。若いからこそできることがあるんです。そのことをしっかり覚えていただけたらありがたい。

新しい時代の変化の全てがＯＫというわけではない。しかし時代の曲り角にあることを象徴するような、先ほど挙げた何冊かの本は、できれば読んでください。読んで、頭の中で整理して、自分の言葉にしてみてください。新しい世界ができるかどうかは、皆さんの決断次第です。

今日までの4日間、講師の先生方がお話しされたことは、あなた方の心に響いたことと思います。ロータリアンもライラリアンも、ここに来てくださった方はこれからもお付き合いしましょうね、とロータリーはプロポーズをしています。そういう関係をつくりたいと願って、後にいるロータリアンの人たちは皆、いままでＲＹＬＡを続けて来ました。34年の間に、ここで大勢の人が出会いました。この絆をいつまでも大事にしていきたいと思います。

閉講のあいさつ

国際ロータリー第2680地区ガバナーエレクト
石丸 鐵太郎（神戸南RC）

受講生の皆さん、余島での3泊4日いかがだったでしょうか。中には1泊4日という方もいたんではないでしょうか。大変お疲れではないかと思います。ご苦労様でございました。素晴らしい講師の良い話を聞き、新しい仲間と話し合い、時には沈思黙考し、さらに新しい友だちと討論したこの結果はきっと皆様の身となり血となり肉となっていくことと思います。余島での天候は非常に変わりやすく、初日は暖かかったけども曇り空で、日本の今を象徴するような天候だったような気がします。翌日は予想通り雨が降って夕方には強風になり、３日目は晴れたけれどもものすごい風が吹いて、孤島になってしまいました。幸い、最終日は風も止み、天気は非常に良い状況です。受講生の皆様の将来を見通すような天気だったのではないかと思います。大変苦労することもあると思いますけれども将来は今日の天気のように明るいんじゃないかと思っております。

話は変わりますけれども、今井先生がいらっしゃいますので、偉そうなことは言えないんですが、私も70歳に近づいてまいりました。こういう歳になりますと本当に理解できるようになる諺がございます。多分、皆様もご承知と思いますけれども「少年老い易く学成り難し」「一寸の光陰疎んずべからず」というような諺であります。70歳近くなりますと、若い人が羨ましい、今から何かしようと思っても時間が足りないと、つい暗い気持ちになってしまいます。そういうことのないように、ちょっとの時間も惜しんで毎日一生懸命励んでいただきたいと思います。一生懸命励むと自分が気付いていない素晴らしいところが分かってきますから、それを楽しみにして毎日頑張っていただきたいと思います。最後になりましたけれども、このライラをお世話いただきました2670地区、2680地区の運営委員会の皆様、どうもありがとうございました。お礼を申し上げて、閉講の挨拶とさせていただきます。

閉講のあいさつ

国際ロータリー第2670地区
新世代活動委員会カウンセラー・パストガバナー
今井　正信（観音寺RC）

受講生の皆さん、本当に良いセミナーに参加していただいてありがとうございました。昨日、一昨日とずっと悪い天気でしたけれども、皆さんいろんなことを持って帰られる自信ができたと思います。今、ここにいる50人の若い人は、さっき今井先生がおっしゃったように、30年後はリーダーとして地域を引っぱっていく人になってほしい。それがロータリーからのお願いです。私もかろうじて今井先生と言われはしますが、こんなに幅の広い、こちらの今井先生に最初にお会いしたのは6年前ですけれども、私とは大きな差があります。実は私は日野原重明先生にも懇意にしていただいて、この間お会いしたんですが、日野原先生は100歳。僕とは20歳違うんですけれども、本当に今の世の中、100歳前後の元気な方が非常に多い。ただ、皆さんがそうなる時には、もっと悪い世界になっているかもしれません。それを皆さん自身が考えなければいけないと思いますし、おそらくこの４日間でそれを感じたと思います。それを感じて、本当にそうしようと思わないとならないんですよ。

この小豆島も人口が減少していますが、もっと激減している所はたくさんあります。そういう中で、いいコミュニティを作るのは、皆さんの力、皆さん一人ひとりの力です。昨日のフォーラムを聞いていても、優秀な人ばかりだと僕は思ってます。こんなに良い人を集めるというのは、このライラが本当に見事なセミナーだからです。これは、今井先生をはじめ、我々の先輩の方達が一生懸命で築き上げてこられたからだと思います。

皆さんも今はライラリアンです。ライラリアンが2,000人近くになりました。皆さんも含めて、良いコミュニティをつくろうという、その意志を一人ひとりが持って帰ってもらいたいということをくれぐれもお願いします。これは、偉大な今井先生のお願いであり、大したことのない今井もそう思います。人任せではなく、自分が地区のリーダーか、その活動の一員になって、自分達でやろうじゃないか、という人になってもらいたい。

本当に期待した通りのセミナーだったと思います。それから、2680地区、2670地区のロータリーの委員会の方の絶大なる力があったことに対し、本当にお礼を申し上げて閉講のご挨拶といたします。どうも、ありがとうございました。

感想文

A班

第34回RYLAセミナー

カウンセラー　坂東　隆弘

カウンセラーとして2度目のRYLAセミナー、余島は不安定な天候、自身の心情を表しているかのようだ。昨年、経験しているからとはいえ、受講生の顔を見るまでは落ちつかない。

A班、男性９名、女性３名、第2680地区、７名。第2670地区、５名。平均年齢26才、ちょっと大人しめ24の瞳。今回、パートナーとして平井英津子母さんといっしょにこの受講生を受け持つ。

受付時から、担当する受講生をいち早く知り、顔と名前をまず一致させ、待機の様子などから、できるだけ早く把握する様に努めた。

１日目のスケジュールが終わり、オープニングパーティー、キャビンタイムとつづく中、新しい仲間とかなり打ち解けあったようだが、まだ充分でない者もいる。

２日目、２講義が終わり、レクレーション、悪天候ではあったが、なんとか外で体を動かせた。連帯感も高まったようである。

テーマが発表され、バズセッション。４名３組に分け、それぞれ別々のキャビンで、話し合い。現代子らしい考えが、出てきている。あえて何も言わずに、本人等にまかせてみる。

３日目、シャッフルして２組に分け、再びバズセッション。まとめには苦労をしたようだが見守った。

フォーラム発表、寸劇を加えたみごとなプレゼンテーション。まさにチームが一丸となった。

カウンセラーの私自身が、受講生を信頼し、まかせることの大切さを学んだ、有意義なセミナーだった。A班の皆、ありがとう。

同窓会が、楽しみだ。

ライラセミナーに参加させていただいて

カウンセラー　平井英津子

カウンセラー２年目。今年はどんな出会いがあるんだろう？と楽しみにして参りました。９男３女の坂東家スタート。最初の夜、班を示すプレート作り。「A班らしい表現をしよう！！」と話し合うが、なかなかまとまらない。時間ばかりが過ぎて行く。時間切れとなるとなる直前ドタンバで出ました。「ドタンバA（エース）」と命名。翌朝の食堂のテーブルには、そのプレートが誇らしげに立っていました。「ドタンバの底力」を発揮した最初の共同作業でした。みんなの心が、グッと近くなりました。三日目のフォーラムでも、この底力が見事に発揮されました。一人一人の力もチームになれば大きな実を結ぶ事を実感できた瞬間でした。あなた方には、「人が人として尊重され、幸せに暮らせる社会」を実現するために、「私は何をすべきか？私に出来ることは何だろう？」と常に一人称で考える人になってほしい。失敗を恐れないチャレンジ精神で一歩踏み出す勇気を持って大きく羽ばたいて欲しいと願います。すばらしい余島の自然の中で、共に学び語りあったこの経験は何物にも変えがたい宝物になると思います。出逢いに感謝！！です。坂東パパ、お世話になりました。楽しい４日間でした。この機会を与えてくださったすべての皆様に心よりお礼を申し上げます。

「第34回RYLAセミナーを終えて」

井関　善貴

単刀直入に言うと、今回のRYLAセミナーを終えて私は自分のことや相手に対する考え方が変わりました。

まず私がRYLAセミナーに参加したきっかけは我が社の社長による推薦であります。私はセミナーや研修会というのは何度か経験があり、今回で三度目となります。リーダーシップの形成ということもあり、私は過去に何度もリーダーを任され、また達成をしてきました。内心では研修に行っても既に修得済なので学ぶことはない。自分がまたさっさとやれば終わるだろうと。そう甘えた考えでいました。

いざ、研修が開始してグループでミーティングが始まります。私はリーダーをすると宣言し、皆も納得の上でした。が日時がすぎ、グループにとけ込んでゆく内に、力を持ったリーダーが無くなりました。話して討論を繰り返してゆく内に、皆がリーダーシップを発揮するようになりました。グループの内１人がリーダーではないのです。グループ全員がリーダーとなりました。この瞬間に「心を一つに」という言葉を実感しました。

考え方が変化した点は、自分がリーダーとして力を持っていても、その力を分け与えていく。簡単に言うと受け継がせて人間を育成していき、また自分も成長をしていくことです。

言葉が少なすぎるかもしれませんが…時間の都合上記入はここまでとなります。このセミナーは一味違います。是非とも参加をすすめるので体感して下さい。

RYLAセミナー

岩下　智志

私はこのセミナーを受講する際、今ひとつどのような内容なのかわからなかった。実際にセミナーを修了した今感じることは、学生の頃に体験した修学旅行や自然学校のような印象を受けた。グループに複数づつ分かれ、寝食を共にし、考え、人間関係をも深める。しかし、過去に体験したそれらと大きな相違点がある。それは、その日に初めてであった人達と過ごすということだ。また、年齢も職業も違うメンバーである。最初はそんな条件でまともに議論ができるのか？と思った。社会人としてキャリアを積んでいる人もいれば学生もいるからだ。しかし、

それこそが今セミナーの醍醐味であり、裏テーマでもあると日を追うごとに感じた。その職種違うメンバーは“全員平等な立場であり、同じ発言権を持っている”ので互いに背をあわせることが必要になってくる。その為には、“相手の話を否定せずに聞く”ことがコツであることを学んだ。RYLAセミナーはそういった意味ではとても社会的である。仮にリーダーと称した人物が全ての権限を持ってしまうと、偏った答えになりかねない。それでは社会は改善されない。

個人的に社会人になってもうすぐ2年目だが、逆に視野が狭くなっていたことを感じた。とてもタイトなスケジュールであったが、社会では感じられない社会をシミュレーションしたような気分だ。

感想文

宇田　貴行

今回のセミナー参加で自分が痛感した事は自分の会話能力の低さと、意見をまとめる能力の低さだ。

元々、自分は小中高と友達と呼ぶことのできる人間の数が少なく、また、いたとしても付き合うのはその場限りだけの仲であったりした。

なので、ここに参加する前からあまり上手く人と会話することができるとはまったく考えていなかった。

もしこのセミナーが今まで自分の所属してきた学校の行事ならそれでよかっただろう。

しかし、この場で行うことは討論である。

この考えの甘さを実感したのは2日目のバズセッションだった。

ここで初めて自分の意見を発表したわけであったが、それは意見と呼べるものではなかった。自分でも途中から何を言っているのか分からなくなったほどだ。

こういったことから、自分の意見は3日目の発表ではあまり採用されず、班の発表に参加できず、取りのこされる形になってしまった。

バズセッション、発表で自分が役立たずだったのは班の雰囲気ではなく、完全に自分のコミュニケーション能力の低さの結果である。

自分が20年という人生で学ぼうとも、参加しようともしなかったからこの場所で無様な醜態をさらけだしたわけだ。

自分が学生でなければこのことは一生残っていただろう。

次にこのような形で討論会等に参加する時は、大学の講義等でコミュニケーション能力を少しでも高めようとすることが、今の自分にできることだろう。

ライラセミナーを受講して

吉川　晶子

私はセミナーや講習会に出たり、自分でもフォーラムを企画したりしてきていたので、このような泊まりがけの自然の中で行われるセミナーとはどのようなものか、ちょっと観察するつもりで来た所もありました。初めにメンバーと会った時は、正直な所みんなが若くて、やっていけるか不安になりました。そしてライラに参加をした理由をきくと、ほとんどの方が会社から行かされてという言葉だったので、そこにも納得できなさがありました。セミナーは自分で行こうと思って来た人と行かされて来た人とでは、持ってくる想いが違うと私は思っていたからです。

今、セミナーが終わってみて、その考えは少し変わりました。私は学校で働いています。学校も行きたくて行っている生徒だけではありません。でも行きたくなくて来てても本気にいつの間にかなってしまうことはある。知らないうちに夢中になってしまったということはあると思います。その姿をこのセミナーの、特にグループの中で見た気がします。初めにあった不安は

その中で消えてしまいました。そのことは大変よかったと自分では思っています。

セミナーを受けながら、青少年指導者育成プログラムときいていたけど、どういう所がそうなんだろうとこちらも疑問に思っていました。でも今は、特にカウンセラーの方々を見ていて、その後ろ姿を見ることが最も指導者育成プログラムにふさわしいことだったかなと思います。こどもは大人の背中を見て育つ。そのことを感じました。自分が帰ってからの生活の中で、私もこんな風なリーダーになりたいと感じました。ありがとうございました。

でも私は何でもそうですが、セミナーは終わった後が大事だと思っています。終わった後の人とのつながり、付き合い、自分の生き方や行動が、セミナーに来た意味を作ります。ここから、あんな奴のためにお金払って損したと思われるような生き方をしないようにしようと思っています。特に私は今からはライラ学友会で働きたいと思っています。それでもやっぱり、自発的にすることの方が、自分にとっては好きな選択だと思うからです。この時間を与えて下さってありがとうございました。

ライラセミナーに参加して

小林　佑輔

私は、セミナーに参加するのを社長に勧められどんな内容のものかもほとんど知らないままに参加しました。来るまでは、皆と話せるだろうか等の心配でガチガチに緊張していました。しかし、いざ参加してみると皆とすぐに仲良くなれたし、プログラムも楽しく進めていけたと思います。最近の社会はSMSの発展で顔をつきあわせて合う事が少なくなっています。こういう時こそこういったセミナーが重要なんだと思いました。

このセミナーに参加して自分で考える事の重大さ等を教えていただき一皮むけたと感じました。3泊4日の短い時間でしたが大変有意義で濃密なセミナーだったと感じました。

他のこういったセミナーにも積極的に参加していきたいと思いました。

RYLAセミナーを受講して

時任　祐輔

私は、今回初めてこの様な形の講習会に参加しました。学校の形式とは違うやり方で、話しを聞けてとてもよかった。

そして様々な先生方の話を聞けて物事の考え方に変化があった様に少し感じた。またバズセッションでは班の人と話しをして話をまとめたりする事をくり返しまとめた。しかし伝わりやすさを考慮し即席の劇をやったりした事がとても自分の中にあります。

後は時間の都合上、箇条書きで失礼します。

A班はまとまりがあり、カウンセラーの方もすごいよく尊敬できました。

仲間の大切さ、その時のノリで場をすごす、自分から発言する。相手を尊重する。

今回、知り合えて、その方々達と一緒に学べた事に感謝したい。

ライラセミナーを受講して

前田　沙穂

4月から仕事として青少年活動に携わる者として全く予備知識のないままの参加であったが、得たものは想像をはるかに越えた4日間であった。

我が班に関しては、仲間の絆についてはここで言及しきれない程すばらしいものとなり、自分も含めた各メンバー自身、そして敬愛するカウンセラーの父母とキャビンタイムで確認し合えた為、ここでは一番印象深かった思索の時間について記そうと思う。

2日間しっかり仲間と過ごした後のこの時間、短い間に自分の考えが大きく変わっていた

事に驚いた。自然だけを見ながら皆との時間を思い出していると、仕事への不安でいっぱいだったはずが純粋に今の若者達に同じ体験をさせてあげたいと考えていた。一日として同じ景色がない事、日ざしが差しこむとこんなに美しく海の色が変わる事、一緒に過ごす人がいてくれる幸せ、そして地震等が起きてからではなく自然への畏敬の念はもっと早くから育てられたのではないか等小さな事から大きな事まで仲間の存在を含めたこの環境からわき出る感情は止まらなかった。

若者を育てるという立場だけでなく、自分自身も若者として社会と関わっていく道筋もフォーラムで深く学ぶことができ、この有意義な体験を必ず仕事、そしてボランティア等で生かしたいという希望と責任で今は胸がいっぱいである。

最後に、素晴らしい仲間、カウンセラー、ロータリアンの皆様との出会いに感謝し、今後も一員として尽力していく事を誓って。

ライラサイコー

梅村　悠希

参加してよかった。初日フェリーでの不安はすぐにふきとびました。曇天もようの島にいた方の顔が自分と一緒の顔をしていたから。

全員笑顔にしてやる楽しませてやると思いました。でも実際ライラセミナーがはじまり11人の仲間とお父さんお母さんといると、自然にみんな笑顔で、楽しませてやると思っていた私が一番楽しんでいました。

全く知らない肩書きも立場も違う14人が寝食を共にする３泊４日は『出会い』『発見』『おどろき』私を成長させてくれる最高の場所でした。

新しい出会い、講義、頭の中がいっぱいになったときにおとずれる「思索の時間」。自分の心をみつめる時間なんて22年間の人生でどれだけとれていたかわからない貴重な時間がライラセミナーにはありました。

４日間でできる限界の成長を私はさせていただきました。

2680地区、2670地区ロータリークラブ、ライラ運営委員会、YMCA余島のみなさん、この機会を与えてくださりありがとうございました。

第34回ライラセミナー受講生48名みんなありがとう。

どたんばAのみんなありがとう。

お父さんお母さんありがとう。

この出会いを一生ものに。

「行ってきます。」

第34回RYLAセミナーに参加して

岡田早耶香

このセミナーに参加して、人と関わること、人の為に活動すること、人と協力することの大切さをたくさんの人（仲間）から学びました。今まで、自分の仕事（保育士）の関係面の事柄しか考えようとしていませんでしたが、その面から地域・社会など、もっともっと広いところまでつながるような関わり、活動に参加・自分発信ができるようにしていきたいです。そのためにも、班みんなで出した『挨拶』を根底に、いろいろな事に興味を持ち、知識を蓄え、知恵にできるようにします。

このように４日間の異年齢・異性での共同生活・作業など特に社会人になってすることがなかったのでとても良い経験となりました。

しかし、他の方の意見・今までの生き方・活動を共にすることで、「協力」できることだけではなく、「その人次第」ということも感じました。みんな「心」を持っているので、自分の思ったように行動します。良くも悪くにもなります。自分で良い、楽しい、幸せと促えられるようにすれば、自分も周りも変わっていくと感じました。

このセミナーを運営して下さった方、お世話をして下さった方、YMCAスタッフ皆様、受

講生、セミナーに誘ってくれた園長先生、協力してくれた職場の先生達みんなに感謝をします。とても良い時間を過ごしました。

未来を作る若者として

尾﨑　悠

まず始めに、私は初めて会う人と、一から関係をつくるということが苦手です。いつも周りに合わせて、自分の考えを周りに発表するということをしてこなかったため、このRYLAセミナーで少しでも変えられれば良いと思い受講しました。

セミナーに参加して、様々な考えや思いを聞いていくと気付かされることがいくつもありました。まず信用と信頼の違いについて、私が今までつくってきたコミュニティでは、信用があっても信頼することが出来て無かったんじゃないかと思います。フォーラムの中で何度もコミュニティ作りの大切さを聞いていると少しでも自分が変われた様な気がしました。若松先生の話で、小さなことでも続けることが大事だと分かったので、帰ってからもあいさつを続けようと思います。

「余島での4日間」

谷口　雄紀

「どうなるのだろう。僕自身は。」

最初の開会式前に、知らない人々に囲まれて、ニコニコ笑うだけのおじさん方々（ロータリアンの方々）に、正直を言えばとまどいや不信感も感じていました。

しかし初日の夕方にはそんな不安も少しずつ消えてゆくことになります。キャビンタイムでの、仲間たちとの交流。寝食とお風呂、バズセッションを通す間に芽生えた信頼感。そして何より、この余島での父親と母親になってくれたカウンセラーの２人。僕はあっと言う間に家族を手に入れてしまいました。

「かけがえのない４日間。」最初の式でスピーチをしていた方すべてが言った言葉です。

「ずいぶん大きなフロシキを広げるんだな。」心の中で考えていなかったと言えばウソになりますが、しかしそんな自分のかけがえのない４日間を余島で過ごせました。

人とのコミュニケーションをテーマに今回のセミナーはくり広げられたと思います。

まったく知らない人がそろい、それぞれが個性的で、でも知らない間にチームとして団結していく。僕のいたA班は、キャビンでの時間（主に飲み会）を過ごす度にテーマにそって自分たちのコミュニケーションを駆使し一つの素晴らしいコミュニティーを築けたと思います。

「どたんばA（エース！）」

はA班のテーマです。最後の最後、どたんばのドタンバまであきらめない人達がそろった。いや、あきらめない人へと成長できたA班と、このライラセミナーでの活動を、宝物にしていきたいと思います。

ありがとうございました。

RYLAセミナーを受講して

田村　英律

私は、学校長に「RYLAに行かないか」と言われ、「分かりました」と答えました。RYLAとは何だろうと疑問に思いつつ、私は当日余島に向かったのです。

初日は、昼から開講式があり、その後、班分けがありました。私はA班になり、201号室のキャビンに行きました。他のメンバーは、私よりも若かったですが、しっかりした方ばかりで、私もしっかりやっていかなければならないと思いました。その反対に、知らない人たちと４日間もやっていけるのか大きな不安がありました。夜は、オープニングパーティーがあり、歓迎会を開いてくれました。そこで、料理を食べたり、お酒を飲んだりしていくうちに、他のメ

ンバーとも次第に距離が近づいていきました。そして、キャビンタイムでは、カウンセラーの方々がお互いにニックネームをつけるようにしてもらうと、お互いの距離はぐんと近づきました。その晩はとても楽しい時間を過ごすことができました。

1日目のおかげで2日目以降はとても楽しい時間を過ごせました。一緒にアーチェリーを行ったり、バズセッションで討論を行ったり、フォーラムで班の発表を行ったり、もちろん講義も静かに聞き、勉強もさせていただきました。

RYLAセミナーを受講して、人とのつながりが大事であることを痛感しました。現在、人との関係が希薄になっている時代にとても必要なことを学ぶことができました。また、A班が発表した「あいさつ」もこれからできるだけ行っていきたいと思いました。私は高校の教員なので、生徒にも伝えていきたいと思います。最後に、ロータリークラブの皆様方に、このような場を設けていただいたことに大変感謝を申し上げます。ありがとうございました。

B班

RYLAセミナーに参加して

カウンセラー　田中　恵美

今回、初めてライラセミナーにカウンセラーとして参加することとなり、カウンセラーという役割が果たして自分にできるのか、不安に思っていました。とにかく受講生と共に学ぼうという姿勢で参加しました。

私は31才。B班には私よりも年上の受講生もいました。１日目には「田中さん」と呼ばれていた私も、２日目、３日目と共に生活するうちに、「お母さん」と呼ばれるようになっていました。

質の高い講義とレクリエーション、そういう経験をすることは、学生以来十年ぶり。全てのカリキュラムを終えた今、心身共に清々しく、参加する前のあのどんよりした気分は何だったのかと思います。

キャビンタイムも１日目は、どこかよそよそしくありましたが、３日目には、皆の心がうち溶けて、心から笑い、色々な話ができました。B班の皆に感謝の気持ちでいっぱいです。

たった４日間ではありましたが、４日間とは思えないほどの充実した時を過ごせ、班の絆が深まったことに、とても驚いています。

この出会いを、今後とも大切にしていけたらと思います。

ライラセミナーに参加する機会を与えて下さったことに感謝します。ありがとうございました。

カウンセラー　米山　徹太

昨年に続き、今年もカウンセラーとして参加させて頂きました。「今年も絶対感動出来る」と期待して余島に来ました。結論から言うとやっぱり「最高」ハマリました。

素晴らしい講義、ロータリアンの感動するお話、最初はおとなしかった受講生の最終日の

晴々とした顔つき、余島の自然、振り返ると涙腺が緩みます。

このセミナーはロータリー精神の醍醐味を最も味わえるセミナーだと思います。入会歴の浅い、又、若いロータリアンは是非参加して頂きたいと思います。

終わりになりますが、お母さんの田中恵美さん、B班の受講生の皆さん、本当にありがとう！！最高のお母さんと12人でした。今井先生、深川先生をはじめ多くのロータリアンの皆様、全ての受講生の皆様、ありがとうございました。いつか又お会いしましょう。

山頂から地平線を眺めて

岡田　依里

ロータリー姫路南のメンバーである父と一緒に出席したロータリーの家族会で、たまたま隣に座った女性がガバナー経験者だったことが全ての始まりでした。無人島で、初対面の人たちと毎夜、語り合うものよ、と聞かされて迎えた３月22日でした。

兵庫県姫路市から四国という島へ渡り、小豆島、余島へと３つの島を渡って来ました。行くからには楽しもう、その一言を心に４日間、本当に一つ一つに楽しさを見出せました。

講義はノートに記録し、自分の記憶としました。思索の時は、山頂へ行き、射し込む朝日に心打たれました。ご飯の時は、ひたすら味覚と視覚と嗅覚で海の幸を堪能しました。こんなにも規則正しく生活したことが久しぶりで、自分の体も軽くなっていくのがわかりました。

初めて出会った４日前には想像できないほど、熱く語り合った12人の班員たちに感謝します。最年少の私の意見を、言葉足らずでモヤモヤしていた私の心を読み取って下さり、多種多様な知恵、経験で「言葉」にしていく様は、涙が出るほどの感激でした。11人の人生の先輩方に感謝。いつも、横で見守ってくださったカウンセラーのお二人に感謝。この場を与えてくれた、全ての人々に感謝します。

山頂で一人、朝日を眺め、白く輝く地平線を眺めて、確信したことがあります。
『世界の未来は明るい』

RYLAセミナー感想文

奥田　　裕

自分の名前と住所以外の漢字を書くのは何年ぶりでしょうか。という事はさておきまして、今回のセミナーに参加して、自分も含め周りの仲間の参加前後の心情や態度の劇的な変化を実感している所であります。ローターアクトの一員として、今まで数々の会に参加しましたが、親ぼくを深める過程が全く違い感動を伴った物でした。誰かがローターアクトの全国研修会で言っておりました。「２時間の懇親会は５時間の会議に勝るものがある」と。会議など、フォーマルな場で体験できない事を体験できる事ができました。今回学んだ事を基に私が最後の付せんに書いたのは、「思った事を思った時にできるようにする。」でした。忘れないように書いておきます。又、音楽は世代をまたぎ、心を通じ合う為の大事な方法であると実感しました。一見すると疑問に思ったプログラムも今思えば全て最初から最後まで考えられ構成されているものだったと気付きました。このセミナーがずっと続いていく事を願います。お父様、お母様、関係者の皆様、感謝いたします。

感想文

尾崎　　真

一言で述べるとしたら「最高のセミナーでした。」全く知らない方たちとの共同生活を経て、日増しどころか時間が増すにつれて他人から仲間という意識が強くなった。たったの４日間という短期間でこれ程の達成感を得れたことが確実に今後の自分にとってかけがえのない財産

になるだろうと思った。そしてこのRYLAセミナーとはあくまでも僕達若者らにとってきっかけ作りであった。前述で得た経験も大切であったがそれ以上にこれからの未来がどうなるか？他人任せではなく自分たちがどう考えどう動くかといったことが求められる。しかしそれを喜びに変え今後の人生の原動力として躍進していきたいと思う。

最後に、このセミナーで出会うことができた仲間やお父さん、お母さん、ロータリアン、関わることができた全ての方に感謝したい。ありがとうございました。

RYLAセミナーに参加して

熊木真人史

私は今回このセミナーに参加して、ボーイスカウトでは経験出来ないような事ばかり経験出来て非常に良かったと思っています。思索の時間といって１時間も自由な時間を与えられる事なんて日常生活でも有り得ない時間で、これから就職活動が始まるので自分を見つめ直す良い機会を貰えたと思います。就職活動が始まれば自分という人間がどういう人間か知る必要が出てくるのでバイトばっかりしていた僕にとっては素晴らしい事だと思います。そして、講義では大学の授業とは違い勉強という概念ではなく自分がどうあるべきなのかという事をすごく考えさせられました。この講義を受けていなければ自分は何も考える事はせず、平凡に１日１日を過ごしていた気がします。セミナーに参加した周りの人にも本当に色々な人がいて、すごく考えさせられたと思います。こういう体験はここでしか出来ない事だと思いますし、こういう活動に参加出来て光栄に思います。紹介してくれた松本さんには、もちろん感謝してますし、様々なスタッフの方々、ロータリアンの方々、仲間達、何よりお母さんとお父さんに感謝です。ありがとうございました。

「34回RYLAセミナーを終えて」

小山　雄平

様々な職種、またいろいろな世代の人が寝食をともにし、一緒に一つのテーマについて勉強するこのセミナーは、日常では考えられないプログラムであり、この機会をフルに使いたいと思い望んだセミナーでした。この同じ日本社会で様々な立場の人達、また一人一人の意識が高い人ばかりの中で、本当に学ぶことだらけでした。またそれと同時に自分の存在がとても小さく弱くちっぽけな存在であるということを強く認識させられ、正直とてもくやしかったです。

一番心に残ったのは、今井先生の講義の中で「もう齢だから」というのは本心からの言葉でないという発言には深い衝動を受けました。本当は今井先生達は自分達でも何とかしたいという気持ちが強いのだと感じました。でもそれができないからこそ若い世代に自分の経験や考えを一生懸命に伝えようとするのが、この齢になってやっとわかり、責任の重さを身にしみました。若松先生が講義の中でおっしゃった通り、地道に自分の中の潜在能力を発掘する作業を根気よく続けていこうと強く思います。

第34回ライラセミナーに参画して

阪本龍太郎

社会人としての、日常を生活している毎日で、カタガキというヨロイを着け、人と関わるのではなく、自分そのもののまま、語り合い色々な事を感じる事のできた数日間でした。

等身大の自分のまま、ありのまま過ごす時間はあたりまえの様で、すごく貴重な事で、実は意識していないと手に入れる事のできない宝物なのだと、改めて感じました。

そんな貴重な気づきをたくさんできたチャンスを与えてくれたロータリアンの方々、カウンセラーの米パパ、田中ママに感謝の気持でいっぱいです。そしてその感謝の気持をあらわす為

に、ライラのメンバーとして、リーダーを育てることのできるリーダーに成る為、そして我々が未来に対して感じている不安をぬぐい去るような、しっかりとした、素敵なビジョン、夢を描く事の出来る人材と成る為、この４日間で学んだ事と、仲間と共に大切にしていきたいと感じました。

今回、かけがえの無い仲間に出会えた事に感謝。

第34回RYLAセミナー

東郷　健太

今回３月22日から25日までの４日間のセミナーに参加させていただいて、大変良い経験ができたと思います。

社会人という立場で他の職に就いておられる方と接する時は何かしらの壁を作る物ですが、今回参加したRYLAセミナーでは皆で討論し共に行動することでそのような壁は一切有りませんでした。

我々に今回のセミナーに参加する機会をくださった多くの人々と余島での生活を支えてくださった方々、そして何もしらない私達に父母のように接してくださったカウンセラーの方々ありがとうございました。そしてセミナーで自分に誓った事をこれから時間をかけて実現していきたいと思います。

RYLAセミナーに参加して

梅原　孔仁

今回、この様なセミナーへ参加させて頂き大変ありがとうございました。参加する前には、誰も知らない場所に知らない人達が集まりどうなるものかと、不安な気持ちでいっぱいでありましたが、その気持ちも嘘の様に、一晩でみんなと打ちとける事ができました。また、一つのテーマを持って、みんなで考えみんなと議論しあうというプログラムのおかげで、更にお互いの距離を近付ける事が出来たと思います。

このセミナーを通して、今まで自分がどれだけ無関心に生きてきたかを痛感しました。自分の思いを相手に伝える重要さ、または相手の意見を取り込み、相手を思いやる大切さを学べた事は、一生の財産になりました。

最後になりましたが、今回のセミナーに関わって下さったみな様にあらためて、ありがとうございましたと伝えたいと思います。

セミナーで得たこと

大川　理恵

ここに来るまえに、ちょっとした人間関係上のトラブルがあって、気が落ちこみぎみで参加しました。フェリーでこの人ライラセミナーに参加される方だなと予想がつくような人でも、『言葉を返してくれなかったらどうしよう…』と不安もあってだまったまま口を一文字につむって、余島に向かった。行く船の船長さんがすでに、気さくで明るく接してくれて、ちょっとは気が安まった。だけど、インフォメーション小屋についた時、もっとみんなは口を閉じていて、隣の人にさえも、しゃべりかけようとはしていなかった。『これは大丈夫なんだろうか…』とまた不安が頭をよぎった。その上に天気がたいへん悪く寒くて、食事はおいしくいただいたけれど、体調でも悪くなってしまうのではないか…と思うほどの気候でした。

そんな気分ののらないセミナーの始まりだったのですが、２日目の野田先生の講義、若松先生の講義を受けるにつれ、だんだんおもしろいと感じはじめました。『このセミナーは面白い！』そう実感したのは、バズセッションです。バズセッションは、班員の意見を一つの課題にそって討論していくようなものだが、なんでみんなこんなに真剣に考えているのだろう…と本当に思った。普通に出会っただけでは聞くことのできない意見が直接、それもお酒とともに聞くこ

とができて、私は大変感動しました。私の意見なんか、私だけの独特なものだと思っていたのですが、同調してくれたり反対の意見を正直にいってくれたりして大変うれしかったです。

この４日間でいろいろな幅の人をギュッと凝縮しているからこそ、こんなに密度の濃いセミナーになったのだと思います。

一つ余談かもしれませんが、私の隣りの隣の方は、聴覚が悪いそうで、作文を書いている時、自分が遅れているのではないかとあせっておられましたが、カウンセラーの方が、それに気づかれて『大丈夫なんだよ、あせらなくて、いいんだよ』と優しく声をかけられていました。

そんな心の余裕がロータリアンの方にはあるのだなと思い、それが最後にわかって本当の意味で参加してよかったと思います。

どうもありがとうございました。

RYLAセミナーについての感想

張　鎮奎

何も知らずに今回第34回RYLAセミナーに参加しましたが、得たものはもりだくさんでした。たった３泊４日の日で自分の考え、自分の行動があんなに変わるのが本当に予想以上です。

初日は不安だったが、今はもう一回参加したい気持ち、本当に不思議なところでした。これはRYLAの力、そして、所属しているB班の力ではないかなと思っています。短い時間に14人の仲間ができるのは、やはりみんなが同じ目標を持ってるからではないかと思います。それはお互いに尊重しあい、心を開いているということです。また、共に活動し共同しあうことで心がつながってると思いました。

私は、今回を活かして、知らない人々に活動して行きたいです。

第34回ライラセミナーについて

西山　和幸

今回のセミナーに参加して、私が感じた事は、ロータリアンの皆様の我々に対する期待感と情熱でした。自分の仕事もあるのに何の関係もない我々の為に時間を惜しまず共にして頂いた事に感謝致します。ありがとうございました。

受講した内容については全く異なる業種の人と同じ議題について話し合え共感出来た事や、年齢も親子程離れた人達と話し合えた事に大変感動を覚えました。ロータリアン皆様の考える次の時代のリーダーに育てると言う思いを勉強

させて頂き期待されているのだなと思う反面、やらないといけないと言うプレッシャーが掛って来ました。でも今後は我々が次の世代に伝えていく伝道師としてこの小さな輪を大きくして行きたいと思います。

本山　智男

今回、私はこのセミナーがどのような趣旨の下行われているのか知らなかった。何の考えを持たずセミナーに参加することで何も得ることができなかったらと不安に思っていたが心配はなかった。このセミナーは、今までうけたセミナーの中でも得るものが多かった。

まず、このセミナー参加者のほとんどは、かなり意識の高い人ばかりだった。そのため議論をしても、それぞれが自分の意見を主張する日本では珍しい光景だったと思う。また、職種がバラバラであることで、多種多様の意見が聞けたことも貴重な経験だった。

特に、私が注目したことは“年齢がバラバラな人たちが平等である”ということです。こういう場は意外に少ない。学校であれば年齢はさほど変わりない。また、社会人であっても平等に意見を言えないことが多い。このセミナーでは、平等に意見をいえることが大変重要な意味を持っていると感じた。

私は、若者の部類に含まれる。若者としての想いを伝えることに一杯であった。しかし、年上の方々は聞くことを重視し意見や言葉を選んでいた。私は、これから社会に貢献したいと思い、活動することで自分の想いを伝えようとしている。そのために、“欠けていること”が見えていなかったと切実に感じた。この経験を活かし、世の中を良くする活動を全力でしていきたいと感じた。

C班

第34回ライラセミナーを終えて

カウンセラー　白井　良夫

今回は初めてのカウンセラーを無事に終えて、ここ近年に味わった事の無い疲労感と充実感を味わっています。不安は余り感じず当日をむかえたが、まず最初のキャビンタイムより、受講生を初めてまじまじと顔を見た時に、やはり仕事の大変さを痛感した。

しかしながらそれは一瞬の事であり、楽しく受講生と共に新任カウンセラーの私も、せっかくのRYLAセミナーの感動を味わって最終日には、本当の信頼のおける親（友人）として笑顔で終える事を目標に突進した様に思えます。

ここに最終日を迎え、C班全員の満足感あふれる顔と信頼を母親役の荻田カウンセラーと確認出来、達成感は全身一杯になっています。別れがおしいですが、これも運命です。

今回の経験を通して、人と人との信頼の上にたった友情と、このダイナミックな内容のRYLAのすばらしさをC班全員で、末永く共有していける事を今後の自分の生き方にいかして行きたいと考えます。

C班受講生の今後の活躍と飛躍に大いに期待し、その一つの手助けを出来た事を誇りにしたいと思います。

第34回RYLAセミナーを終えて

カウンセラー　荻田　智子

男子10名、女子２名、計12名を受け持った４日間が終わった。

４日間は、新たな発見、感動、共感、驚き、喜びの連続だった。脈々と受け継がれてきたメニューを無事終了した今、カウンセラーとしての喜びと感謝の気持ちに包まれている。

東日本大震災では、日本人の底力が見えたと、報道され、一年余が経過した今、日本人として

の問題点が浮き彫りにされ、日本人としてのあるべき姿が問われだした。

最終日の今井鎮雄先生の講義の中で、危険社会（リスク社会）という言葉を聞いた。大きく危険をはらんでいる社会を考えなおさなければならない時代がきている。新しい時代を作り直すことを若者に託したい。しかし託せない若者もいるが、君たちは、託せる若者だと話された。

４日間を共にしたC班の若者達、ライラの受講生は、本当に大丈夫だと思った。C班の12名は何かに直面すると、専門的に考え、対応し、論理的に組み立て、広く深く追求できる力を持っていた。しかも発信する資質と能力には、４日間、驚きの連続でした。情報化社会、高齢化社会、グローバルな観点を、なんなく取り入れ対応できる資質の中には、世代だけではなく、日本古来の優しさや、思いやりや感謝の心や人を大切に思う笑顔が共存していることを再発見した。

本当に日本の未来を託したい。そして受け持ったC班のそれぞれの今後の生き方を見てみたいと思った。白井お父さんありがとう。そして12名の子ども達、よい思い出を作ってくれて、ありがとう。

今日の余島の海は、青く輝き、白い波が春風に輝きを放っています。

ありがとうございました。

「第34回RYLAセミナー」

今井　健太

今回のセミナーに参加して、自分のイメージとは全く違ったものでした。いわゆる、ボーイスカウトや少年のキャンプ的なものか、もしくは余島という孤島で孤立させられての収容所的なものであるというイメージでした。しかし、１日、２日、３日と時間が過ぎるうちに、そのイメージとは逆で、楽しく、そして、真剣に取り組むところは取り組むといったそのスタイルに感動しました。また、私はC班として３泊４日を過ごしました。その班で出会った仲間、そして２カウンセラーの方々は、とても心の受け皿が広く、様々な考えの人達でもそれを認め、また自分自身と向き合っておられる人達ばかりでした。人間というのは、分かっていても、自分の考えを他人に押し付けてしまったり、自分と違うとすぐに壁をつくってしまいがちです。しかし全くそのような事はなく、職業、年齢、性別、関係なく、受け入れる、そのような人達と出会い過ごすことで、今まで自分の生きてきた視野でしか考えることのできなかった事も、違う角度で考えられるようになりました。間違いなく、ここで出会った方々とは何かの縁があると感じています。なので、ここでの４日間だけでなく、今後も関係を深めていき、またどこで自分が力を借りるか分からないので、この出会いを大切に、またそこからさらに、人脈を増やしていきたいと考えております。そして、地元に帰ってからも、このような素晴らしいセミナーが存在していることを伝え、それが自分の周りだけでなく、もっと広く深い輪になればいいと考えております。

最後に、今回のセミナーを運営してくださった関係者、スタッフの方々本当にありがとうございました。

第34回RYLAセミナーに参加して

上月　秀哲

今回、第34回のRYLAセミナーに参加させて頂いて、まず、何が何かわからないままの参加でした。余島という無人島で、初めて会う人たちと３泊４日を共にするということが考えられませんでした。当日、班の発表があり、私はCグループでした。コミュニケーションをとるために、何かの共通点を探そうと思いました。やはり、会話をしていく中で、一人一人、見えてくるものがありました。グループでの発表では、

テーマに「今の社会はこれでいいのか。」というテーマに決まりました。お互いが、素直に意見を出し合い、協力することによって、答えが出てくることに気付きました。私たちのグループでは、コミュニティを中心に考えました。私自身、あまり知識がないので、わからない事は質問しようと思いました。発表では、本当に素晴らしい、発表ができたと思います。

この３泊４日は、とても早く時が過ぎて行きました。楽しい事は早く過ぎると言いますが、本当だなぁと思いました。

最後に、この３泊４日を共にした仲間、支えてくれたスタッフの皆様にありがとうと言いたいです。

RYLAセミナーに参加して

近野　正弥

今回RYLAセミナーに参加して本当にたくさんの事を学ぶ事ができた。

まず、グローバリゼーションの進行に伴い、地域の魅力が影を落とし、過疎化が進行し、また、人間関係の希薄化、格差社会等、今の世界の情勢の現状の一つを生み出してしまっているという事を学習できた。次に、地域の魅力を発掘し、意識改革を進め、地域を活性化していく実践の成功についての実践について学ぶ事ができた。３日目にはそれらを含め、自分達の意見を出し合い、自分達がこれからの社会はこのままで大丈夫か考え、実践できる事としてコミュニティについて意見をまとめた。その中で自分達がおかれているコミュニティについてまとめ、そこから課題を抽出し、出来る事をまとめた。私は出来る事について「未来を明るく元気に」という目標を挙げ実践を誓った。

今回のセミナーに参加し、「人間のつながり」の大切さ、自分が実践していく事の大切さを学ぶ事ができた。今回ロータリーの事について少しですが考える事ができ、この研修の３泊４日は「幸福追求」について考えられたのではと思う。これからRYLAで学んだ事をモチベーションに仕事、地域の活動に携わっていきたい。

「第34回RYLAセミナー」

豊田　優也

今回RYLAセミナーに参加させて頂き、本当に多くの刺激をうけることが出来ました。

参加する前、そして初日は「どうなるのだろうか」という不安がありました。しかし、カウンセラーのお父さん、お母さんが本当にいい人達ですぐに仲良くなる事ができました。私より年が上の人、年が下の人、そして様々な業種の人と生活を共にする中で自分とは違う考えに触れる事ができたのが私にはとても新鮮でした。

また、多方向からの視点で進められる講義は、話題の豊富さや話し方が素晴らしく、私には目からウロコでした。

特に若松さんのお話しは笑わされ、考えさせられ、そして思わずうなってしまう程に納得させられました。とても人間味のような物が溢れており、そして何より親近感をもつことができ、思わず聞き入ってしまいました。

最後になりましたが、Ｃ班のメンバー、そしてお父さん、お母さんに出会え、素晴らしい４日間でした。本当にありがとうございました。

RYLAセミナーへ参加して

長井　陽一

３泊４日という短い期間ではありましたが時間を共にし、行動・協議を積み重ねたおかげで、一つのつながりだけではなく、職業・出身地、思いなど、多角的に相互理解を深めたつながりを持った仲間づくりができたと思います。最も印象に残ったものは協議ではないかと思います。私たちＣ班の協議は独特であった気がします。例えば、本来協議を見守るカウンセラーが、自分の思っていることを積極的に延べ、主体的

に協議に参加していました。RYLAの主旨とは外れて非難されるかもしれませんが、カウンセラーをパートナーとして考え、同じ舞台で協議することは、より多くの気づきを得られ、協議に深みを生むものとなりました。C班の発表が全てを物語っていると思います。これは私たちC班というコミュニティがRYLAという社会へ訴える一つの提言にとらえていただけたらと思います。

さて、一つ不安に感じていることがあります。発表にもありましたが、社会を生きづらいと感じているのに行動しない若者がほとんどだったということ。協議の結果、行動するのは自分となったと思います。ということは今の社会が生きづらいのは自分の責任ということですよね。私たちC班は気づきから、自分たちが活動する地域で行動する目標を立てるまで行きましたが、外の班はどうだったのでしょうか？本気で気付きを得られる協議の場は必要と思います。それをどうするのか？は今の社会に生きる私たちが常に考えなければならないと思います。

第34回RYLAセミナーに参加して

松村　淳

「人を巻き込み人に巻きこまれる」これは本セミナーで私が強く実感した事です。

私はこれまで、多くの物事を一人で決め、一人で実行し、そして一人でいることを愛してきました。しかし今回大勢の人々に巻きこまれる中で多くの事に気付き、多くの喜びと想い出を得ることができました。

「一人を愛する」というと聞こえは悪くはないですが、それは結局、うらを返すと利己的で自分勝手、そして夜郎自大な自意識です。

３泊４日、狭いキャビンに詰めこまれ、濃密な時間を過ごすうちに、私はすっかり忘れていた、他者と深く通じ合う喜び、語り合う喜び、理解し理解される喜びを取りもどしました。今日、これを書き終えるとセミナーは終わりますが、私はここで得た「気付き」、つまり「他人を巻き込み」「他人に巻きこまれる」ことを「実行」していこうと思っています。最後にこのような素晴らしいセミナーを企画し運営してくださった関係者の皆さまに心より感謝を申し上げます。2012年３月25日

第34回RYLAセミナーを終えて

柳　杏奈

私がこのセミナーの事を教えて頂いたのは国際親善奨学生のオリエンテーションでした。今日４日間の受講を終えて思うことは、本当にこのセミナーに来る機会を与えられて幸せだということです。このセミナーで出会ったたくさんの仲間に感謝の気持ちで一杯です。もちろんこのセミナーを開催して下さる多くの方々にも感謝しています。

第１日目は班の中の人ともあまり腹を割って話をすることが出来ず、年齢も職業も異なる人々と意見を交わすことの難しさを実感しました。しかしそれと同時に、今まで知ることのなかった意見を聞く機会も非常に多く、とても新鮮な毎日でした。これから生活していく中でも見知らぬ人々とこのような生活体験をしていくことはないだろうと思います。自分とは違った考えを取り入れ、自分をさらに昇華させていくことの楽しさを知れたのはまたとない貴重な経験です。

今回のセミナーを終えての反省点としてはフォーラムで主張が出来なかったことです。自分の意見は間違っていないだろうか、そんな不安と恥ずかしさが先立って口にすることが出来ませんでした。私の気持ちを察したようにカウンセラーの方が私に声をかけて下さいました。どうしよう、と迷って自分の意見を言わないのではなく、その前にまず自分の意見を言う。言わなければ何も伝わらないし誰も理解してくれ

ない。言うことで印象を残すことも大切。とても心に響きました。このように思わせくれたカウンセラーのお父さん、お母さん、そして班員のみんなに感謝です。

「RYLAに参加して」

吉井　久晴

私は初めてこのセミナーに参加しました。この研修を終え、セミナーに参加して本当に良かったと感じています。

このセミナーを私が知ったのはRACを通じてです。RACの例会でRYLAというのがあり参加してほしいとのことでした。最初は年度末という忙しい時期に３泊４日も拘束されてしまうと困るという気持ちでしたが、まわりから押される形で少し仕方なしという感じでした。またセミナー初日も早く終わればいいなと思っていたのですが、それは良い意味で大きく裏切られました。

このセミナーに参加する前と後とでは自分の考えが大きく変わりました。もちろんプログラムの成果ということもありますが、何よりも同じキャビンで新しい仲間ができたことです。その仲間は、数日ではあったものの大変濃い時間を共有することで一生つきあっていけるのではないかと思うほどです。それが何より自分にとってプラスになりました。自分の人生を豊かにするには仲間が必要だからです。RYLAには２回まで参加できるということなので、またぜひ参加したいと思います。最後にRYLAに参加させていただきお世話をして下さった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。

ありがとうございました。

余島での気付き

岡林　朝也

このセミナーを通して、すばらしい仲間と出会えることができました。共通の課題について意見を出し合い、一人一人の考え方や思いに共感し感動を受けました。

この余島で仲間と同じ時間を過ごし、改めて「人と人とのつながり」について重要性を感じました。今まで出会った人達、「友人・家族・地域の方々」との関わりをこれからも大切にしたい。また、これから出会う人達とも積極的に関わっていきたいと思う。

今井先生のお話しを聞き、これからの社会を担う私達が、今、現実におこっている問題点について認識し、何をすべきかを考えることが重要だと感じました。何事にも関心を持っていきたいと思う。

カウンセラーのお二人にも感謝したい。本当に親身になって接して下さいました。

私もこれから何ができるか分かりませんがささいな事でも誰かの役に立てる、感謝される人間になりたいです。

このセミナーで得た気づきを、自分が所属するコミュニティで実践していきたいです。

RYLAセミナー

眞田　麻子

私は正直、このRYLAセミナーの話を聞いた時行く気になれませんでした。でも経験することも大事だなと思い、参加しました。結論からすると、本当に参加してよかったと思います。最初きた時は心配と不安でいっぱいで、思ってたより同世代が少なそうだったし女の子も少なかったので、少しげんなりしました。最初にできた友達は、やっぱり同い年の子たちでした。数少ない最年少の私たちは、少し居づらい空気の中にいたと思います。でも初日の班分けの後、キャビンでみんな集まってお酒を飲んで色々話

をしているうちに、少し安心しました。みんな私より一まわりも上だったり年齢もバラバラで職業もバラバラで人生も色々あったりして、考え方もちがう12人が同時に集まることは普段めったにないことなので、出逢いは大切にしたいなぁと思いました。２日目から講義が始まりました。講義の先生方の話はとても興味深く、特に若松先生の話はとても心に残っています。人を感動させて人に感動させられる。感動というのはステキな映画を見て涙を流すことだけでなく、心が動くようなでき事のことを指すのだと思いました。

この４日間、C班（上月班）が本当に本当に大好きになりました。みんなもそう思っているような気がするし、それが見えていてすごく伝わってくるので、それも嬉しかったです。カウンセラーのお二人にも本当に感謝しています。カウンセラーという肩書きなだけで、私たちと一緒に何事も楽しんでくれました。見守るという心に余裕のある大人になりたいと本当に思いました。

ここでの出逢いは本当に大切にしたいし、会えるならいつでも会いたいです。ここで経験した事をこれからの生活に生かせるように努力します!

ライラセミナーに参加して…

濵田　晃弘

この度は第34回ライラセミナーに参加させていただいて本当にありがとうございました。

約１ヶ月前、今回のセミナーに参加させていただくことが決まった時は、期待もありましたが、どちらかというと不安の方が大きく、余島までの道中も初めて会う人達と３泊４日もの間、「どうすればうまくやれるか」そんな事ばかり考えていました。

実際、セミナーを終えてみて感じたことは「参加してよかった」ということです。講師をしてくださった野田先生、若松先生、今井先生をはじめ、とてもたくさんの方々にお話を聞けたことは、この先の人生でかならず、役に立つものだと思います。

そういった中でも特に自分にとって大切だと思えたのは、やはり班での団体生活だったと思います。お父さん、お母さん役をしてくださった白井さんと荻田さんには本当にお世話になり、自分達ではなかなか答えが出せない時も、直接教えるわけではなく、大事なポイントを示してくれ、皆で話合うきっかけをたくさん作ってくれたり、お酒の席では友人のように気軽に話せる空気を作ってくれ、お２人がカウンセラーとして同じ班になれて、とても楽しく、それと勉強になりました。

同じく班になった皆も初日は少し慣れない感じもありましたが、２日目、３日目と過ぎていく間、少しずつ仲も深まり、とてもいい関係が築けたと思います。

この余島で過ごした３泊４日で得たたくさんのものをこの先も大切にしていきます。

本当にお世話になりました。

忘れられない余島

姚　海峰

あっという間に３泊４日のライラセミナーが終わりました。この４日間、私はたくさんの思い出をつくりました。友達ができ、勉強になり、交流もできました。外国人留学生として、素晴らしい経験を得ることができました。

今回のセミナーを通じて、私は一番勉強できたのはリーダーとしての３つの条件です。「リスクを背負う能力、人と協力する力、困難を克服する努力」という能力です。今まで私はいつも自分がリーダーシップを取れる人間だと信じました。しかしこの３つの条件を見ると自分はまだ未熟ということを気付きました。

また、今回のセミナーで友達がいっぱいでき

て、いろんな意見を聞いて、本当によかったと思います。最初全然知らない12人が集まって、友達になって、同じ認識ができて、そしてこれから同じ目標に努力することが素晴らしいと思います。

私は今ローターアクトクラブに所属しています。ロータリークラブの米山奨学生事業も経験したことがあります。新世代育成の面でいうとロータリアンの方々はこんなに素敵な活動をしたのに、もうちょっと我々ローターアクトに関心を入れてほしいです。

D班

第34回ライラセミナーを終えて

カウンセラー　吉岡喜久子

未曾有の被害をもたらした東日本大震災から１年。ガレキの処理、原発の問題など震災処理が遅々として進まず、経済不況、少子高齢化、年金…など社会問題が山積する現在の日本にあって、次世代を担う若者は如何に考え、如何に生きているのだろうか。その答えを知りたくて今年もライラセミナーに参加させていただきました。年齢、職業、出身地域の異なる12名の若者は本当によく学び、よく考え、よく語った４日間でした。野田先生からはいかにデジタル化の時代になってもその基本となるアナログ的な人間性の重要度を、そして若松先生からは、「自分の知らない自分を知ること、自分の立ち位置をかえて自分を見つめること」を学びました。今井先生からは、未来を託され、未来を完成する若者へのメッセージを教えていただきました。

カウンシルファイヤーで見た一つ一つの明かりがみんなに集まればどんなに暖かく、大きな輝きを持つことも知りました。そして一人一人がしっかりと自分の意見を発表して、フォーラムには本当に感激しました。

「和敬」これはD班の名であり、座右の銘です。「心を和ませ、お互いを敬う。」これからずっと毎日大切にして行きたい言葉です。

このセミナーで学んだことを縦軸に、D班で知り合った仲間とのふれ合いを横軸に、これからの人生という布をしっかり紡いでいって下さい。そして、余島で受け取ったライラセミナーの種を、それぞれの地に持ち帰り、ライラの種まきをして下さい。近い将来小さな芽が出、やがて美しい花が咲くコミュニティーのまん中に皆様がおられることを楽しみにしています。12名の皆様本当にありがとうございました。

来年の「和敬の会」とても楽しみにしています。最後に、つかず離れて大きく子供達を見守り、多くのことを教えていただいた久保田パパやセミナー運営に御尽力いただいた多くのロータリアンの皆様に心より感謝いたします。そして、美しく大きな余島の自然にも。

第34回ライラセミナーに参加して

カウンセラー　久保田　敦

初参加の自分にとって多くの事を勉強する事が出来た。特に若い人達から学ぶ事が多かった。

プログラムは最高であったと思う。参加者も大きく成長したと感じた。このセミナーを通じて学び・成長しているのは、実はロータリアンではないだろうか？

残念な事は、多くのロータリアンがこのプログラムの真実を知らない事である。一部には、否定的な意見もあることは皆さん知っている。もっとロータリー内部でこの真実を広く伝えるべきではないだろうか。そしてもっと多くの若い世代のロータリアンに是非参加して欲しい。新しい視点でフレッシュな頭脳を加える事で、よりすばらしいライラが生まれると信じている。

最後に、今までのロータリー生活で、このプログラムは自分にとって最高のイベントであった事に、心より感謝致します。

RYLAセミナーに参加して

秋定　容子

仲間・調和・協力・笑顔…。私がこの４日間で経験したことを表す単語だ。

全く違う職業、顔を初めて合わすD班のメンバー、開講式後のオープニングパーティーは、お互いの事が分からず、楽しい中にもぎこちない感じがあった。キャビンタイム、レクリエーションをすることで、メンバーが仲間になった。信頼し、声をかけ合う、２日目でこのセミナーがどれだけ充実するか、ワクワクした。

このセミナーでは、バズセッション、フォーラムがあり、この仲間とテーマについて話し合い発表した。話し合いを進めるにつれ、自分の思っている事を言えたし、仲間が伝えたい想いを理解しようとした。話し合いの中で皆が相手の意見を尊重し、一つの方向に向かっていた。協調ではなく、和やかな中で作業ができたので、調和という単語が思い浮かんだ。

様々な作業、生活の中で協力することは、必須だった。それぞれが自分に責任を持ち、真剣に仲間を想い、４日間を過ごせていたように思う。

そして、最後は、笑顔。４日間、ずっと笑顔でいれた。それは仲間がいたからこそ、そして、自然の中にいれたからだ。

最後になったが、カウンセラーのおとうさん、おかあさん、そしてこの場を与えていただいたロータリアンの皆様に感謝したい。

この４日間で得たことを、必ず自分が行動し、実現したいと思う。

RYLAセミナーを終えて

北野　諭士

私は、このセミナー参加の時に大丈夫かとても心配でした。中、高校と全く勉強せず今まできました。このセミナーの話が来た時、アホな私が参加した事で、私の職場、社長に迷惑がかからないか心配ばかりでこのセミナーに参加いたしました。あまり話などしない私は、D班になり、頭のすごいいい学生さん、先生、和食屋をされる方、小豆島の方など、すごいメンバーが集まりました。不思議な事に仲はすぐ良くなりました。色々プログラムがあった中、私は、キャビンタイム、バズの時間が長い事もあり一番思い出になっています。私は、職業が介護というのもあり、その事しか知らない、それしか言えない中、バズの時に私の介護の思いを言いました。すると思った以上にびっくりされた様子に私がびっくり。しかし違う職業なので当た

り前、その時私は、必要な人間と少しでも思えました。私自身とても頼りなく、妻、子供がいますが、私は結婚時わけがあり親と縁を切りました。しかし親を忘れた事は一度もなく心配しています。親も私を心配していると思います。この話に近いテーマが一度出ました。中国では、違う考え、私は、間違った選択をしたのかなと思う事もありましたが、自分の考えを貫き、地に足をつけていく姿をみせるのも親孝行だと思い親もそれを願っていると思います。セミナーの事から話がずれましたが、私は介護で地域に貢献出来るように努力、リスクを背負ってでも貢献したいと思います。１人が２人１馬力を倍に仲間を信じ最後には、いい物を手に入れられるようにしたいと思います。このセミナーに来てフォーラムで発表し、少しでも自信がつきました。このセミナーのおかげだと思います。このD班で知り合った仲間みんなが素敵、いい笑顔でした。１年後に会う時には、また一つ大きくなった私を仲間にみせたいと思います。ありがとうございました。

ライラセミナー

田中　大貴

今、私の心の中には４日間充実したという気持ちとライラセミナーを支援して下さった方々と私をこの場に導いてくれた両親に対する感謝の気持ちで満ち足りています。

皆様本当にありがとうございました。

今後、私はロータリアン、ライラリアンとの関わりを大切にして、地域の活性と私の愛する人々の幸せに貢献できる様に努力していきたいと思います。また、私は大学の友人や将来知りあう若い人達にこのライラセミナーのことを知ってもらい、各々の成長の助けになっていきたいと思います。

ライラセミナーを終えて

中尾　悠亮

ライラのことは、以前から職場の先輩方に聴いていましたので、非常に楽しみにしていました。私は現在グループホームで働いていますが、責任有る立場を与えて頂きながらも、どこか自信を持てずにいました。今回のセミナーを通して、自分が変わるきっかけを持ちたいと思いました。

４日間を共に過ごすグループのメンバーは実に様々で、学生も社会人も、20代から40代まで、住んでいる場所もバラバラでした。そんな12人が一緒に過ごし、共に一つの議題について想いを語り合うバズセッションはとても刺激がありました。自分の立場からは見えない事でも、他のメンバーが言った事に共感することが出来ます。何かを成し遂げるには、この「共感」がとても重要だと思います。共感することが、１人から２人、３人と仲間を増やしていき、大きな流れになっていきます。この４日間を通して、同じグループで過ごしてきた12人とカウンセラーのお二人とは、かけがえのない仲間になることが出来ました。セミナーが終われば、また仕事に戻ることになりますが、ここで得た情熱を持ち、地域を自らの動きで活性化出来るよう努力していきます。

思索の時間の際、島内を散策しましたが、余島の自然にも感動しました。このような素晴らしい環境で自分を磨く機会を与えて頂いたことに感謝します。ありがとうございました。

RYLAセミナーを受講して

永城　敬介

日々の生活の中で、あまり話をした事のない業種の方、学生の方と接する機会が持てた事が大変よかったです。初めは、不安な気持ちもありましたが、この時期にこのセミナーに参加しようと思ったのも何かのご縁だと思いますし、

本当に良い仲間と出会えました。

志の高いメンバーの中で、自分自身刺激を受けました。講義の中や、バズセッションで今の青少年の現状を耳にしたり、話し合ったりして一人一人が何か行動をする事により、何か新しい何かが生まれてくると感じました。

このセミナーが終了すると、それぞれまた違った環境に戻ります。仲間の大切さ、社会にもっと目を向け今後の生活に生かして行きたい。

本当に仲間に恵まれたセミナーでした。

第34回青少年指導者育成 RYLAセミナーの受講を終えて

前田　徳三

このセミナーに参加させていただき、ありがとうございました。

今回のテーマ「新しい地域社会」について、３名の講師よりご講演をいただきました。

私は、現在、伊丹市教育委員会事務局に勤務し、教育についての仕事に携わっておりますが、現在の教育においては、地域との関わり、地域の支援なしでは、子ども達の教育は成立いたしません。なぜなら、子ども達、保護者のコミュニケーションの希薄化より、不登校問題、いじめ問題、規範意識の低下が、起こっているとこは、社会問題としての事実です。

そういった意味においても、野田松太郎先生のICT観点からの地域の役割、責務の講演会、若松進一先生の人間牧場・町おこし、村おこしの講演、そして、最後に今井鎮雄先生の若者に求められる世代変化への講演は、意義深いものでした。ありがとうございます。

また、世代、年代を超えてのバズセッションは、多くの若者の考えをきくことができ、D班の受講生は、とても満足がいくものとなりました。

最後に、ロータリアンの方々とも共働させていただき、次世代のこども達に、夢と希望のあるすばらしい日本を築くとともに、今井先生はじめ、多くの先輩方が築き上げていただいた文化・伝統を継承させていただかなくてはいけないと、改めて考えさせていただきました。

今回、このようなすばらしい機会を与えてくださったロータリアンのみなさま、スタッフのみなさま、カウンセリングの久保田様、吉岡様、誠にありがとうございました。

第34回ライラセミナーに参加して

水島　和美

漠然とした情報だけで、何か得る物があると受講させて頂いたのですが、得た物が多すぎて本当に受講して良かったです。

まず普段どれだけ考えずに生活して来たのかを痛感しました。地域の為にまず個人として実践できる事が分かりました。そして一緒に考えて行動する仲間が13人もでき、それぞれの仲間から、会社、友達と言うコミュニティでは知り得る事ができなかった問題や情報を聞けました。

自分が行動をして社会を変えて行く事などできないと思っていましたが、人をまき込んで輪を広げて行く事、大それた事もまずは個々の小さな力から始まる事が分かり、自分に自信が持てた事が他のセミナーでは習得できなかった様に思います。

まずは最初の一歩として、来年の昨日にこのメンバーがそれぞれに人を一人連れてきて集合する、第１回和敬の会を開催する事が決定しました。この一年でここでの仲間に報告できる活動を自分がどれだけできるのか楽しみです。

RYLAセミナー参加の感想

公文　貴之

今回、初めてRYLAセミナーに参加をして、とても濃密な４日間を過ごすことができました。

家を出るとき、いったいどうなるのだろうかという心配と緊張でいっぱいでした。島に着き、班分けがされ、顔も名前も知らず、住んでいる

所でさえ違う人達とどうやって接したらいいのかと思いました。しかし、話しをしているうちに、意外なほど息の合うチームとなっていました。

私は自分の意見を相手に伝えるのはとても苦手でしたが、バズセッションやフォーラムを通じて、こんなにも自分の意見を聞いてもらえるのが嬉しいことであるということを知りました。

たった４日間という短い時間のなかでまったくの接点のない人間が意気投合し、来年また会うことを約束するというのはとてもすごいことだと思いました。

今回、このセミナーに参加し、自分の知らない一面を発見できてとてもよかったです。

第34回RYLAセミナーを終えて

竹村　竜二

私は今回紹介して頂いた方が松山北ロータリーの真鍋清さんという人なのですが、普段からこの人と交流があった訳ではなく、思う事もあり久し振りに茶道教室に行った所本当にたまたまお会いする事ができました。茶道教室ですので基本あまりおしゃべりをするのではなく、お稽古をしています。その中で少し会話をすることがあり、私が東京から戻って今独立を考えている事などを話させて頂きました。真鍋さんの真意は解りませんが私に行ってみないかとセミナーの参加をすすめて頂きました。それから何度か教室に通っていますが会う事が出来たのはこの一度きりです。

今回セミナーに参加して感動している事はもちろんの事ですが、まず何より私はこの真鍋さんとの出会いに最大の感謝の念を抱いております。帰ったら一番にお伝えしたいと思っている所であります。また、あまり知らない私を誘って頂けたのは、教室の先生の所に通っている人ならという信頼もあったのかもしれません。本当に心から感謝しております。

これから私は、日本料理和敬というお店を独立開業する予定ですが、和敬の店名の源である「茶室に入ると万人平等」という精神とロータリーの精神が同じであった事にすごく勇気を頂きました。あなたのしようとしている事は間違っていませんよと言われている気がしました。

最後に、自分の信じた道にかっこたる信念を持ちだれにも負けない情熱を注いで何事にも取り組んで行く事を私は誓います。本当にありがとうございました。

RYLAセミナーに参加して

中野　悟

今回、最年少の20歳で学生の立場として参加させていただいたのですが、本当にたくさんの方々に出会うことができ、自分の世界が広がりました。中でも、班ごとに分かれてあるテーマについて討論し発表する点が良かったです。私は、人前で話をすることに慣れていなくて緊張するタイプなのですが、このような機会を増やし、自分から積極的に活動していこうという気持ちになりました。様々な講義をしていただき、本当に得ることが多かったのですが、印象に残っている言葉は、「チャンスを生かすも殺すも自分次第だ。」という言葉です。これからもいろいろな出会いがあると思いますが、この言葉を肝に銘じて行動していきたいと思います。

また、寝食を共にした方々は特に、本当に友達というよりも家族のような存在でした。これからも付き合っていきたいと思います。本当にお世話になりました。ロータリークラブの活動を自分も含め、いろいろな人に広めていければいいなと思います。

最後に、今回、このような貴重な経験を与えてくださったロータリークラブの皆様にお礼申し上げたいと思います。ありがとうございました。

余島での3泊を終えて

平川　貴規

まさかここまで充実した３泊４日を過ごすことになろうとは、４日前の自分には想像もつかなかった。知人に誘われ離島でのバカンス気分で参加したつもりだが、ともすればこれは人生という航海の中、この離島に漂着したことが今後の航行を大きく変えたように思われる。そう思わざるをえないこの４日のことを、徒然と書き綴っていこうと思う。

僕らのグループはカウンセラーを含め14人だが、初めは全く見ず知らずの他人。それが今や水いらずである。ここまで深い関係を持てたのは他ならずここ余島が舞台であったからだ。喧騒を離れ、自然に囲まれたここ余島で、寝床をともにし、同じ釜の飯を食べる。このような環境の下、誰しもが須く心のバリアを外していた。ここで自らの将来や夢、またはこの社会の未来について真剣に語らう。そうした中で人の意見をとり入れて三歩前進し、自分を見つめ直して二歩後退。こうして自らが見据えるべき先へ向けての確実な一歩を踏み出すことができたと実感している。おそらく他の13人のメンバーも同様に一歩前へ前進したことだろう。こうして踏み出した一歩を、一歩で立ち止まるのではなく二歩、三歩と進めてゆき、同じ道を歩む者と手をとり合っていこうと約束した。１年後、この仲間達と再び会う約束をしたが、その時の仲間の成長を楽しみに、そして自分はそれに負けないように、明日へ向けての力強い一歩を踏みしめてゆきたい。

第34回RYLAセミナーに参加して

森本　正隆

今回３泊４日で研修に参加するにあたって不安がかなりありました。

普段小豆島で生活をし、小さい組織、コミュニティで活動している自分の考えが正しいのか、共感してもらえるのかという不安が強くありました。

班分けにより知り合った12人、サポートをして頂いたカウンセラーの２人の優しさ、暖かさを十分に感じることができ、とても幸せな時間でした。

さらに、見ず知らずの人達と一緒に生活をし、職種も世代も違う人達、各先生の幅広い話を聞き、討論できたことでそれぞれの考え方に共感し、共に学ぶことで今後成長できると思えるようになった。

バズセッション、フォーラムにおいて、今住

んでいる小豆島の問題を話し、参加者それぞれの目線で話の中に取り入れて頂き、その話に耳を傾けていただけたことにとても感謝をしています。

今後、仕事、地域のコミュニティを通じ、今の小豆島の現状をよりよくする決心をしました。

ここで知り合い、時間を共有した仲間を大切にし、「和敬」というグループ名に恥じない人間力をつけます。

最後になりますが、このようなセミナーを開催し、参加させて頂いたことに感謝すると共に、今後もよろしくお願いします。

思い出

これから何が始まるんだろう?

食べることも楽しい

毎年、余島の食事は好評です

思い出

南の浜には、こんな作品（?）もありました

こんなに一生懸命講義を聴いたのは久し振り

キャンプソングは心を一つにします

第34回RYLAセミナー運営委員会

ガバナー

久野　薫（第2680地区　神戸東RC）
美馬　精一（第2670地区　鴨島RC）

顧問

今井　鎮雄（第2680地区PG　神戸西RC）
深川　純一（第2680地区PG　伊丹RC）
飯　忠悟（第2670地区PG　今治RC）

アドバイザー

三木　明（第2680地区PG　姫路RC）
今井　正信（第2670地区PG　観音寺RC）

●新世代委員会（第2680地区）

委員長　常次　佳丈（神崎RC）
副委員長　徳梅　明彦（あわじ中央RC）

●新世代活動委員会（第2670地区）

委員長　古川　充（脇町RC）

●RYLA委員会

（第2680地区）

委員長　黒田　建一（西宮夙川RC）
委　員　井本　学明（赤穂RC）
井奥　寛泰（姫路南RC）
大江与喜子（西宮恵美寿RC）
白井　良夫（伊丹RC）
滝澤　功治（神戸須磨RC）
安平　和彦（姫路RC）
安行　英文（三田RC）
吉田　正人（神戸東RC）
カウンセラー　坂東　隆弘（柏原RC）
白井　良夫（伊丹RC）
吉岡喜久子（伊丹RC会員夫人）
田中　恵美（伊丹RC会員夫人）

（第2670地区）

委員長　猪野恵一郎（松山南RC）
委　員　森　廣一（美馬RC）
伊勢　英利（鴨島RC）
吉原　良一（坂出東RC）
別役　重具（高知東RC）
森田　康子（高知東RC）
篠原　成行（北条RC）
阿部　弘治（松山南RC）
深見　邦芳（松山RC）
荻田　智子（高松北RC）
米山　徹太（松山RC）
カウンセラー　米山　徹太（松山RC）
久保田　敦（松山北RC）
荻田　智子（高松北RC）
平井英津子（高松北RC会員夫人）

●RYLA学友会

会　長　倉本　勉（第2680地区）
幹　事　小林　雅美（第2680地区）
事務局長　里見　和彦（第2670地区）

2011－2012年度

国際ロータリー第2680地区
ガバナー事務所
〒651-0096
兵庫県神戸市中央区雲井通6-1-5
神戸東急イン3F
TEL.078-271-2680
FAX.078-271-2681

国際ロータリー第2670地区
ガバナー事務所
〒776-0010
徳島県吉野川市鴨島町鴨島471-2
セントラルホテル鴨島内
TEL.0883-36-9267
FAX.0883-36-9268